

白河街区跡・岡崎遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇五―四

白河街区跡・岡崎遺跡

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・岡崎遺跡

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび市営住宅新築工事に伴う白河街区跡・岡崎遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

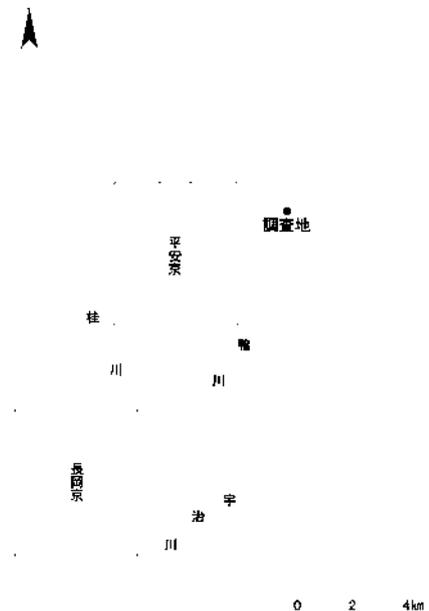
平成 17 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・岡崎遺跡
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎天王町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2005年3月9日～2005年7月29日
- 5 調査面積 1,277 m²
- 6 調査担当者 近藤奈央・木下保明・本 弥八郎・小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）「岡崎」吉田」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 1・2調査区別に通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 自然遺物の分析 竜子正彦・丸山真史（京都大学大学院生）
- 18 本書作成 近藤奈央・木下保明
- 19 執筆分担 近藤奈央：1、2、3（1・2）、4（1・2-1古墳時代土器以外・3・4-1・5～7）、5
木下保明：3（3）、4（2-1古墳時代土器・2-2・4-2）
竜子正彦：6（1・3）
丸山真史：6（2）
- 20 編集・調整 中村 敦・児玉光世
- 21 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。
- 22 動物依存体の分析については、京都大学大学院生丸山真史氏の御厚意により、稿を頂き掲載した。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	4
(1) 遺構の概要	4
(2) 1 区の遺構	5
1) 基本層序	5
2) 古墳時代後期の遺構	8
3) 平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構	10
4) 室町時代後期の遺構	18
5) 江戸時代中期から明治時代の遺構	27
(3) 2 区の遺構	32
1) 基本層序	32
2) 平安時代以前の遺構	32
3) 平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構	35
4) 室町時代後期の遺構	37
5) 江戸時代末期から明治時代の遺構	51
4. 遺 物	52
(1) 遺物の概要	52
(2) 土器類	53
1) 1 区出土の土器類	53
2) 2 区出土の土器類	74
(3) 瓦類	80
1) 1 区出土の瓦類	81
2) 2 区出土の瓦類	91
(4) 木製品	96
1) 1 区出土の木製品	96
2) 2 区出土の木製品	106
(5) 石器・石製品	110
(6) 金属製品	113
(7) 土製品	114
5. ま と め	115

(1) 古墳時代	115
(2) 平安時代後期	115
(3) 平安時代末期から鎌倉時代初頭	115
(4) 室町時代	121
(5) 江戸時代後期から明治時代	122
(6) 遺物について	122
6. 自然科学的分析	123
(1) 岡崎周辺の火山灰について	123
(2) 白河街区から出土した動物遺存体	125
(3) 白河街区から出土した植物遺存体	127

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区調査区全景 [古墳・平安時代] (東から)
		2	1 区調査区全景 [室町時代] (東から)
図版 2	遺構	1	1 区土壙 748 (西から)
		2	1 区土壙 748 遺物出土状況 (東から)
		3	1 区土壙 862 (北から)
図版 3	遺構	1	1 区井戸 588 (東から)
		2	1 区井戸 614 (北から)
図版 4	遺構	1	1 区井戸 583 (西から)
		2	1 区井戸 583 縦板残存状況 (南から)
		3	1 区井戸 317 (東から)
		4	1 区土壙 274 (西から)
図版 5	遺構	1	1 区溝 668・801 (南から)
		2	1 区溝 668・801 断面 (南東から)
図版 6	遺構	1	1 区井戸 75 (西から)
		2	1 区井戸 75 北西隅木組状況 (南東から)
		3	1 区井戸 75 掘形断面 (北東から)
図版 7	遺構	1	1 区井戸 119 (西から)
		2	1 区井戸 452 (北から)
		3	1 区建物 1～3 (西から)

- 図版 8 遺構 1 1区井戸 58 (西から)
2 1区土壇 619 (北東から)
- 図版 9 遺構 1 1区井戸 56 (南から)
2 1区土壇 63 (南から)
3 1区土壇 61 (東から)
4 1区土壇 50 (西から)
5 1区溝 51 (南東から)
6 1区溝 73 (北東から)
7 2区江戸時代から明治時代遺構全景 (東から)
8 2区カマド 2 (西から)
- 図版 10 遺構 1 2区調査区全景 [平安時代以前] (東から)
2 2区調査区全景 [平安時代から室町時代] (南東から)
- 図版 11 遺構 1 2区調査区西半全景 [平安時代から室町時代] (北東から)
2 2区調査区東半全景 [平安時代から室町時代] (北から)
- 図版 12 遺構 1 2区溝 308 (北から)
2 2区建物 2 (東から)
- 図版 13 遺構 1 2区井戸 10 (東から)
2 2区井戸 318 (南東から)
- 図版 14 遺構 1 2区土壇 109 遺物出土状況 (北東から)
2 2区土壇 458 遺物出土状況 (西から)
- 図版 15 遺物 1区出土土器類 [古墳時代]
- 図版 16 遺物 1区出土土器類 [古墳時代・平安時代後期]
- 図版 17 遺物 1区出土土器類 [平安時代末期から鎌倉時代]
- 図版 18 遺物 1区出土土器類 [平安時代末期から鎌倉時代]
- 図版 19 遺物 1区出土土器類 [室町時代]
- 図版 20 遺物 1区出土土器類 [室町時代]
- 図版 21 遺物 1区出土土器類 [室町時代]
- 図版 22 遺物 1区出土土器類 [室町時代]
- 図版 23 遺物 2区出土土器類 [古墳時代・平安時代・室町時代]
- 図版 24 遺物 2区出土土器類 [室町時代]
- 図版 25 遺物 2区出土土器類 [室町時代]
- 図版 26 遺物 1 2区出土陶磁器 [室町時代]
2 2区出土瓦器 [室町時代]
- 図版 27 遺物 1区出土軒丸瓦
- 図版 28 遺物 1区出土軒丸瓦・軒平瓦

- 図版 29 遺物 1 区出土軒平瓦
- 図版 30 遺物 1 区出土軒平瓦・平瓦、2 区出土軒丸瓦
- 図版 31 遺物 2 区出土軒平瓦・塼、1・2 区出土刻印瓦
- 図版 32 遺物 1 区井戸 614 木枠（縦板）
- 図版 33 遺物 1 区井戸 614 木枠（縦板）
- 図版 34 遺物 1 区井戸 614 横棧・支柱
- 図版 35 遺物 1 区井戸 75 木枠・横棧
- 図版 36 遺物 1・2 区出土木製品
- 図版 37 遺物 1 区井戸 58・2 区井戸 10 出土木製品（683 のみ 1 区井戸 58）
- 図版 38 遺物 2 区井戸 10 出土木製品
- 図版 39 遺物 1 2 区井戸 10 出土木箸
2 石製品
- 図版 40 遺物 1 石製品
2 土製品・金属製品

挿 図 目 次

図 1	2 区調査前全景（南東から）	1
図 2	1 区作業風景（北東から）	1
図 3	調査位置図および周辺調査（1：2,500）	2
図 4	調査区配置図（1：1,000）	3
図 5	1 区東壁断面図（1：100）	5
図 6	1 区南壁断面図（1：100）	6
図 7	1 区古墳時代遺構平面図（1：200）	7
図 8	1 区土壌 748・862 実測図（1：20）	8
図 9	1 区溝 817、落込み 818・835・842 断面図（1：40）	9
図 10	1 区平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構平面図（1：200）	11
図 11	1 区井戸 317・588 実測図（1：30）	12
図 12	1 区井戸 614 実測図（1：30）	13
図 13	1 区井戸 583 実測図（1：30）	14
図 14	1 区井戸 583 断面図、土壌 274・555・600 実測図（1：30、1：40）	

図 15	1区溝 668 平面図 (1 : 40)	16
図 16	1区溝 668・801 断面図 (1 : 40)	17
図 17	1区室町時代遺構平面図 (1 : 200)	19
図 18	1区建物 1～3、柵 1 実測図 (1 : 80)	20
図 19	1区井戸 58 実測図 (1 : 30)	21
図 20	1区井戸 75 実測図 (1 : 30)	22
図 21	1区井戸 119 実測図 (1 : 30)	23
図 22	1区井戸 452、土壇 15・247・249 実測図 (1 : 30、1 : 20、1 : 40)	24
図 23	1区土壇 619、溝 342 実測図 (1 : 80、1 : 150、1 : 40)	25
図 24	1区江戸時代遺構平面図 (1 : 200)	28
図 25	1区溝 51、土壇 50・53 実測図 (1 : 40)	29
図 26	1区カマド 112、井戸 56、土壇 61・63・590 実測図 (1 : 30、1 : 40、1 : 20、1 : 10)	30
図 27	1区溝 73 実測図 (1 : 40)	31
図 28	2区東壁断面図 (1 : 100)	32
図 29	2区南壁断面図 (1 : 100)	33
図 30	2区平安時代以前遺構平面図 (1 : 200)	34
図 31	2区風倒木痕 472 断面図 (1 : 50)	35
図 32	2区平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構平面図 (1 : 200)	36
図 33	2区土壇 111・459、井戸 328 実測図 (1 : 30)	37
図 34	2区室町時代遺構平面図 (1 : 200)	38
図 35	2区建物 1・3 実測図 (1 : 50)	39
図 36	2区建物 2 実測図 (1 : 50)	40
図 37	2区柵 1～3 実測図 (1 : 50)	41
図 38	2区井戸 10 実測図 (1 : 30)	42
図 39	2区井戸 10 断面図 (1 : 30)	43
図 40	2区井戸 318 実測図 (1 : 30)	44
図 41	2区土壇 41・109・458 実測図 (1 : 30)	45
図 42	2区土壇 206・215・216 実測図 (1 : 30)	46
図 43	2区土壇 209・320・321・327 実測図 (1 : 30)	48
図 44	2区土壇 108 断面図 (1 : 50)	49
図 45	2区江戸時代遺構平面図 (1 : 200)	50
図 46	2区カマド 2・3 実測図 (1 : 30)	51
図 47	1区出土土器実測図 1 [縄文時代] (1 : 2)	53
図 48	1区出土土器実測図 2 [古墳時代] (1 : 4)	54

図 49	1区出土土器実測図3 [平安時代中期から後期] (1:4)	56
図 50	1区出土土器実測図4 [平安時代末期から鎌倉時代] (1:4)	59
図 51	1区出土土器実測図5 [平安時代中期から鎌倉時代] (1:4)	60
図 52	1区出土土器実測図6 [室町時代] (1:4)	65
図 53	1区出土土器実測図7 [室町時代] (1:4)	67
図 54	1区出土土器実測図8 [室町時代] (1:4)	69
図 55	1区出土土器実測図9 [室町時代] (1:4)	70
図 56	1区出土土器実測図10 [江戸時代] (1:4)	71
図 57	1区出土土器実測図11 [江戸時代] (1:4)	73
図 58	2区出土土器実測図1 [古墳時代・平安時代] (1:4)	75
図 59	2区出土土器実測図2 [室町時代] (1:4)	76
図 60	2区出土土器実測図3 [室町時代] (1:4、1:8)	78
図 61	2区出土土器実測図4 [室町時代] (1:4)	79
図 62	1区出土軒丸瓦拓影・実測図1 (1:4)	82
図 63	1区出土軒丸瓦拓影・実測図2 (1:4)	83
図 64	1区出土軒平瓦拓影・実測図1 (1:4)	86
図 65	1区出土軒平瓦拓影・実測図2 (1:4)	87
図 66	1区出土丸瓦拓影・実測図 (1:4、574のみ1:6)	89
図 67	1区出土平瓦・塼拓影・実測図 (1:4、1:6)	90
図 68	2区出土軒丸瓦拓影・実測図 (1:4)	91
図 69	2区出土軒平瓦拓影・実測図 (1:4)	92
図 70	2区出土丸瓦・平瓦拓影・実測図 (1:6)	93
図 71	2区出土塼拓影・実測図 (1:4)	94
図 72	刻印瓦拓影 (1:1)	95
図 73	1区井戸614 木枠実測図1 (1:10)	97
図 74	1区井戸614 木枠実測図2 (1:10)	98
図 75	1区井戸614 横棧・支柱実測図 (1:10)	99
図 76	1区井戸75 木枠・横棧実測図1 (1:10)	
	100	
図 77	1区井戸75 木枠・横棧実測図2 (1:10)	101
図 78	1区井戸614・58・452・317 曲物、井戸119 木枠実測図 (1:10)	102
図 79	1区井戸614・58・75・583 他出土木製品実測図 (1:4)	105
図 80	2区井戸10 出土木製品実測図1 (1:4)	107
図 81	2区井戸10 出土木製品実測図2 (1:4、1:8)	108
図 82	石器・石製品実測図 (1:2、1:4)	111

図 83	石製品・土製品・銭貨・金属製品拓影・実測図（1：4、1：2、1：1）	112
図 84	古墳時代から平安時代以前遺構配置図（1：350）	116
図 85	平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構配置図（1：350）	117
図 86	室町時代遺構配置図（1：350）	118
図 87	江戸時代遺構配置図（1：350）	119
図 88	既往検出遺構関係図（1：2,000）	120
図 89	白河街区復元図（1：10,000）	121
図 90	2区火山灰検出土層	123
図 91	1区井戸 75 壁面	123
図 92	大山系火山灰顕微鏡写真（× 75）	123
図 93	始良 Tn 火山灰顕微鏡写真（× 30）	123
図 94	調査地点位置図（1：5,000）	124
図 95	ヒシクイ胸骨（× 1.5）	126
図 96	タイ科右上顎骨	126
図 97	魚類鱗（× 7.5）	126
図 98	貝類	126
図 99	昆虫遺存体	126
図 100	植物（木本）遺存体	128
図 101	植物（草本）遺存体	128

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	3
表 2	遺構概要表	4
表 3	遺物概要表	52
表 4	確認された火山灰一覧表	124
表 5	種名表	125

白河街区跡・岡崎遺跡

1. 調査経過

この調査は、京都市東天王町市営住宅ただし、17- 1・2 棟新築工事に伴い実施した発掘調査である。調査地は、京都市左京区岡崎天王町地内に所在する。西・南に位置する平安神宮や京都市動物園周辺を中心として、平安時代後期に白河殿や六勝寺が造営されたことに伴い、寺院や邸宅として開発された白河街区の一部に該当する。また、岡崎一帯では、弥生時代から古墳時代の遺構が多数発見されており、当調査地も岡崎遺跡の範疇に含まれる。周辺の発掘調査では、平安時代中期に建立された東光寺関連の遺構や平安時代後期から鎌倉時代の白河街区の遺構が検出され、当該期の遺物が数多く出土している。今回の調査に先立って、旧市営住宅棟解体の際に立会調査を行い、平安時代後期の遺構が良好に残存していることを確認した。その結果、認定道路を挟んで南北に建設される2棟の市営住宅棟基礎部分を調査対象地とした。北側を1区とし、東西約41m、南北約18mの調査区を設定した。南側は2区とし、東西約40m、南北約15mのL字形の調査区を設定した。

調査事務所建設予定地が旧住宅棟基礎抜き取り跡の窪地であったため、平成17年3月9日に盛土を埋め戻して整地した。翌10日に市住宅建設課による調査範囲の確認および付帯工事の開始、15日に重機掘削を開始した。調査の結果、2区南東部で検出した室町時代後期の根石のある柱穴が建物跡になる可能性が高くなったため、南へ約6.5m拡張することになり、5月13日に重機掘削を実施した。また、室町時代後期の遺構残存状態が良好であり、白河街区における当該期の様相を知る上で貴重な遺跡であるという判断から、6月4日に現地説明会を開催し、約350人の来聴者を得た。7月20日に2区拡張区の埋め戻しを行い、すべての調査を7月29日に終了した。

その他に、修学旅行生の体験学習、中学生のチャレンジ体験を実施した。また、テレビドラマの撮影舞台として調査区を提供した。



図1 2区調査前全景（南東から）



図2 1区作業風景（北東から）

2. 位置と環境

調査地は、東山の西麓、吉田丘陵の南に位置し、それらの間を縫って北東から流れてくる白川の扇状地上に立地する。現在の白川は調査地から約 500 m 東方を流れているが、伏流水が豊富なため、井戸などの深い遺構を掘削すると湧水が始まる。地表面の標高が、1 区で 56.00 m 付近、2 区で 54.90 m 付近と異なるのは、旧市営住宅が建てられた際に、1 区北側で隣接している丸太町通に合わせて盛土が行われたためである。

調査地は白河街区の一面に該当し、六勝寺の筆頭寺院である法勝寺の北側に位置する。白河街区とは、平安時代後期に寺域や宅地として開発された鴨川より以東の街並みのことである。平安京の二条大路を東に延長した「二条大路末」と法勝寺を基準として、平安京に倣った条坊が敷かれたと考えられている。法勝寺西道から鴨川までは 8 町分の規模であったが、東・南・北側の区画の範囲が何町に及んでいたのかは明らかではない。法勝寺は、白河天皇の御願寺として、現在の京都市動物園付近に造営された 4 あるいは 6 町の規模を持つと考えられている寺院で、承保二年（1075）に造営が始まり、承暦元年（1077）には金堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂などの法要が行われ、永保三年（1083）には九重塔・薬師堂・八角堂が完成した。12 世紀中葉までに他の御願寺をはじめとする寺院や御所が、天皇や皇后などによって造立される中で、白河街区は街並みを整えていった。しかし、応仁元年（1467）に始まる応仁の乱によって多くの寺院や宅地が

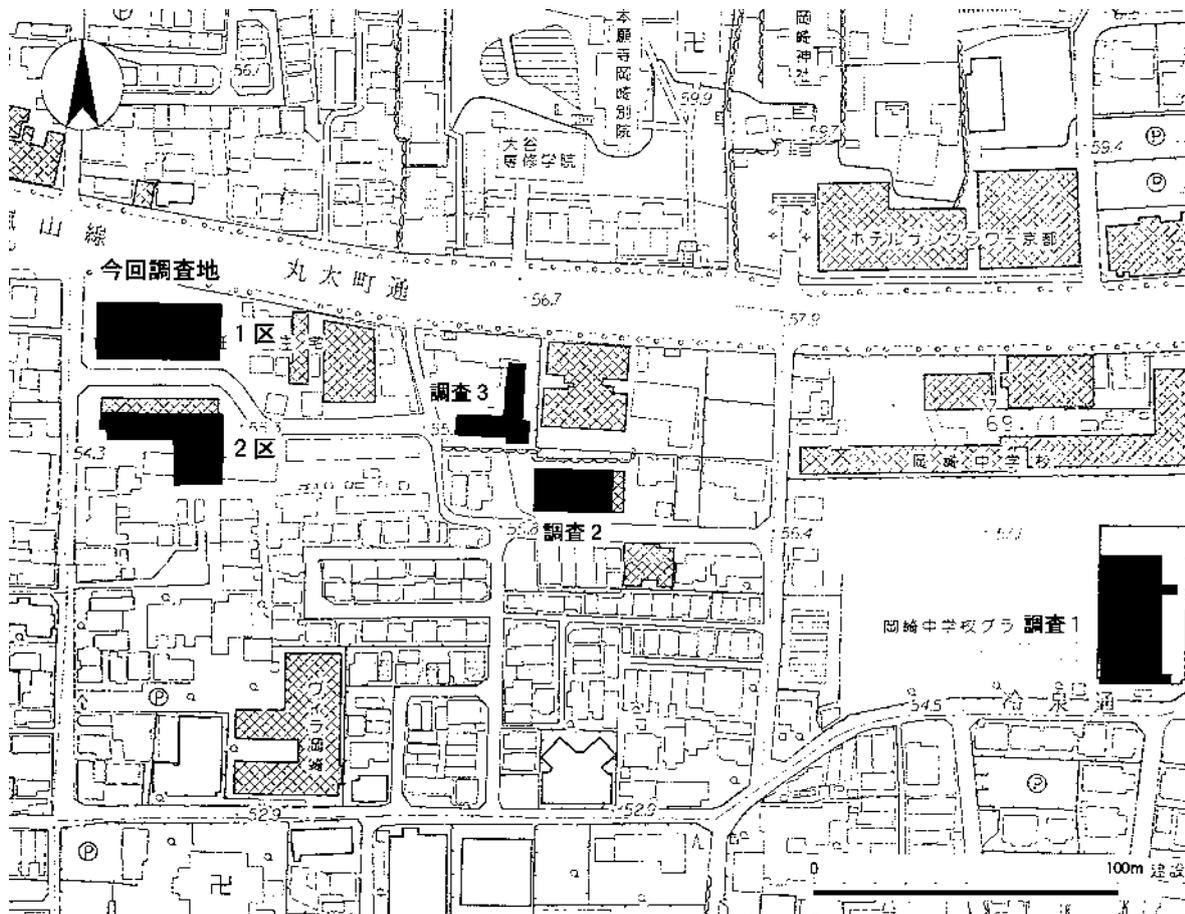


図3 調査位置図および周辺調査（1：2,500）

表1 周辺調査一覧表

番号	事業	調査日	面積	文献
1	岡崎中学校内建物建築	1987.8.5～ 1987.10.29	790m ²	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財研究所概要』 1991年
2	住宅新築	1989.1.19～ 1989.4.9	405m ²	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財研究所概要』 1993年
3	マンション建設	2002.2.5～ 2002.3.25	365.2m ²	『白河街区・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-14 2003年

焼失・荒廃し、六勝寺の中で最後まで残った法勝寺も16世紀後半に廃絶する。その後の白河街区は、畑地や水田として利用されたため、条坊の痕跡がほとんど残っていない。

このように、早い段階で地中に埋もれてしまったことや、文献資料の残る六勝寺自体についても不明な点が多いため、白河街区に至っては例え寺院に接する宅地であれ、条坊であれ、どのように土地が利用されていたのかを知ることが難しくなっていた。戦後に発掘調査が六勝寺を中心に始められて、資料が増加し、六勝寺の一部の伽藍配置や御堂の建物規模、区画溝が確認されているが、断片的であり、街区の全容は不明である。また、同時期の溝でも地点によって方位の振れが異なることがあるため、条坊の復元図が作られているものの確定していない。

今回の調査地周辺では、発掘調査が3回行われている(図3、表1)。白河街区跡としては、平安時代後期の溝、鎌倉時代の池状落込みや石敷方形池、溝や柵、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は、造り替えが行われた溝や柵、柵と溝の間に石敷がなされた道路状遺構などが検出されている。特に、昭和62年度(調査1)で検出された平安時代後期の南北方向の溝は遺物量の多さ

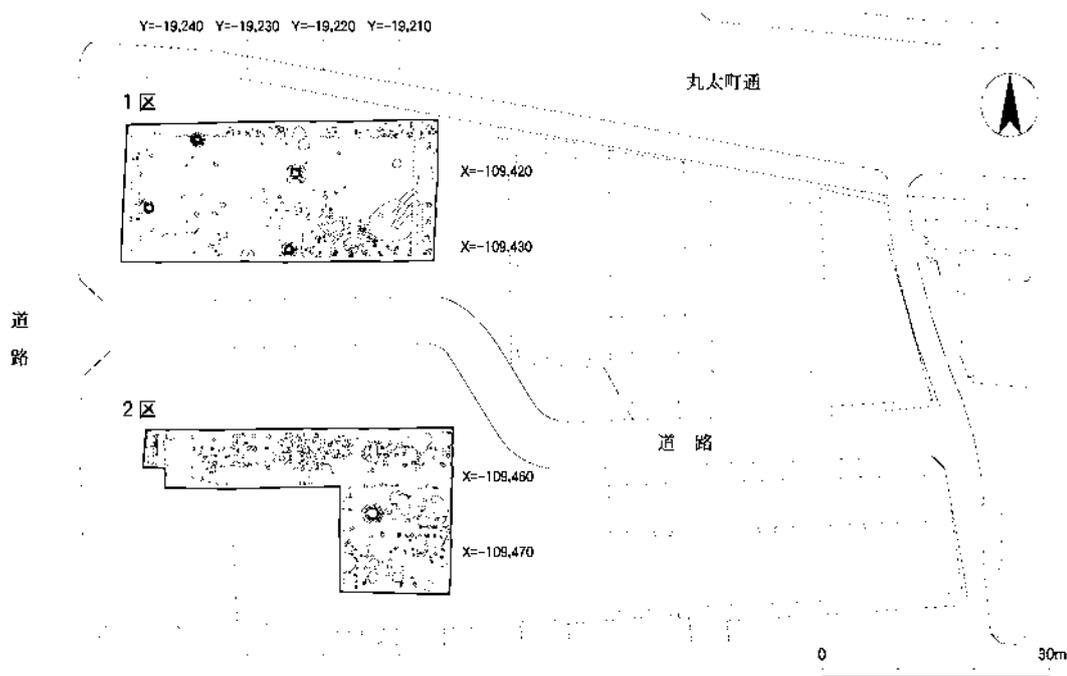


図4 調査区配置図(1:1,000)

に加え、溝の規模も大きいことから宅地境界溝とされ、法勝寺寺域の東限に位置することとも合わせて、白河街区の区画溝と考えられている。昭和63年度（調査2）・平成13年度（調査3）で検出された鎌倉時代の石敷方形池は東西約30m、南北約16mになると考えられるもので、最初の瓦積み石組みに替えられ、修復がされて室町時代前半に廃絶したとされ、これは法勝寺の北にあったと考えられている東光寺に付属する施設と考えられている。これらのことから、調査地一帯は平安時代後期から室町時代前半まで断続しながらも寺地や宅地として利用されていたようである。また、岡崎遺跡としての成果では、弥生時代の遺物が新しい時期の遺構に混じって出土し、古墳時代の遺構がわずかに検出されている。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

1区で検出した主な遺構は、古墳時代後期の土壙（土壙748・862など）、溝（溝817）、落込み（落込み818・842など）、平安時代後期から鎌倉時代初頭の井戸（井戸317・583・588・614）、土壙（土壙274・600など）、白河街区の南北区画内外溝と推定できる溝（溝668・801）、室町時代後期の建物跡（建物1～3）、柵（柵1）、井戸（井戸58・75・119・452）、土壙（土壙619など）、溝（溝342）、江戸時代後期から近代のカマド（カマド112）、井戸（井戸56・74）、土壙（土壙32・50・53・60・77・81など）、区画溝（溝73など）、耕作溝群（溝6など）である。

2区で検出した主な遺構には、平安時代以前の遺構として落込み452、溝465、風倒木痕472がある。平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構として井戸（井戸328）、溝（溝121・246・308）、土壙（土壙111・459）、室町時代後期の遺構として建物（建物1～3）、柵（柵1～3）、井戸（井戸10・318）、土壙（土壙41・109・206・209・215・216・320・321・327・458など）などがある。江戸時代末から近代の遺構としてカマド（カマド2・3）がある。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
古墳時代	溝817・818・842、土壙684・748・862	落ち込み452
平安時代後期 ～鎌倉時代	井戸317・583・588・614、溝668・801、 土壙49・274・340・555・600・630	井戸328、溝121・246・308、 土壙111・459
室町時代	建物1～3、柵1、柱穴15 井戸58・75・119・452 溝342、土壙247・249・619	建物1～3、柵1～3、井戸10・318 溝255・428、土壙41・108・109・206・ 209・215・216・321・327・458
江戸時代 ～明治時代	カマド112、井戸56・74、柱穴590、 溝6・51・73 土壙32・50・53・61・77・81・143	カマド2・3

(2) 1区の遺構

1) 基本層序 (図5・6)

基本層序は、表土下約70～110cmまでは現代の旧市営住宅建築時に行われた盛土および近代の盛土であり、その下に近世包含層であるにぶい黄褐色砂質土が約20～40cm、室町時代包含層である暗褐色粘質土・灰黄褐色粘質土が約10cm、平安時代後期の整地層である黒褐色粘質土が約20cm、古墳時代包含層である黒色粘土が約15cm、その下に地山である褐色粗砂・にぶい黄褐色粘土がある。平安時代後期の整地層と古墳時代包含層は、調査区西半分でのみ検出している。各時代の遺構は、古い時期の包含層を切り込んで造られており、古墳時代の遺構は地山を切り込んでいた。調査区北中央から東にかけての範囲と東側では、盛土直下の室町時代包含層や地山を切り込んで近世遺構と室町時代遺構を検出した。また、調査区中央北寄りには、旧市営住宅基礎跡の攪乱層が東西方向に開いていたため、地山である褐色粗砂層が現れており、深さのある井戸などの遺構が残存しているに過ぎなかった。この攪乱層と周辺の褐色粗砂上面との高低差は、高いところで約50cmあり、西に行くほど低くなって中央付近で周辺との差がなくなる。断面の観察から、北東から南西にかけて地形が緩やかに低くなっており、北東部の高い部分が住宅を建てる際に掘削されたということがわかった。

地山層の補足調査として1区出土井戸完掘後の断面観察を行った。その結果、平安神宮火山灰層して知られる岡崎一帯に降り積もった始良丹沢火山灰(AT火山灰：約20,000～23,000年前)とその直下で泥炭

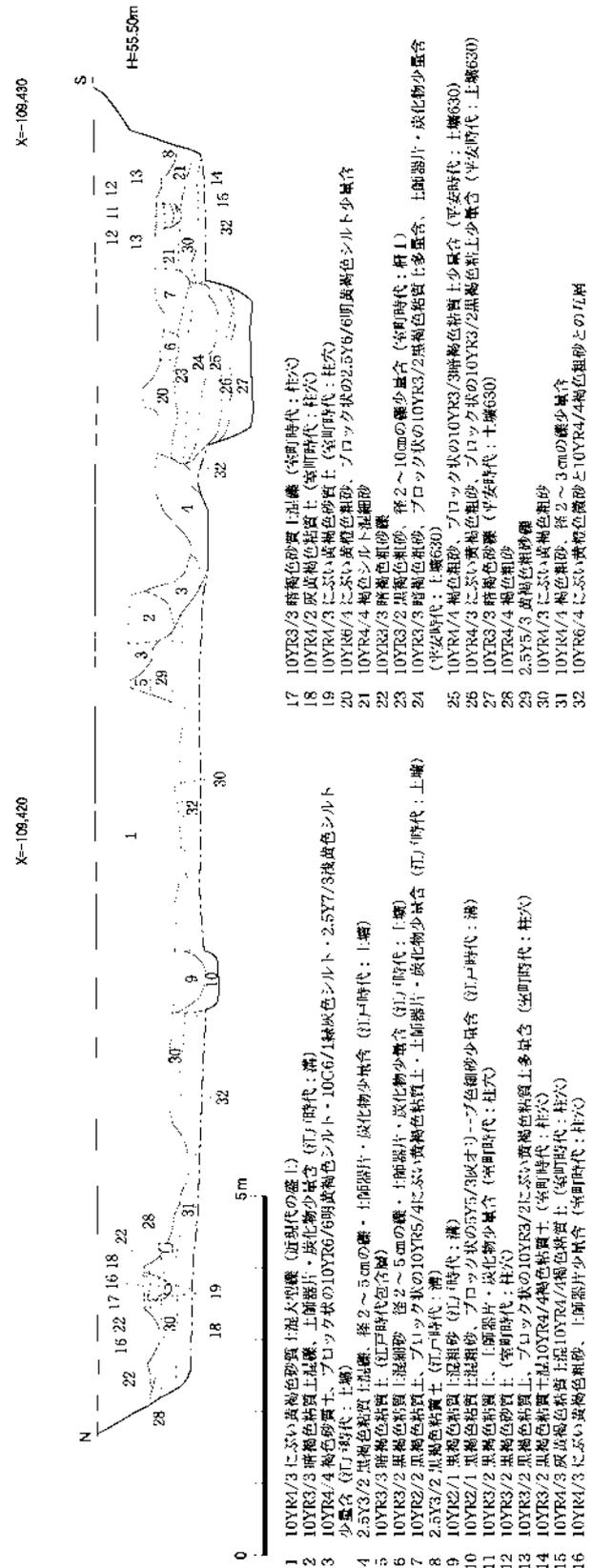


図5 1区東壁断面図 (1:100)

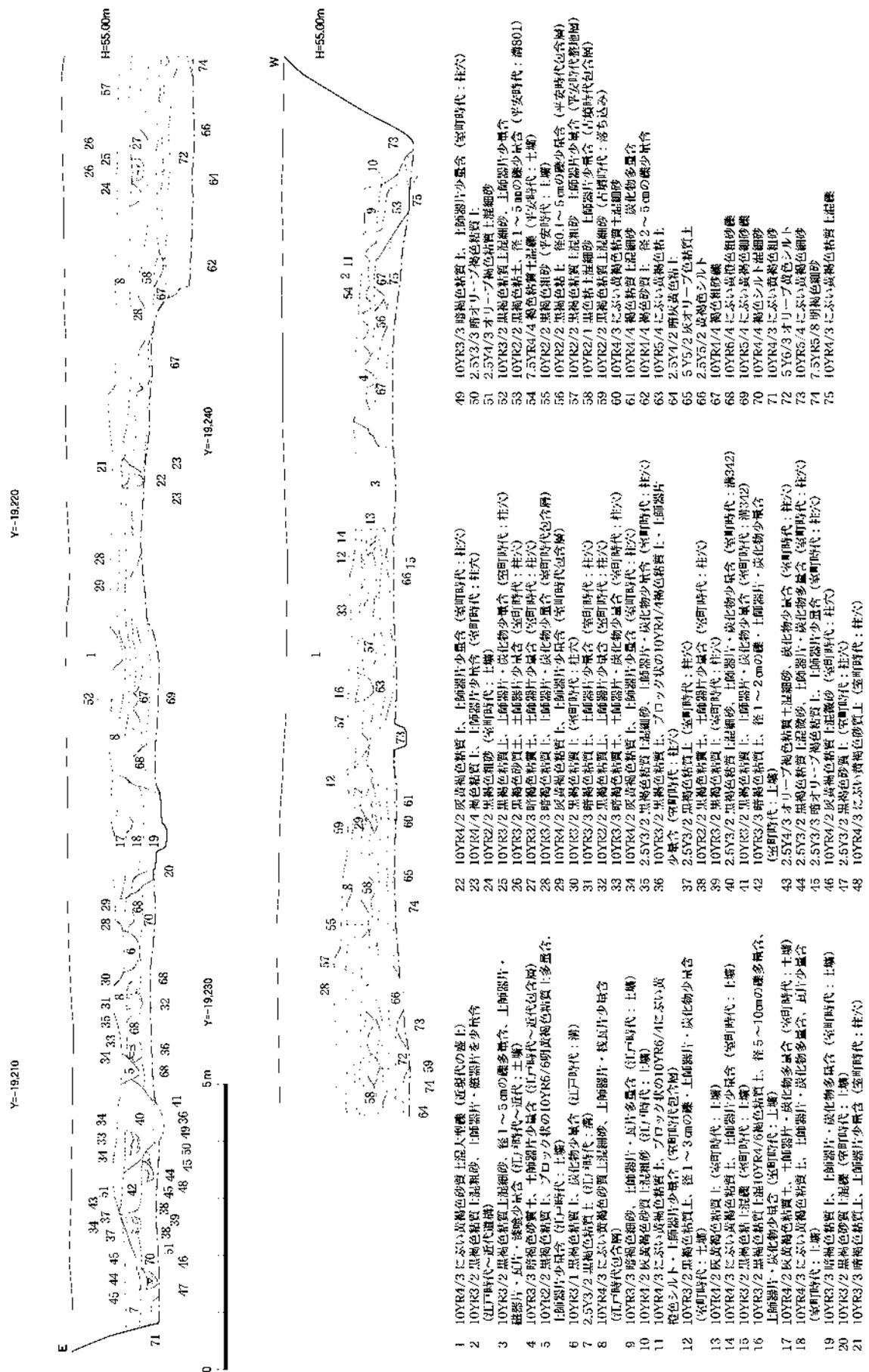


図6 1区南壁断面図(1:100)

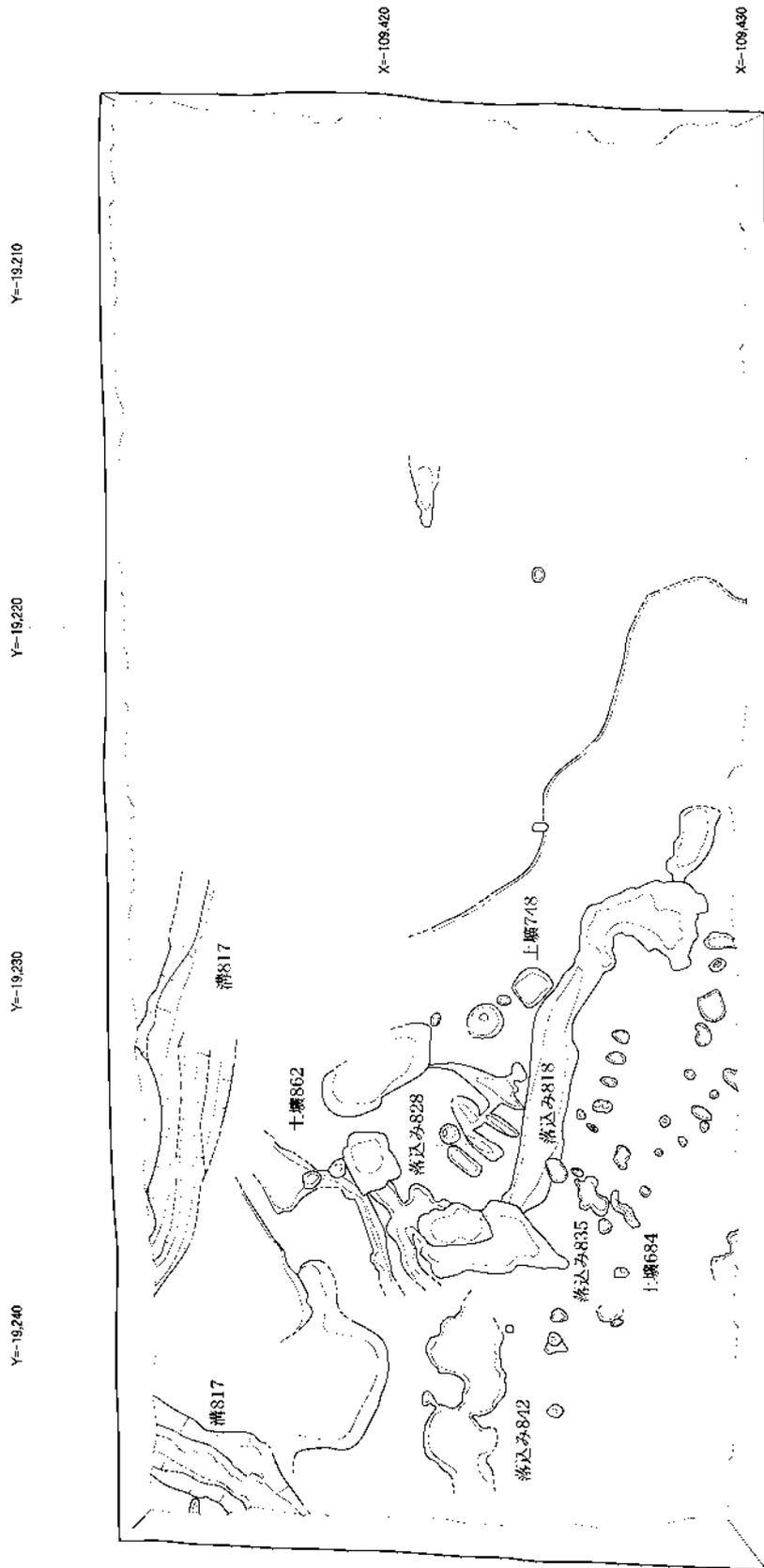
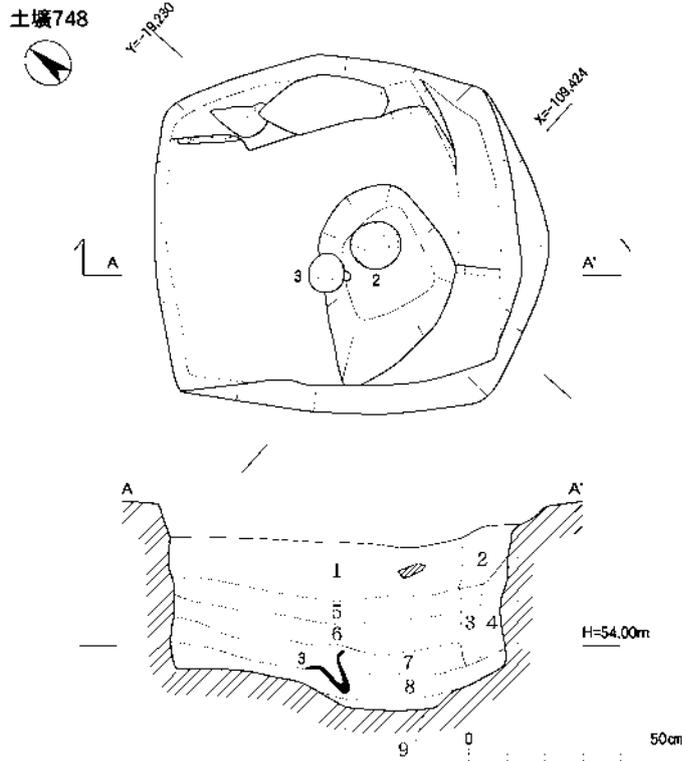


図7 1区古墳時代遺構平面図(1:200)



- 1 10YR2/1 黒色粘土、径1～5mmの礫・大型鉄少量含
- 2 10YR3/1 黒褐色粘土、径1～6mmの礫・ブロック状の10YR5/6 黄褐色微砂少量含
- 3 10YR2/1 黒色粘土混10YR4/3 灰黄褐色粘土
- 4 10YR3/3 暗褐色粘土混10YR5/3にぶい黄褐色粘土
- 5 2.5Y2/1 黒色粘土、ブロック状の10YR2/2 黒褐色粗砂少量含
- 6 10YR2/2 黒褐色粗砂、レンズ状の10YR5/3にぶい黄褐色細砂・ 网状の10YR2/1 黒色粘土少量含
- 7 10YR3/3 暗褐色粗砂
- 8 10YR2/1 黒色粘質土
- 9 10YR4/1 褐灰色粘質土混細砂

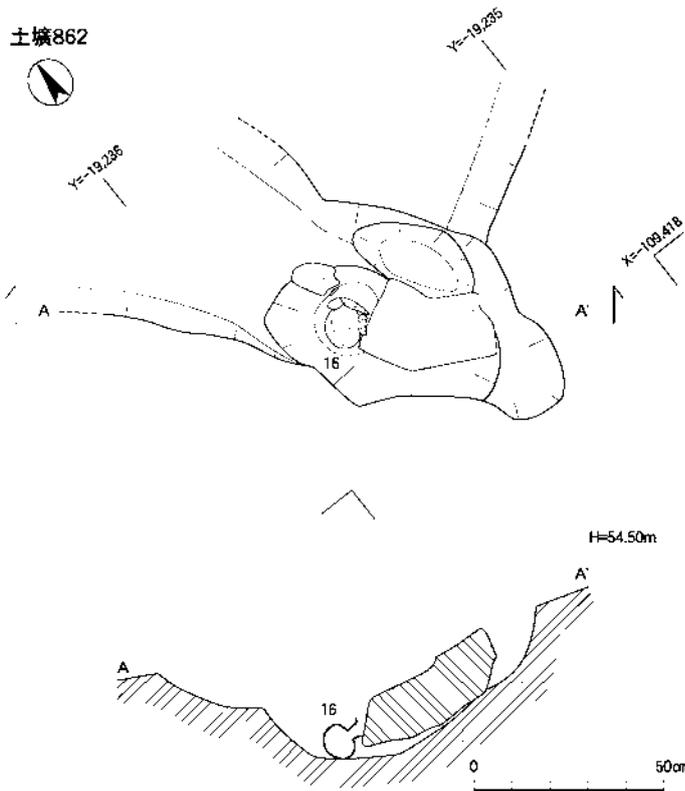


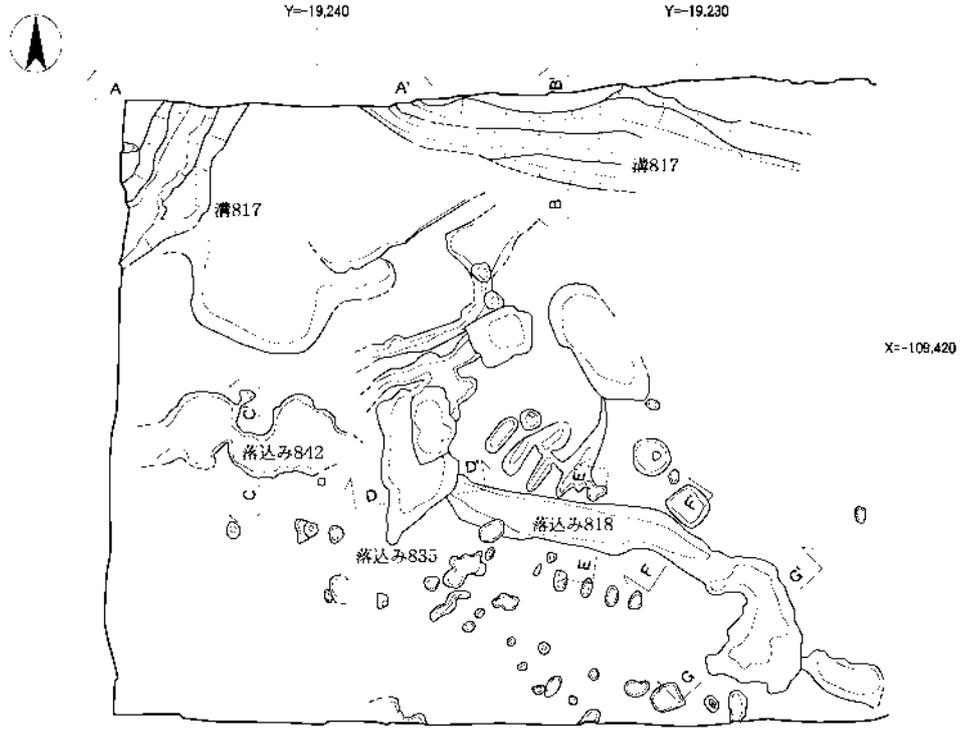
図8 1区土壌748・862実測図(1:20)

層を確認した(図20・91参照)。火山灰層は黄褐色微砂で約20cm、泥炭層は黒褐色粘質土で約50cmの堆積を確認しており、泥炭層はさらに厚く堆積しているものと考えられる。火山灰層の上面は、遺構検出面から約1.8m下の標高52.25m附近である。なお、「6.自然科学的分析」で詳しく記述する。以下、各時代の主要な遺構について報告する。

2) 古墳時代後期の遺構(図7、図版1)

古墳時代の遺構は、調査区西半で検出した。旧地形は調査区中央から西に向かって落ち込み、なだらかに傾斜している。検出遺構は土壌748、溝817、その他自然の落ち込みがある。

土壌748(図8、図版2)1区南西部の北西から南東方向に走る落ち込み818の北側に位置する、一辺約0.8m、深さ0.55mの方形土壌である。土壌中央部に土師器の高杯脚部が逆位置で、須恵器の杯身が伏せた状態で置かれ、土壌底北端に約35cm×15cmの自然石が長軸を土壌辺に沿わせた状態で出土した。断面から東側に垂直方向の堆積を確認し、土壌底の北側と東側の一部で木材痕跡を検出したことから、箱または板組みがあった可能性が高い。箱内と考えられる埋土は黒色粘土や中に砂礫を含む上層と黒褐色粗砂の下層に分かれ、箱外の東側の埋土は黒褐色粘土に微砂や灰黄褐色粘土を含



※ A-A' は図16参照

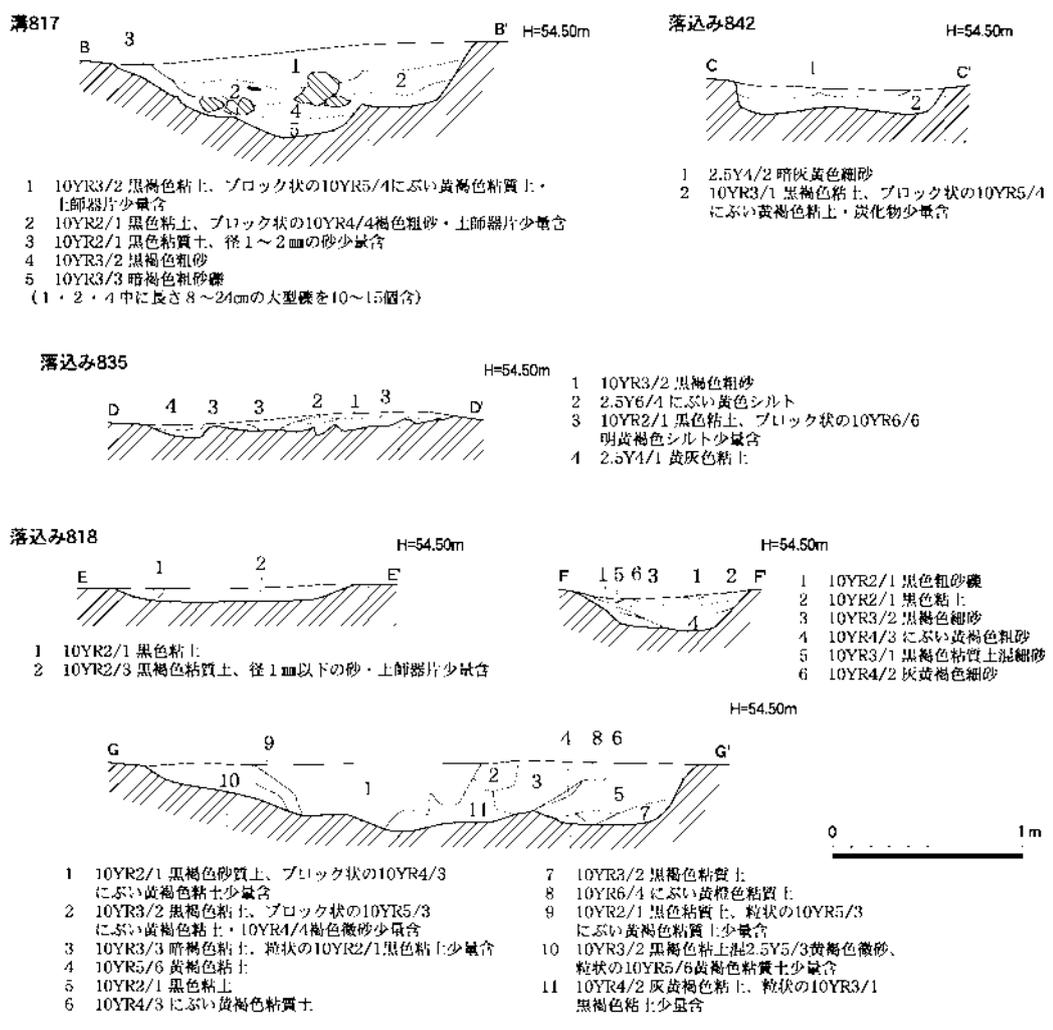


図9 1区溝817、落込み818・835・842断面図(1:40)

む。これらの下には上述の遺物が出土した黒色粘質土が堆積している。遺物の出土状況や遺構の形状などから墓壙と考えられる。

土壙 862 (図 8、図版 2) 溝 817 の南で検出した。検出長約 0.8 m、幅約 0.55 m、深さ約 0.4 m の楕円形を呈する。長辺 0.45 m、短辺 0.25 m、厚さ 0.15 m の河原石が傾斜した南壁に貼りついた状態で検出した。石の根元には口縁部を打ち欠いた**甕**が、口縁を南東に、胴部の孔を南西に向けた状態で出土した。埋土は黒褐色粘質土である。

土壙 684 (図 7) 調査区西半南寄りで確認した。直径約 0.4 m の不整形土壙である。深さは 0.05 m 程度と非常に浅く、全体に広がる落込みの深い部分が残存したと考えられる。土師器片、須恵器片が出土している。

溝 817 (図 9) 調査区北西部で検出した。西端から弧を描きながら調査区北壁に向い、一旦調査区外に出て途切れるが、再度北壁から現れて東へ延びる。残存状態の良いところでは幅約 1.6 m、深さ約 0.5 m の規模を有するが、大部分の上部が削平を受けているため平面形態は不明である。埋土上層は、にぶい黄褐色粘質土や褐色粗砂をブロック状に含む黒褐色粘土や黒色粘土であり、下層は黒褐色粗砂や暗褐色粗砂礫である。上層から下層上半部にかけての堆積土中に、長辺約 8 ～ 24 cm の大型礫が多く含まれていた。遺物には、土師器甕、須恵器甕・高杯脚部・**甕**胴部片・杯片、鉄滓などがある。

落込み 828 (図 7) 溝 817 の南で検出した。長さ約 1.1 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.15 m の落込みである。埋土は黒褐色粘質土で、土師器片、須恵器片が出土した。また、遺構の時期には伴わない縄文時代の鉢底部と考えられる破片が 1 点出土している。

落込み 818・835・842 (図 9) 調査区西半分で検出した。地形は、北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜していた。埋土は、上層が砂層、下層が粘土層または砂層で、黒色系の色調を呈する。落込み 818 は深い所で約 0.35 m、落込み 835 は深さ約 0.1 m、落込み 842 は深さ約 0.2 m である。土師器甕、須恵器甕・杯片などが多く出土している。

3) 平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構 (図 10、図版 1)

調査区北側の削平を受けている所では深さのある井戸を検出し、その他では溝や柱穴、土壙などの遺構を検出した。確認した 4 基の井戸はすべて方形木枠組みである。

井戸 317 (図 11、図版 4) 調査区中央北寄りで検出した。上部の一部が近世遺構に削平されているため、約 1.3 m の不整形な掘形になっている。検出面から井戸底までの深さは約 1.5 m、底に一辺 0.68 m の方形横棧組みと直径約 45 cm の曲物を据え、北・西側の木組みの外側に丸・平瓦が入られていた。南西の隅に高さ約 10 cm ほど縦板が 1 枚残存していることから、もともとは縦板組みの井戸であり、裏込めに瓦が入られていたが、廃棄される時に縦板が再利用の為に抜き取られた可能性が高い。上層が暗オリーブ褐色粘質土混礫や黒褐色粘質土、下層が暗灰黄色・灰色粘質土などであり、瓦片はほとんど全ての層中に含まれていた。土師器皿片が出土している。

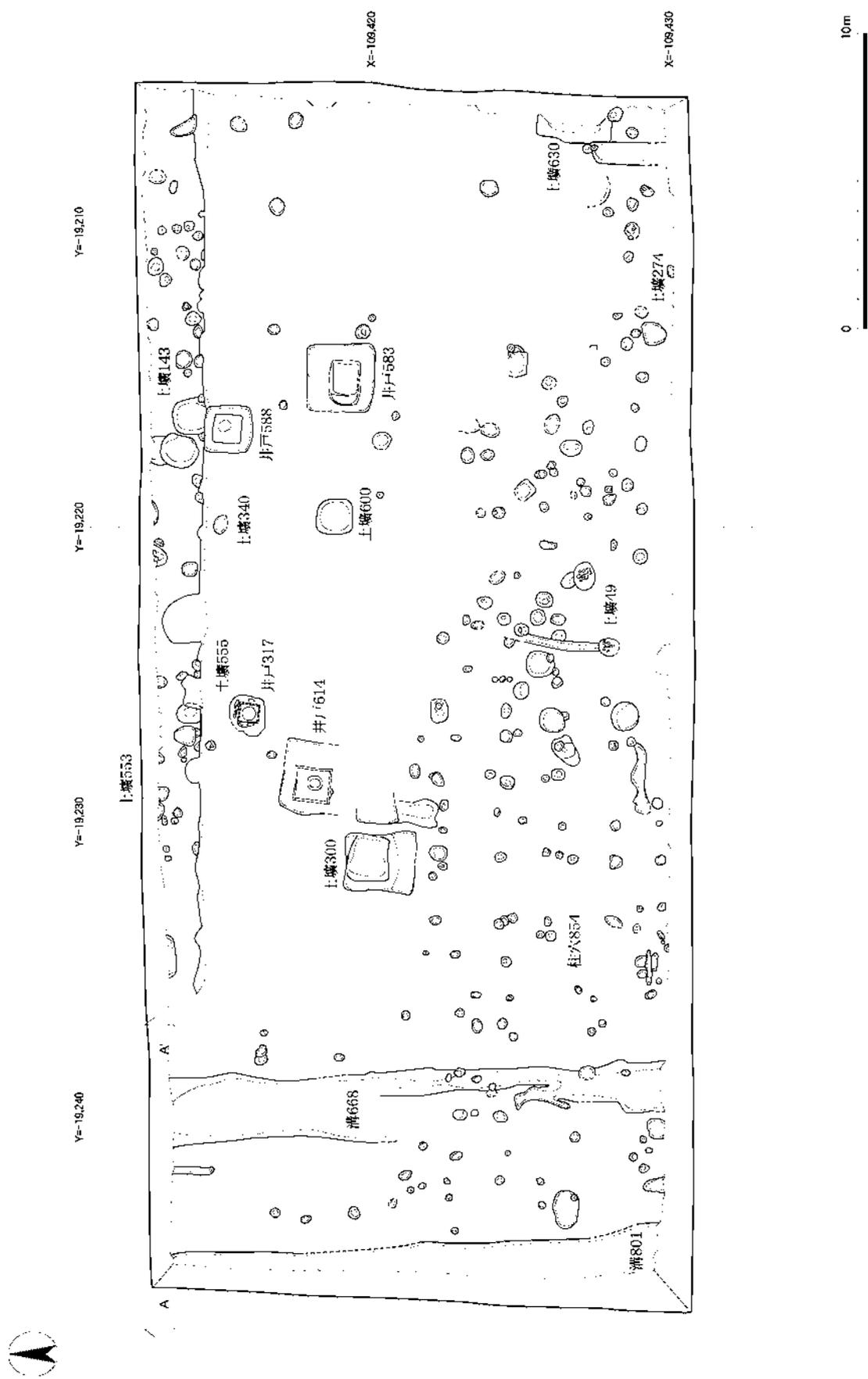
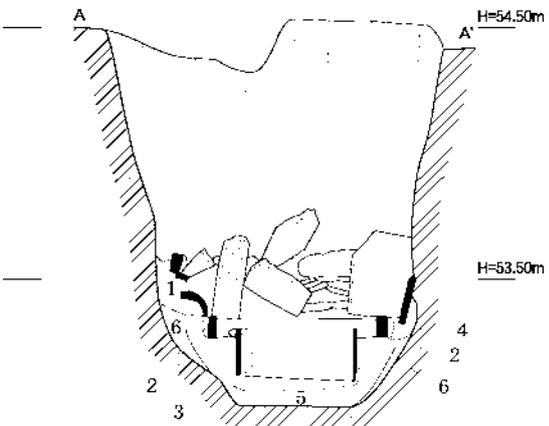
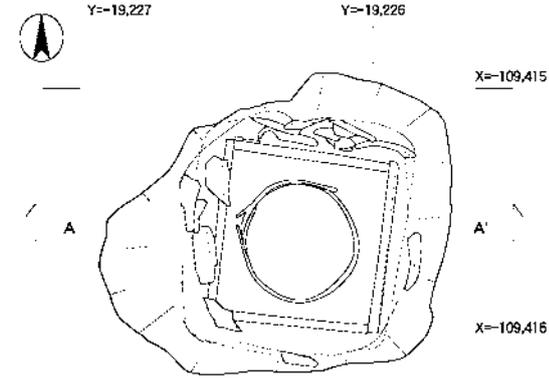
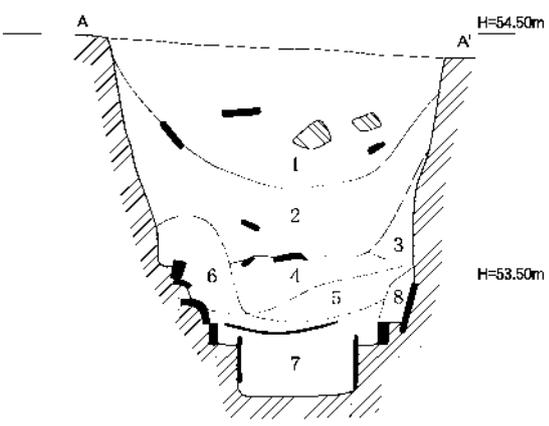


図10 1区平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構平面図 (1:200)

井戸317

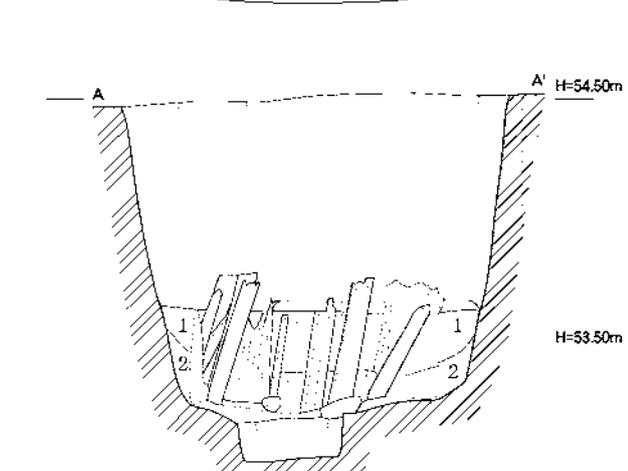
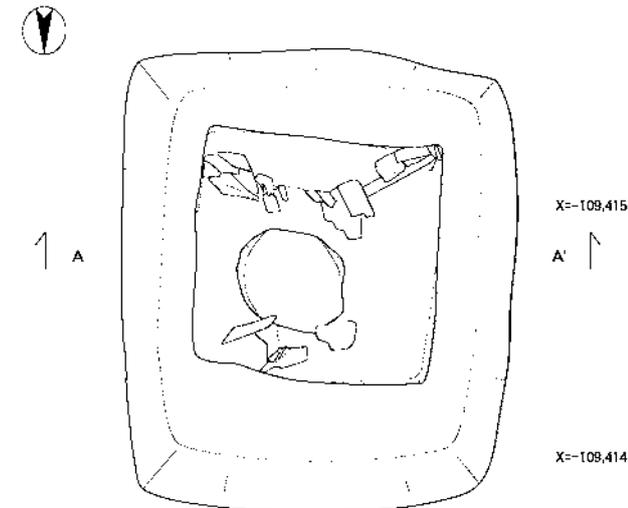


- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂礫
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 3 2.5Y3/2 オリーブ褐色細砂
- 4 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂礫
- 6 10YR5/6 黄褐色砂礫

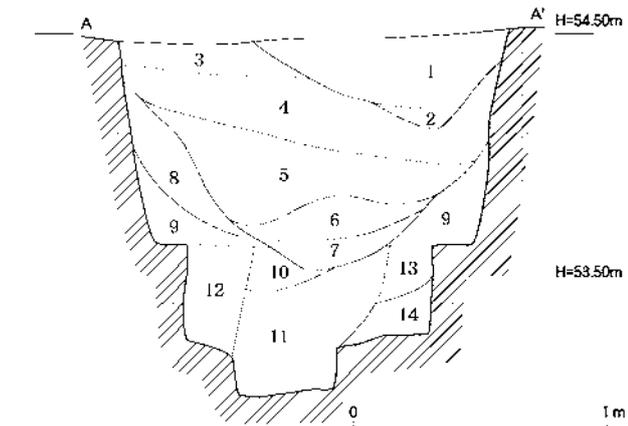


- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土混礫、ブロック状の7.5YR4/4 褐色粘質土・瓦多量含
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の10YR4/4褐色砂質土多量含
- 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、瓦多量含
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土混10YR4/6褐色粘質土
- 6 5YR5/6 明赤褐色粗砂、ブロック状の10YR3/2黒褐色粘土多量含
- 7 5Y5/1 灰色粘質土
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂礫

井戸588

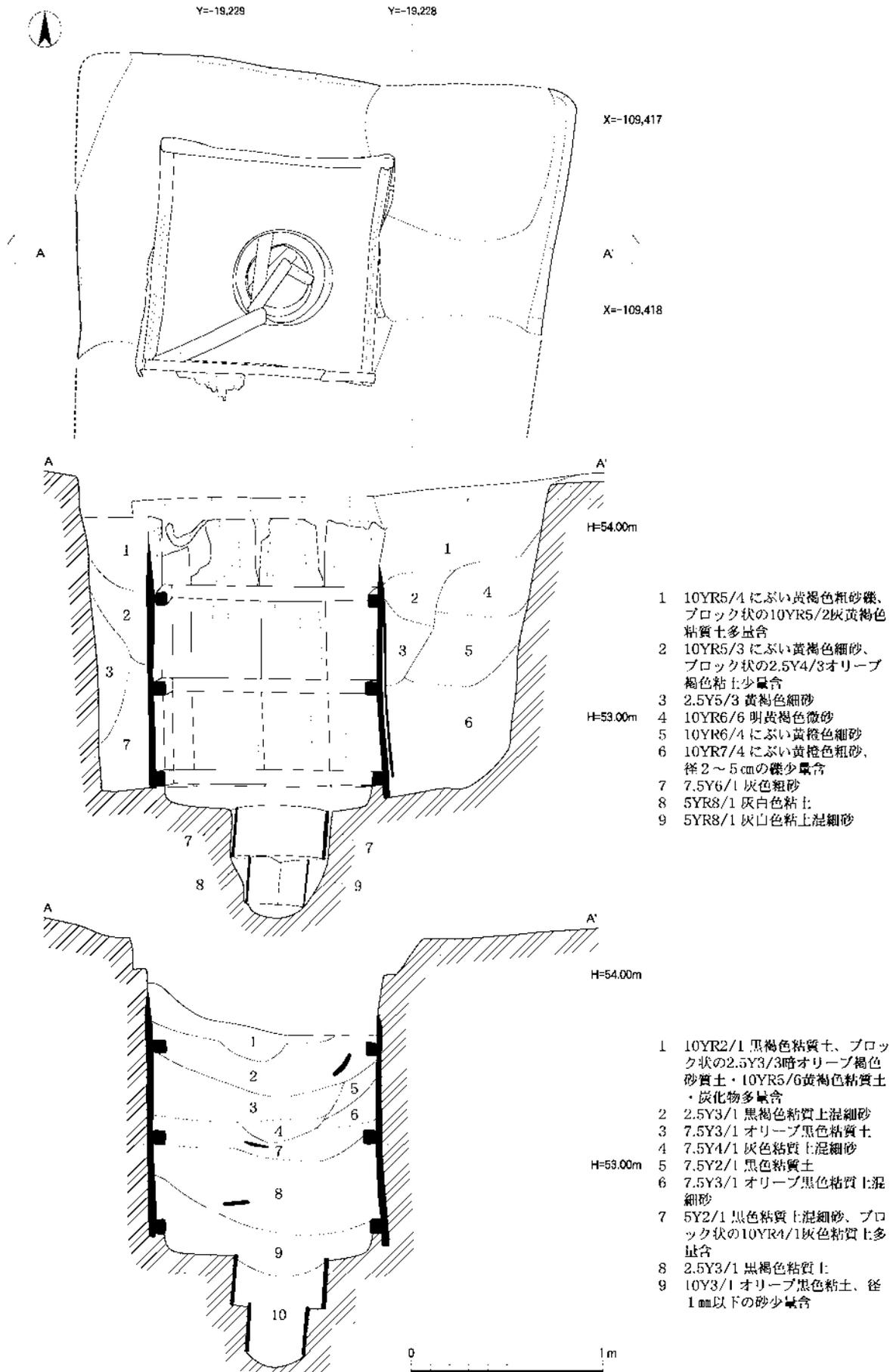


- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂、炭化物少量含
- 2 10YR4/1 灰色粗砂



- 1 10YR5/6 黄褐色粗砂と10YR3/4暗褐色粘質土(炭化物少量含)の互層、瓦少量含
- 2 10YR4/4 褐色粘質土混10YR5/6黄褐色粗砂、炭化物少量含
- 3 10YR5/6 黄褐色粗砂、径2~20mmの礫多量含
- 4 10YR5/6 黄褐色粗砂、ブロック状の10YR3/3暗褐色粘質土多量含、瓦少量含
- 5 10YR5/6 黄褐色粗砂、ブロック状の10YR3/3暗褐色粘質土・10YR2/1 黒色粘質土多量含、瓦少量含
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 7 10YR4/3 灰黄褐色粗砂礫、木棒片・瓦少量含
- 8 10YR5/6 黄褐色粗砂、ブロック状の10YR2/1黒褐色粘質土少量含
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混粗砂
- 10 10YR7/4 にぶい黄褐色粗砂礫
- 11 10YR4/1 褐灰色粗砂礫
- 12 10YR5/6 黄褐色粗砂礫
- 13 10YR6/2 灰黄褐色粗砂
- 14 10YR7/8 黄褐色粗砂礫

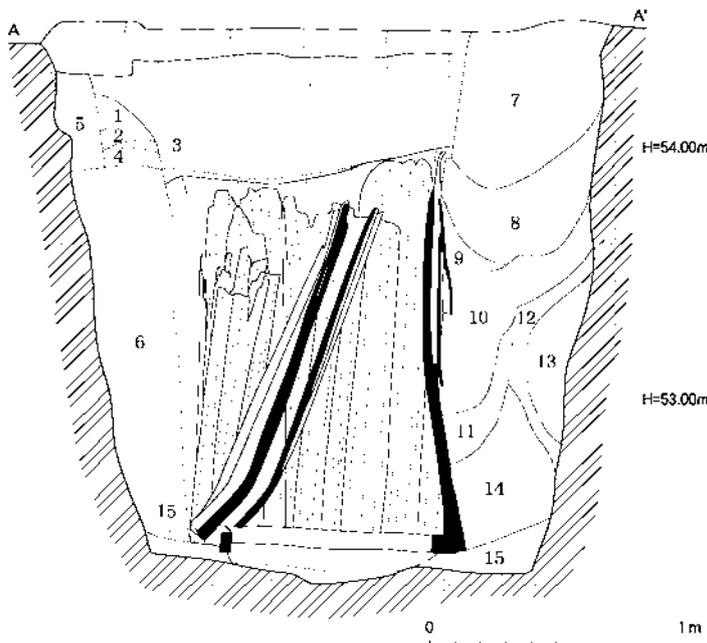
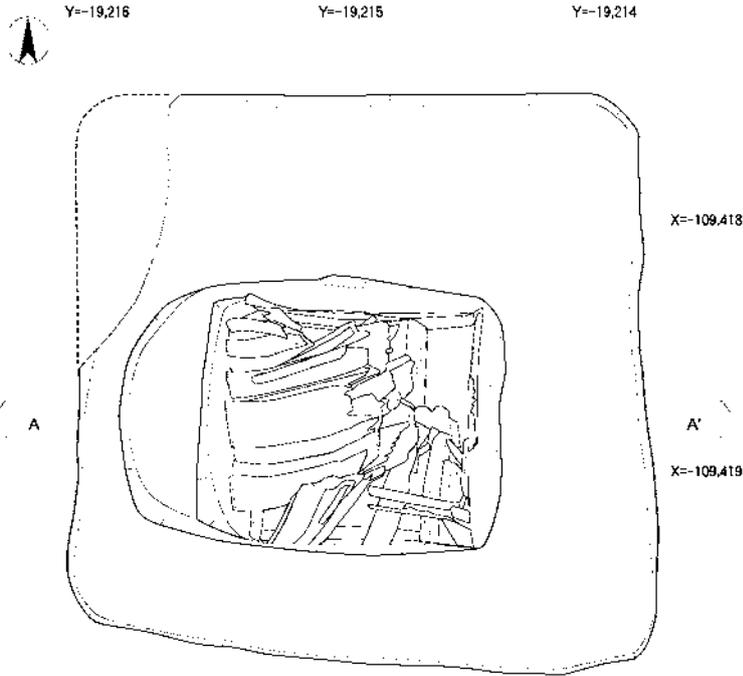
図 11 1区井戸 317・588 実測図 (1:30)



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫、ブロック状の10YR5/2灰黄褐色粘質土多量含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂、ブロック状の2.5Y4/3オリブ褐色粘土少量含
- 3 2.5Y5/3 黄褐色細砂
- 4 10YR6/6 明黄褐色微砂
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂
- 6 10YR7/4 にぶい黄褐色粗砂、径2~5cmの礫少量含
- 7 7.5Y6/1 灰色粗砂
- 8 5YR8/1 灰白色粘土
- 9 5YR8/1 灰白色粘土混細砂

- 1 10YR2/1 黒褐色粘質土、ブロック状の2.5Y3/3暗オリブ褐色砂質土・10YR5/6黄褐色粘質土・炭化物多量含
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土混細砂
- 3 7.5Y3/1 オリブ黒色粘質土
- 4 7.5Y4/1 灰色粘質土混細砂
- 5 7.5Y2/1 黒色粘質土
- 6 7.5Y3/1 オリブ黒色粘質土混細砂
- 7 5Y2/1 黒色粘質土混細砂、ブロック状の10YR4/1灰色粘質土多量含
- 8 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- 9 10Y3/1 オリブ黒色粘土、径1mm以下の砂少量含

図12 1区井戸614実測図(1:30)



- 1 10YR4/6 褐色粘質土混2.5Y3/3オリーブ褐色粘質土、土師器片少量含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR3/4暗褐色粘質土少量含
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
- 4 10YR3/4 暗褐色粘質土混細砂、ブロック状の10YR2/1黒色粘土多量含
- 5 10YR2/1 黒色粘土混10YR3/3暗褐色粘土、土師器片少量含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR2/2黒褐色粘質土少量含
- 7 10YR3/2 黒褐色粗砂混10YR5/4にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR8/2 灰白色粘土・土師器片少量含
- 8 10YR5/6 黄褐色粗砂、ブロック状の10YR2/1黒色粘土多量含・土師器片少量含
- 9 5Y5/1 灰色粘質土混細砂、ブロック状の5G6/1緑灰色粗砂多量含
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混礫
- 11 2.5Y5/1 黄灰色粗砂
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR2/1黒色粘土少量含
- 13 10YR5/6 黄褐色粗砂
- 14 7.5Y5/1 灰色粘質土混礫
- 15 5BG6/1 青灰色粗砂

図13 1区井戸583実測図(1:30)

井戸583(図13・14、図版4)調査区西側で検出した。一辺が0.9mの方形横棧縦板組みであったものが、南東部と西部の板が内側に倒れ込んで埋まったと推定できる。掘形は約2.2m四方で、北西部角が近世井戸に切られている。深さは検出面から約2.1mあり、底には約0.9mの方形に組まれた横棧が残存していた。井戸埋土上層は黒褐色粘質土、下層は黄褐色粗砂などの地山の土が混じっている。掘形の埋土は褐色～黒色粘質土と地山のにぶい黄褐色粗砂が交互に堆積している。土師器皿、須恵器、瓦片などが出土している。

井戸588(図11、図版3)井戸583の北側で検出した。南北約1.8m、東西約1.5mの掘形を持ち、井戸本体は0.9m四方で、ほぼ中央に直径約0.4m程度の曲物があった痕跡が残る、深さ約1.4mの縦板組み井戸である。板材は他の井戸に比べて残りが悪く、底の南側と北側の一部に約50cmの高さで残っていた。暗褐色系粘質土と黄褐色粗砂が上層では互層になっており、灰黄褐色粗砂礫や褐灰色粗砂礫が下層に堆積していた。掘形埋土には、にぶい黄褐色粗砂と灰色粗砂が堆積している。土師器皿、須恵器、瓦器碗、瓦片

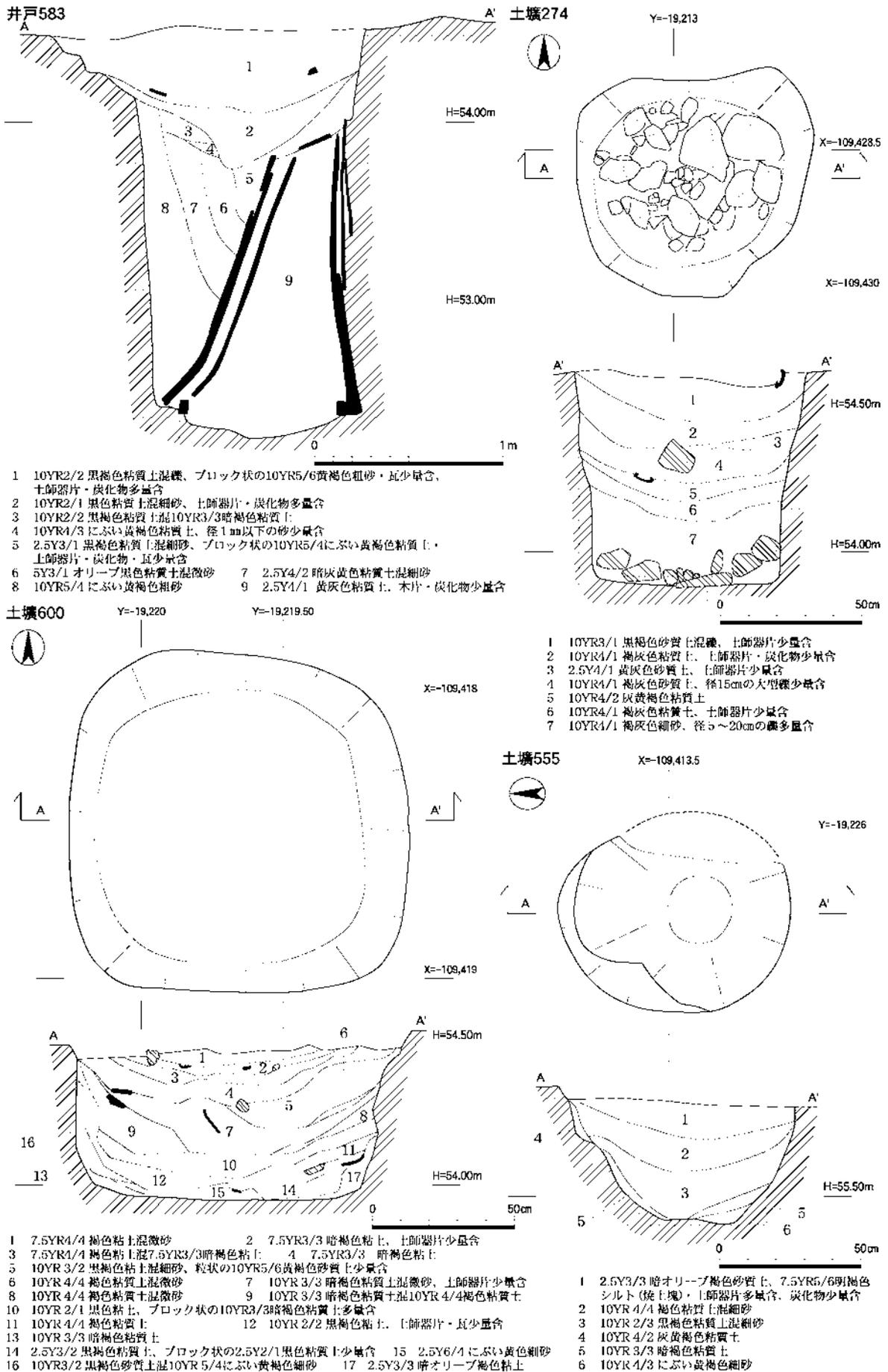


図14 1区井戸583断面図、土壌274・555・600実測図(1:30、1:40)

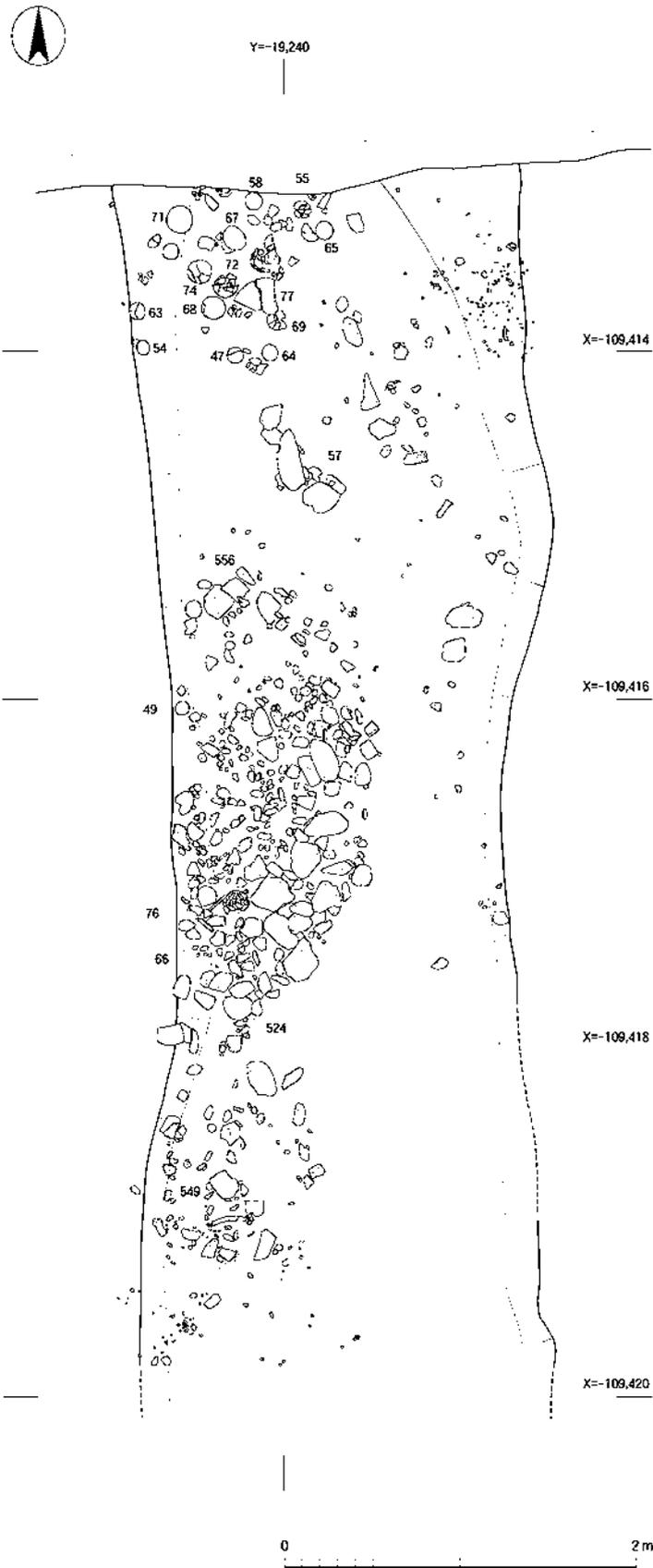


図15 1区溝668平面図(1:40)

などが出土している。

井戸614(図12、図版3)調査区中央北寄りに位置し、南半分を攪乱墳に切られていた。一辺1.2mの横棧を方形に3段に組み、四隅に支柱を立てて、横棧の外側に立てた縦板を支えるように造られた方形縦板横棧支柱式と呼ばれる井戸である。深さ約2.3mで底に大小の曲物を2段積にしていた。曲物の内側には支柱に使われたと考えられる角柱を4本と、井戸枠内に斜めに立てかけられたような状態で横棧1本を検出しており、廃棄時には横棧が4段以上あったということがわかった。掘形は一辺約2.4m、井戸本体は掘形内の西側に偏って造られている。埋土は黒褐色粘質土が主体である。掘形埋土上層は、にぶい黄褐色系の砂層、下層は灰白色粘土である。土師器皿・甕、須恵器鉢、輸入磁器、瓦などが出土した。他に、ヒシクイの胸骨、貝類、モモ・オニグルミを検出している。

土壇49(図10)調査区中央南寄りで検出した。直径約0.45m、深さ約0.1mの円形土壇である。土師器皿が出土した。

土壇143(図10)井戸588の北側に位置する。井戸588の北辺を切っていたと考えられるが、削平されずに残った壇上で検出し、深さが約0.2mと浅かったことから、正確な切り合いは不明である。

Y=19.244

Y=19.240

※ 図10のA-A'に対応

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混大型礫 (近現代の盛上)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、土師器片・瓦少量、炭化材多量 (江戸時代：上層)
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土、ブロック状の10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土・土師器片・炭化物少量 (江戸時代包含層)
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片少量
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片・瓦・炭化物多量
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混粗礫、土師器片・瓦少量
- 7 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片・瓦少量
- 8 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片・瓦・炭化物多量
- 9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片多量、炭化物少量 (平安時代：溝668)
- 10 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片・炭化物少量 (平安時代：溝668)
- 11 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片多量 (平安時代：溝668)
- 12 10YR3/4 暗褐色粘質土、土師器片少量 (平安時代：溝801)
- 13 10YR3/2 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片・炭化物少量 (平安時代：溝801)
- 14 10YR3/2 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代整地層)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、炭化物少量
- 16 10YR3/3 暗褐色粘質土混粗礫、土師器片・瓦・炭化物少量
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、土師器片少量
- 18 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、土師器片少量
- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代包含層)
- 20 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質土、土師器片少量
- 21 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、土師器片少量
- 22 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片少量
- 23 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片少量
- 24 10YR2/2 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代包含層)
- 25 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、土師器片少量 (溝817)
- 26 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 27 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 28 10YR3/2 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 29 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 30 10YR7/1 灰白色粘質土
- 31 10YR3/2 黒褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (溝817)
- 32 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 33 2.5Y4/1 灰褐色粘質土混粗礫、土師器片少量 (平安時代：溝817)
- 34 10YR5/6 黄褐色粘質土混粗礫 (地山)

図 16 1区溝 668・801 断面図 (1:40)

- 17 -

一辺約 1.2 mの隅丸方形土壙である。土師器皿が出土している。

土壙 274 (図 14、図版 4) 調査区東の南壁直下で検出した。直径約 0.8 mの不整円形を呈し、深さ約 0.8 m、底部には直径 5～20 cmの大型礫が敷き詰められていた。土師器皿片が礫に混ざって出土している。埋土は黒褐色砂質土、褐灰色粘質土などである。遺構の性格は不明である。

土壙 300 (図 10) 調査区のほぼ中央で検出した。土壙内で 2 段に落ち込んでおり、上部は長辺約 2.4 m、短辺約 2.2 m、深さ約 0.1 m、下部は一辺約 1.4 m、深さ約 0.3 mである。埋土は暗褐色粘質土である。土師器皿が出土した。

土壙 340 (図 10) 井戸 588 の西で検出した。長辺約 0.7 m、短辺約 0.4 m、深さ約 0.05 mを測る。現代に上部大半を削平されていた。土師器皿が出土した。

土壙 553 (図 10) 調査区北壁中央附近で半分壁面に掛かっていた。長辺約 0.5 m、短辺の残存長約 0.2 m、深さ約 0.05 mの不整円形を呈すると考えられる。土師器皿が出土した。

土壙 555 (図 14) 井戸 317 北側で検出した。東側の一部に削平を受けている。長径約 0.8 m、短径約 0.7 mの楕円形を呈する深さ約 0.4 mの土壙である。断面形状は楕円形に近い。埋土上層に土師器片や炭化物と共に、焼土塊を多く含んでいた。下層は褐色系の細砂や粘質土である。廃棄土壙と考えられる。

土壙 600 (図 14) 一辺が約 1.2 m、深さ約 0.6 mの隅丸方形土壙である。褐色粘土と黒褐色粘土、褐色粘質土が交互に堆積していた。井戸を造る途中で止めたと考えられるが、正確な用途は不明である。土師器皿・椀、須恵器、瓦器椀、輸入磁器、瓦片などが多く出土している。

溝 668 (図 15・16、図版 5) 調査区西で南北方向に検出した溝である。南端では幅約 1.7 m、深さ 0.25 m、中央附近で幅約 0.6 m、深さ 0.12 m、北端で幅約 2.2 m、深さ約 0.4 mである。北壁の観察から、幅約 2.8 m、深さ約 0.8 mの規模であったと考えられる。上層の暗褐色粘質土には、直径 1～2 cmの礫や炭化物、土師器皿が大量に含まれ、中層の黒褐色粘質土混粗砂礫にも土師器皿が大量に入っていた。下層の暗褐色粘質土では、底近くに土師器皿の完形品が多く含まれていた。須恵器鉢、焼締陶器、輸入磁器、白色土器高杯脚部、瓦片などが出土した。

溝 801 (図 10・16、図版 5) 調査区西端で検出した南北溝であるため、溝の西肩は調査区外で溝幅は不明である。検出した幅は 0.5～1 m、深さ 0.05～0.3 m、溝の振れは西へ 1 度 50 分で溝 668 と平行している。埋土は、暗褐色細砂と黒褐色細砂の上下 2 層であった。遺物は溝 668 に比して非常に少なく、土師器皿や須恵器などが出土した。白河街区の南北区画西側外溝に想定できる。

4) 室町時代後期の遺構 (図 17、図版 1)

調査区ほぼ全面にわたって、この時期の遺構を検出した。旧市営住宅による削平と近世遺構による削平を受けている調査区北半分の低い部分と西半分は、検出できた遺構の密度が低くなっている。検出した 4 基の井戸は、石組みと木枠組みや曲物を組み合わせていた。並ばないが、それ



Y=19,240

Y=19,230

Y=19,220

Y=19,210

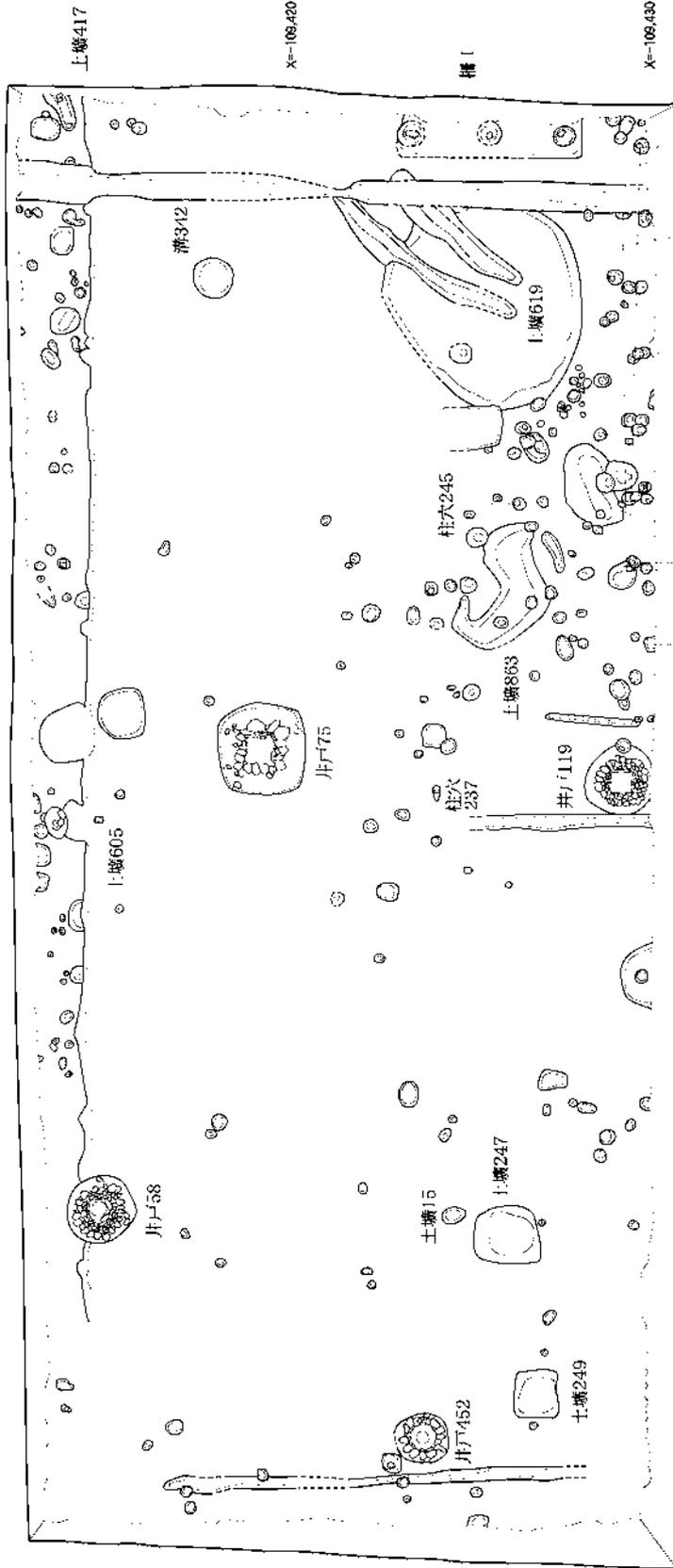
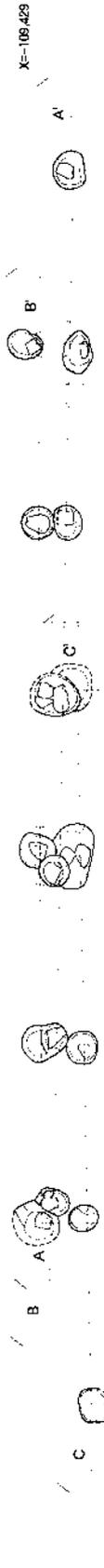


図17 1区室町時代遺構平面図(1:200)

Y=19,220

Y=19,215

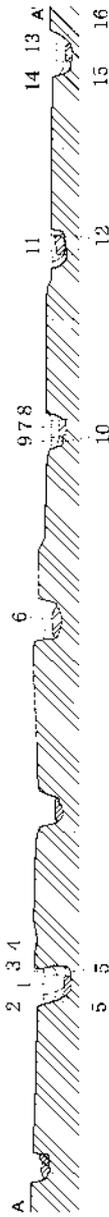
Y=19,210



X=109,429

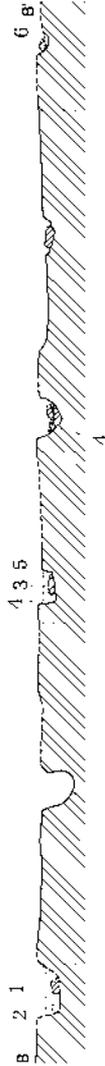
建物 1

H=55.00m



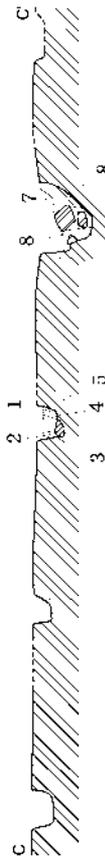
建物 2

H=55.00m



建物 3

H=55.00m



X=109,424

X=109,426

柵 1

2m



Y=19,206

建物 1

- 1 10YR2/3 黒褐色粘質土、径1mm以下の砂少量
- 2 10YR3/4 暗褐色粘質土
- 3 10YR2/2 黒褐色粗砂
- 4 5YR3/1 オリーブ褐色粘質土
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質土混雑
- 6 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 8 10YR3/2 黒褐色粘質土混雑
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質土混雑
- 10 10YR4/6 褐色粘質土
- 11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- 12 10YR4/4 褐色粘質土
- 13 10YR4/3 暗褐色粘質土混雑
- 14 10YR4/4 褐色粘質土
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 16 10YR6/6 明黄褐色粘質土

建物 2

- 1 10YR3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- 2 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり10YR3/2 黒褐色粘質土
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 5 10YR1/4 褐色粘質土
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質土混雑、上層器片少量

建物 3

- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 3 10YR2/3 黄褐色粘質土
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混雑
- 5 10YR2/3 黒褐色粘質土
- 6 2.5Y2/1 黒色粘質土、径1mmの砂少量
- 7 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、上層器片少量
- 8 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂

H=55.00m

0 2m

図 18 1区建物1～3、柵1実測図 (1:80)

ぞれが等間隔に配置されている。

建物 1～3（図 18、図版 7）調査区南東端で根石を持つ柱穴を東西方向に検出した。柱間はすべて約 2 m となる。柱穴の直径は約 0.4 m である。中央の建物 1 は、6 間×1 間以上の建物になると考えられ、ほとんどの根石が残存している。北側の建物 2 は、5 間×1 間以上で、すべての根石が残っていた。南側の建物 3 は、4 間×1 間以上、大半に根石が見られなかった。同じ場所で少なくとも 3 回は建て直しが行われたと考えられ、建物 1～3 の柱穴の位置はほとんど重なった状態で検出した。しかし、建物の軸方向や柱の本数に違いがあることから、同じ構造・規模の建物を造っていた可能性は低い。柱穴の深さは 0.2～0.6 m と幅があり、根石が上下に 2 つ積み重ねられている柱穴があることから、一つの柱穴の中でも 2 回以上の手直しが行われていた可能性がある。建物の新旧は、建物 3→建物 2→建物 1 とほぼ推定できる。柱跡埋土は暗褐色粘質土など、掘形埋土には黒褐色系の砂質土や黄褐色系の砂層が堆積していた。遺物は、土師器皿片、瓦片などの細片が少量出土している。

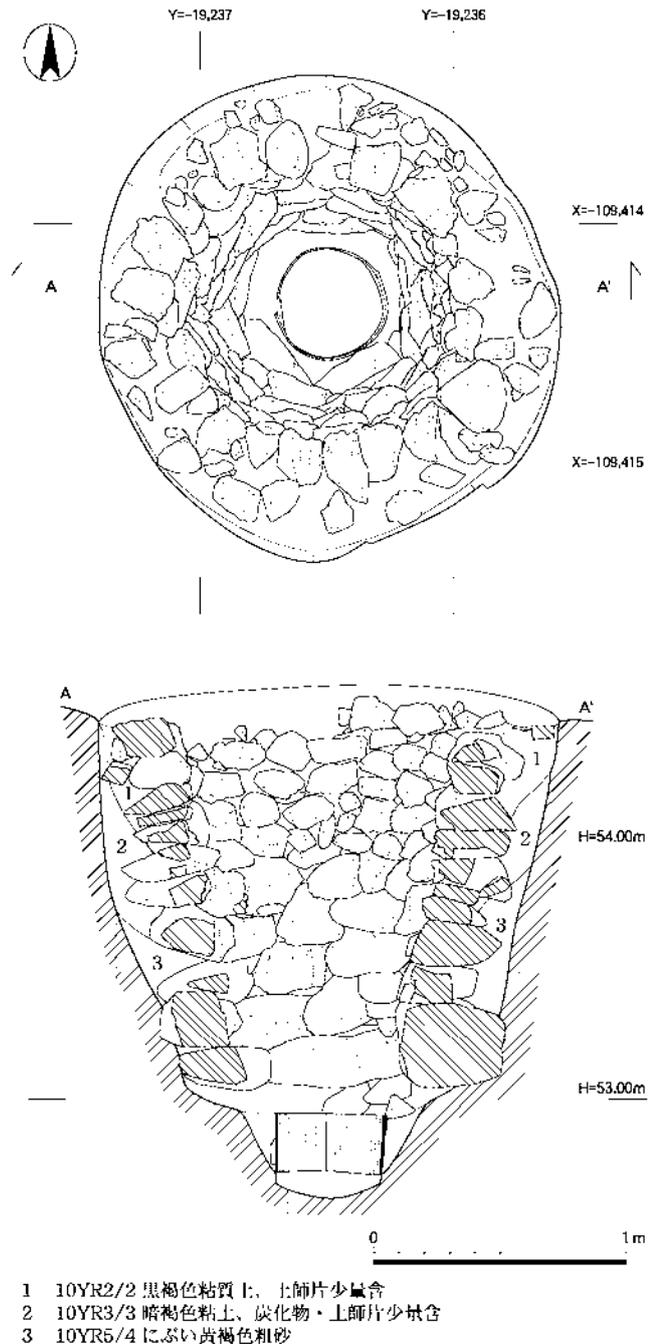


図 19 1 区井戸 58 実測図（1：30）

柵 1（図 18）調査区南東隅で検出した南北方向の布掘りである。布掘り掘形の正確な長さは近世遺構に削平されているため不明であるが、推定長 5.2 m、幅約 0.4 m となる。深さ約 0.4 m の布掘り底には柱穴が等間隔に並ぶ。柱間は約 2 m の 2 間となり、柱穴底には根石が残存していた。遺物はほとんど出土しなかったが、西約 0.6 m にある南北溝 342 と平行していることから、同時期の遺構と考えられる。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

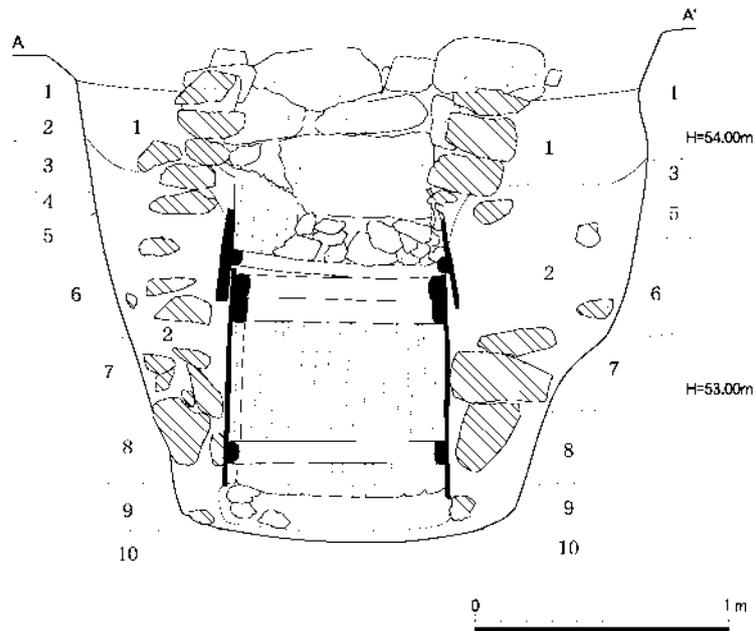
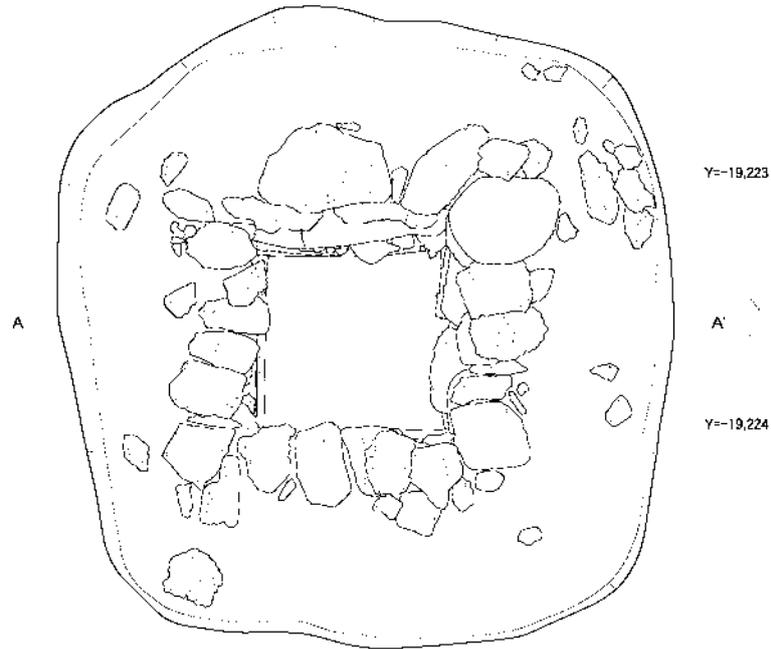
井戸 58（図 19、図版 8）調査区北西部に位置する。円形石組みで底に直径約 45 cm の曲物を据えていた。掘形を含めた直径は約 1.8 m、内法約 1.1 m、深さ約 2 m である。石組みに使用さ



X=-109,418

X=-109,419

X=-109,420



井戸75堀形埋土

- 1 2.5YR3/1 黒褐色粘質土混微砂、砂粒状の7.5YR5/6明褐色細砂多量含
- 2 10YR2/1 黒色粘質土

井戸75壁面地山

- | | |
|------------------------|---|
| 1 10YR4/6 褐色粗砂 | 7 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂、径3~7cm
の花崗岩・頁岩・石英が主体（白川砂） |
| 2 10YR5/6 黄褐色微砂 | 8 5BG6/1 青灰色細砂 |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 | 9 2.5YR2/2 黄褐色微砂（火山灰層） |
| 4 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土混粗砂 | 10 7.5YR2/2 黒褐色粘質土（泥炭層） |
| 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫 | |
| 6 2.5YR6/3 にぶい黄色粗砂 | |

図20 1区井戸75実測図（1：30）

れている石は、下部にいくほど大きくなり一辺0.4 m程となる。また、最下段は石を五角形に並べている。井戸内埋土は黒褐色砂質土混礫の単層で、直径10～15 cmの礫や土師器皿、瓦片などが大量に出土した。特に、土師器皿の完形品が数枚重なった状態で出土しており、井戸を埋める際の一括投棄をしたものと考えられる。石組み裏込めの埋土は土師器片を含む黒褐色粘質土や地山のにぶい黄褐色粗砂などである。

井戸75(図20、図版6)調査区中央で検出した掘形が一辺約2.5 m、内法約0.9 m、深さ約1.9 mの上部石組下部板組の方形井戸である。上から約0.7 mまでは20～60 cm石を方形に組んでいるが、下部は縦約85 cm、横約80 cmの一枚板または横80 cm程度の幅になるように2枚の板を並べたものの内側に、横棧を上2段、下1段組んで留めていた。この上にさらにもう1段横棧があり、これらの板材の後ろに残存長35～45 cmの板材を半分差し込んだ状態にして、内側に倒れ込まないように留めている。埋土はオリブ黒色粘質土混粗砂であり、土師器皿・鉢、須恵器鉢、焼締陶器、瓦器、輸入磁器、鉄器(鉄鍋の底)、瓦などの遺物が多く出土した。黒褐色粘質土主体の裏込め土内には、井戸枠で使用されている大型石と同じ

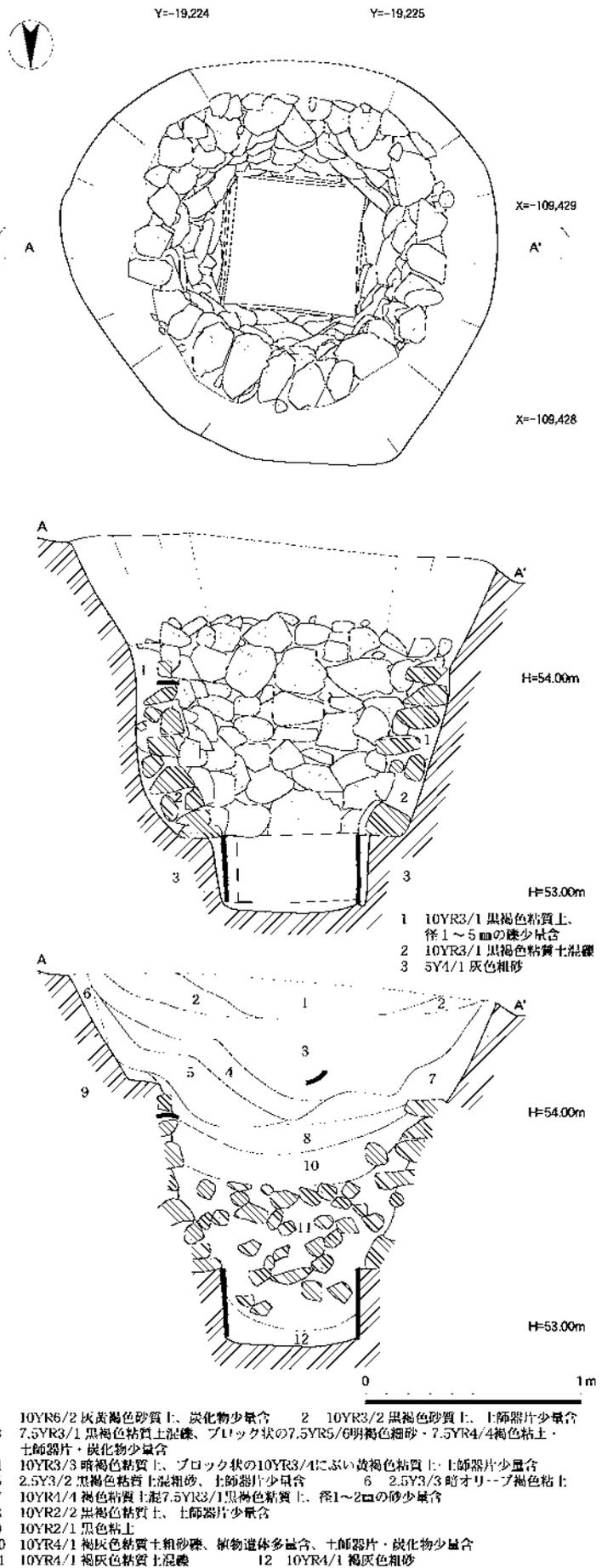
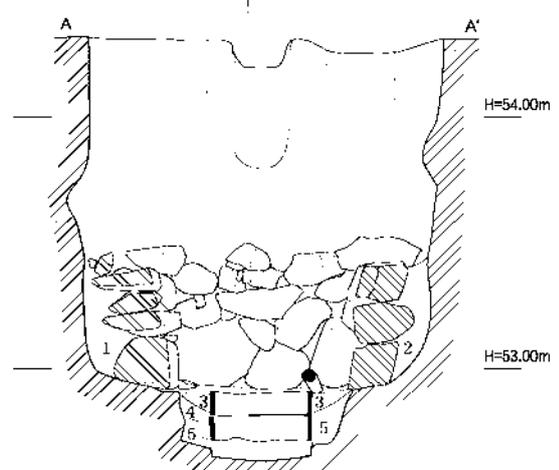
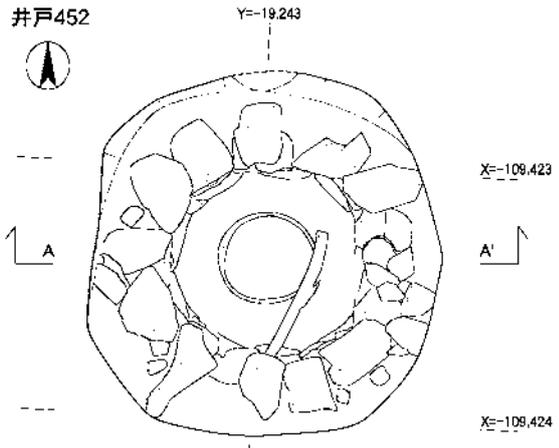
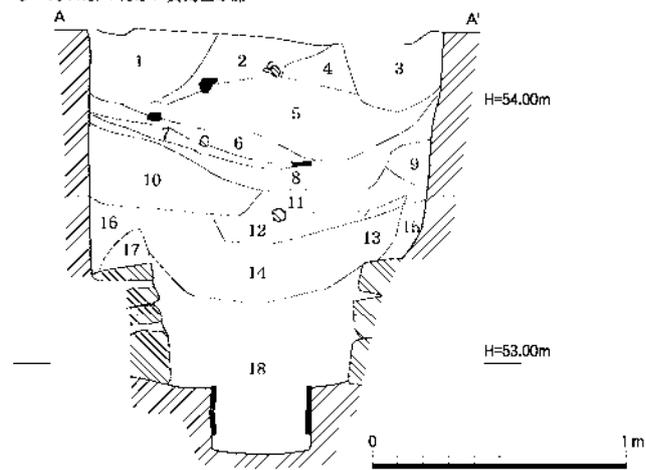


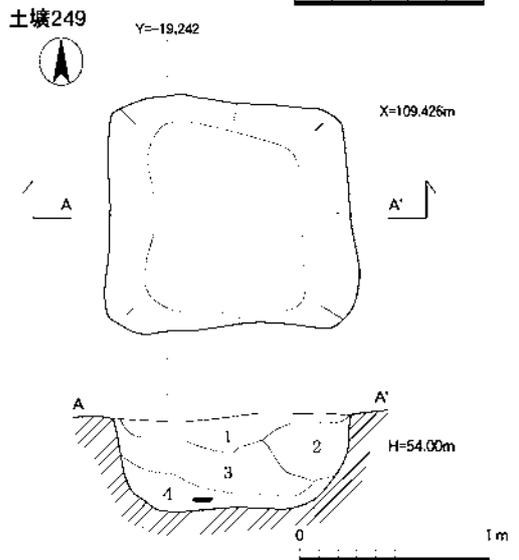
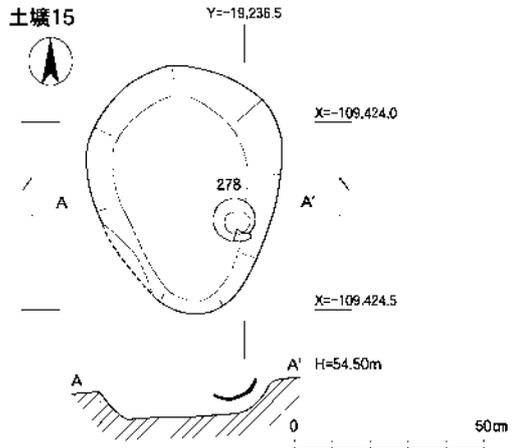
図21 1区井戸119実測図(1:30)



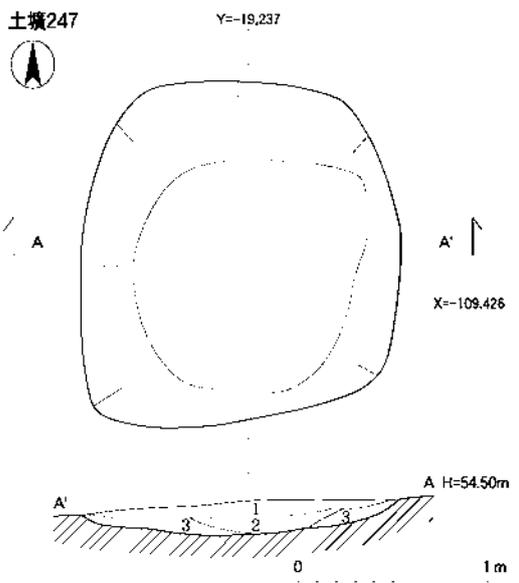
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂礫
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
- 3 7.5Y4/1 灰色粗砂
- 4 2.5GY5/1 オリーブ灰色粗砂
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫



- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂質土混礫、径2~4cmの上師器片・瓦多量含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土混礫、上師器片・瓦少量含
- 3 10YR3/3 暗褐色砂質土、ブロック状の5Y6/2灰オリーブ色粘土・上師器片少量含
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質土、上師器片少量含
- 5 10YR3/3 暗褐色砂質土混10YR4/3にぶい黄褐色細砂、上師器片少量含
- 6 10YR3/2 黒褐色砂質土、上師器片・炭化物少量含
- 7 10YR4/4 褐色粗砂、上師器片・炭化物少量含
- 8 10YR3/1 黒褐色砂質土混細砂、ブロック状の7.5YR4/4褐色砂質土多量含、上師器片少量含
- 9 7.5YR3/3 暗褐色粘質土混暗褐色砂質土
- 10 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の5Y6/2灰オリーブ色粘土多量含、上師器片少量含
- 11 10YR3/1 黒褐色粘質土混細砂
- 12 10YR4/1 褐色粘質土混10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
- 13 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土
- 14 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 径1~3mmの砂礫多量含
- 15 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
- 16 7.5YR4/4 褐色細砂
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
- 18 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、径1~2mmの砂多量含



- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質土、ブロック状の2.5Y7/4浅黄色粘土・上師器片・瓦少量含
- 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質土混粗砂礫、ブロック状の2.5Y7/4浅黄色粘土・炭化物少量含
- 3 7.5YR4/1 褐色砂質土混粗砂、ブロック状の2.5YR7/4浅黄色粘土多量含
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の2.5YR7/4浅黄色粘土少量含



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土、径3~5cmの礫・上師器片・瓦少量含
- 2 7.5Y4/3 褐色砂質土、上師器片少量含
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂質土、上師器片少量含

図 22 1区井戸 452、土壌 15・247・249 実測図 (1 : 30、1 : 20、1 : 40)

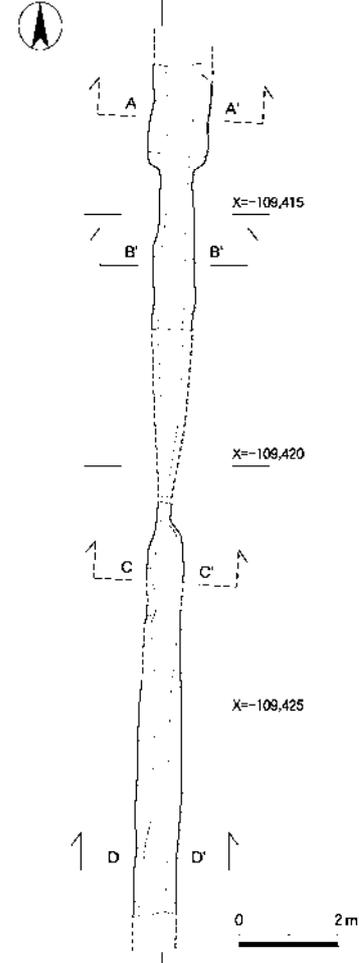
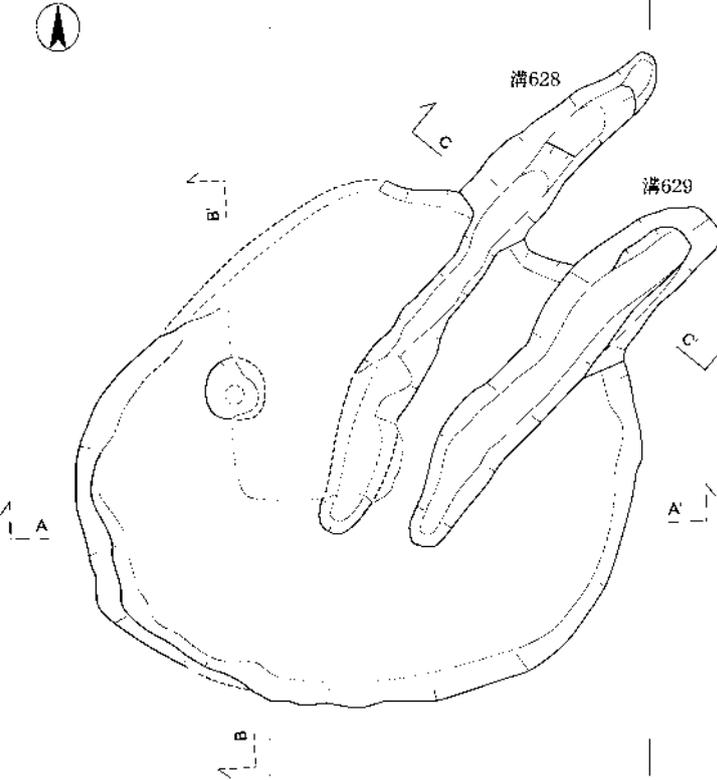
土塙619

Y=-19,212

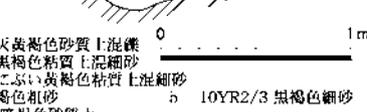
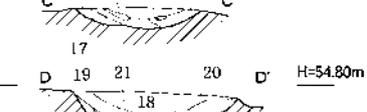
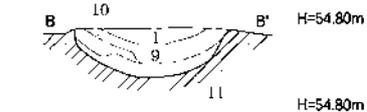
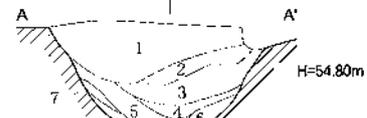
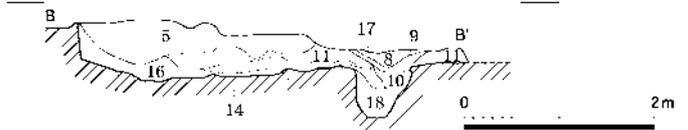
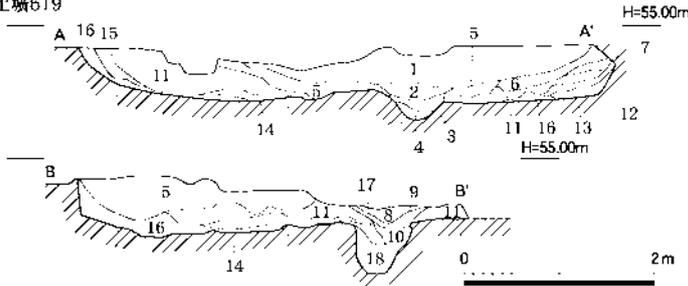
Y=-19,208

溝342

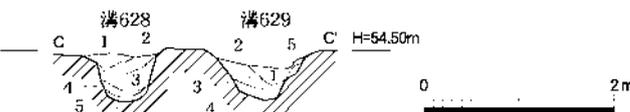
Y=-19,208



土塙619



- 1 10YR2/2 黒褐色粘質土混10YR4/4 褐色粘質土、土師器片・炭化物少量含
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質土混10YR6/6明黄褐色微砂、土師片少量含(溝629)
- 3 10YR3/3 暗褐色粗砂(溝629)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘質土混2.5Y5/4黄褐色微砂、径1~15mmの礫少量含(溝629)
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質土混10YR5/6暗褐色細砂混、土師器片・炭化物少量含
- 6 10YR4/6 褐色細砂、径2~5cmの礫少量含
- 7 10YR5/6 黄褐色微砂、径5~30mmの礫・ブロック状の10YR3/3暗褐色粘質土少量含
- 8 10YR3/2 暗褐色粘質土混10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、土師器片少量含
- 9 10YR5/6 黄褐色砂礫、ブロック状の10YR3/2黒褐色粘質土少量含
- 10 10YR4/4 褐色粗砂
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂、ブロック状の5Y2/2オリブ黒色粘質土多量含
- 12 10YR5/6 黄褐色粗砂
- 13 10YR3/3 暗褐色粘質土混10YR4/4褐色粘質土
- 14 10YR2/2 黒褐色粘質土、ブロック状の10YR5/4にぶい黄褐色粗砂少量含
- 15 10YR5/6 黄褐色微砂混10YR4/4褐色粘質土
- 16 10YR6/4 にぶい黄褐色微砂混10YR3/2 黒褐色粗砂
- 17 10YR3/4 暗褐色粗砂(柱穴)
- 18 10YR3/4 暗褐色粗砂、10YR2/2黒褐色粘質土をブロック状少量含(柱穴)



- 溝628
- 1 10YR2/1 黒色粘質土混10YR4/4褐色粗砂礫
 - 2 10YR5/6 黄褐色粗砂
 - 3 10YR4/5 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR3/2黒褐色粘質土・10YR3/3暗褐色粘質土少量含
 - 4 10YR3/3 暗褐色粘質土混10YR3/2黒褐色粘質土多量含
 - 5 10YR3/3 暗褐色粗砂
- 溝629
- 1 10YR4/4 褐色細砂、粒状の10YR3/2黒褐色粘質土少量含
 - 2 10YR5/6 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR2/1黒色粘土少量含
 - 3 10YR4/4 褐色細砂
 - 4 7.5YR5/6 明褐色粗砂、ブロック状の10YR2/3黒褐色粘質土少量含
 - 5 10YR4/2 にぶい黄褐色粗砂

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質土混礫
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土混細砂
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混細砂
- 4 10YR4/4 褐色粗砂
- 5 10YR2/3 黒褐色細砂
- 6 7.5YR3/3 暗褐色砂質土
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂礫
- 8 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
- 9 10YR3/1 黒褐色粗砂
- 10 10YR3/3 暗褐色粗砂、土師器片少量含
- 11 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片・炭化物少量含
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 13 10YR6/6 明黄褐色粘質土
- 14 10YR3/1 黒褐色粘質土、径1~2mmの砂少量含
- 15 7.5YR4/4 褐色砂質土
- 16 2.5Y3/3 暗オリブ褐色砂質土
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂礫
- 18 10YR3/3 暗褐色粘質土、径1~2mmの砂少量含
- 19 10YR3/2 黒褐色細砂
- 20 10YR3/2 黒褐色粗砂、ブロック状の10YR4/4褐色細砂・土師器片少量含
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、炭化物少量含

図23 1区土塙619、溝342実測図(1:80、1:150、1:40)

大ききの石が積み上がった状態が入っていた。

井戸 119(図 21、図版 7) 井戸 75 のほぼ南約 8 m で検出した。掘形が直径約 2 m、内法約 1.1 m、深さ約 1.7 m の円形石組井戸で、底に一辺 0.6 m、高さ 0.3 m の木枠が組まれていた。使用されている石は拳大から人頭大のものまでであるが、1 区検出井戸の中では小振りの石を積み上げている。井戸の断面形状は擂鉢状である。検出面より 0.4 m 程は石が抜かれており、検出面より約 0.8 m 下から底にかけての埋土内に直径 10 ～ 20 cm の礫が多く混入していることから、廃棄時に壊されたものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土に礫や砂を多く含み、土師器皿、須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦などが出土した。

井戸 452 (図 22、図版 7) 調査区西端で検出した。直径約 1.4 m、内法約 0.8 m、深さ約 1.6 m、の円形石組井戸である。井戸底に曲物が据えられ、曲物上部からは樹皮の残る木材が石組に立て掛けられた状態で出土した。井戸枠として使用されている石には、長辺約 50 cm を測るものがあり、特に最下段に並べられていた。検出面から約 0.9 m 附近までの枠石は抜き取られていた。埋土は上層の黒褐色砂質土や褐色粗砂と、石組み底面より下層の暗灰黄色粘質土に分かれる。掘形埋土は灰黄褐色砂礫などの地山土が混ざったものであった。土師器皿、須恵器、焼締陶器、瓦などが出土している。

土壙 15 (図 22) 調査区南西で検出した。長辺 0.65 m、短辺 0.5 m の楕円形を呈する。深さ 0.1 m、埋土は暗灰黄色粘質土である。土壙東肩近くで完形の土師器皿が出土した。

土壙 247(図 22) 土壙 15 の南側で検出した。約 0.9 m 四方で隅丸方形を呈する。深さ約 0.1 m で、埋土は褐色系の砂質土が堆積していた。土師器皿片、瓦が少量出土した。

土壙 249 (図 22) 井戸 452 の南東方向で確認した。一辺 0.6 m 四方、深さ 0.25 m の隅丸方形土壙である。埋土は灰黄褐色砂質土や褐色砂礫にブロック状の浅黄色粘土を含む。

土壙 417 (図 17) 調査区北東の東壁に半分かかった状態で検出した。検出長約 1.2 m、幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。10 ～ 15 cm 程度の石が数個、底に残存していたが、規則性は見られない。そのため、遺構廃絶時に投げ込まれたものと考えられ、柱穴の可能性もある。土師器皿が出土した。

土壙 863 (図 17) 土壙 619 と井戸 119 の中間で検出した。最大長約 3.6 m、最大幅約 1.4 m の平面 S 字形を呈する不整形土壙である。深さは最大で約 0.4 m あるが、浅い所で約 0.2 m となり、底面の凹凸が著しい。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。木の根の痕跡と考えられる。

土壙 864 (図 17) 土壙 863 の南東にある。長さ約 2.4 m、幅約 1.3 m、深さ約 0.6 の土壙である。断面が擂鉢形で、埋土は黒色粘質土である。土壙 863 同様、木の根の痕跡と考えられる。

土壙 619 (図 23、図版 8) 直径約 5.6 m の円形の土壙である。深さは 0.5 ～ 0.6 m あり、土壙の底には北東から南西にかけて、後述する溝 (溝 628・629) を 2 本平行して検出した。土壙埋土上層は粘質土が主体であるが、下層は微砂や粗砂の砂層堆積が中心である。遺物は細片の土師器皿片、瓦片が出土している。遺構の性格は溝 628・629 共々、不明である。

溝 628・629 (図 23、図版 8) 土壙 619 の底で検出した。土壙 619 の下層埋土から掘り込まれた遺構であることから、遺構存続期に必要となって造られたものと考えられる。溝 628 は長さ 6 m、

最大幅 0.7 m、深さ約 0.5 m、溝 629 は長さ 4.6 m、最大幅 1 m、深さ約 0.5 m である。溝 628 は一部を攪乱墳に切り取られている。いずれも埋土は褐色系の粗砂や細砂である。遺物はほとんど出土していない。

溝 342 (図 23) 土壙 619 の東肩を南北方向に切った状態で検出した。近世の遺構に一部壊されて途切れているが、検出長約 17 m、幅約 0.6 m、深さ約 0.3 m の南北方向の溝で柵 1 と平行する。埋土は砂質土と粘質土、砂礫層が交互に堆積している。遺物はほとんど出土していない。

5) 江戸時代中期から明治時代の遺構 (図 24)

調査区全面にわたって検出した。調査区西半は特に残存率が高く、カマド 112 や井戸 56、溝 51・73、土壙 50 などの遺構群からは一つの宅地跡の想定が可能である。中でも、土壙 50・53、溝 51 は水回り関係の遺構群と考えられる。調査区東端では土取り穴と溝を中心に検出している。

カマド 112 (図 26) 調査区西の北壁で検出した。長さ約 1.7 m、残存幅約 0.7 m、高さ約 0.4 m の規模である。西半分のカマド壁と考えられる粘土層に石や漆喰の塊が並べて配置され、東半分には焼土や炭化物の混ざった層が箱状のカマド壁内に堆積した状態を確認した。前者は煙道もしくは鍋などを置くための支石、後者は焚口と考えられる。遺構中心部に径 0.3 m 程度の円形土壙があり、一部に灰と考えられるブロック状のシルトが焼土と混じっていた。整地した上に、にぶい黄橙色粘土を使用してカマドを構築したと考えられる。支石のための漆喰や石は焼土上に行っていることから、一部は造り直された可能性がある。

井戸 56 (図 26、図版 9) カマド 112 の南側で検出した直径約 1.8 m、内法約 0.9 m の円形石組井戸である。深さは約 1.5 m 以上あるが、さらに深くなると考えられたため、安全上、このレベルで掘削を止めた。長さ 10～30 cm 程度の長細い石の短辺を井戸内に向けて石を積む。裏込めには拳大の礫を大量に詰め込んでいた。埋土は暗褐色粘質土の単層である。土師器皿、肥前磁器碗・皿、京・信楽陶器碗・皿、瀬戸・美濃陶器碗、焼締陶器播鉢、棧瓦などが出土した。

井戸 74 (図 24) 調査区北端中央付近で検出した円形石組井戸である。内法直径約 0.9 m、掘形直径約 1.5 m で、深さは 1.5 m 以上ある。花崗岩を三角錐に切りだし、底面を内側に向けて積み上げていた。近世から近代の磁器碗、陶器碗の他に、豆電球のついたサーチライトが出土した。戦後まで井戸は開口していたと考えられる。

土壙 32 (図 24) 調査区東中央に位置する東西約 4 m、南北約 3.5 m の土取り穴である。深さは 1.5 m を超える。土師器皿、肥前磁器碗・皿、京・信楽陶器碗・皿、瀬戸・美濃陶器碗、焼締陶器播鉢、堺・明石播鉢、棧瓦などが多く出土した。遺物に時期差が無いことから、土取り作業後に一気に埋め戻されたと考えられる。

土壙 50 (図 25、図版 9) 調査区西で検出した。後述する溝 51 とその集石部、土壙 53 と一連の遺構である。土壙 50 は長さ約 1.3 m、幅約 0.9 m の漆喰塗りの水槽と考えられる。上部は削平されており深さ約 0.1 m のみ残存する。漆喰を約 0.1 m 塗り固めていた。漆喰の下部は漆喰の残

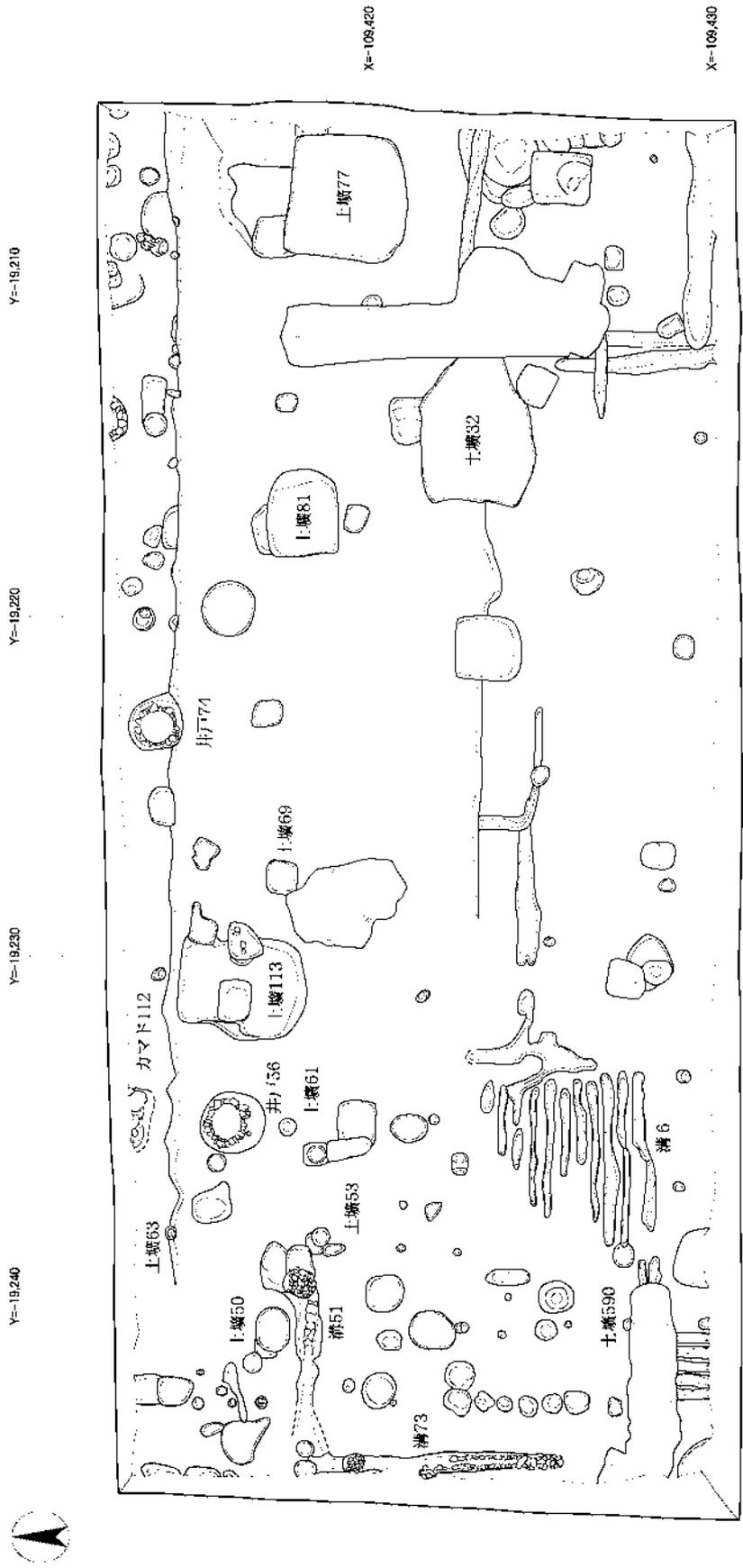


図24 1区江戸時代遺構平面図(1:200)

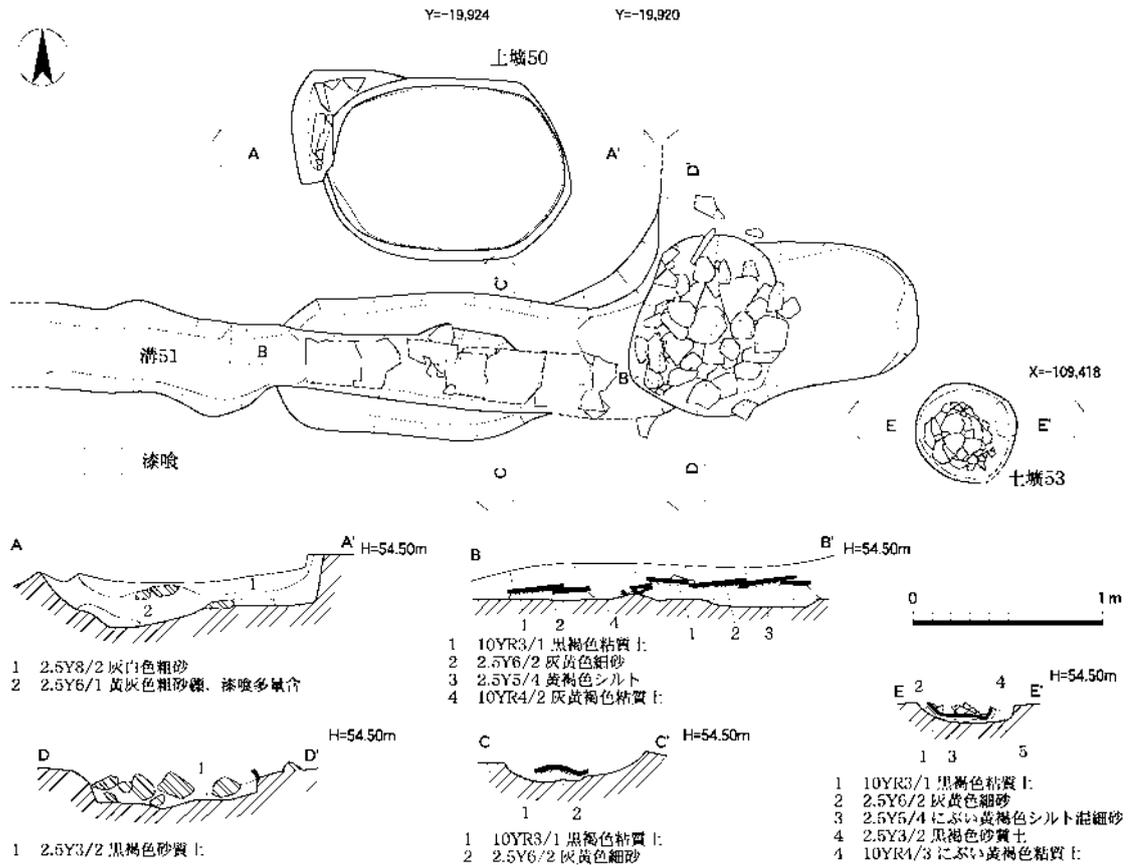


図25 1区溝51、土壇50・53実測図(1:40)

片や石を混ぜた黄褐色砂礫を一面に敷き、土台を固める。この裏込め層から肥前磁器鉢などが出土した。

溝51(図25、図版9)土壇50の南側に位置する東西方向の溝である。掘り窪めた溝上に、平瓦の裏面を上に向けたものを7枚、端部を少しずつ重ねて蓋をしていた。溝本体の長さ約1.5m、最大幅約0.35m、深さ約0.1m、瓦敷きの長さ約0.8mである。埋土は上層に黒褐色粘質土が薄く堆積し、下層に灰黄色細砂が約0.1m堆積していた。また、溝51の東端に直径10~20cmの石を集めた土壇があり、水を集・排水するための遺構と考えられる。直径約0.5m、深さ約0.1mを測る。石の下の埋土は黒褐色砂質土であった。

土壇53(図25)溝51集石部の東側に焼締陶器甕の底部が残存していた。直径約0.5mである。甕底は信楽焼で、底径20cmを測る。にぶい黄褐色粘土を敷いた上に、シルトや細砂を入れて甕を据えていた。漏水防止対策をした便槽と考えられる。

土壇61(図26、図版9)井戸56の南側で検出した。上半分以上は削平されていた。直径約0.8m、深さ約0.35mの円形土壇の底に、14枚の縦板と3枚の底板を組み合わせて作った直径約40cmの桶が据えられていた。掘形はほとんど無いが掘形と桶との間には黄灰色粘質土が薄く堆積していた。

土壇63(図26、図版9)カマド112の南西に位置する。長径0.45m、短径0.35m、深さ約0.35mである。土壇内に棧瓦の割ったものを敷き詰め、その上に直径約20cmの美濃焼陶器鉢を据える。

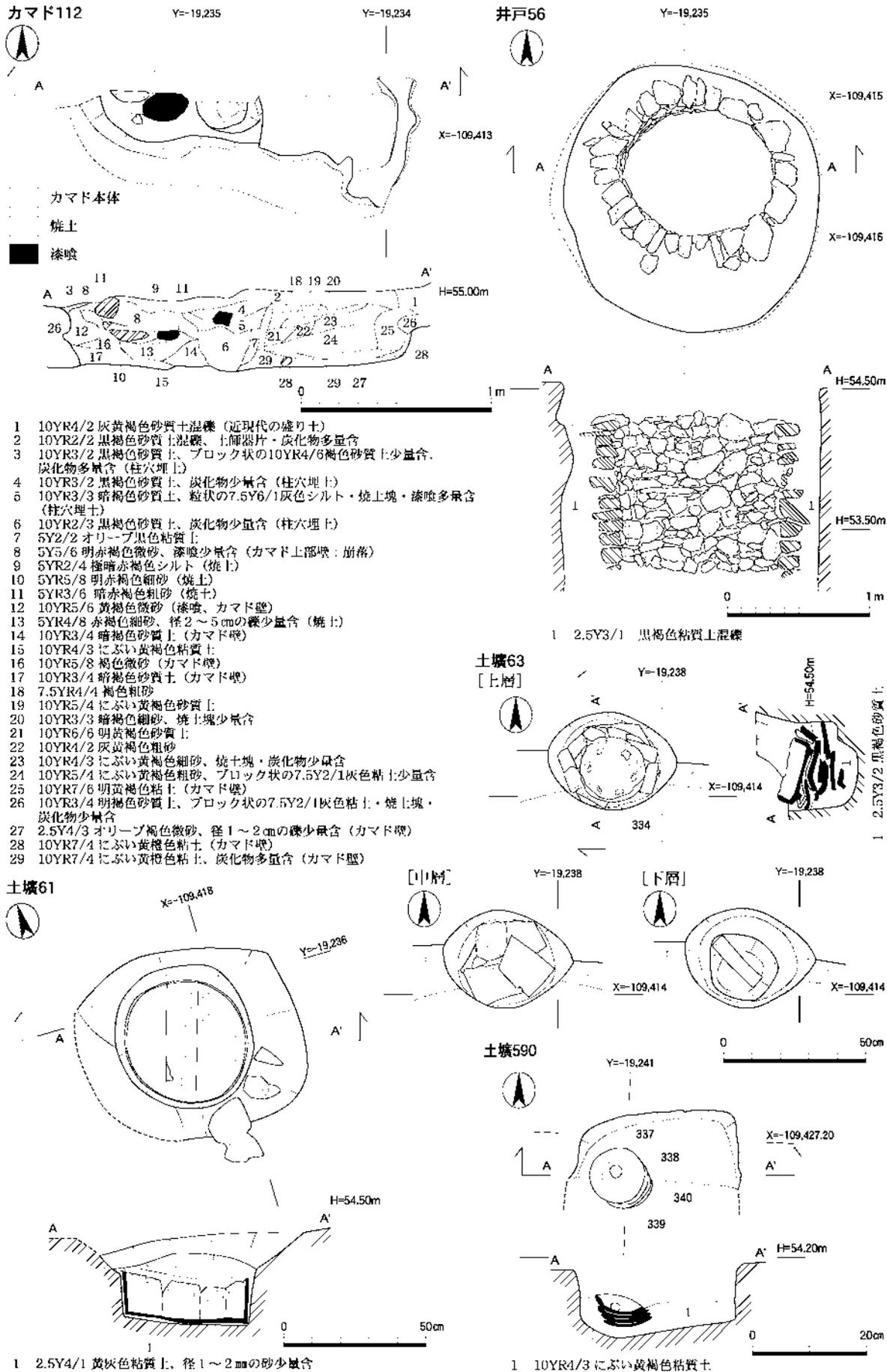


図26 1区カマド112、井戸56、土壌61・63・590実測図(1:30、1:40、1:20、1:10)

瓦の間には黒褐色砂質土が詰まっていたが、埋土上部は攪乱墳に切り取られてほとんど残っていなかった。設置式水溜め用鉢と考えられるが、正確な用途は不明である。

土壙 69 (図 24) 調査区中央北寄りに位置する。一辺 1 m 四方の土壙である。深さ約 0.3 m を測る。土師器皿、肥前磁器碗などが出土した。

土壙 77 (図 24) 調査区東端の中央附近で検出した。東西約 3.5 m、南北約 3.6 m の土取り穴である。埋土は暗褐色粘質土で、深さ 1.5 m 以上になると考えられる。肥前磁器碗、曲物が出土した。

土壙 81 (図 24) 井戸 74 の南東で検出した土取り穴である。東西約 2.5 m、南北約 2 m、深さ約 1.2 m 以上を測る。土師器、肥前磁器、京・信楽陶器、焼締陶器、棧瓦、木製品などが出土した。

土壙 113 (図 24) 土壙 69 の北西で検出した。一辺 0.6 m、深さ約 0.2 m の方形土壙である。土師器皿が出土した。

土壙 590 (図 26) 調査区南西にある南北方向に開いた攪乱墳に半分切り取られた状態で出土した。東西約 0.3 m、南北の残存長約 0.15 m、深さ約 0.15 m を測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。土壙西寄りに土師器皿を 4 枚重ね、その上に直径約 1.5 cm の基石形白色石が置かれていた。地鎮などの祭祀関連の遺構と考えられる。

溝 73 (図 27、図版 9) 調査区西端で検出した南北方向の石組み溝である。全長約 7.5 m、内法約 0.15 m、深さ約 0.2 m、南側に石蓋が数個残っていた。南端に石が置かれて終点となっている。溝の中程で東西方向の暗渠があり、T 字状に交差して、調査区外に延びる。南北方向の溝の構造がこの暗渠と同じであることから、

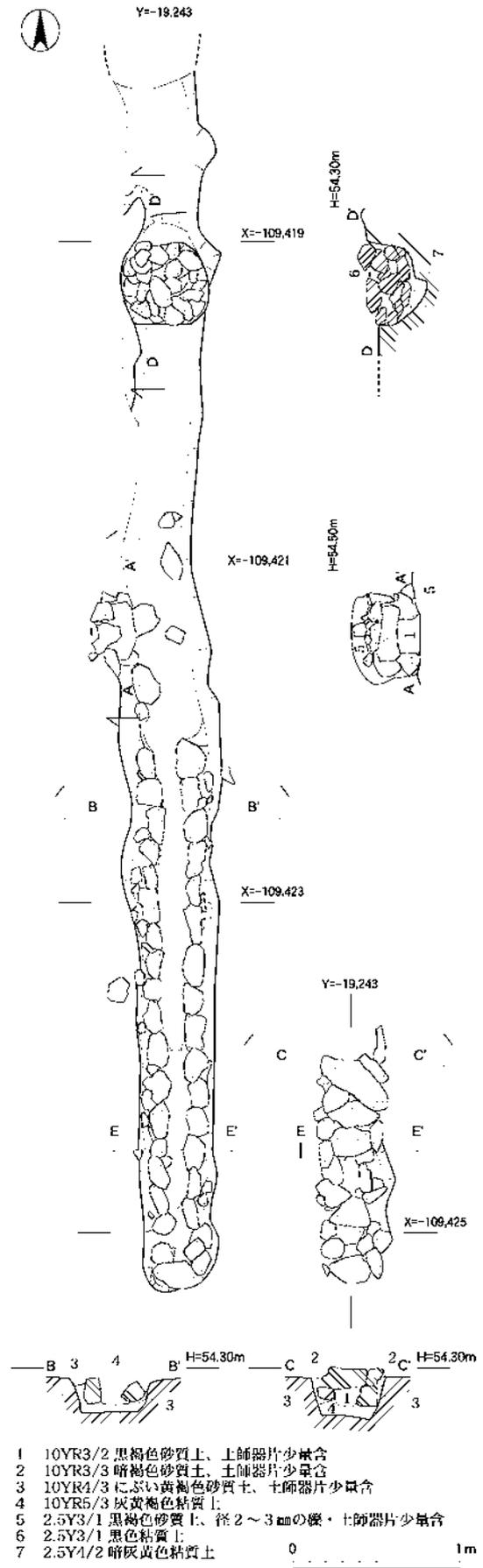


図 27 1 区溝 73 実測図 (1:40)

溝も暗渠であった可能性が高い。灰黄褐色粘質土を張り詰めた後に側石を並べて裏込めの土を入れ、蓋石を置いていた。また、この北端に直径約0.4 mの集石があり、集・排水部として使用していたと考えられる。径10～20 cmの礫の間に黒色粘質土が堆積していた。

溝6などの耕作に伴う溝群(図24)溝73の東側に東西方向に数条並んで検出した。何れも長さ5 m、幅0.2～0.3 m程度のもので主体である。

(3) 2区の遺構

1) 基本層序(図28・29)

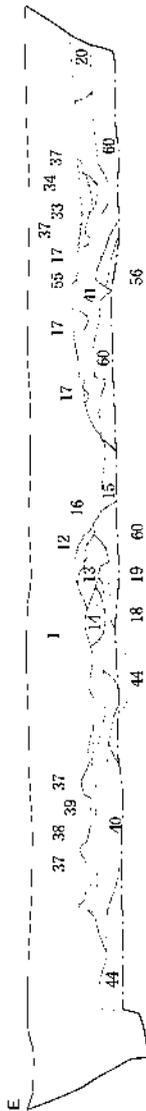
基本層序は、表土下約60 cmまでが現代の盛土で、その下に近世包含層である土師器片や炭化物を多く含む約20 cmの暗褐色粘質土、室町時代包含層である厚さ約10 cmの黒褐色粘質土が堆積し、以下灰オリーブ色シルトやオリーブ灰色シルトの地山層が続く。北側に位置する丸太町通との関係で厚く盛土がされた1区と異なり、2区は盛土の高さが低かったために近世の遺構が削平されていたために近世の遺構が削平されていた。また、旧市営住宅棟間の通路が調査範囲内に当たったために、ガス管や上下水道管理設溝による東西方向に長い攪乱を受けていた。近世遺構は調査区西端に数基確認しただけであったが、調査区全面にわたって室町時代後期の遺構の残存状態が良好であった。

以下、各時代の主要な遺構について報告する。



図28 2区東壁断面図(1:100)

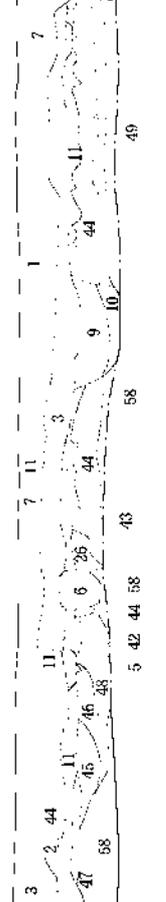
Y=19,210



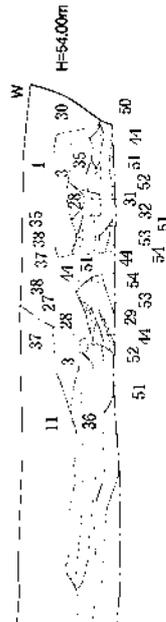
Y=19,220



Y=19,230



Y=19,240



- 1 10YR4/3 細かい黄褐色砂質土 近現代の盛土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片・炭化物少量含 (江戸時代～近代も含層)
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片・炭化物多量含 (江戸時代も含層)
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (江戸時代、土庫)
- 5 2.5Y3/3 オリオリーブ褐色粘質土 (江戸時代、土庫)
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質土 近現代の盛土、土師器片少量含 (江戸時代、土庫)
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質土 後2～3口の砂・土師器片少量含 (江戸時代、土庫)
- 8 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片少量含
- 9 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、径5～10mmの礫・ブロック状の2.5Y5/3黄褐色シルト少量含
- 10 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 土湿細砂
- 11 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片多量含 炭化物少量含 (江戸時代も含層)
- 12 10YR3/2 黒褐色粘質土、炭化物少量含 (室町時代、土庫)
- 13 10YR2/1 黒褐色粘質土 (室町時代、土庫)
- 14 10YR3/2 黒褐色粘質土 (室町時代、土庫)
- 15 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、径1～7mmの礫・土師器片・炭化物少量含 (室町時代、土庫)
- 16 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 径5Y5/3オリーブ色シルト (室町時代、土庫)
- 17 10YR4/2 灰黄褐色粘土、ブロック状の黄褐色シルト少量含 (室町時代、土庫)
- 18 10YR4/2 灰黄褐色粘土、土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 19 10YR4/2 灰黄褐色粘土 径2.5Y6/3に細かい黄褐色シルト (室町時代、土庫)
- 20 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片・炭化物少量含
- 21 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 径2.5Y6/3に細かい黄褐色シルト、土師器片少量含

- 22 2.5Y6/3 に細かい黄褐色粘質土、土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 23 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 24 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の5Y5/2オリーブ色シルト・土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 25 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片少量含
- 26 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 27 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (平安時代、土庫)
- 28 10YR3/3 暗褐色粘質土、土師器片少量含 (平安時代、土庫)
- 29 10YR4/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含
- 30 10YR3/1 黒褐色粘質土、径2～3mmの砂・土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 31 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (室町時代、土庫)
- 32 10YR4/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (平安時代、土庫)
- 33 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含 (平安時代、土庫)
- 34 10YR3/1 黒褐色粘質土 径2.5Y3/3黄褐色シルト (平安時代、土庫)
- 35 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含、瓦片少量含 (平安時代、土庫)
- 36 10YR3/2 黒褐色粘質土、土師器片少量含、瓦片少量含 (平安時代、土庫)
- 37 10YR2/1 黒褐色粘質土
- 38 5Y3/1 オリオリーブ褐色粘土
- 39 5Y4/3 オリオリーブ褐色粘土
- 40 5Y5/1 オリオリーブ褐色粘土

- 41 2.5Y4/3 オリオリーブ褐色粘土、ブロック状の2.5Y4/2暗灰黄色シルト多量含
- 42 10YR4/2 明黄褐色粘質土 土湿細砂
- 43 10YR4/2 明黄褐色粘質土
- 44 5Y5/2 オリオリーブ褐色粘土
- 45 10YR4/2 明黄褐色粘質土、径1～12mmの礫少量含
- 46 10YR4/3 に細かい黄褐色シルト、ブロック状の10YR2/1黒色シルト少量含
- 47 10YR4/2 明黄褐色粘質土 土湿細砂
- 48 2.5Y5/3 暗褐色粘質土、ブロック状の2.5Y3/2黒褐色粘質土少量含
- 49 10YR4/2 明黄褐色粘質土、径1～10mmの礫少量含
- 50 10YR3/3 暗褐色粘質土、径2～7mmの礫少量含
- 51 10YR4/3 に細かい黄褐色粘質土 土湿細砂
- 52 2.5Y4/4 オリオリーブ褐色粘土
- 53 2.5Y3/3 暗褐色粘質土
- 54 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 55 10YR3/2 明黄褐色粘質土
- 56 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 57 10Y6/2 オリオリーブ褐色粘土
- 58 10YR4/4 褐色粘質土 (第61区の大規模なほとんど含まない)
- 59 5Y4/2 灰オリーブ褐色粘質土 径2.5Y5/4黄褐色粘土
- 60 10YR4/4 褐色粘質土 (径5～10mmのチャート・頁岩・花崗岩多量含)
- 61 10YR6/3 に細かい黄褐色粘質土

図 29 2区南壁断面図 (1 : 100)

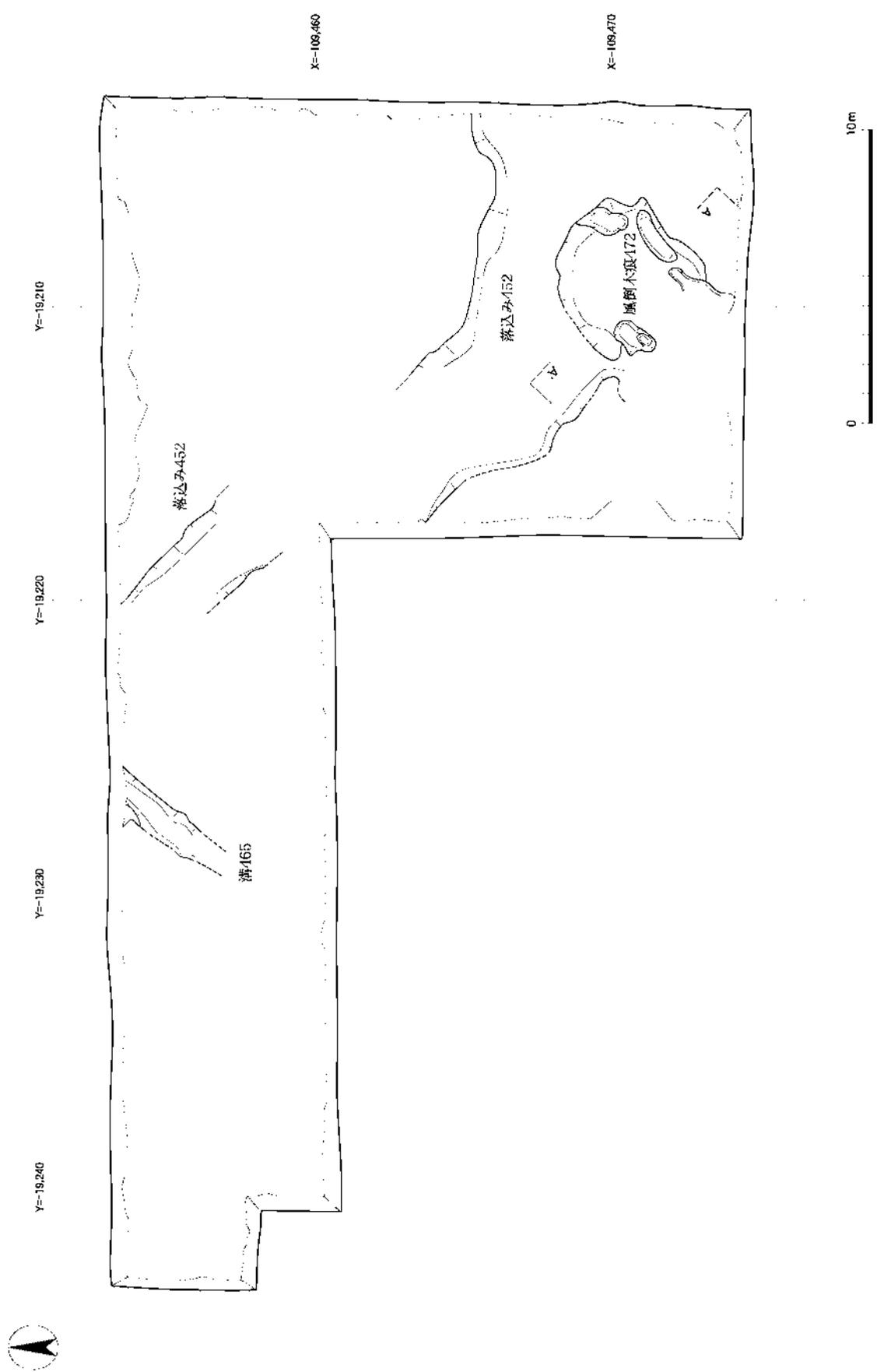


図30 2区平安時代以前遺構平面図 (1:200)

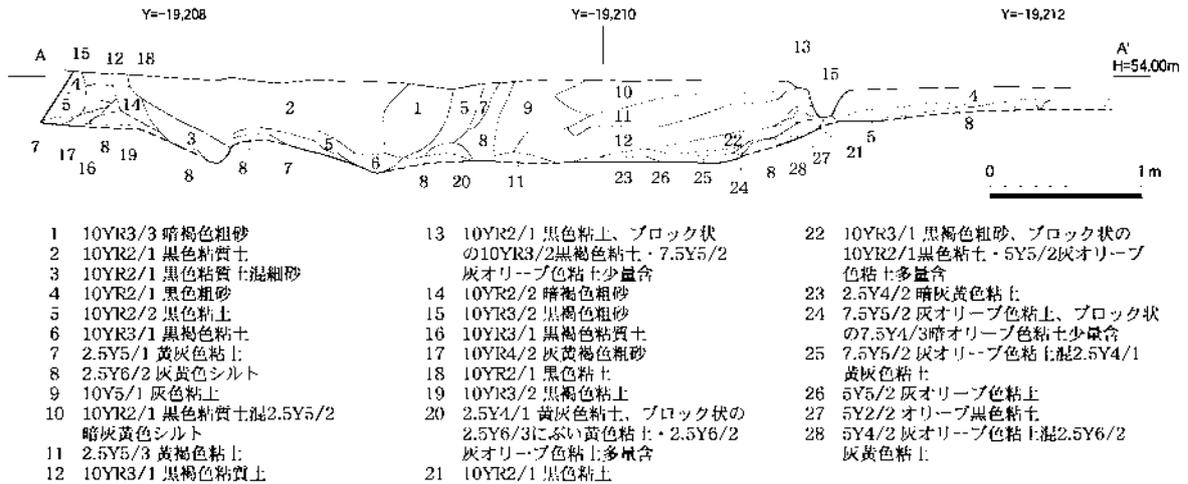


図 31 2区風倒木痕 472 断面図 (1 : 50)

2) 平安時代以前の遺構 (図 30、図版 10)

落込み 452 (図 30) 調査区の東半部で検出した。北西—南東の方向をもつ浅い溝状の遺構である。埋土は黒褐色の粘土である。幅は北西部で 2.5 m、南西部で 9 m 以上となって広がり、深さは 0.1 ~ 0.2 m である。遺物は含まず、時期は不明であるが、1 区で検出した古墳時代の落込み 818 の続きである可能性がある。

溝 465 (図 30) 調査区西で検出した。北東—南西方向の溝である。北側の壁から約 2.5 m 検出し、幅 0.85 ~ 1.20 m、深さ 0.25 m である。埋土は黒褐色の粘土であるが、遺物は含まれていない。

風倒木痕 472 (図 30・31) 拡張区の南側で検出した、北西—南東の長さが約 5 m で、南西部が攪乱で破壊されているため北東—南西の規模は不明、深さは 0.6 m である。落込み 452 の埋土とその下に堆積する地山が、約 90 度回転した形で土層が観察された。木が風などの要因によって倒された時に土層も引っ張られて、垂直方向に立ったと思われる。また、全体的に層位関係が乱れていることなどから、風倒木の痕跡と判断した。

3) 平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構 (図 32、図版 10)

井戸 328 (図 33) 拡張区の南西で検出した。径約 1.20 m、深さ 0.95 m の素掘り井戸である。丸・平瓦が多数出土した。西肩部が 2 段になっており、埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土が主体である。瓦の他に土師器皿、須恵器などが出土している。

溝 121 (図 32) 拡張区の西側で南北方向の溝として検出した。幅 0.55 ~ 1.0 m、深さ 0.25 m、全長 10.5 m で、北半分は攪乱墳によって削平されている。埋土は暗褐色粘質土や黒褐色粘質土である。土師器片、瓦片が少量出土している。宅地内の区画溝と考えられる。

溝 308 (図 32、図版 12) 調査区西で検出した。全長 6.7 m、幅約 3.3 m、深さ約 0.2 ~ 0.3 m の南北方向の溝である。埋土は黒褐色粘質土の単層で、遺物は土師器皿、輸入磁器、瓦片などが出土している。白河街区の南北区画内溝の推定ラインに位置することから、1 区から続く区画内

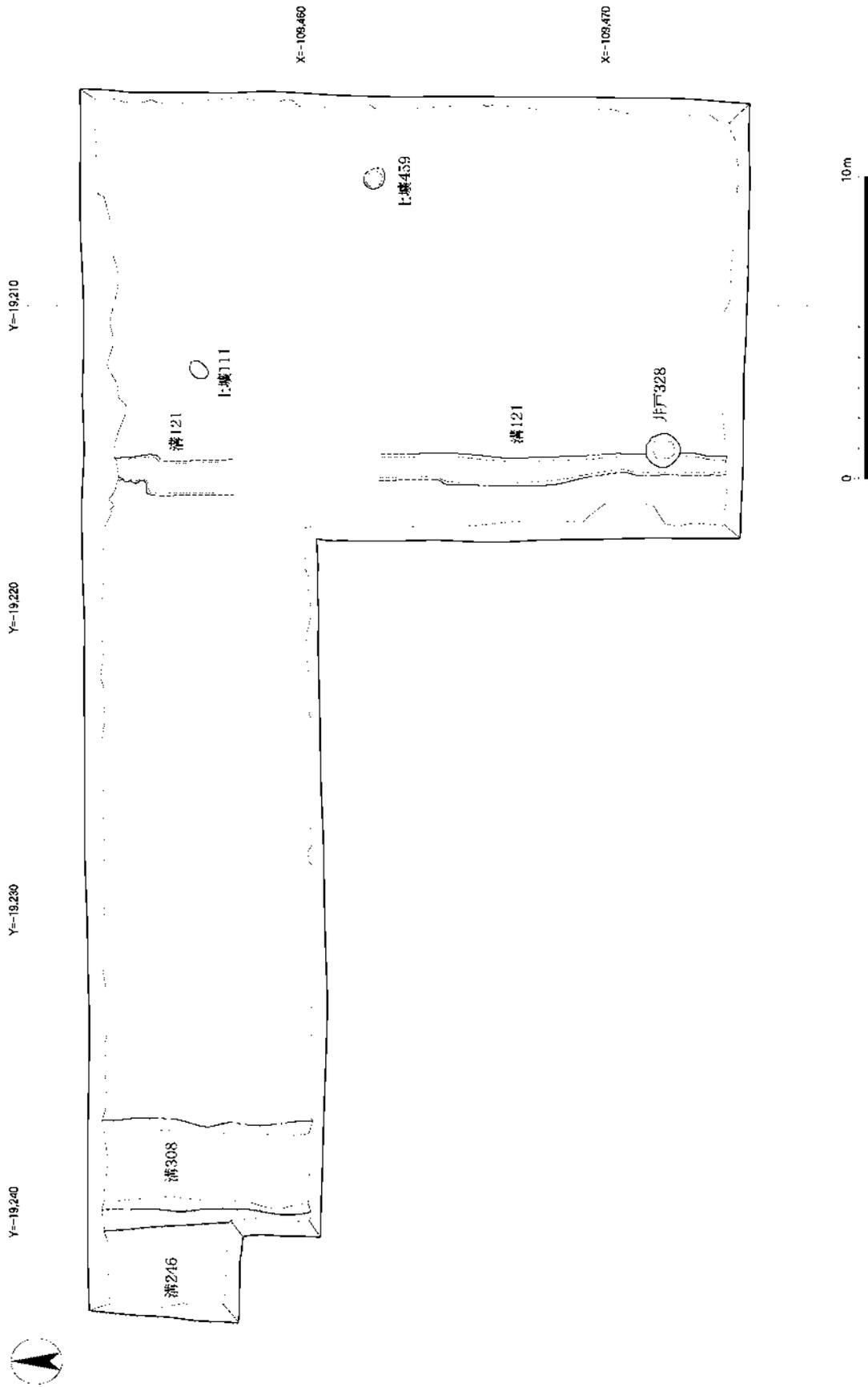


図 32 2区平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構平面図（1：200）

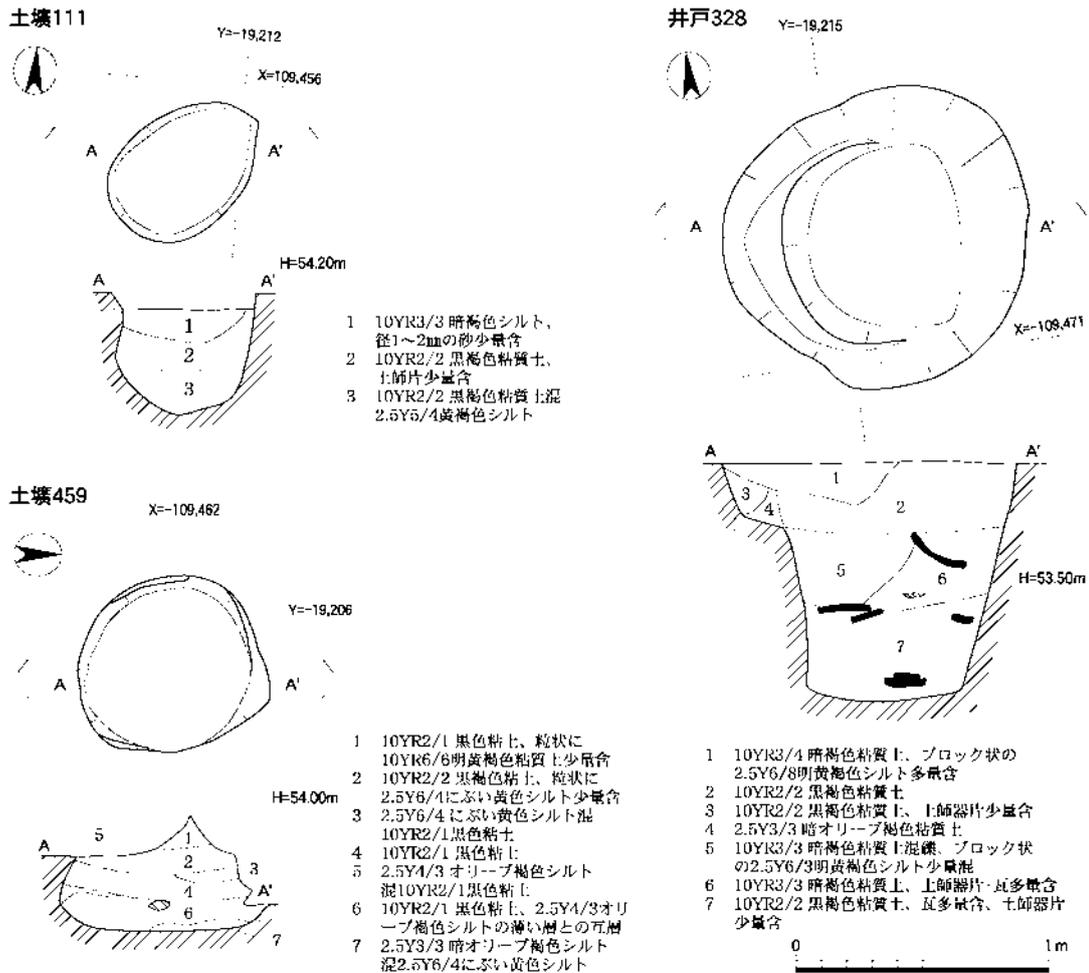


図33 2区土壌 111・459、井戸 328 実測図（1：30）

溝と推定できる。溝 121 と溝の芯々距離は約 24 m である。

溝 246 (図 32) 調査区の西壁際で検出した。南北方向の溝で、室町時代後期の溝 428 に切られている。推定法勝寺金堂の中軸線の北に伸びる白河街区の南北道路東側溝の推定ラインに位置するが、1区で検出した推定溝(溝 801)とは、位置が若干ずれる。長さ 4 m 以上、幅 1.2 m 以上、深さ 0.3 m である。埋土は黒褐色粘質土で、土師器、須恵器、輸入青磁などが出土している。

土壌 111 (図 33) 調査区の北東で検出した。長径 0.65 m、短径 0.48 m の楕円形の土壌で、深さは 0.4 m である。埋土は 3 層に別れ、上層は暗褐色シルト、中層は黒褐色砂質土、下層黄褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦片などが出土している。

土壌 459 (図 33) 調査区の東側で検出した、南半を攪乱墳、北半を室町時代の土壌 51 に破壊された径 0.7 m、深さ 0.45 m の円形の土壌である。埋土は黒色粘質土が主体であり、遺物は出土していない。

4) 室町時代後期の遺構 (図 34、図版 10・11)

建物 1 (図 35、図版 11) 拡張区で検出した。南北 1 間 (2.4 m) × 東西 3 間 (6 m) の東西棟



Y=19,240

Y=19,230

Y=19,220

Y=19,210

東ピット群

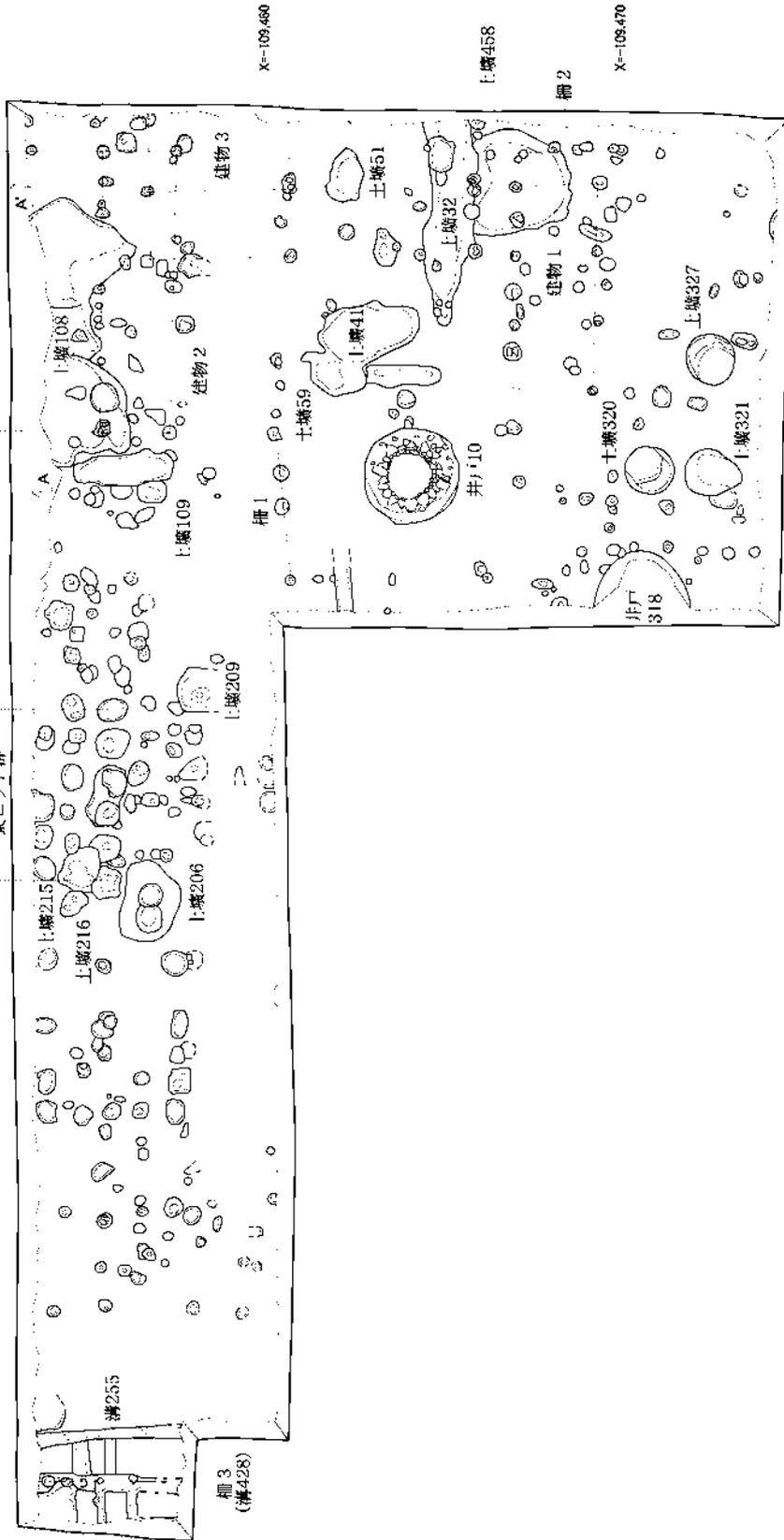


図34 2区室町時代遺構平面図(1:200)

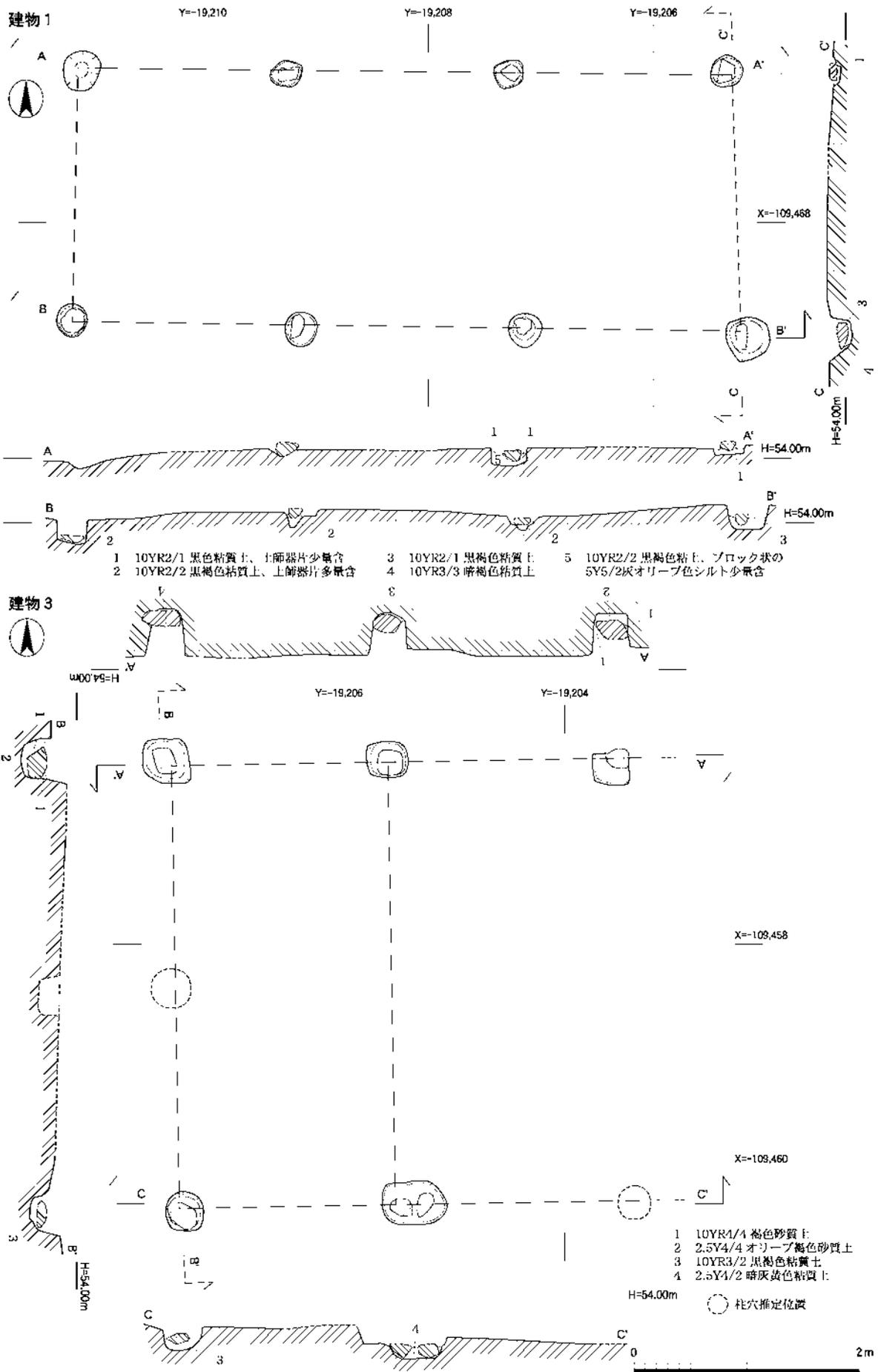


図35 2区建物1・3実測図(1:50)

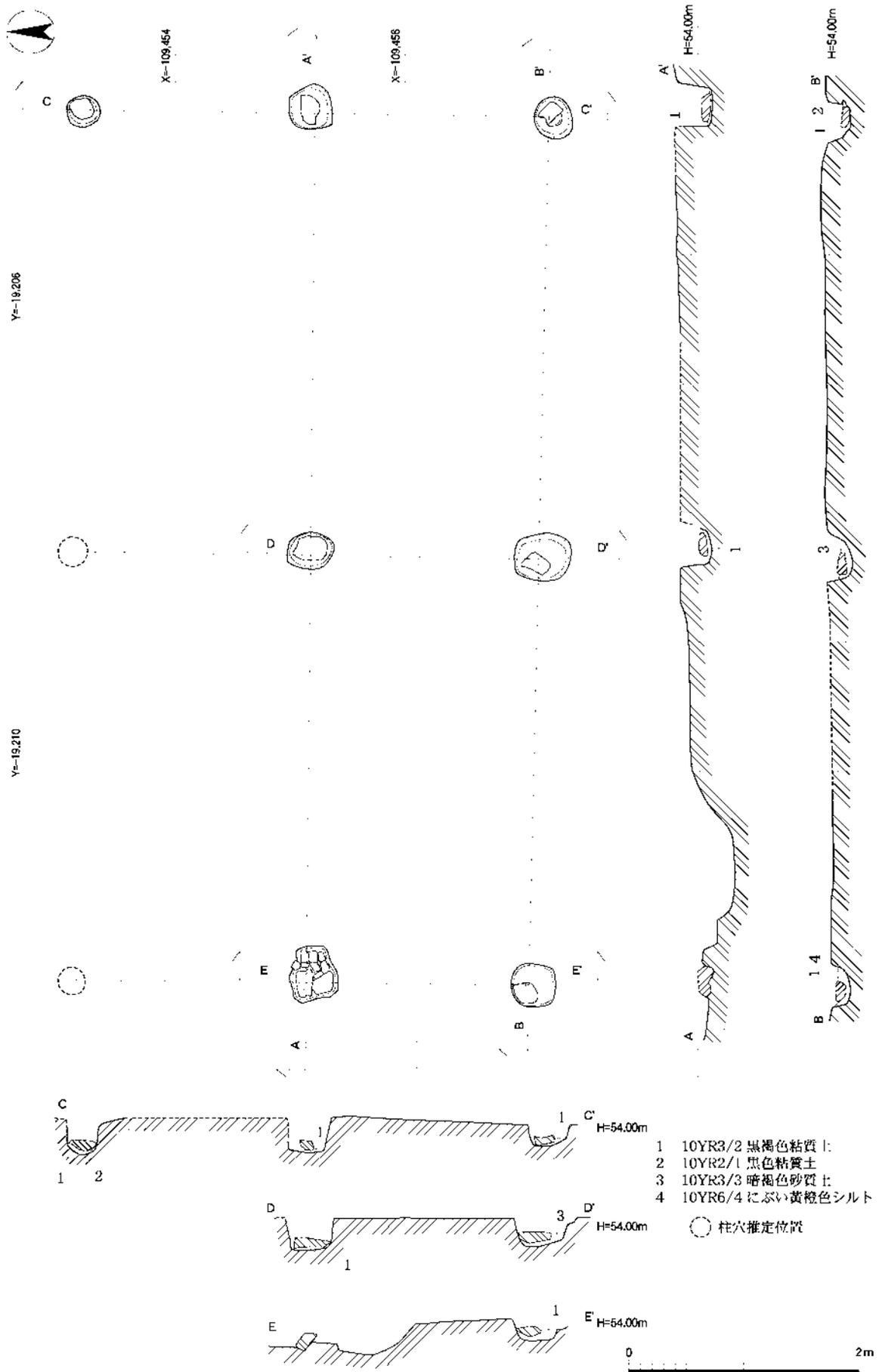


図 36 2区建物2実測図 (1:50)

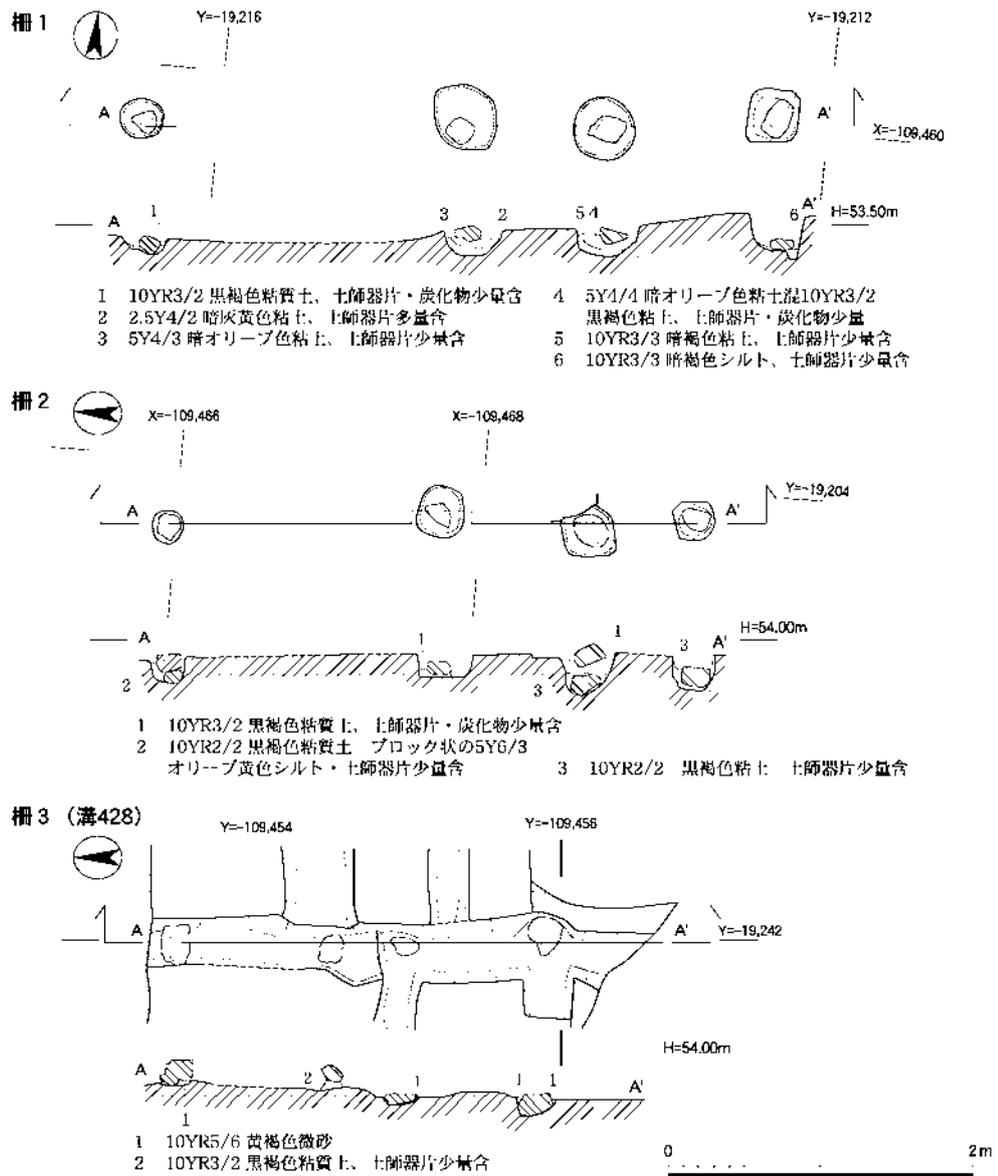


図 37 2区柵1～3実測図(1:50)

の掘立柱建物である。南北の柱間距離が2.4m、東西の柱間距離2mで、柱穴には根石が据えられている。

建物2(図36、図版12) 調査区北東隅で検出した。南北2間(4m)以上×東西2間(8m)以上の東西棟と考えられ、柱穴に根石を据える。柱間距離は南北2m、東西距離4mである。

建物3(図35、図版10) 建物2の南東角附近と重なって検出した南北2間(4m)×東西2間(4m)以上の東西棟で、柱穴に根石を据える。西側の妻の中央の柱穴は、攪乱で柱穴痕が削平されている。柱間距離2mである。

3棟とも若干西に傾くが、ほぼ真南北方向に建てられている。

柵1(図37、図版11) 建物1の東約1mの地点で、北から2番目の柱穴は攪乱によって失われているが、4間分の南北方向の柱穴列を検出した。柱間距離は2mで、柱穴には根石が据えられている。西から南へ3度の傾きをもつ。



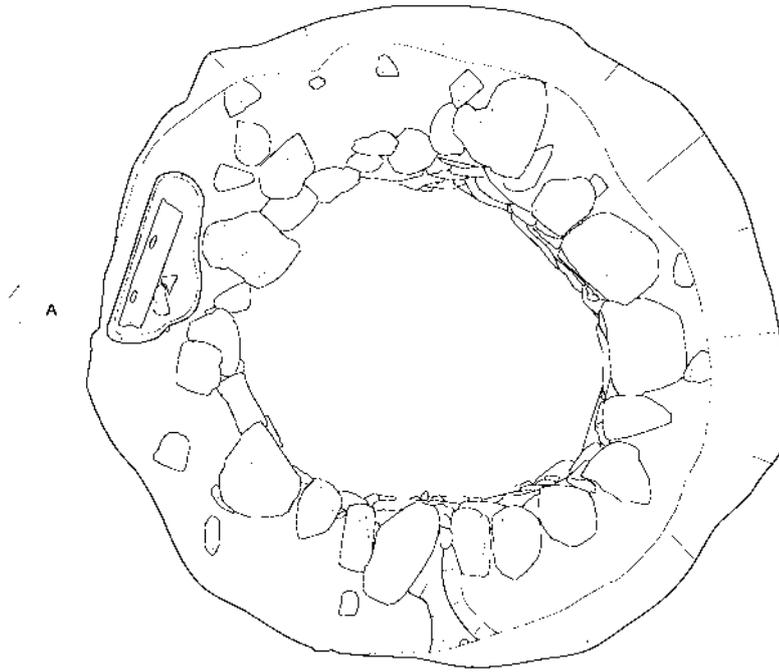
Y=19,213

Y=19,214

X=-109,465

X=-109,464

X=-109,463



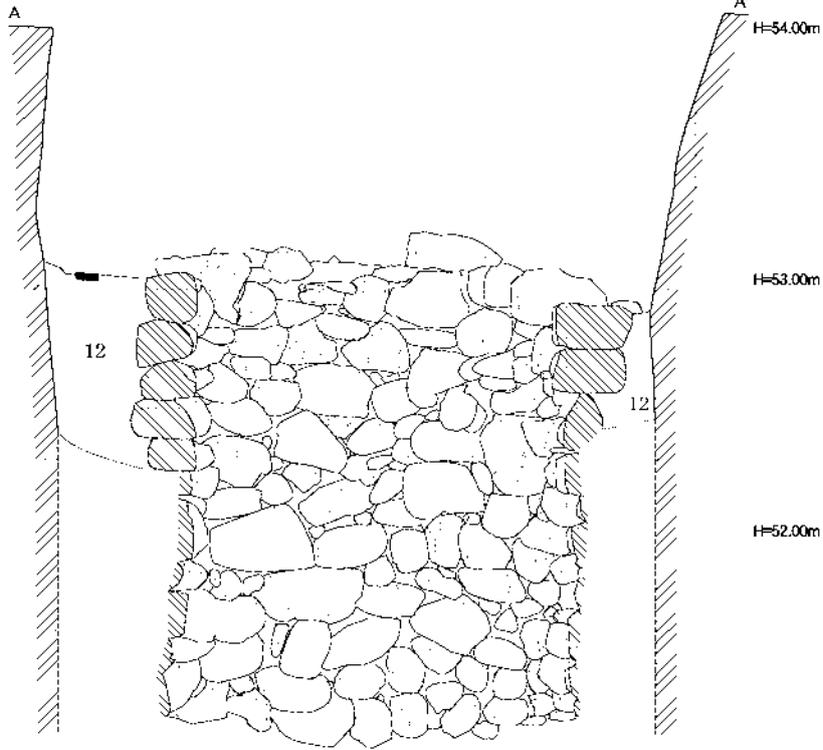
A

A'

H=54.00m

H=53.00m

H=52.00m

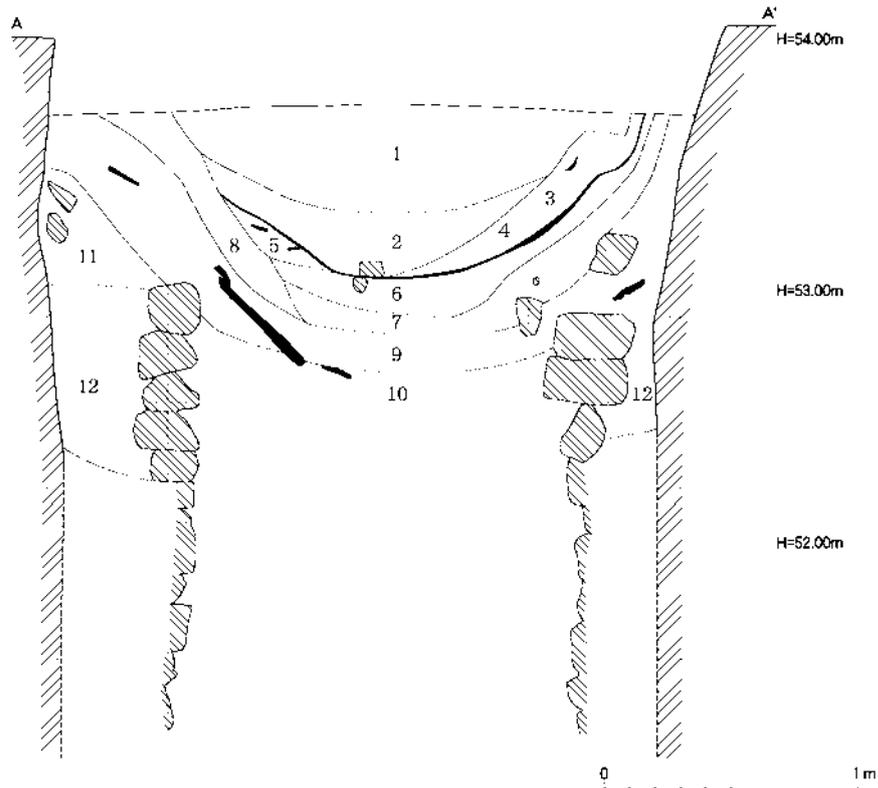


12

12



图 38 2区井戸 10 実测图 (1 : 30)



井戸10埋土・掘形埋土

- | | | | |
|---|--|----|---|
| 1 | 7.5YR3/2 黒褐色粘質土混粗砂、土師器片多量含 | 7 | 2.5Y5/1 黄灰色粗砂、瓦少量含 |
| 2 | 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、土師器片・炭化物多量含 | 8 | 10YR3/3 暗褐色粘質土混礫、土師器片少量含 |
| 3 | 7.5YR4/6 褐色粘質土、ブロック状の5YR3/6暗赤褐色粘質土(焼土)・土師器片・炭化物多量含 | 9 | 10YR3/1 黒褐色粘質土混粗砂礫、土師器少量含 |
| 4 | N2/ 炭材 | 10 | 10YR2/1 黒色粘質土 土師器片・瓦少量含(腐植土) |
| 5 | 7.5YR2/1 黒色粘質土 炭化物多量含、土師器片少量含 | 11 | 10YR3/3 暗褐色粘質土混粗砂礫、土師器片多量含 |
| 6 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土混微砂、土師器片少量含 | 12 | 2.5Y5/1 黒色粘質土、径1~5mmの礫・ブロック状のN6/灰色粘土少量含 |

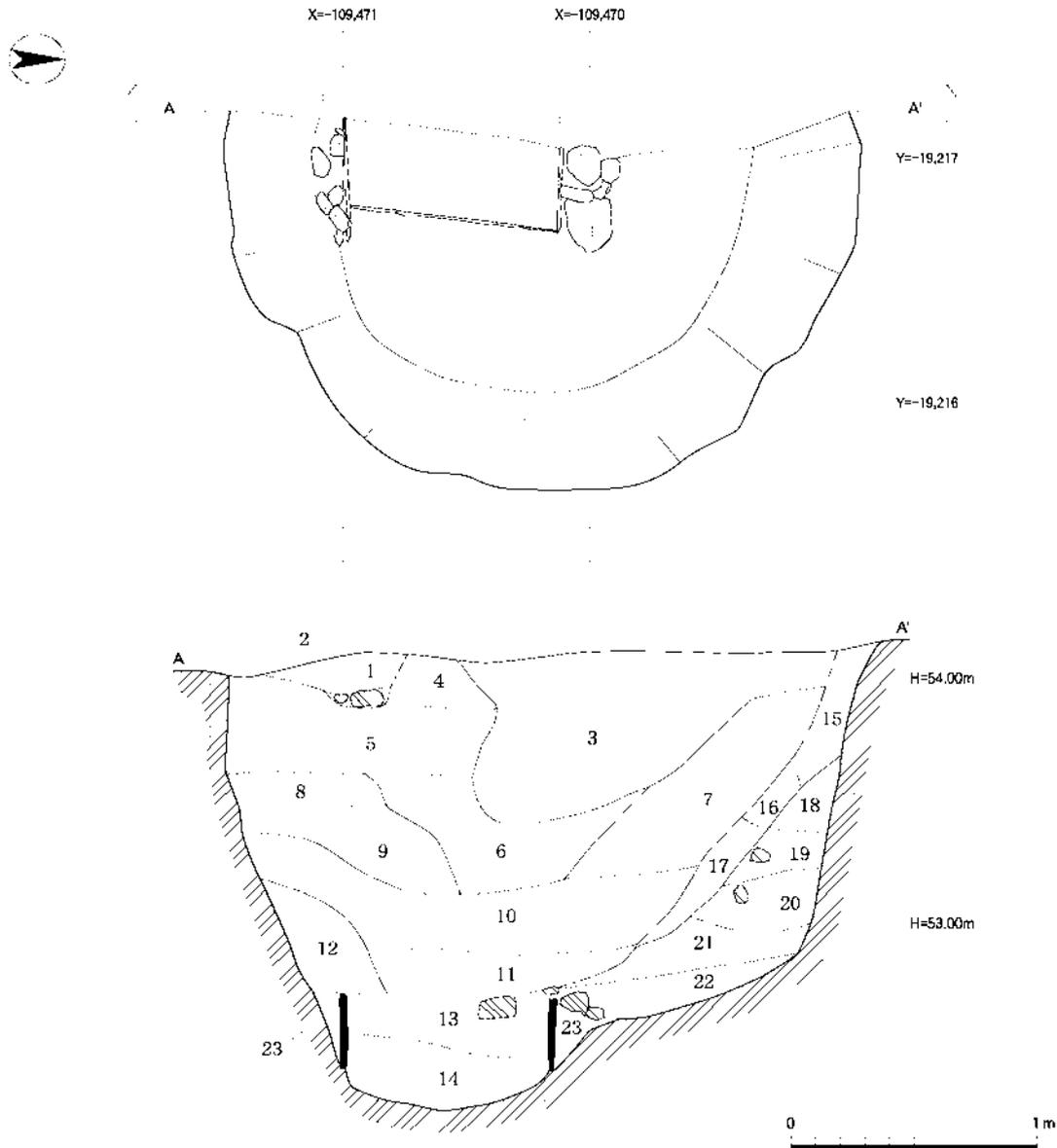
図39 2区井戸10断面図(1:30)

柵2(図37) 調査区中央付近で、西から2番目の柱穴は攪乱によって失われているが、4間分の東西方向の柱穴列を検出した。柱間距離は2mで、柱穴には根石が据えられている。北から西へ7度の傾きをもつ。

柵3(溝428)(図37、図版12) 調査区の西端で検出した。南北方向の柱列である。布掘り溝(溝428)の溝中に根石が据え付けられている。3間分検出し、柱間距離は北から1m-0.5m-1mで、南北とも調査区外に延びると思われる。白河街区の南北区画東側築地の推定ラインに位置する。若干西に傾くが、ほぼ真南北の方向をもつ。

布掘り溝(溝428)は、両肩がほぼ垂直に落ち、底面は平坦である。また、南壁から1.3m、2.2mの地点で直角に東側に折れ曲がる溝が取り付く。長さは4m以上、幅0.45m、上部は別の遺構で削平されているが、深さは0.35mである。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、下層は褐色粘質土である。遺物は土師器、輸入青磁などが出土している。

井戸10(図38・39、図版13) 建物1の北西で検出した。直径約2.7mの円形の掘形をもつ、内法約1.4mの円形石組井戸である。石組は人頭大の川原石を積み上げたもので、石の間に自然木・建築部材などの木材が、積まれている箇所がみられる。石組は、検出面から1m程下で検出している。廃棄時に上部の石は持ち去られたと考えられる。埋土は上から黒褐色粘質土、炭層、



- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土、土師器片少量含
- 2 10YR3/3 暗褐色微砂
- 3 10YR3/2 黒褐色微砂、径2~10cmの礫・ブロック状の5Y5/2黄褐色シルト・土師器片・炭化物少量含
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の2.5Y5/3黄褐色シルト・10YR4/4褐色粗砂多量含、土師器片・炭化物少量含
- 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト混10YR4/4褐色微砂、ブロック状の2.5Y4/4黄褐色粘質土少量含
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質土、径5~15cmの礫少量含
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混礫、土師器片・炭化物多量含
- 8 10YR3/3 暗褐色微砂、ブロック状の10YR3/2黒褐色粘土多量含
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土混細砂、ブロック状の10YR3/1黒褐色粘質土・5Y6/3オリブ黄色シルト多量含
- 10 2.5Y4/1 黄灰色粘質土混5Y5/3灰オリブ色シルト、土師器片・炭化物多量含
- 11 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂、ブロック状の10YR3/1黒褐色粘質土多量含
- 12 10YR4/2 灰黄褐色砂質土、ブロック状の10YR4/2暗灰黄色シルト少量含
- 13 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、径2~3cmの礫少量含
- 14 2.5Y7/1 灰白色粗砂礫
- 15 2.5Y5/3 黄褐色シルト、ブロック状の10YR3/1黒褐色粘質土多量含
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂礫
- 17 10YR4/4 褐色粗砂、ブロック状の2.5Y5/3黄褐色シルト多量含
- 18 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、径1~5mmの礫・ブロック状の10YR3/3暗褐色粘質土少量含
- 19 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、ブロック状の10YR2/2黒褐色粘質土少量含
- 20 2.5Y5/3 黄褐色粘質土混細砂
- 21 2.5Y3/3 暗オリブ褐色粗砂
- 22 10YR3/3 暗褐色粗砂礫
- 23 10YR4/6 褐色粗砂

図40 2区井戸318実測図(1:30)

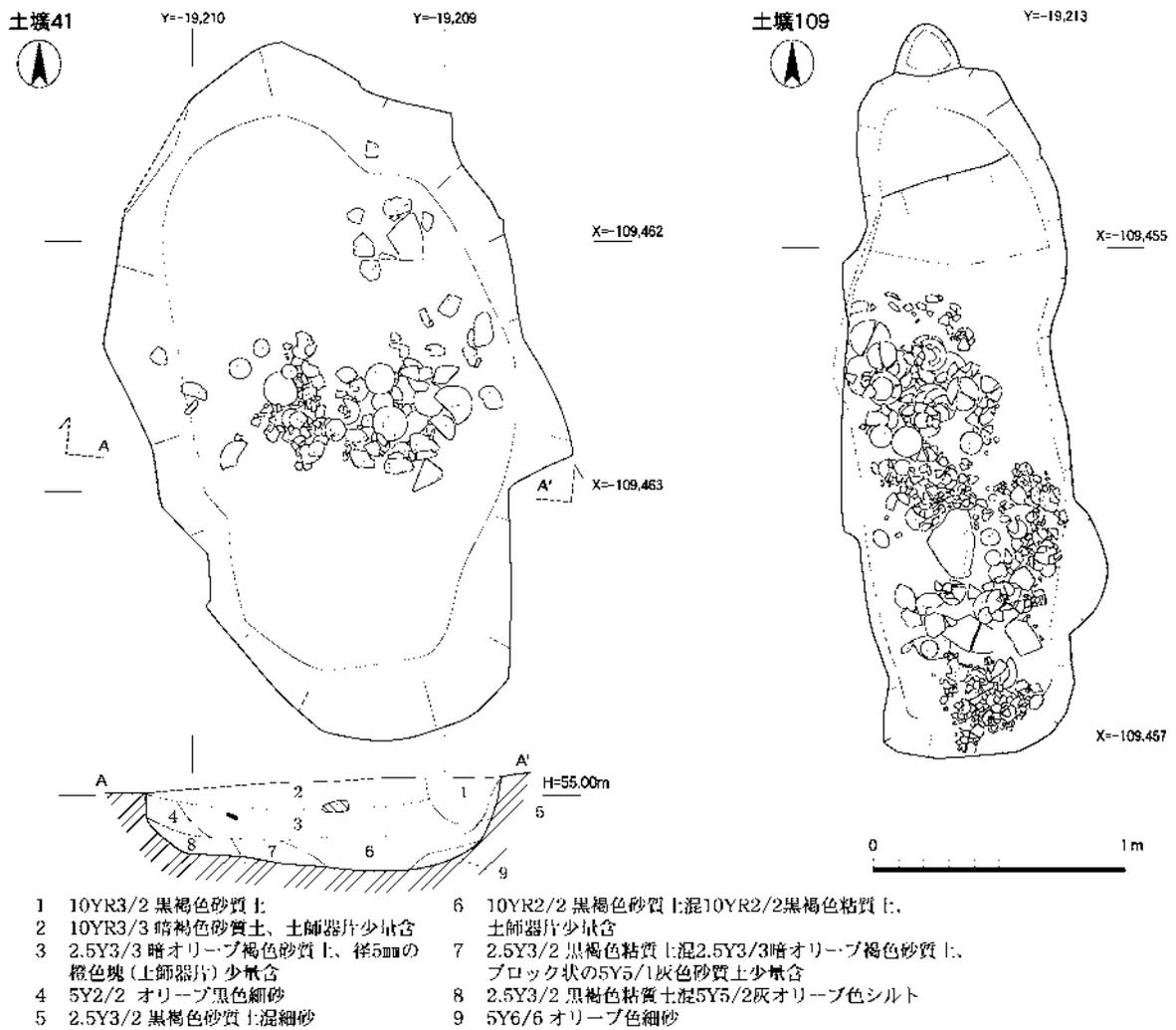


図41 2区土壌41・109・458実測図(1:30)

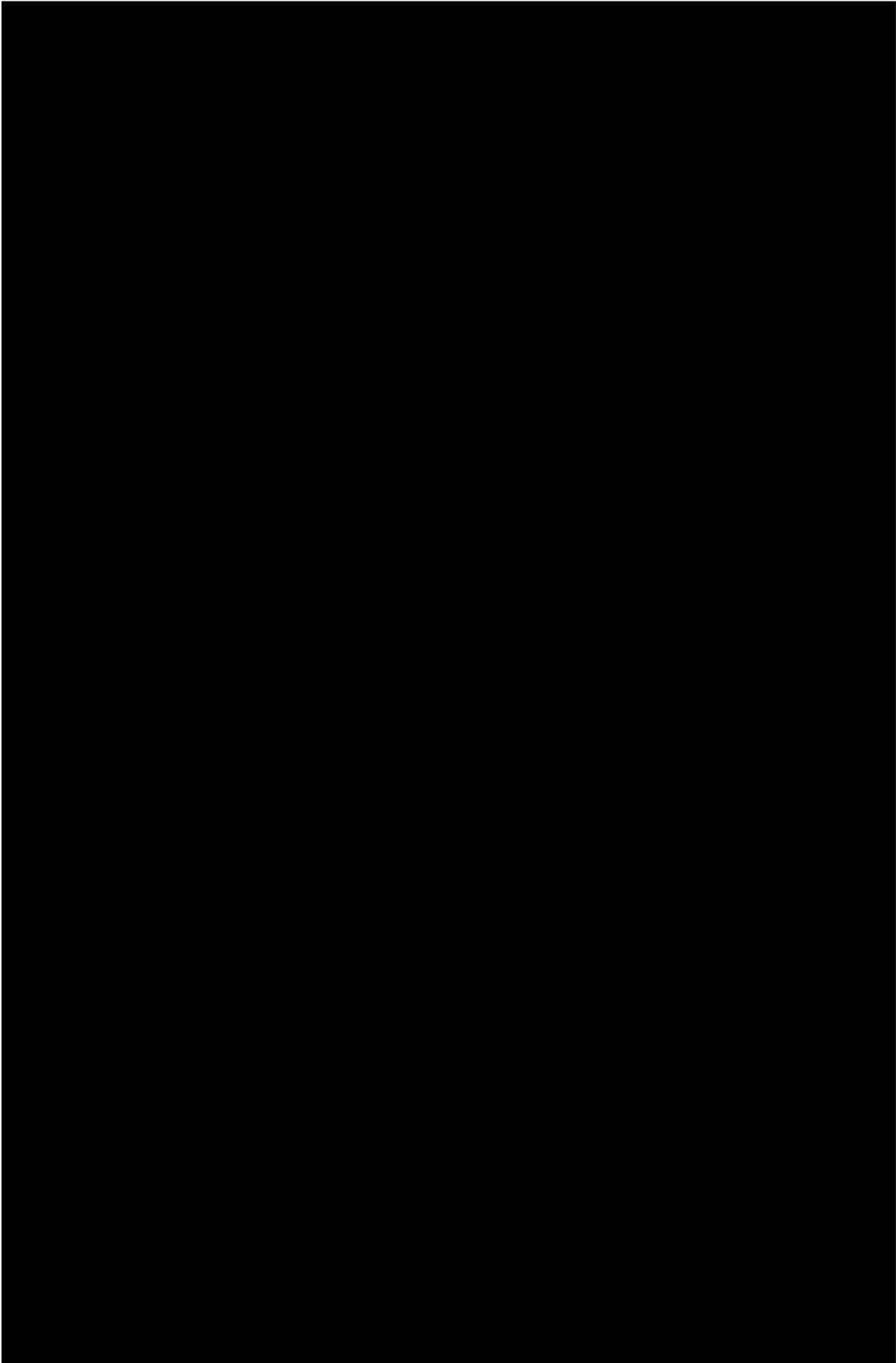


图 42 2区土壤 206·215·216 实测图 (1:30)

暗灰黄色粘質土、暗褐色粘質土混粗砂、石組内は黒色粘質土が堆積していた。何れの層からも大量の遺物が出土し、その量は遺物整理箱 20 箱分に相当した。土師器皿、瓦器鍋、焼締陶器挿鉢、瀬戸焼鉢、瓦、木製品（箸・折敷・焼印のある曲物・下駄・人形・建築部材など）がある。また、オニグルミ・モモ・ウメ・スモモ・クリなどの植物遺存体、タイ・昆虫の動物遺存体が出土している。検出面より約 2.75 m まで掘り下げたが、井戸底を確認することができなかった。

井戸 318（図 40、図版 13） 拡張区西壁で東半分を検出した。残りの半分は調査区外となった。掘形の直径約 2.6 m で、円形石組井戸であったと考えられるが、すべて石は抜き取られており、一部底の方形井戸枠材周辺に散乱していた。方形木枠の規模は、一辺 0.9 m、高さ 0.25 m である。木枠は鉄釘の打ち込みによって組み立てられている。埋土上層は黒褐色粘質土であるが、下層になると灰オリーブ色シルトや灰白色粗砂礫などの地山に近い土や地山が混ざり込んでいた。遺物は、土師器皿、須恵器、瓦器、輸入磁器、焼締陶器、瓦などである。

土壇 41（図 41） 井戸 10 の東側で検出した。長さ約 2.8 m、幅約 1.5 m の不整楕円形で、深さは 0.35 m である。黒褐色砂質土と黒褐色粘質土などの埋土中に、土師器皿の完形品数十個体を含む遺物が整理箱 3 箱分出土した。焼締陶器、瓦片などの遺物も出土している。

土壇 109（図 41、図版 14） 調査区東の北側で検出した長さ約 2.7 m、幅約 0.9 m の矩形で、深さ約 0.5 m である。土師器皿の完形品が一部重ねられた状態のままで出土している。土壇の中央から南側に遺物が集中して出土していることから、南側から投棄されたと推定できる。埋土は黒褐色粘質土で、遺物が整理箱 5 箱分出土した。

土壇 458（図 41、図版 14） 拡張区の東部で検出した。暗褐色粘質土の埋土中から、遺物整理箱 3 箱分の大量の土師器皿を検出している。一辺約 1.4 m の不整方形を呈しており、深さが 0.1 m である。この土壇が埋め戻された後に建物 1 が建てられている。建物 1 との時期差は、土師器皿の編年の 1 時期分であり、実年数にして 20 ～ 30 年程度と考えられることから、世代交代による敷地内での変遷があったものと推定できよう。他に菊花形銅製品が出土している。

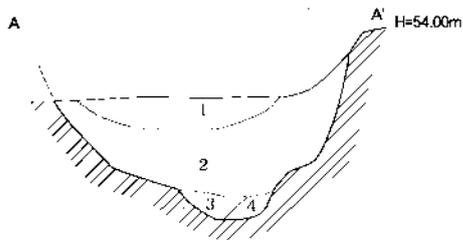
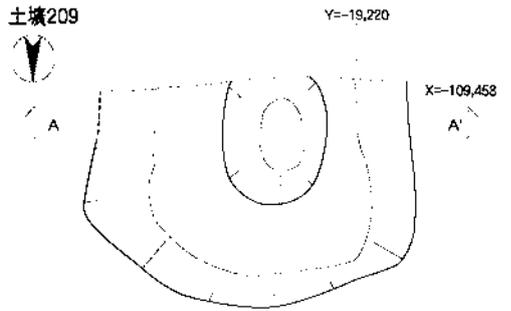
土壇 41・109・458 は、それぞれ大量に土師器皿が投棄されたごみ捨て穴と考えられる。

土壇 32（図 34） 拡張区の東部で検出した。東西の長さ 5.75 m 以上、幅 1.3 m の溝状の遺構で、底部は 2 段になり西半の深さが 0.15 m、東半が 0.1 m となる。埋土は暗褐色砂質土で、土師器、瓦器が出土している。

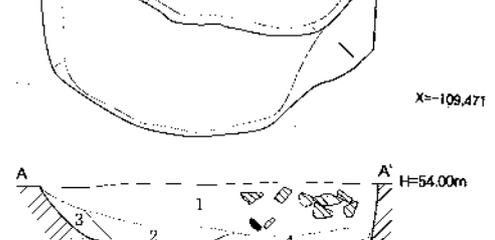
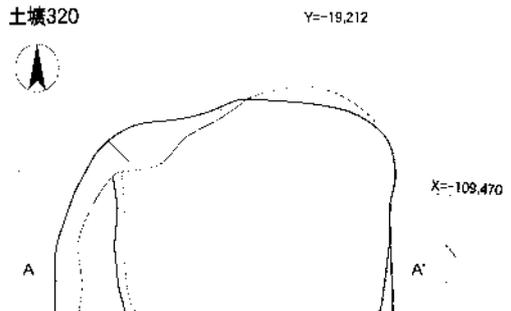
土壇 51（図 34） 拡張区の東部で検出した。北側の断面が袋状になって地山を切り込んでいるが、長さ 0.95 m、幅 1.5 m の不整楕円形を呈し、深さ 0.45 m である。埋土は黒褐色砂質土が主体で、土師器、瓦、輸入青磁などが出土している。

土壇 59（図 34） 井戸 10 の東側で検出し、土壇 41 を破壊している。長さ 1.05 m、幅 1.15 m の不整五角形を呈し、深さは 0.3 m である。埋土は黒褐色砂質土で、土師器、瓦器、輸入青磁などが出土している。

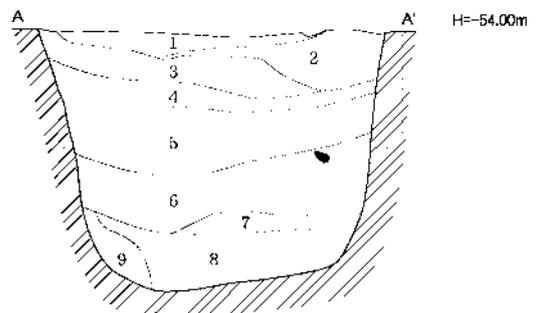
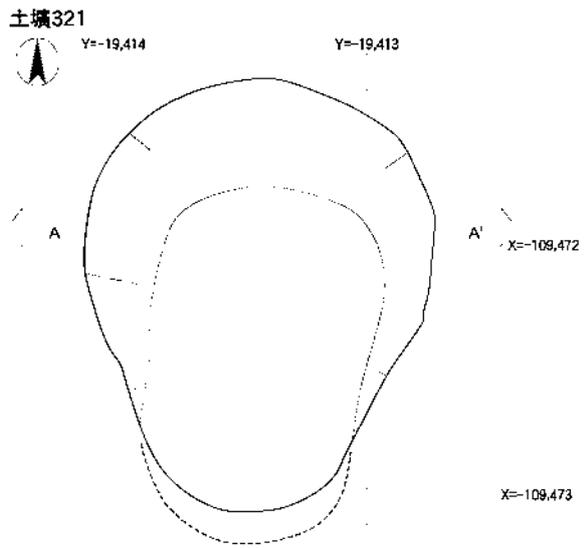
土壇 206（図 42） 調査区の中央で検出した。長さ 2.3 m、幅 1.9 m の楕円形で、底部は東西で 2 箇所に分かれ、深さは東部が 0.75 m、西部が 0.6 m である。埋土は 3 層に分かれ、上層が黒



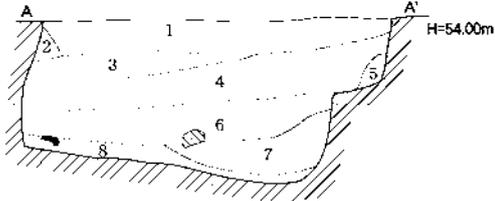
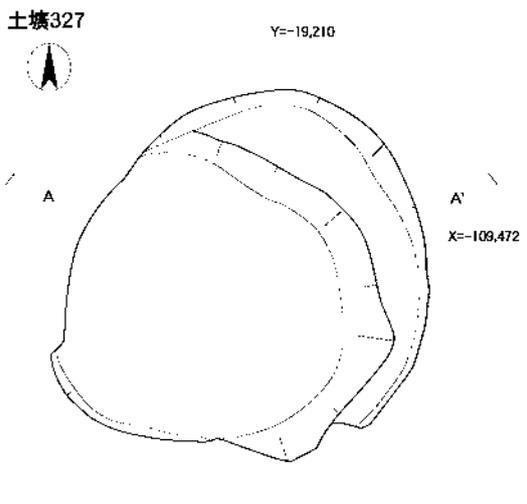
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土、ブロック状の2.5Y5/6明黄褐色シルト・土師器片少量含
- 2 10YR2/1 黒色粘質土、ブロック状の2.5Y4/4オリーブ褐色シルト多量含、土師器片少量含
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土、ブロック状の10YR4/3にぶい黄褐色微砂・土師器片少量含
- 4 2.5Y4/2 オリーブ褐色粘質土



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混雑、瓦多量含
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質土、径3~8cmの礫少量含
- 3 10YR2/2 黒褐色砂質土、径7cmの礫少量含
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、径1~3cmの砂少量含
- 5 10YR4/4 褐色粘質土、径4~12cmの礫少量含



- 1 10YR6/6 明黄褐色微砂
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の5Y4/2灰オリーブ色シルト少量含
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質土混粗砂、土師器片・炭化物少量含
- 6 10YR2/2 黒褐色粘質土混細砂、土師器片少量含
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、径1~2mmの砂少量含
- 8 10YR3/2 黒褐色粘質土混微砂、ブロック状の10YR4/4褐色粘質土少量含
- 9 10YR3/2 黒褐色粘質土混細砂、土師器片・炭化物多量含



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混雑
- 2 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土混雑、ブロック状の2.5Y5/6黄褐色シルト少量含
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土、ブロック状の5Y4/2灰オリーブ粘土多量含
- 5 2.5Y5/6 黄褐色微砂
- 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、ブロック状の5Y5/3灰オリーブ色シルト・2.5Y5/4黄褐色シルト多量含
- 7 2.5Y3/2 黒褐色微砂、ブロック状の2.5Y5/4黄褐色細砂多量含、土師器片・炭化物少量含
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土



図 43 2区土壌 209・320・321・327 実測図 (1:30)

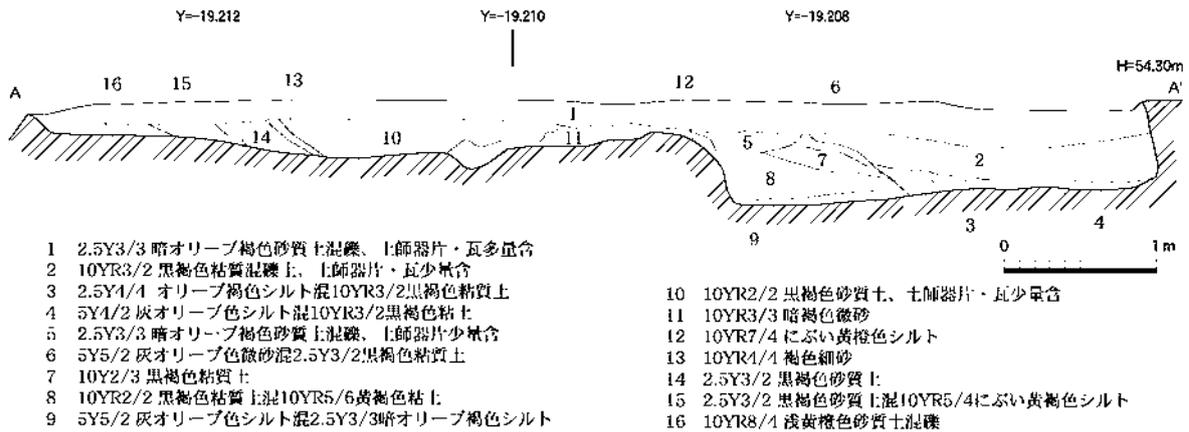


図44 2区土壌108断面図(1:50)

褐色粘質土、中層が灰黄褐色粘質土、下層が暗オリーブ褐色粘質土で、土師器、瓦、瓦器、焼締陶器などが出土している。

土壌215(図42) 調査区の中央で検出した。長さ約1.3m、幅1.05mの不整楕円形で、深さは0.2mである。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が暗褐色の粘質土で、土師器、瓦、瓦器、天目茶椀などが出土している。

土壌216(図42) 調査区の中央で検出し、南西部を土壌215に破壊されている。一辺の長さ約0.8mの不整形で、深さは0.15mである。埋土は上層が暗褐色微砂、下層がにぶい黄褐色粘質土で、土師器、瓦、焼締陶器などが出土している。

土壌209(図43) 調査区の中央で検出した。長さ南半分を攪乱によって破壊されているため南北の規模は不明だが、東西幅1.15m、深さ約0.5mである。埋土は主に黒色の粘質土が堆積し、土師器、瓦器、陶器、瓦などが出土している。

土壌320(図43) 拡張区の南西部で検出した。長さ1.45m、幅1.3mの隅丸方形を呈し、深さは0.35mである。埋土中に瓦・石が多く含まれ、上層がにぶい黄褐色砂質土、下層褐色粘質土などが堆積し、土師器、陶器などが出土している。

土壌321(図43) 拡張区の南西部で検出した。長さ1.75m、幅1.35mの楕円形を呈し、深さは1.05mである。埋土は黒褐色粘質土が主体で、土師器、瓦器、瓦が出土している。

土壌327(図43) 拡張区の南部で検出した。長さは1.0m、幅0.9mの不整形を呈し、深さは0.65mである。埋土は暗オリーブ褐色の粘質土が主体で、土師器、瓦器、陶器、瓦が出土した。

土壌108(図44) 東部の北壁際で検出した。大きな不整形の土壌である。東西の幅が約7.4mで、深さは0.35～0.6mである。埋土は上層が暗オリーブ褐色の砂質土、下層は黒褐色砂質土・粘質土が主体で、土師器、瓦器、瓦、焼締陶器(常滑焼甕)、施釉陶器(瀬戸焼おろし皿)などが出土した。この土壌が埋まった後に、建物2が造られている。

甕ピット群(図34、図版11) 調査区中央の北部で、土壌群を検出した。南北約2.5m、東西約4.7mの範囲に12基の土壌が整然と並んでいる。空白はあるものの、約1m間隔に東西5基、南北3基の各土壌が並んでいる。各土壌は径0.45～0.85m、深さ0.2～0.3mの円形で、埋土は黒褐

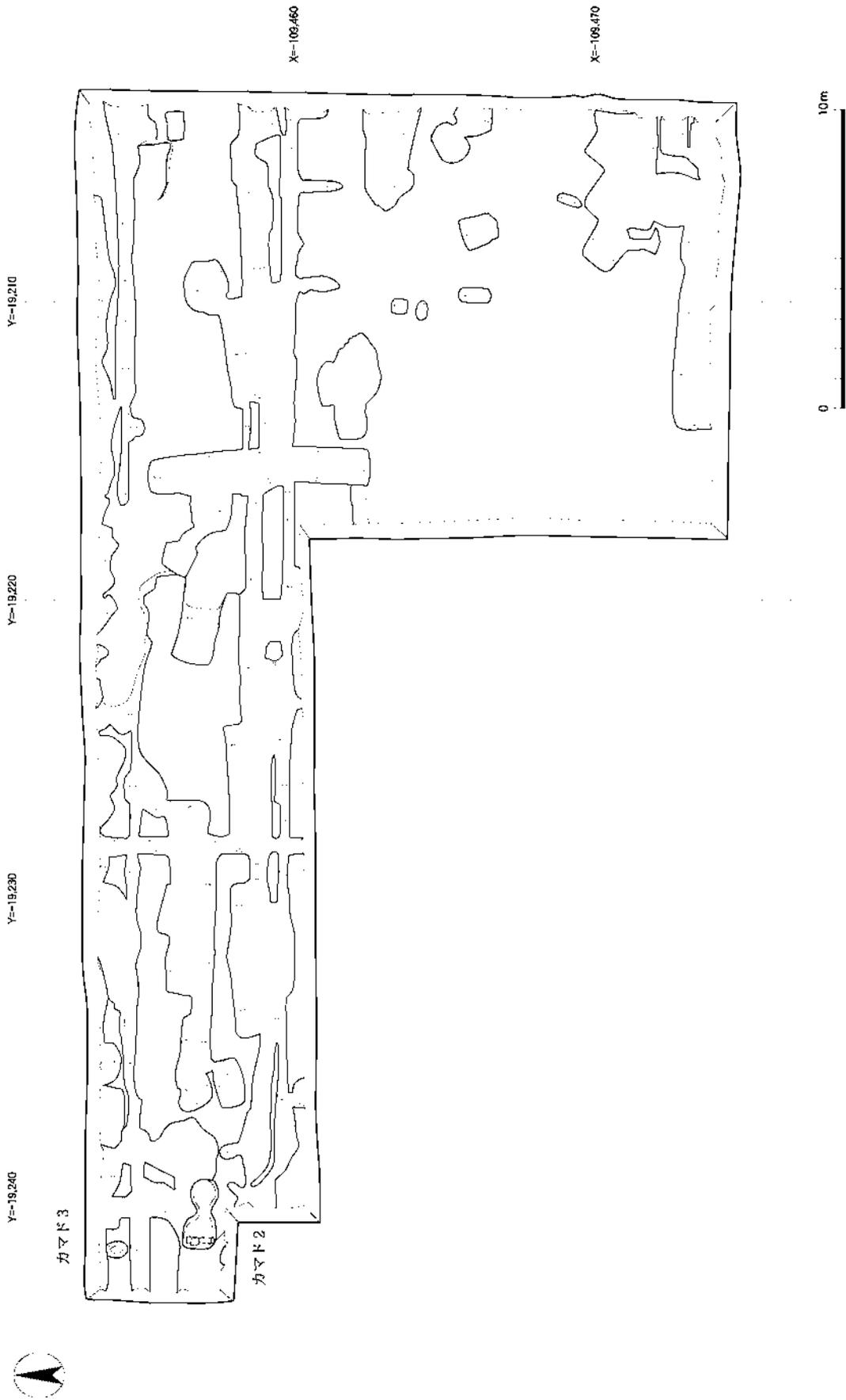


図 45 2区江戸時代遺構平面図 (1 : 200)

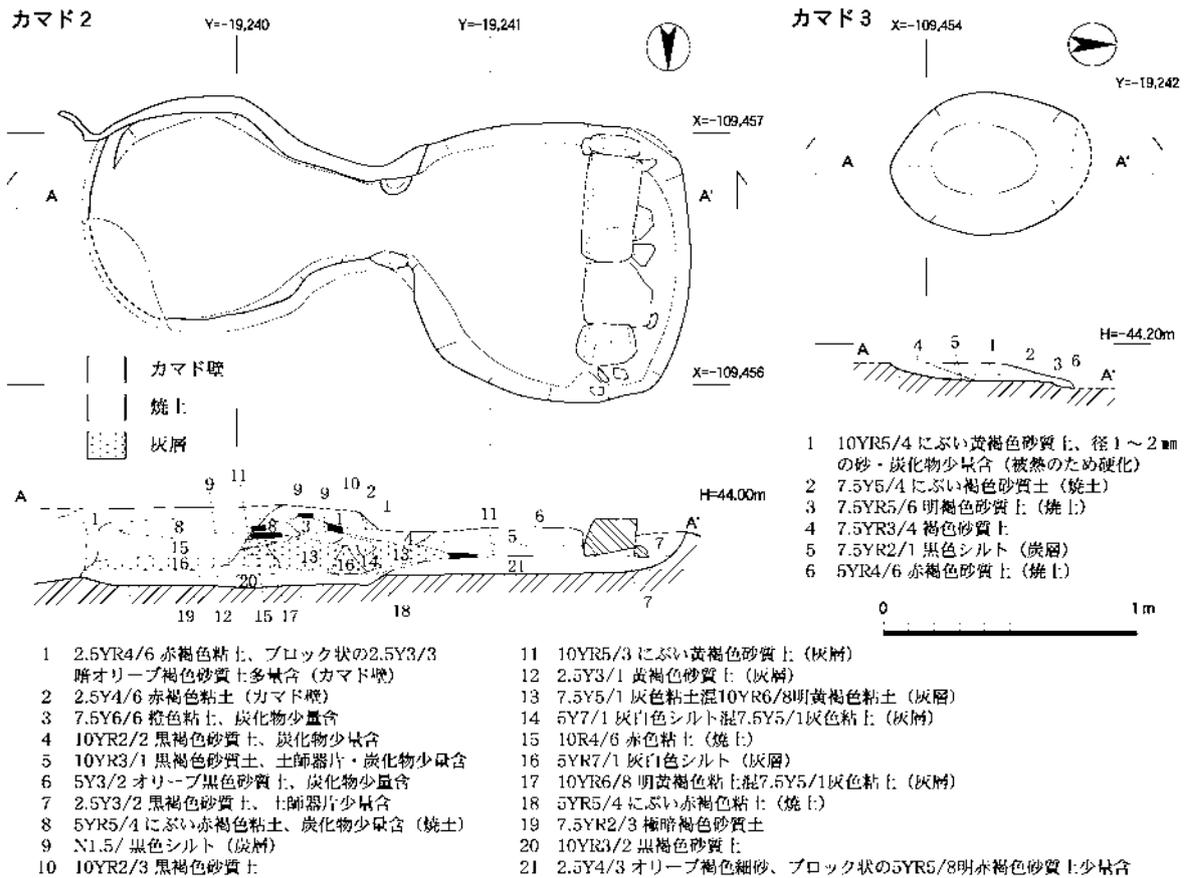


図 46 2区カマド 2・3実測図 (1:30)

色の砂質土が主体となる。遺物は、土師器、瓦器、瓦、陶器などが出土している。この土壌に甕が据え付けられていた可能性が考えられ、このことから甕ピット群とした。

溝 255 (図 34) 調査区の西部で検出した。南北方向の溝である。長さ 4 m 以上、幅 0.35 m、深さは 0.25 m である。埋土は灰オリーブ色シルトで、土師器、輸入青磁が出土している。白河街区の南北区画東側築地の推定ラインの内側に位置し、宅地内の溝の可能性がある。北から西へ 6 度の傾きをもつ。溝 428 との芯々距離は、1.5 m である。溝 428 と 2 条の東西溝で結ばれている。

5) 江戸時代末期から明治時代の遺構 (図 45、図版 9)

カマド 2 (図 46、図版 9) 2 個の不整形の土壌が結合した瓢箪形をしている。東の土壌は径約 1.2 m、幅約 0.9 m の不整形を呈している。東辺以外は、高熱を受けて変質した赤褐色粘土のカマド壁が残っていた。埋土は橙色粘土・明黄褐色粘土の焼土層や、黒色シルトの炭層、灰色粘土の灰層である。椀瓦片が少量出土している。西側の土壌は約 1.1 m の不整形土壌の西端に、南北方向に切石を 1 列に並べた遺構である。埋土は、黒褐色砂質土やオリーブ黒色砂質土に炭化物が少量混じる。両土壌が連なる中央の最も狭いところが焚き口と考えら、幅 50 cm 程度の通路状の両脇に石が立てられていた。西側の土壌が作業場で、ここから薪を供給し、東側の土壌で燃焼

させたものと思われる。規模や形状から、いわゆる五右衛門風呂の遺構（下部構造）と推定できる。

カマド3（図46、図版9）カマド2の北側で検出した長さ約0.7m、幅約0.55mの楕円形を呈する燃焼痕をもつ遺構で、カマドの底部と考えられる。5cm程の深さに非常に固いぶい黄褐色砂質土、明褐色砂質土、褐色砂質土、炭層の黒色シルト、赤褐色砂質土が堆積している。上部形態などは不明である。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

縄文時代、古墳時代、平安時代から鎌倉時代、室町時代、江戸時代から明治時代の遺物が出土した。大半は土器・瓦類である。1・2区合わせて整理箱に269箱と、その他に井戸枳材が約150点出土している。その内、鉄器類が1箱、木器類が44箱ある。木器類は1・2区ともに多く出土し、ほとんどが井戸内から良好な状態で出土した。

表3 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器、剥片		縄文土器1点、石器1点		
古墳時代前期	布留式土器		土師器1点		
古墳時代後期	土師器、須恵器、石製品、土製品		土師器5点、須恵器19点、石製品3点、土製品1点		
奈良時代	瓦		瓦1点		
平安時代中期～後期	土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、山茶碗、瓦器、輸入磁器		土師器7点、須恵器1点、白色土器2点、黒色土器5点、山茶碗2点、瓦器1点、輸入磁器2点		
平安時代末～鎌倉時代	土師器、須恵器、白色土器、山茶碗、瓦器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、木製品、石製品、金属製品、土製品		土師器89点、須恵器5点、白色土器2点、山茶碗2点、瓦器9点、輸入磁器17点、施釉陶器1点、焼締陶器2点、瓦101点、木製品44点、石製品4点、金属製品2点、土製品3点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、輸入陶器、瓦、木製品、石製品、銭貨、金属製品、製塩土器		土師器205点、須恵器4点、瓦器30点、施釉陶器9点、焼締陶器7点、輸入磁器19点、輸入陶器2点、瓦3点、木製品134点、石製品7点、銭貨2点、金属製品5点、製塩土器1点、		
江戸時代	土師器、土師質土器、焼締陶器、磁器、施釉陶器、軟質施釉陶器、木製品		土師器19点、土師質土器5点、焼締陶器1点、磁器12点、施釉陶器19点、軟質施釉陶器1点、木製品1点		
合計		313箱	819点 (37箱)	7箱	269箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より44箱多くなっている。
大型の木製品（井戸枳・曲物）は、コンテナに収納できないため、上記の箱数に含んでいない。

古墳時代後期の遺物として、土師器、須恵器、石製品などがある。周辺の調査では、弥生時代から古墳時代中期の遺構や遺物が検出されているが、後期のものは見つかっていない。よって、後期の遺物が確認されたことは古墳時代土地利用の変遷を考える上で、注目される事柄である。

平安時代中期の遺物は、1区の整地層からではあるが、少量出土している。平安時代末から鎌倉時代初頭の遺物の多くは、井戸・土壇から出土した。瓦類は丸・平瓦が大半であるが、軒丸瓦や軒平瓦も含まれる。長さが30cmを超える瓦や厚みのある瓦で、六勝寺と同一文様の瓦当をもつ瓦があることから、南に位置する寺院（法勝寺）の瓦が整地する際に混入、あるいは投棄された可能性が高い。また、瓦の中には刻印やヘラ記号が認められるものもあった。

室町時代後期の遺物は、土師器皿を中心として、多くの遺物が出土している。特に、2区の井戸10出土の木製品は量が多いことに加え、種類が豊富である。箸、折敷、曲物の底、人形、下駄、建築部材などである。下地に黒漆を塗り、赤漆を使って様々な文様を描いた漆椀も3点出土している。その他に、魚のうろこ、動物骨、桃や梅の種、椎の実、マツボックリ、植物の葉脈などがあり、中世の食生活や周辺の植生を復元することが可能となる遺物が出土している。

江戸時代の遺物は、土師器・肥前磁器などが出土した。重機掘削の際には、この時期に伴う多くの遺物を確認している。

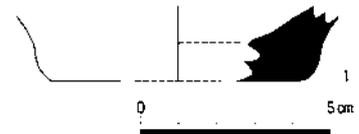


図 47 1区出土土器実測図1
[縄文時代] (1:2)

(2) 土器類

1) 1区出土の土器類 (図 47 ~ 57、図版 15 ~ 22)

縄文時代の土器類 (図 47)

土壇 828 出土土器 (1) 1は縄文土器の底部片である。直径約6.5cmの平底になると考えられる。残存高は2.0cmである。角閃石を多く含む黄褐色の胎土を持つ。古墳時代の遺構に混入して出土した。時期は不明である。

古墳時代の土器類 (図 48)

土壇 748 出土土器 (2・3) 2は須恵器の杯身で、平坦な底部から屈曲して体部がほぼ直線的に外方に開き、立上りは短く内傾する。受部はほぼ水平である。底部はヘラキリのまま無調整、体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整、内底面は仕上げナデを施す。ロクロの回転方向は反時計回りである。口径11.6cm、器高3.6cmである。

3は土師器の高杯の脚部である。中空の柱状部から屈曲して裾部となる。外面は磨滅が激しく調整は不明であるが、内面にはシボリ目のあとが明瞭に残る。脚裾部径10.9cm、残存高9.7cmである。

溝 817 出土土器 (4~9) 4~6は須恵器の杯身である。底部から体部へ明瞭な境をもたず、外反気味にのびる。立上りは短く内傾し、受部は水平のものと斜め上方にのびるものがあり、いずれの端部も丸味をおびる。底部・体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、5は時計回り、4・6は反時計回りである。復元口径は14.2~14.5cm、復元器高3.6~4.0cmである。8は須恵器の高杯の脚部である。透かし孔を持たないタイプで、

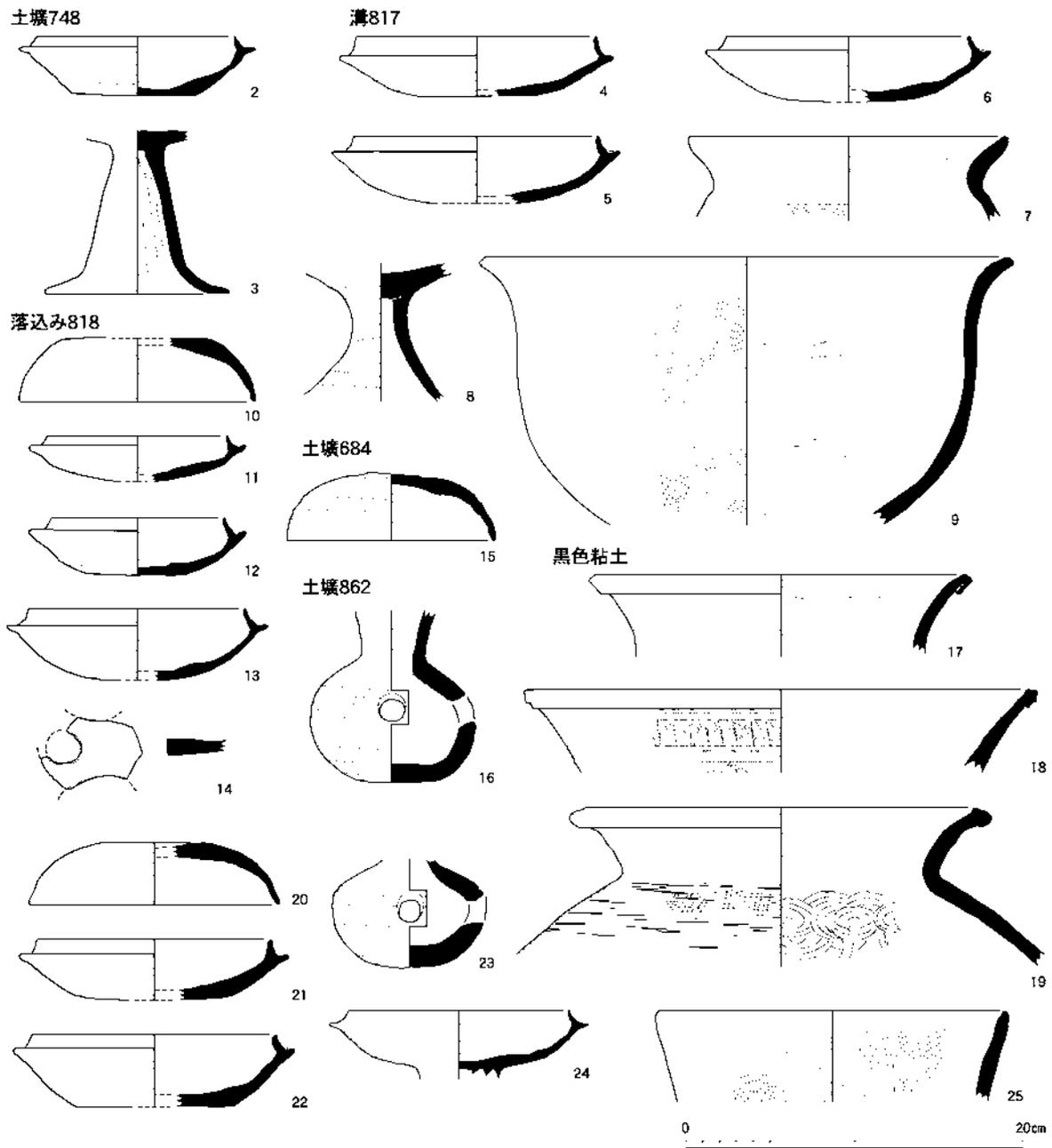


図 48 1区出土土器実測図2 [古墳時代] (1:4)

おそらく無蓋の高杯になると思われる。回転を利用したナデ調整を施す。

7は土師器の甕で、体部から口縁部へ「く」の字形に屈曲し、口縁端部は丸味をおびる。口縁部外面と内面の上半はナデ調整。体部外面は縦方向のハケ目、体部内面は斜め方向のハケ目、口縁部下半は横方向のハケ目調整をほどこす。9は底部からゆるやかに屈曲し、体部がほぼまっすぐ上にのび、口縁部が外方に開く土師器の鉢である。口縁端部は外方に面をもつ。口縁部はナデ調整、体部外面は縦方向ないしは斜め方向のハケ目調整、体部内面は横方向ないしは斜め方向のハケ目調整を施す。二次焼成を受けて赤変している。復元口径 31.0 cm、残存高 15.9 cmである。

溝 818 出土土器 (10～14) 10は須恵器の杯蓋である。比較的平らな天井部から口縁部に屈曲し、口縁端部は丸味をおびる。天井部はヘラキリのまま無調整、天井部と口縁部の境は回転ヘラケズリ、

他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。口径は 14.0 cm、器高 3.8 cmである。

11～13は須恵器の杯身である。底部から体部へ明瞭な境をもたず外湾気味にのびる。立上りは短く内傾し、受部は斜め上方にのび、いずれの端部も丸味をおびる。底部・体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。11は復元口径 10.6 cm・復元器高 2.7 cm、12は口径 10.3 cm・器高 3.45 cm、13は復元口径 12.8 cm・器高 4.3 cmである。

14は土師器の甑の底部である。中央に円形の透かし、周辺に楕円形の透かしを配したものである。

柱穴 684 出土土器 (15) 15は須恵器の杯蓋である。天井部から明瞭な屈曲を持たずに口縁部になる。天井部はヘラキリのまま無調整、口縁部上半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。口径は 12.4 cm、器高 4.1 cmである。

土壇 862 出土土器 (16) 16は須恵器の甗の体部である。体部は球形に近く穿孔の下位に浅い沈線がめぐる。底部・体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。体部径 9.9 cm、残存高 10.2 cmである。

黒色粘土出土土器 (17～25) 17～25は調査区西半分で約 10 cmの厚さで堆積していた黒色粘土の整地層を掘り下げた際に出土した。

17～19は須恵器の甗である。17は口縁部を折り曲げて、外方は肥厚する。回転を利用したナデ調整を施す。復元口径は 22.6 cmである。18は口頸部は直線的に外上方にのび、端部は段をなす。口頸部外面に上方 2 条、下方 3 条の沈線をめぐらし、間に波状文を施す。回転を利用したナデ調整を施す。復元口径は 29.2 cmである。19は体部から口頸部に「く」の字形に屈曲し短く外上方にのび、口縁端部は段をなすが先端は丸くなる。口頸部は回転を利用したナデ調整を施す。体部外面は縦方向のタタキ調整をした後、カキ目調整を施す。体部内面には、同心円のアテ具の痕跡が残る。復元口径は 23.0 cmである。

20は須恵器の杯蓋である。比較的平らな天井部から口縁部に屈曲し、口縁端部は丸味をおびる。天井部・口縁部上半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。復元口径は 14.8 cm、器高 3.7 cmである。

21・22は須恵器の杯身である。平坦な底部から屈曲して体部がほぼ直線的に外方に開く。口縁部の立上りは短く内傾し、受部は斜め上方にのび、いずれの端部も丸味をおびる。21は底部はヘラキリのまま無調整・体部は回転ヘラケズリ、22は底部回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は時計回りである。21は復元口径 14.0 cm・器高 3.6 cmである。22は復元口径 14.4 cm・器高 4.3 cmである。

23は須恵器の甗の体部である。体部は球形に近く穿孔の上位に浅い沈線がめぐる。底部・体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整を施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。体部径 9.1 cm、残存高 6.4 cmである。

24は有蓋高杯の杯部である。底部から体部へ明瞭な境をもたず外反気味に内湾する。立上りは短く内傾し、受部は水平で、いずれの端部も丸味をおびる。底部・体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転を利用したナデ調整、内底面は仕上げナデを施す。ロクロの回転方向は、時計回りである。口径は13.0 cm、残存高4.1 cmである。

25は土師器の甑の口縁部である。口縁部はまっすぐ外上方にのび、口縁端部は内面に段をもつ。内外面とも斜め方向のハケ目調整を施す。復元口径は20.5 cmである。

平安時代中期から後期の土器類 (図49・51)

黒褐色粘質土出土土器 (26～45) 26～45は調査区西半分で約20 cmの厚さで堆積していた黒褐色粘質土混粗砂の整地層を掘り下げた際に出土した。

26・27はいわゆる「て」の字形口縁を持つ土師器皿で、直径約10 cmの小型の部類に入る¹⁾。器高は1.2 cmと1.4 cmである。磨滅が著しいが、所々にナデ調整の痕跡が認められる。28は口縁端部を外反させた、器高の高い土師器皿である。胴部下半には指頭圧痕が明瞭に認められる。復元口径14.0 cm、残存高2.8 cmである。29は口縁部外面を強くなでて、口縁端部を外反させる。復元口径14.6 cm、残存高2.3 cmである。30は口縁部を2段になでるが、全体的に丸みを帯び、器厚が薄い。復元口径13.0 cmで、残存高は2.9 cmである。

31・32は白色土器の椀また皿の高台部分である。ロクロによる回転ナデが施され、その後高台

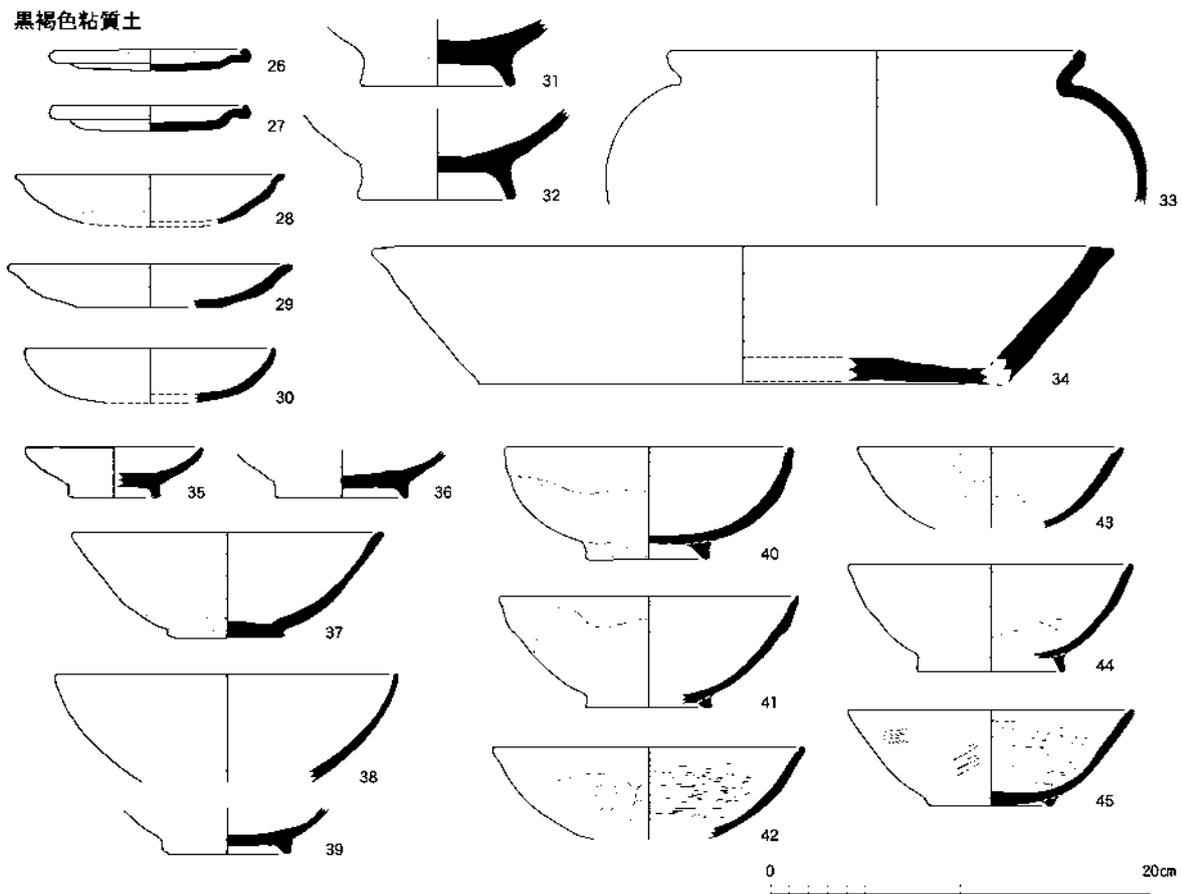


図49 1区出土土器実測図3 [平安時代中期から後期] (1:4)

を貼り付けしている。前者は底径 7.8 cm、残存高 3.6 cm、後者は底径 7.6 cm、残存高 4.8 cmである。

33 は土師器甕である。内外面をナデ調整し、内面の口縁端部に段を有する。外面の口縁から胴部にかけて煤痕跡が残る。復元口径 21.2 cm、胴部最大径約 28.4 cm、残存高 8.2 cmである。

34 は土師質土器盤である。復元口径 36.6 cm、底径 27.6 cm、残存高 7.3 cmで、灰白色の胎土である。口縁から胴部下半の厚みはほぼ均一であるが、底部の厚みは中心部分が分厚い。口縁端部は平に面取りされ、内外面に回転ナデが施されている。接地面には 4 cm程の出っ張りが 1箇所認められ、製作時について工具痕と考えられる。

35 は須恵器皿である。回転糸切り痕が底部に残る。高台は貼り付けである。重ね焼きをしていた痕跡が残っており、接地面の一部が剥がれたり、付着している釉には別の器の胎土が付いている。内面は自然釉が全面に付着し、所々に付着物が認められる。口径 9.2 cm、底径 4.2 cm、器高 2.7 cmである。36 は須恵器底部片であるが、椀または鉢のものと考えられる。糸切りをした後、高台を貼り付ける。内面にわずかに自然釉が発生している。底径 6.0 cm、残存高 2.5 cmである。37 は須恵器椀である。口縁部付近で器厚が厚くなり、外反する。底部は回転糸切り痕が残り、回転方向は反時計回りである。胎土に径 1～2 mmの石英やチャートを含む。口径 16.2 cm、底径 5.2 cm、器高 5.6 cmである。東播系の可能性がある。

38・39 は中国白磁の椀口縁部と底部である。38 はわずかに内湾しながら立ち上がる。釉薬が貫入し、高台附近が露胎している。復元口径 17.8 cm、残存高 5.3 cmである。39 は器形が立ち上がる所で、内面に沈線を有する。ケズリ出し高台で、釉薬が流れた後ケズリ落として平滑にしていることが窺える。釉薬は接地面ぎりぎり高台内の一部にまで付く。高台内には輪トチンの痕跡が残る。底径 6.6 cm、残存高 2.5 cm。

40・41 は黒色土器の内面だけが黒色を呈する A類と呼ばれる椀である。40 は器厚が分厚い。口縁内面を強くユビナデした上に沈線を施す。口縁外面は指頭圧痕が残り、口縁端部は内面に丸く面取りする。内外面の調整は磨耗が著しいため不明であるが、内面にミガキと考えられる痕跡が認められる。高台は貼り付けである。復元口径 14.8 cm、底径 6.2 cm、器高 5.9 cmである。41 は外面の指頭圧痕が 40ほど明瞭ではなく、また 40の胴下半部の丸みを帯びた器形と比べると底部からの立ち上がり直線的である。よって、40よりも新しい時期に位置すると考えられる。内外面のミガキ調整は不明瞭である。復元口径 15.6 cm、底径 6.6 cm、器高 5.9 cmである。

42 は復元口径 16.4 cmの瓦器椀である。粘土板結合法と呼ばれる粘土紐を巻き上げて作られており、体部にその痕跡が残る。内外面を細かくミガキ調整する。口縁外面を強く磨き、口縁内面に沈線を引く。残存高は 4.9 cmである。

43 は黒色土器 B類椀である。外面に指頭圧痕が残る。口縁端部内面には段を有する。内外面を細かく磨くが、外面はほとんど調整が見えない。復元口径 13.8 cm、残存高 4.3 cmである。44 は黒色土器 B類椀と考えられる。外面のミガキ調整は不明瞭であるが、内面には細かいミガキ調整が施されている。口縁端部内面に浅い沈線を有する。貼り付け高台で、復元口径 14.6 cm、底径 7.4 cm、器高 5.7 cmである。45 は内外面を丁寧に磨く黒色土器 B類椀である。貼り付け高台の高さは低く、

口縁端部内面の沈線は浅く細い。復元口径 14.8 cm、底径 6.6 cm、器高 5.6 cmである。

土壙 854 出土土器 (131) 131 は口縁部をなでて外反させる土師器皿である。器高が低く、全体が歪んでいる。口径 8.8 cm、器高 1.6 cmである。

土壙 600 出土土器 (142～148) 142～148 は土師器皿である。144～147 の2段ナデの部分は陵を為す程窪む。142 は白色土器で、ロクロナデによって外反しながらわずかに立ち上がる器形を呈する。口縁端部は丸い。底部は回転糸切りである。口径 10.6 cm、底径 4.4 cm、器高 2.2 cmである。143 は頸部を強くなでて外反させ、口縁端部を垂直に立ち上げる。端部は丸い。底部外面中央が窪む。口径 10.6 cm、器高 1.5 cmである。144 は2段ナデを行い、口縁部を立ち上げる。145 は口縁を2段になでて、外反させる。146 は145 と同形であるが、口縁部で内湾する。147 は146 の大型品である。144～147 の口径は 10.0～12.0 cm、器高は 1.8～2.1 cmである。148 は2段になでるが、下段のナデがほとんど窪まない。口径 15.0 cm、器高 3.2 cmである。

時期は 11 世紀末である。

土壙 300 出土土器 (135・136・159) 135 は口縁部を強くなでて外反させる小型の暗褐色を呈する土師器皿、136 は2段になでる小型の土師器皿である。口径は 10.0 cm、底径は 7.0 cm、器高は 1.4 cmである。

159 は瓦質土器蓋である。外面は削った後ミガキ調整を行い、内面口縁端部にも一部でミガキが確認できる。口縁内面は工具による斜め方向のナデ、見込み部分は一方向ナデ、見込み中央にC字の暗文が重ねて描かれている。復元口径 17.6 cm、器高 2.3 cmである。経筒の蓋の可能性はある。

時期は 12 世紀中葉である。

土壙 619 出土土器 (151) 151 は白色土器である。4～5 cm程度の脚が付く皿か椀になると考えられる。内面を平らになで、脚部外面は本体との接合部から右下に向かってナデ調整する。脚部内面は横ナデである。本体底部の磨滅が著しいため、糸切りを行っているかは不明である。土壙 619 に混入していた。残存高 4.5 cm。11 世紀後半～12 世紀初頭に比定できる。

平安時代末期から鎌倉時代の土器類 (図 50・51)

溝 668 出土土器 (46～90) 46～74 は土師器皿である。46・47 は鉤針状に内湾する口縁をもつ。口縁部外面を丁寧になでているため、わずかに窪む。口径 8.2 cm、器高 1.2 cm と 1.5 cm である。48～65 は口縁外面を2段になでるもので、小型で口径 8.8～10.2 cmに納まる。器高は 1.4～1.9 cmである。体部のナデによる段は明瞭なものと、不明瞭なものがあるが、口縁部との境目は明瞭なものが大半である。器厚は分厚いが、口縁端部断面は三角形を呈する。66～74 は口縁外面を2段になでる大型のもので、口径 13.6～14.8 cm内に納まる。口縁端部断面は三角形である。小型のものも同様に、段が明瞭・不明瞭なものがある。器高は 2.4～3.3 cmである。

75 は白色土器の高杯脚部である。下部では、15 面のケズリ調整を行う。残存高 13.0 cm。

76 は土師器羽釜である。復元口径 21.8 cmで、調整は内面上部と外面をなで、内面下部はハケ状工具で行う。外面は赤橙色を呈していることから、常に火に掛けられていたと推測できる。残存高は 8.0 cmである。

溝668

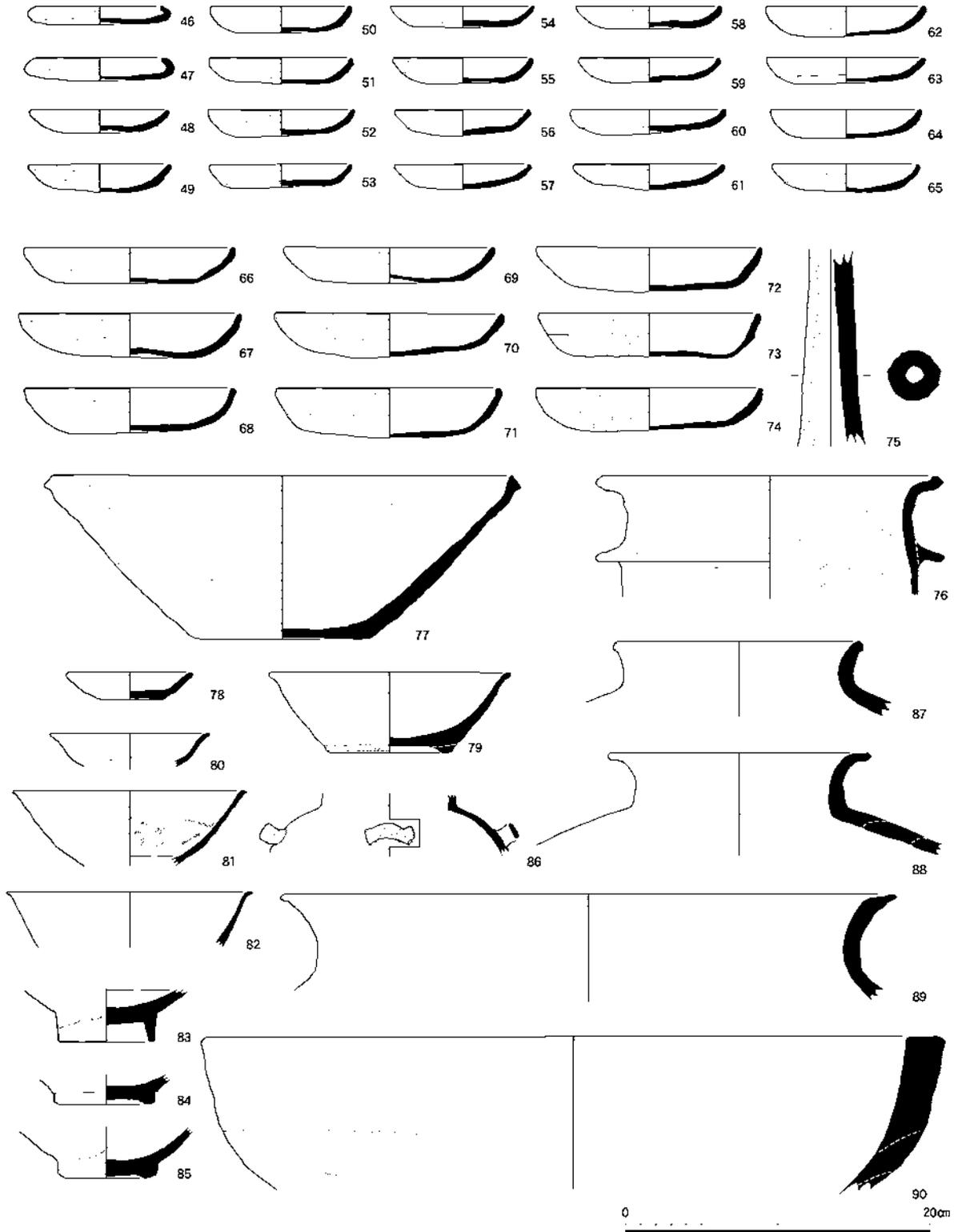
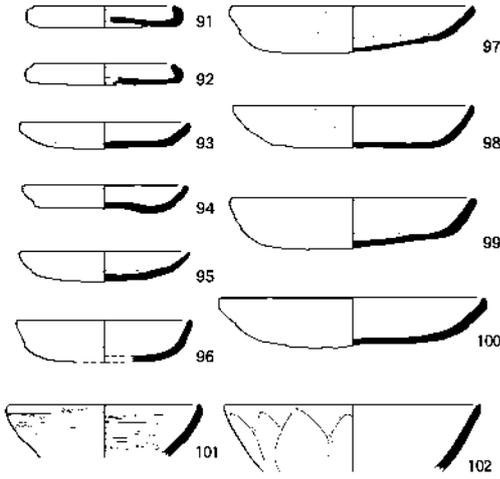


図 50 1区出土土器実測図4 [平安時代末期から鎌倉時代] (1:4)

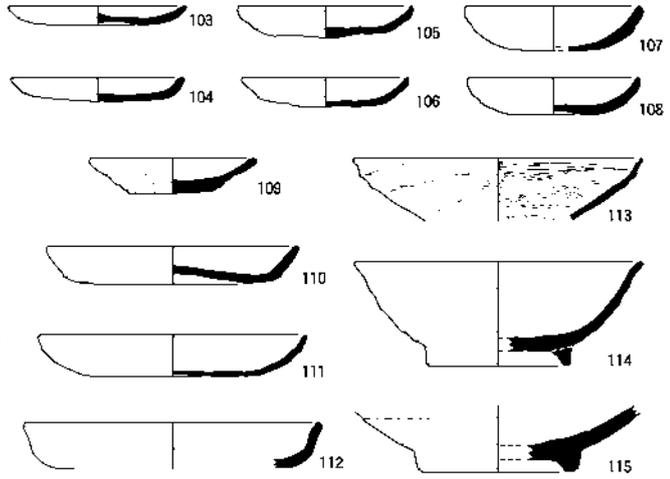
77は東播系の須恵器捏鉢である。内外面をナデ調整する。内面底部近くと接地面は使用のため磨滅が著しく、平滑になっているが、内面底部は何らかの道具で食品を加工したと見られる敲打痕が認められる。復元口径 30.0 cm、底径 11.4 cm、器高 10.85 cmである。

78は須恵器皿である。時計回りの回転ナデ調整を施し、底部は回転糸切りである。口縁端部に

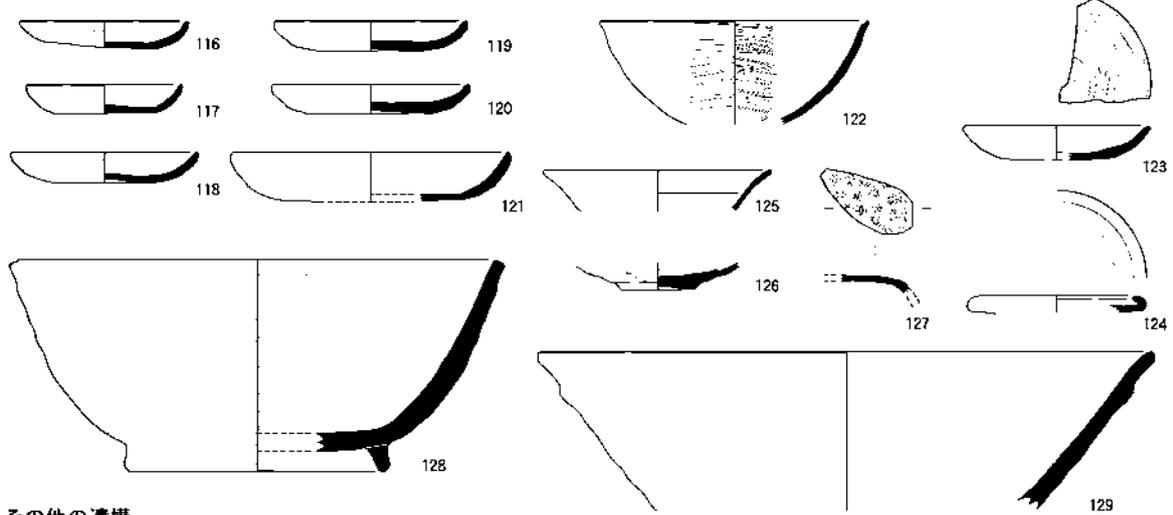
土壙274



井戸583



井戸614



その他の遺構

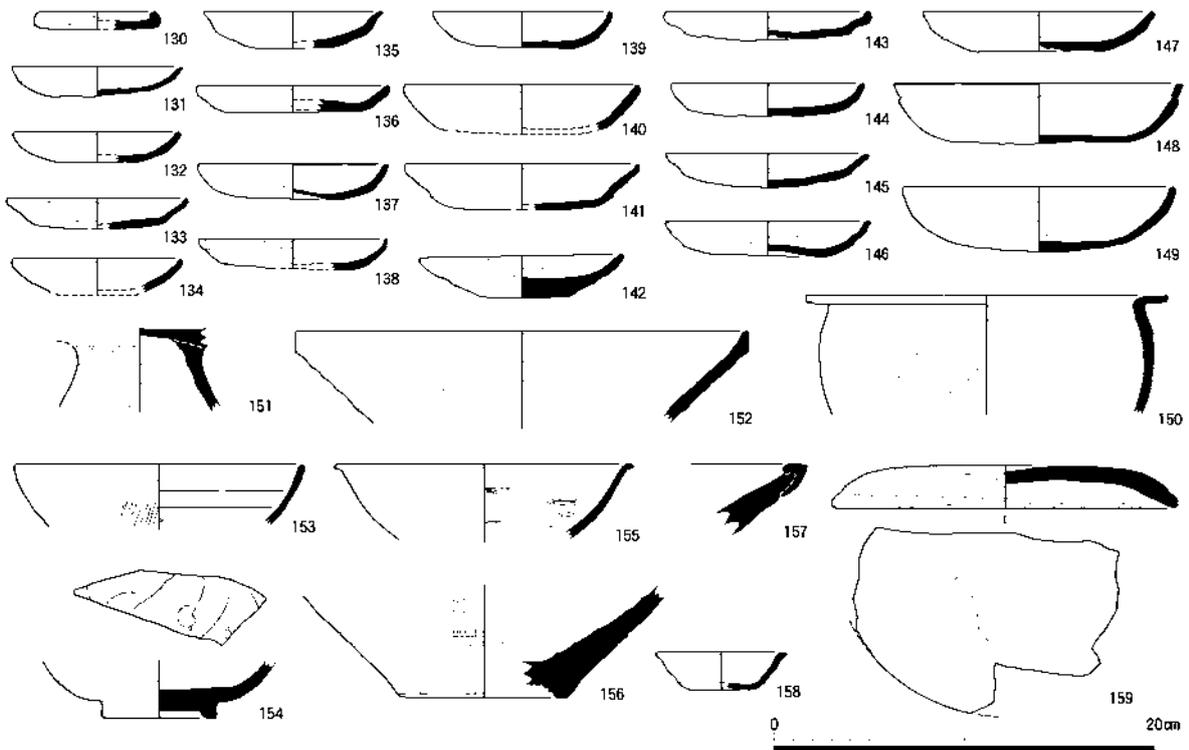


図 51 1区出土土器実測図5 [平安時代中期から鎌倉時代] (1:4)

は自然釉が発生している。口径 8.0 cm、底径 4.2 cm、器高 1.8 cm である。

79 は渥美・湖西型の山茶碗である。内外面を回転ナデにより成形する。口縁端部をわずかに外反させている。高台接地面には、整形・乾燥の際に、癒着を防止するために敷いたと考えられる粉殻痕が認められる。口径 15.4 cm、底径 7.4 cm、器高 5.3 cm である。

80～82・84・85 は青磁であり、釉調から同安窯系の製品と考えられる。80 は外面にナデによる陵があり、そこから口縁が大きく外反する皿である。内面底部に沈線が認められる。内面の一部に鉄釉と考えられる 2～3 mm 程の点が、釉下に付着している。復元口径は 10.4 cm、残存高は 2.2 cm である。81 は内面に櫛状工具を使用した文様が描かれている。口縁端部直下に幅約 3.5 mm の沈線が入っているが、口縁端部を外側に摘み出す際に付いたものと考えられる。内湾しながら大きく開く形の碗と考えられる。復元口径 14.8 cm、残存高 5.0 cm である。82 は 81 と同器形の碗になると考えられるが、81 の口縁端部が釉の付着により丸みを帯びているのに対し、82 は生地自体が丸みを帯び、また摘み出された部分の長さが長くなっている。内面の一部に傷跡が認められる。復元口径 15.6 cm、残存高 3.7 cm。84・85 は碗の底部である。いずれも削り出し高台で、接地面を外方から斜めに削っている。内面には両者共に沈線が引かれているが、高台と身の境目にある段は 84 にしか認められない。85 は胎土がにぶい橙色、釉は灰黄色を呈することから、2 次焼成を受けている可能性がある。84 の底径 5.8 cm、残存高 2.0 cm、85 の底径 5.2 cm、残存高 3.4 cm とする。

83 は白磁碗の底部と考えられる。削り出し高台で、身との境目に沈線を引く。内面には細い沈線が施文されているが、途切れている。底径 6.2 cm、残存高 3.5 cm。86 は白磁の四耳壺肩部片である。窄まった肩部に内傾しながら立ち上がる頸部が付く。肩上部には確認できる限り 2 本の沈線が引かれ、その上に 4 本の沈線を引いた把手が横方向に貼り付けられている。残存高 4.2 cm である。

87 は古瀬戸の広口壺口縁部である。肩部からわずかに外反しながら立ち上がり、外面に丸く納まりながら段を持つ。鉄釉が全面に掛かる。復元口径 15.6 cm、残存高 6.8 cm である。

88 は常滑の広口壺である。肩部から立ち上がった口縁部は、端部で大きく外反して、わずかに立ち上がる。内面に浅い幅広の沈線が認められる。頸部と胴部内面には鉄釉、肩部以下はオリブ灰色の釉葉が掛かる。復元口径 26.8 cm、残存高 6.8 cm である。89 は常滑の甕口縁部である。口縁は大きく外反する。口縁端部はナデにより内外面が窪む。内外面に自然釉が発生している。復元口径は 40.0 cm、残存高は 6.3 cm である。

90 は瓦質の盤と考えられ、復元口径 48.0 cm、残存高 10.4 cm を測る。内外面を板状工具によって調整している。内面と口縁端部、外面上半部は丁寧になでているが、外面下半部は粘土紐輪積痕跡を明瞭に残す。また、使用痕と見られる点状の剥離痕が残る。器厚は下半分で急に薄くなる。

溝 668 出土の土器は 12 世紀後半を中心とする。

土壙 274 出土土器 (91～102) 91～100 は土師器皿である。91・92 は口縁部を内側に折り込む器形のものである。口縁端部外面はナデによる窪みを生じる。口径 7.2 cm と 7.4 cm、器高は 1.1 cm である。93～95 は口縁部外面を 1 ないしは 2 段になでる皿で、器厚は薄い。器高が低く、口

縁部が波打っている。口径は 8.4～8.8 cm、器高は 1.4～1.6 cm に納まる。96 は口縁外面を 1 段になでる深い皿である。白色を呈する。口径 9.0 cm、器高 2.2 cm である。97～100 は 2 段ナデを施す大型の皿である。口径 12.4～14.0 cm、器高 2.3～3.3 cm である。98 の口縁端部は丸く、他のものに比べると断面が三角形状になっていない。

101 は瓦器の小型椀で、内外面に密なミガキを施す。外面に部分的に指頭圧痕が認められる。復元口径 10.0 cm、残存高 2.8 cm である。

102 は龍泉窯の青磁椀で、外面に鎬蓮弁を陽刻する。復元口径 13.4 cm、残存高 3.6 cm である。

土壙 274 の時期は、土師皿のナデ境の陵が消えかけ、器形も歪むものが多いことから、12 世紀末に比定できよう。ただし、2 段ナデの中にはナデ境が窪むものもある。

井戸 583 出土土器（103～115） 103～112 は土師器皿である。103～106 は口径 8.6～9.0 cm、器高 1.1～1.7 cm になる。103・104 は 1 段ナデ調整である。特に器高が低く、扁平である。105・106 は 2 段ナデを行うものである。ナデにより口縁下部が窪む。107・108 は 2 段ナデで、陵が明瞭である。口径 8.8 cm、器高は 2.0～2.4 cm となり高い。109 はロクロナデによって製作された白色土器で、接地面に回転糸切り痕跡が残る。口縁端部が分厚く、丸く面取りされている。口径 8.4 cm、底径 4.0 cm、器高 1.9 cm である。110～112 は大型土師器皿である。口径 13.0～15.2 cm、器高 2.0～2.5 cm である。110 は底部から斜めに立ち上がる器形を呈する。乙訓型と呼ばれるものである。111 は 2 段ナデで、口縁部を短くなでる。ナデの窪みが明瞭である。112 は灯明皿として使用されていた。ナデにより外反する。

113 は内面を丁寧に磨く瓦器椀である。外面はなでた後、右上がりの暗文を所々に描く。大和型である。復元口径 16.0 cm、残存高 3.3 cm である。

114 は渥美・湖西型の山茶椀である。胴部は張りつつ、口縁部で大きく外反する。底部は回転糸切り痕が残る、高台は貼り付けられている。内外面の一部に自然釉が発生している。復元口径 15.0 cm、底径 7.2 cm、器高 5.5 cm となる。

115 は白磁の椀底部である。見込みに沈線を有する。削り出し高台である。体部の大半が露胎している。復元底径 7.8 cm、残存高 7.0 cm である。

時期は 12 世紀中葉～後葉と考えられる。

井戸 614 出土土器（116～129） 116～120 は小型の土師器皿で、口径 8.2～10.2 cm、器高 1.4～1.6 cm である。121 は大型の土師器皿である。復元口径 14.4 cm、器高 2.7 cm である。いずれも口縁部外面を 2 段になでる。116 は器高が低く、119・120 は器厚が分厚い。

122 は大和型の瓦器椀である。内面と口縁部外面を密にミガキ調整し、体部外面には間隔を空けた右上がりのミガキを行う。底に暗文を描く。復元口径 14.0 cm、残存高 5.5 cm である。123 は瓦器皿で、内面に同心円のミガキを施す。器形は緩やかに立ち上がる。底部外面の調整は磨滅のため不明である。復元口径 9.6 cm、器高 1.8 cm である。124 は瓦器皿で、口縁部を内側に折り込むいわゆるコースター形のもので、丸くなでられている。内面に一部ジグザグの暗文が認められる。復元口径 8.2 cm、器高 1.0 cm である。

125 は白磁の椀である。口縁部が外反する。内面に横方向の沈線と、ハケ目状工具による文様が描かれている。口縁部内面には重ね焼の際に付いたと考えられる釉薬と胎土が残っている。また、剥がす際に釉薬と生地が剥がれた痕跡が認められる。復元口径 11.8 cm、残存高 2.2 cm である。126 は白磁の皿底部である。見込みに圈線を引く。高台は中央を挿鉢状に窪ませた削り出しである。底径 3.8 cm、残存高 1.5 cm である。

127 は青白磁の合子蓋破片である。外面に 12 弁の菊花文を散し、周囲を弧線の連続で囲み、側面を波状に加工する。内面が一部露胎している。

128・129 は須恵器鉢である。内面下半はミガキがかけられたように滑らかになっている。128 は口縁端部を平らに面取りし、高台を貼り付ける。内外面をナデ調整し、外面体部下半を時計回りに削る。高台接地面に靱殻痕が残る。復元口径 25.0 cm、底径 13.4 cm、器高 11.2 cm となる。129 は底部から真っ直ぐに外反し、口縁部でユビナデを施すため、外面が窪む。口縁端部は丸く面取りしながら立ち上げる。外面体部下半をケズリ調整する。復元口径 32.0 cm、残存高 8.4 cm である。

12 世紀後半と考えられる。

井戸 588 出土土器 (138・139・149) 138・139 は口縁を 2 段になでる土師器皿である。口径 8.2～9.8 cm、器高 1.7～1.9 cm である。138 はナデにより窪みができている。器高が低く、扁平な器形をなす。139 は口縁端部を立ち上げる。149 は口縁を 2 段になでる大型の土師器皿で、口径 14.0 cm、器高 3.5 cm である。

時期は 12 世紀後半である。

土壙 143 出土土器 (130・133・150・154) 130 は口縁部を内面に折り曲げ、端部を山形に面取りしている瓦器皿である。内外面をなでる。復元口径 6.0 cm、器高 0.9 cm である。

133 は 2 段になでられた土師器皿である。ナデによる陵が明瞭でなくなり、器形も外側に倒れている。復元口径 9.4 cm、器高 1.6 cm である。

150 は土師器甕である。外面体部に指頭圧痕の痕跡が残る。口縁部は外側に折り曲げた際に、時計回りの方向に引っ張りながら製作したと考えられ、斜め方向の皺が確認できる。その後、頸部をユビナデする。体部外面に煤が付着している。復元口径 18.8 cm、残存高 6.3 cm である。

154 は龍泉窯の青磁椀底部である。内面中央に飛鳥文と考えられる陽刻が施文されている。削り出し高台内まで釉が流れており、剥がした痕跡が認められる。底径 5.4 cm、残存高 3.1 cm である。

時期は 12 世紀後葉である。

土壙 49 出土土器 (140・152・153・156) 140 は口縁端部が断面三角形になる土師器皿である。復元口径 12.2 cm、残存高 2.4 cm である。

152 は東播系須恵器鉢である。ロクロナデが明瞭に残る。口縁部外面を垂直にナデ調整する。復元口径 23.6 cm、残存高 4.9 cm である。

153 は同安窯の青磁椀である。内面に沈線を 2 本引き、その下にハケ目状工具で文様を描く。外面は体部下半に櫛状工具により縦方向の施文を行う。口縁部外面はナデによりわずかに窪む。

復元口径 15.0 cm、残存高 3.3 cmである。

156 は白磁壺底部片である。接地面から約 4 cm上の外面に、沈線を平行に 2 本引き、直交するように 4 本の沈線を引く。内面は横ナデ痕が明瞭に残る。高台は削り出しで、内面の高台付け根に沈線が入る。高台内面にも釉薬が付着している。復元底径 8.6 cm、残存高 6.0 cmである。

時期は 12 世紀後葉である。

土壙 630 出土土器 (132・134・155・157) 132・134 は緩やかに湾曲しながら外反する土師器皿である。134 は口縁端部を摘み上げて、断面を三角形に近い形状に成形している。132 は復元口径 8.6 cm、器高 1.7 cm、134 は復元口径 8.8 cm、残存高 1.8 cmである。

155 は同安窯の青磁椀である。口縁端部を外面に平行に引き出す。内面上部に沈線を引き、沈線より下にハケ目状工具により文様を施す。復元口径 15.0 cm、残存高 4.0 cmである。

157 は土師質土器鉢である。口縁端部を粘土で覆い、平らに面取りする。外面の粘土接合痕跡は沈線状に残る。内外面を横ナデする。残存高 4.0 cmである。

時期は 12 世紀末である。

土壙 553 出土土器 (141) 141 は 2 段ナデを施し、口縁端部を垂直に立ち上げた土師器皿である。復元口径 12.2 cm、器高 2.4 cmである。時期は 12 世紀後半と考えられる。

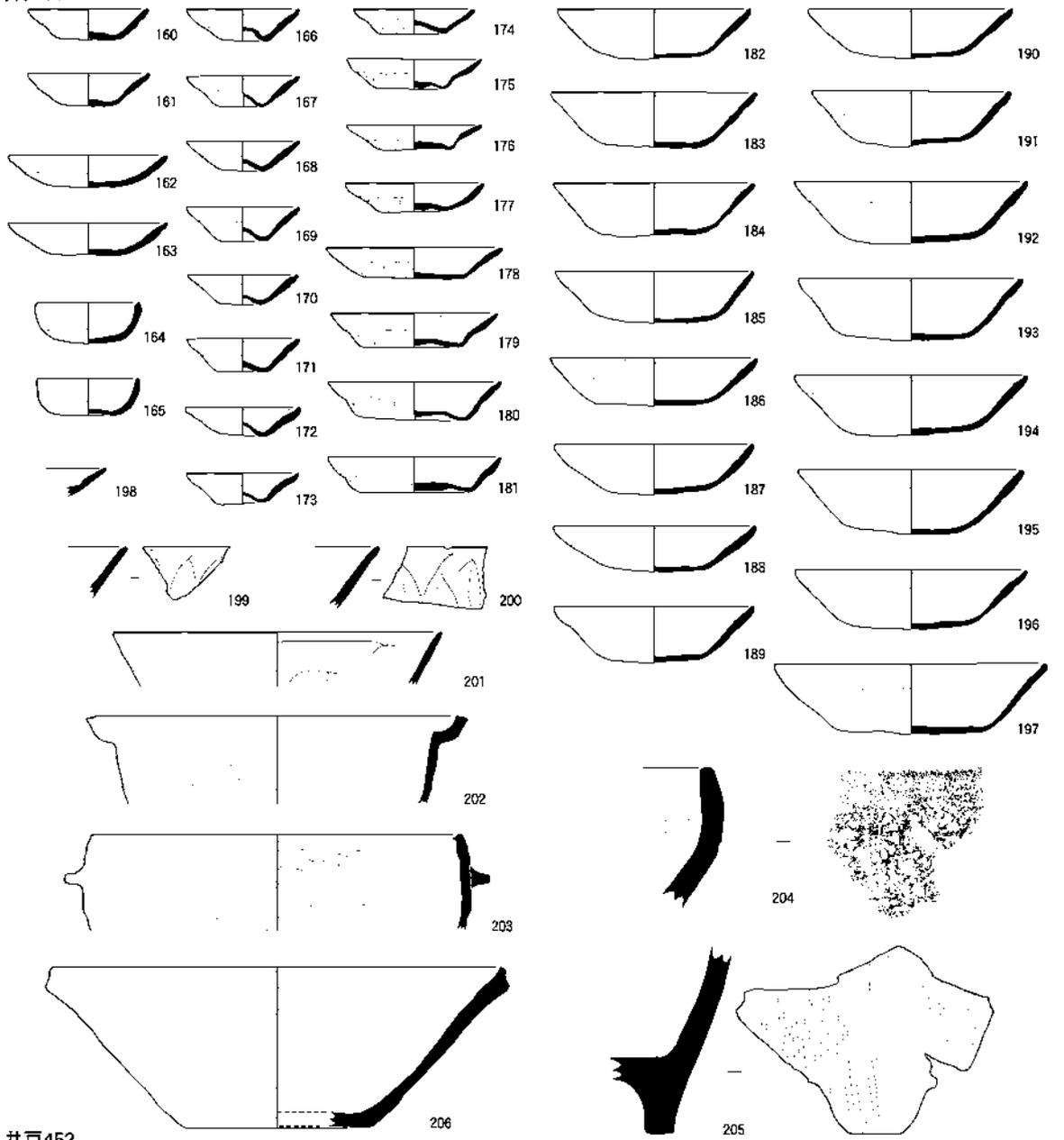
柱穴 605 出土土器 (158) 158 は瓦器の小型椀である。口縁端部を外方に引き出し、端部上面を平らになでる。底部がわずかに窪む。全面ナデ調整である。柱穴 605 に混入していた。復元口径は 6.8 cm、底径 3.0 cm、器高 2.0 cmとなる。時期は 12 世紀後半と考えられる。

土壙 555 出土土器 (137) 137 は口縁部を 1 段になでる土師器皿である。外面から底部中央が窪む。口径 9.8 cm、器高 3.7 cm。12 世紀前半と考えられる。

室町時代の土器類 (図 52～55)

井戸 58 出土土器 (160～205) 160～197 は土師器皿である。160～173・182～197 は灰白色・にぶい黄橙色、174～181 は橙色の色調を呈する。160・161 は外反しながら立ち上がり、口縁端部をわずかに立ち上げる。底部中央がわずかに窪む。内面はナデ、外面は指頭圧痕が残る。口径 6.8～7.0 cmである。162・163 は器高の低い皿である。口縁外面に 1 段ナデを行い、口縁端部をわずかに立ち上げる。口径 9.2 cm、器高 1.8～1.9 cmである。164・165 は底部附近が丸く立ち上がり、体部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形を呈する。江戸時代に「でんぼ」と呼ばれる土師質土器があり、それに非常に似通った手捏ねの土器である。底部以外の内外面にナデ調整を行う。口径 5.8 cm、器高 2.2～2.4 cmである。166～173 は底部中央を外側から窪ませるへそ皿である。口縁端部を上方に立ち上げる。口径は 6.2～6.6 cm、器高は 1.9 cm前後に納まる。174～181 は体部に指頭圧痕を明瞭に残し、それによって口縁部の粘土の厚みが強調されて、外面に段があるように見える土師器皿である。小型のものから大型のものまで揃って出土した。小型 (174) は口径 7.0 cm、器高 1.5 cm、中型 (175～177) は口径 7.6～8.0 cm、器高 1.5～1.8 cm、大型 (178～181) は口径 9.6～10.2 cm、器高 1.7～2.3 cmである。灯火具としての使用を確認できたのは、173 と 180 である。174 は底部を深く窪ませる。182～197 は底部に対して口縁が大きく広がる。

井戸58



井戸452

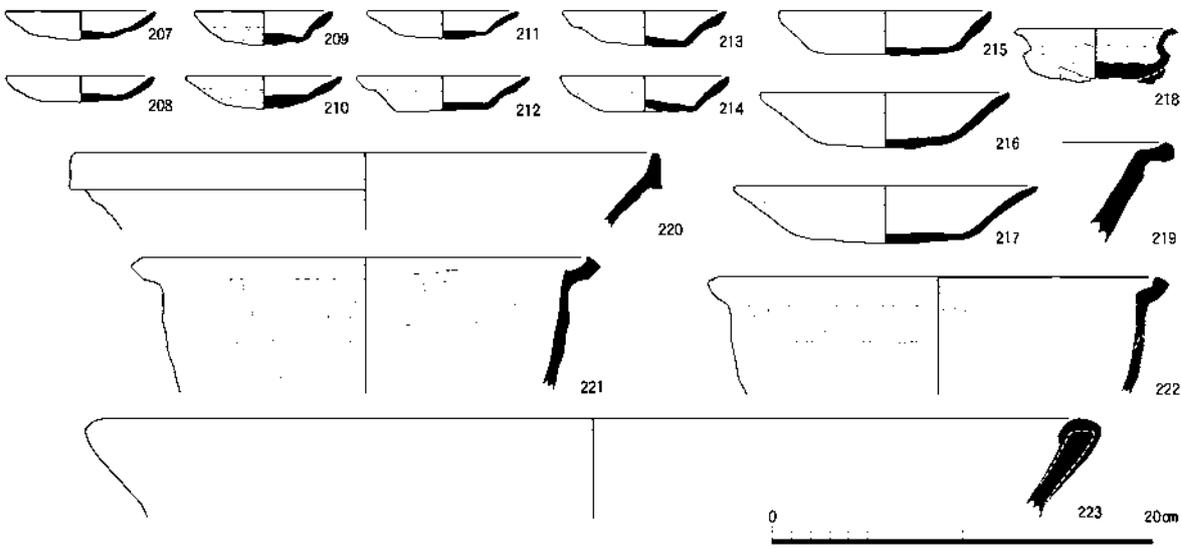


图 52 1区出土土器实测图6 [室町時代] (1:4)

口縁端部は斜め上方に向かって立ち上がる。見込みを一方向ナデを行った後、内面と口縁部外面を横方向になでる。口縁部の厚みは肥厚している。口径 11.2 ～ 15.8 cm、器高 2.7 ～ 4.1 cmの小型から大型品まで揃い、器高の低いものから高いものまでである。

198 は同安窯の青磁皿である。内面に抉ったような段を有する。釉調は灰オリーブ色を呈する。199・200 は龍泉窯の青磁椀である。外面に蓮弁を陽刻する。200 は釉により、口縁端部が肥厚している。201 は同安窯の陽刻した花卉と考えられる文様を描く青磁椀である。復元口径 18.8 cm、残存高 3.2 cmである。

202・203 は瓦質土器鍋・釜である。202 は頸部で外屈し、口縁部が内湾しながら立ち上がる。内外面をなでる。特に口縁部内外を強くなでているので、口縁端部が張り出す。外面に吹きこぼれ痕跡が残る。復元口径 21.0 cm、残存高 5.2 cmである。203 は口縁から体部に向かって球状に湾曲する。貼り付けられた鏝先が下がる。外面はナデ、内面を板状工具でなでた後、一部なでる。体部外面に指頭圧痕が残る。復元口径 21.2 cm、残存高 5.7 cmである。

204・205 は瓦質火鉢である。204 は内湾する口縁で、端部を面取りする。内面はなでており、外面は被熱した際に器面が荒れているため、調整痕が認められない。外面の口縁直下に菊花文印判を横並びで2つ押す。残存高は 7.8 cm。205 は体部から脚部にかけて残存する。外面を縦ミガキ、内面と脚内面をナデ調整する。脚内面には指頭圧痕が残る。内面は磨滅が著しいが、外面は点状の剥離痕が多い。いずれも使用痕と考えられる。残存高は 11.0 cmである。206 は東播系須恵器鉢である。内外面を回転ヨコナデ、底部をヘラキリする。口縁部内面を強くなでるため、端部が内湾している。復元口径 20.6 cm、底径 10.4 cm、器高 9.4 cmである。

時期は 15 世紀前半を中心とする。202 の鍋と 203 の釜は 14 世紀後半、204・205 は 14 世紀中葉、206 の須恵器捏鉢は 12 世紀後半である。

井戸 452 出土土器 (207 ～ 223) 207 ～ 217 は土師器皿である。207・209 ～ 211・215 は橙色、208・212 ～ 214・216・217 は灰白色・明黄褐色を呈する。207・208 は口縁と底部の境目をナデによって窪ませる。器高の低い扁平な皿である。口径 7.7 ～ 7.8 cm、器高 1.4 ～ 1.5 cmである。208 は見込みの周囲を強くなでる。209 ～ 214 は体部に指頭圧痕が明瞭に認められる。口縁部との境目の段が明瞭なものは中型 (口径 8.6 ～ 9.0 cm、器高 1.9 cm) の 212 ～ 214、不明瞭なものは小型 (口径 7.2 ～ 8.0 cm、器高 1.4 ～ 1.8 cm) の 209 ～ 211、大型 (口径 11.0 cm、器高 2.3 cm) の 215 である。216 は大きく開く口縁の端部が立ち上がる。口径 13.0 cm、器高 2.9 cmである。217 は口縁が外反し、器高の低い器形を呈する。口縁端部がわずかに立ち上がる。口径 15.8 cm、器高 3.0 cmである。211 は灯明皿である。

218 は瀬戸の香炉形鉢である。くの字に内屈した後、外反して口縁端部を外方に引き出す。内外面は回転ヨコナデ、底部は回転糸切り痕が残る。底部には3方向に粘土塊の脚が付く。口縁部内面から頸部外面に緑色の釉薬が掛けられている。口径 8.0 cm、底径 4.8 cm、器高 2.9 cmである。219 は口縁部で直角に外屈し、端部を玉縁状に面取りする瀬戸系鉢である。内外面を施釉する。残存高が 5.3 cmである。

220 は東播系須恵器捏鉢の口縁部片である。口縁部外面の陵が強調されて、段を形成する。復元口径 30.6 cm、残存高 4.0 cm である。

221 は瓦質土器鍋である。202 と同器形である。体部外面に頸部から下方に押し引いた指頭圧痕を残し、内面を板状工具によりなでる。復元口径 23.4 cm、残存高 7.2 cm である。222 は 221 より体部が膨らむ。頸部外面に指頭圧痕が残り、内面は板状工具によりなでる。復元口径は 23.0 cm、残存高は 6.2 cm である。223 は瓦質の盤である。口縁が外反する。口縁端部を内面に折り込んで、内面を有段にする。内外面をなでる。復元口径 51.0 cm、残存高 5.3 cm である。

時期は 15 世紀後半である。220・221 は 14 世紀前半から後半である。

井戸 75 出土土器 (224 ~ 262) 224 は土師質の製塩形土器と考えられる。内傾接合された輪積粘土痕跡が明瞭に残る。残存高は 4.0 cm である。225 ~ 244 は土師器皿である。225 ~ 234 は灰白色・にぶい黄橙色、235・236・240 は橙色を呈する。225 ~ 228 は底部が窪むへそ皿で、口

井戸75

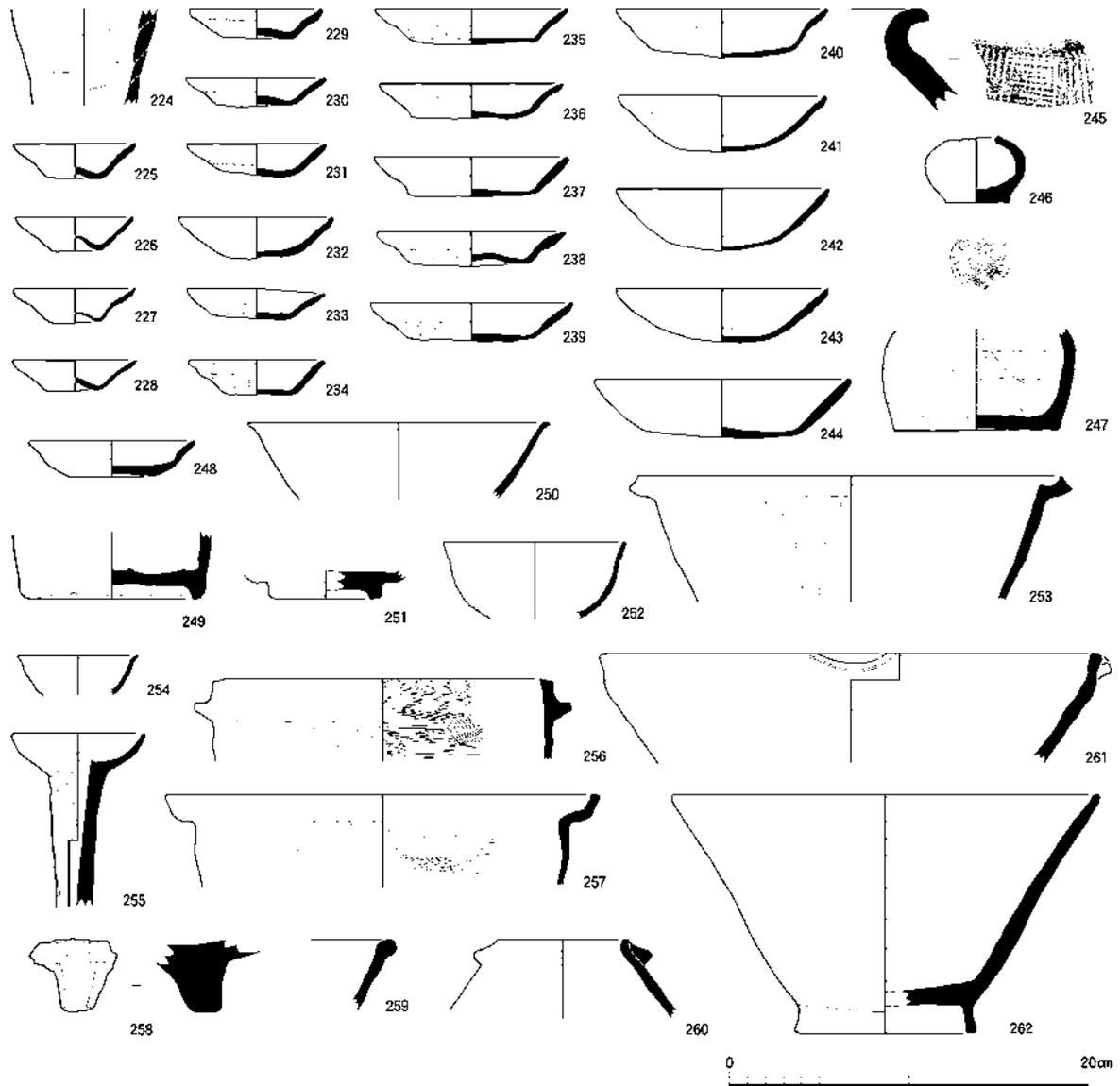


図 53 1区出土土器実測図7 [室町時代] (1:4)

縁端部が立ち上がる。229～234は体部に指頭圧痕と段を明瞭に残すものと、指頭圧痕は残すものの段をほとんど残さないものがある。口径6.4～8.4cm、器高1.6～2.3cm内に納まる。235～239は229の器形の中型(口径10.0～11.2cm、器高1.9～2.2cm)、240は大型(口径11.6cm、器高2.7cm)である。241～244は底部が丸みを帯び、緩やかに外反する器高の高い土師皿である。口縁端部はほとんど立ち上がらない。口径11.4～14.0cm、器高3.0～3.3cmである。

245は須恵器甕の口縁部片である。頸部を強くなでて、口縁端部を外反させる。体部を平行叩き目の入った板で縦横に叩き締めている。

246は瀬戸の小型無頸壺である。口縁端部を丸く調整する。底部は回転糸切りで、台の痕跡と見られる2本の平行沈線が付いている。緑釉を口縁内面から外面に掛ける。口径3.0cm、底径3.5cm、器高3.8cmである。

247は常滑の壺下半分である。外面は丁寧になでるが、内面には粘土紐接合痕と指頭圧痕が明瞭に残る。体部上部に自然釉が発生している。底径9.0cmで、残存高は6.3cmである。

248・249は龍泉窯の青磁皿と壺底部である。248は頸部で逆「く」の字に外反する。体部と底部を回転ケズリ調整する。内面に沈線状の段を施す。249は体部がほぼ垂直に立ち上がる。高台の接地面以外に釉が厚くかかり、外面下部に釉溜りができている。248は口径9.0cm、底径4.8cm、器高2.0cm、249は底径9.0cm、残存高3.8cmである。

250は白磁の椀である。口縁部をほぼ水平に外側に引き出す。復元口径は16.0cm、残存高4.4cmである。251は龍泉窯の青磁小椀である。底部から屈曲して開きながら立ち上がる器形を呈すると考えられる。内面と高台接地面が著しく磨滅している。底径4.8cm、残存高1.6cmである。252は白磁椀である。体部下半が丸い器形を呈する。体部外面に回転ヘラケズリによる凹線が幾筋も入り、口縁部に段を作る。口縁外面の段は、内面を盛り上げる。口縁端部を釉剥ぎする。復元口径10.0cm、残存高4.3cmである。

253は瓦質土器鍋である。外傾する体部が頸部で外屈し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面に指頭圧痕が残る。復元口径は23.6cm、残存高7.0cm。254は小型瓦器椀である。口縁端部をわずかに外反させる。復元口径6.6cm、残存高2.2cmである。255は瓦質土器の灯火具上半部と考えられる。丁寧なミガキを行う脚部に、湾曲しながら広がり立ち上がる体部を持つ。内外面をなでて、口縁端部は丸く面取りする。脚部中心は竹輪のように孔が貫通し、体部との境目で外方に粘土が盛り上がる。類似品は、古瀬戸の燭台に見られる。口径7.2cm、残存高9.8cm。256は瓦質土器釜である。上向きの鏝が口縁下に貼り付けられている。口縁端部は強くなでたため、窪んでいる。外面はナデと指頭圧痕、内面は横方向の板状工具によるナデである。復元口径17.4cm、残存高4.7cmである。257は253より古い時期の瓦質土器鍋である。胴部が球状に張り、口縁部が逆「L」字上に立ち上がる。外面をなでて、内面を板状工具でなでる。復元口径24.0cm、残存高5.2cmである。

258は土師質土器の火鉢の脚部である。磨きながら、面取りしている。内面を磨く。

259は口縁端部を玉縁状に作る輸入陶器片である。内外面に緑釉が掛けられており、中国南部

の華南三彩陶器鉢と考えられる。残存高 4.0 cm である。260 は輸入陶器の壺口縁である。内屈する体部が口縁部で立ち上がる。口縁外面には粘土を突帯のように貼り付ける。口縁端部から外面に自然釉が発生している。復元口径 6.8 cm、残存高 4.5 cm である。261 は須恵器片口鉢である。外反する体部が口縁部附近で内面を強くなでられることによって立ち上がる。1 箇所口縁部を外側に引き出して口部を作る。復元口径 27.0 cm、残存高 6.2 cm になる。

262 は底部から真っ直ぐに外反する灰釉陶器鉢である。内面と外面上半部は回転ナデ、外面下半部と底部は時計回りの回転ヘラケズリが行われている。高台は張付けである。底部には自然釉が発生している。内面底は磨かれたように平滑になっており、使用痕と見られる。復元口径 23.2 cm、底径 9.2 cm、器高 13.4 cm となる。

時期は 14 世紀後半が主体であるが、15 世紀中葉まで井戸の口が開いていた可能性がある。254 は 12 世紀末～13 世紀初頭、257 は 14 世紀前半、261 は 12 世紀後半、262 は 12 世紀前半の混入品である。

井戸 119 出土土器 (263～273) 263～266 は土師器皿である。263 は底部が窪むへそ皿である。口縁端部がわずかに立ち上がる。口径 6.2 cm、器高 1.7 cm である。264 は器形からへそ皿になると考えられる。復元口径 7.2 cm、残存高 1.7 cm。265 は扁平な皿形を呈する。口縁端部を平らに面取りする。266 は口縁端部を立ち上げる。復元口径 8.2 cm、器高 1.6 cm である。

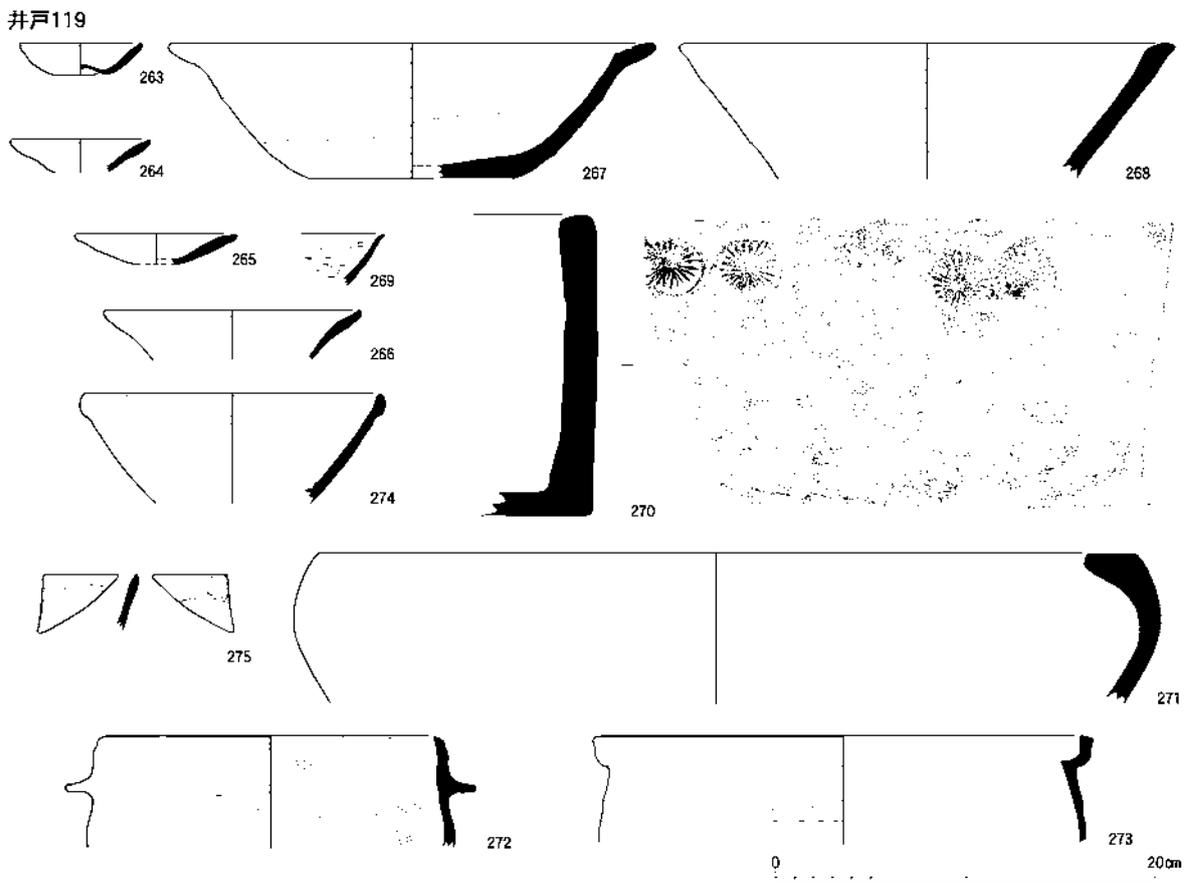


図 54 1 区出土土器実測図 8 [室町時代] (1 : 4)

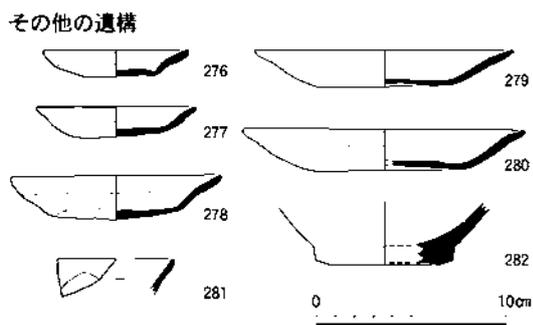


図 55 1区出土土器実測図9 [室町時代] (1:4)

267は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部で外屈し、内面に突起のような陵を持つ。口縁端部を折り曲げた際に接合部をナデ消さず、沈線のように残す。内外面をなでて、外面下半分と底部に回転ヘラケズリを行う。端部を丸く面取りする。内面上半部から外面上半部に黄褐色の釉を掛ける。復元口径は25.0 cm、底径10.8 cm、器高7.2 cmを測る。

268は焼締陶器播鉢である。内外面をなでる。産地は信楽と考えられる。

269は大和型瓦器椀である。内面を磨くが、外面はナデである。復元口径25.0 cm、残存高7.2 cmである。

270は奈良火鉢である。底部から直角に立ち上がる。全面をナデ調整した後、所々ミガキを行う。口縁部外面に2個単位の菊花文印を押す。器高16.0 cmになる。271は奈良火鉢口縁部である。体部は張り出しており、内湾した口縁部外面を平らに面取りする。内面外面ともに点状の剥離痕が認められる。復元口径41.6 cm、残存高8.0 cmである。

272・273は瓦質土器釜と鍋である。272は口縁部が内湾し、端部を斜め外側に面取りする。内面は左上がりの板状工具ナデで、鏝の裏側に当たる部分を横方向になでる。外面はナデである。口縁部外面に沈線が入る。復元口径17.6 cm、残存高5.9 cmである。273は内湾した体部に、逆「L」字状の口縁が付く。内外面をなでる。復元口径25.0 cm、残存高5.7 cmである。

274は口縁部外面が下膨れ状に張りだし、段を有する白磁椀である。段直下には沈線が入る。内面底部附近に沈線を有する。復元口径が15.4 cm、残存高が5.8 cmになる。

275は同安窯の青磁椀口縁部片である。内面に2本の陰刻、外面に弧状の陽刻を施す。

時期は14世紀後半である。269は13世紀中葉、273は14世紀前半の混入品である。

その他の遺構出土土器(276～282) 276は体部を強くなでて、口縁部との境目に段を作る土師器皿である。口縁端部をわずかに立ち上げる。橙色を呈する。口径7.6 cm、器高1.4 cmである。時期は15世紀中葉と考えられる。

277は口縁部外面をなでて外反させる土師器皿である。色調は橙色である。口径8.2 cm、器高1.6 cmである。時期は14世紀中葉と考えられる。

278は口縁部と体部の境目を強くなでて外反させ、口縁端部を丸く納める土師器皿である。口径10.8 cm、器高2.4 cmである。14世紀後半と考えられる。

279は口縁が外方に伸び、器高も低く、扁平な土師器皿である。口径13.4 cm、器高2.0 cmを測る。16世紀中葉と考えられる。

280は口縁部外面をなでてさらに外反させ、口縁端部を上方に引き上げる土師器皿である。口径14.6 cm、器高2.2 cmとなる。281は龍泉窯の青磁椀口縁部片である。外面に蓮弁を陽刻する。282は白磁の椀底部である。内面に沈線を持つ。高台は削り出しである。復元底径5.0 cm、残存高3.3

土塚32

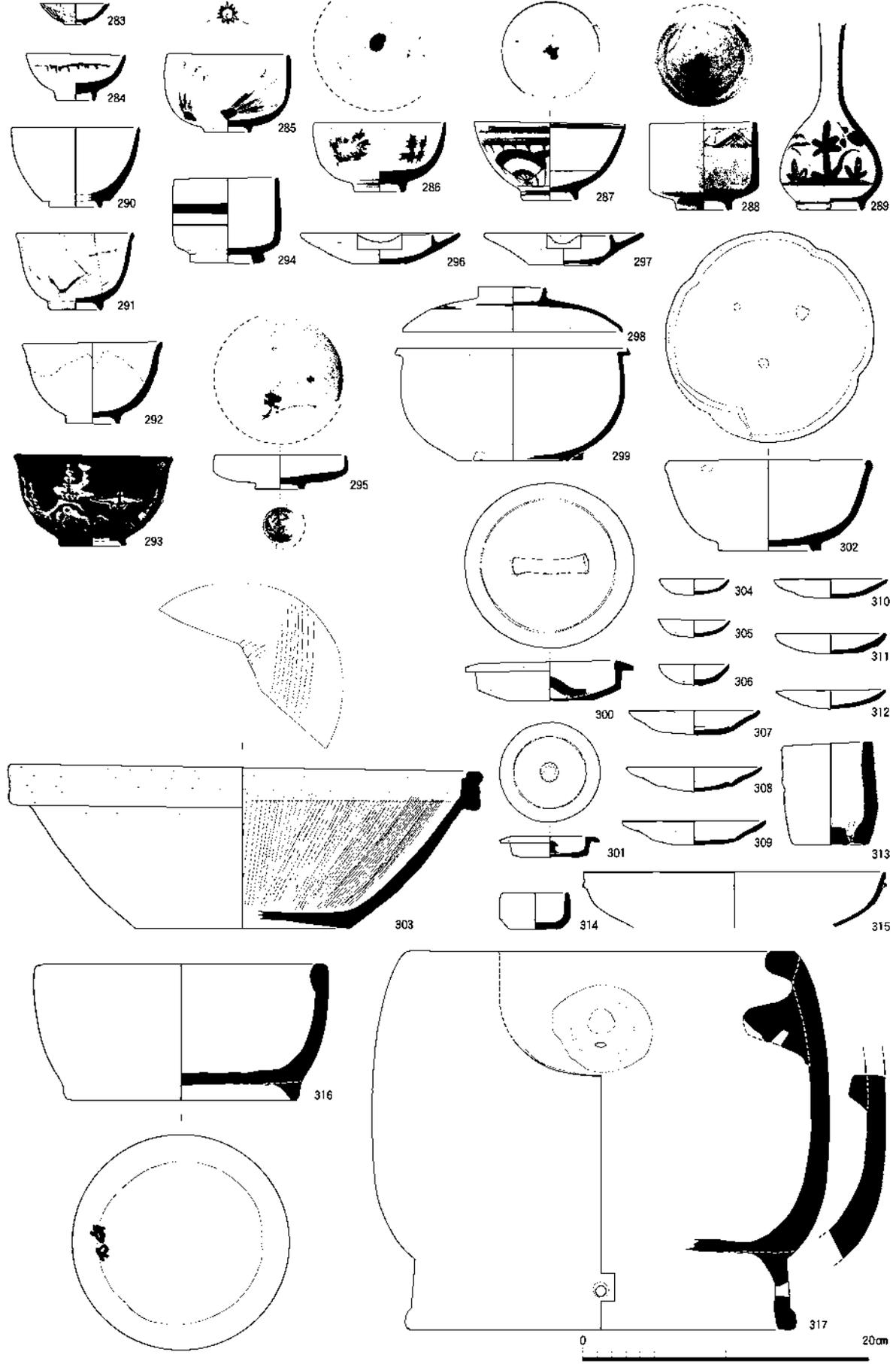


图 56 1区出土土器实测图 10 [江戸時代] (1:4)

cmである。時期は 15 世紀後半である。

276 は柱穴 237、277 は柱穴 245、278 は土壙 15、280～282 は土壙 619 から出土している。
江戸時代の土器類（図 56・57）

土壙 32 出土土器（283～317） 283～289 は肥前系磁器である。283 は白磁の紅皿である。内面と外面上部に釉を掛ける。口径 4.8 cm、器高 1.5 cm である。284 は小椀で、外面に笹文を染付で描く。口径 6.7 cm、底径 2.4 cm、器高 3.4 cm である。285 は外面に稲藁と蜻蛉、見込み中央に宝珠を描く丸椀である。同じ物が他に 2 点出土しているので、組物であったと考えられる。口径 8.4 cm、底径 3.2 cm、器高 5.5 cm である。286 はくらわんか茶椀である。外面に印判で紅葉文や菊文を押し、染付で井桁文、見込みに点と 2 本の圏線を描く。口縁部から体部に入ったひびに焼き継ぎが行われている。口径 9.1 cm、底径 3.4 cm、器高 4.9 cm。287 は外面に蛇の目と扇、その下地に菊弁、見込み中央にくずし字文を施文する椀である。口径 10.5 cm、底径 3.8 cm、器高 5.6 cm を測る。288 は青磁染付の筒形椀で、わずかに内傾する。口縁部内面に四方禪文、見込み中央に印判五弁花を描く。口径 7.3 cm、底径 3.6 cm、器高 6.2 cm である。289 は花入である。松竹梅文を描く。底径 4.2 cm、残存高 13.2 cm である。

290～294 は京・信楽系陶器椀である。口径 7.2～10.8 cm、底径 3.4～4.6 cm、器高 5.4～6.4 cm である。290 は小杉椀の小型品で、最も退化したものである。291 は白化粧した上に呉須で文様を描く上絵椀で、文様は山水と考えらる。292 は灰釉を掛けた上に、口縁部の内外面にだけ瑠璃釉を掛け分ける。293 は褐釉を掛けた上に、イッチン描きの山水文を施文する。294 は筒形椀で、体部中央に黒色の横線を引く。信楽産である。

295 は京・信楽系陶器皿であり、見込みに 2 箇所目跡を残す。錆絵染付で草花文を見込みに描き、透明釉を掛けている。高台内に「元章」と墨書する。口径 9.0 cm、底径 3.4 cm、器高 2.4 cm である。296～302 は京・信楽系陶器である。296・297 は灯明皿受けである。口径 11.0 と 10.8 cm、器高 2.2 と 2.3 cm である。296 体部は丸みをもちながら外反するが、297 体部はわずかに窪みながら外反する。298 は口径 15.3 cm の鍋蓋、299 は口径 16.0 cm の鍋である。300・301 は土瓶蓋である。300 は施釉され、持ち手に紐状の粘土を貼り付ける。301 は持ち手が菊花を呈する。302 は鉢である。俯瞰すると 4 枚の花弁形である。見込みに 3 つの目跡を残す。口縁部外面に釉下錆釉を流し掛け、透明釉を掛ける。口径 13.6 cm、底径 6.8 cm、器高 6.8 cm である。

303 は焼締陶器の堺・明石系播鉢である。播目の単位は 9 本で、密に入れられている。口径 32.3 cm、底径 15.0 cm、器高 11.6 cm である。

304～312 は土師器皿である。304～309・311・312 は灰白色・にぶい黄橙色、310 は橙色を呈する。304～306 は小型（口径 4.8～5.0 cm、器高 1.1～1.5 cm）の手捏ね皿で、指頭圧痕を明瞭に残す。307～309 は見込みに圏線を有する。口径 9.0～10.0 cm、器高 1.7 cm である。310～312 は丸底の中型皿（口径 7.6～7.8 cm、器高 1.3～1.5 cm）である。307・311・312 は灯明皿である。

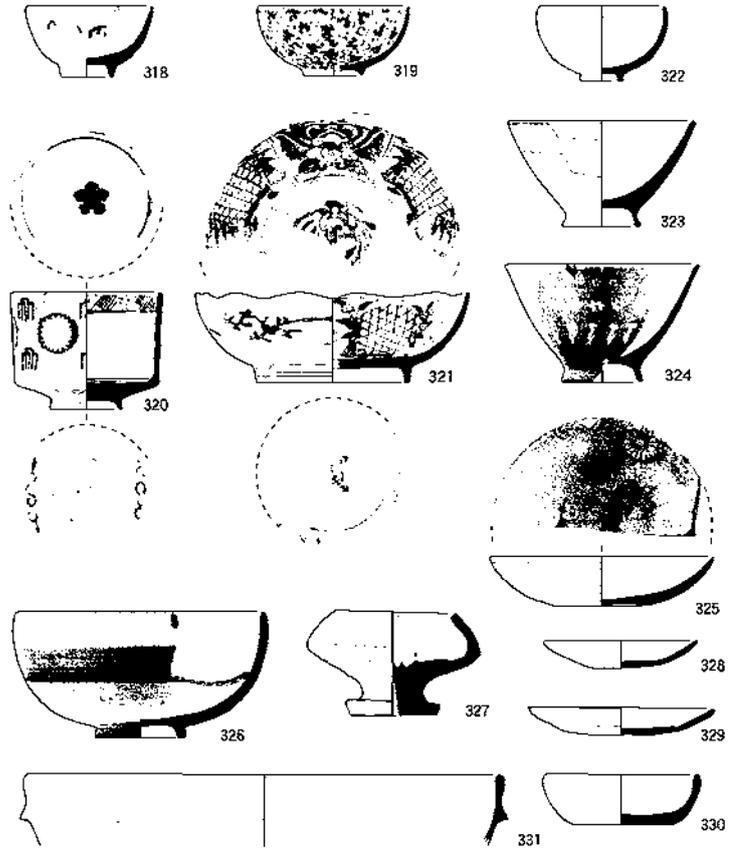
313 は焼塩壺である。底に粘土塊を補うかたちのものである。内外面をなでる。口縁端部内側

が一部立ち上がる。口径 6.2 cm、器高 7.3 cm である。314 はでんぼである。底部を削る。口径 4.6 cm、底径 3.2 cm、器高 2.6 cm である。315 は口縁部に細い突帯を貼り付けた炮烙である。復元口径 21.0 cm、残存高 3.9 cm である。316 は土師質の火入である。内外面を丁寧になで、口縁端部を平らに面取りする。高台は貼り付けで、高台内に「甘口」という墨書が認められる。底部内面は点状の剥離痕が認められる。口径 20.8 cm、底径 15.8 cm、器高 9.6 cm を測る。317 は土師質の風炉である。1 箇所を半月状に切り取り、その対角線上とそれに直交する場所に突起を貼り付ける。口縁部を内側に折り曲げ、端部を平滑になでる。高台を貼り付け、孔を開ける。内面突起には下方から貫通しない孔が開けられている。外面を丁寧に磨く。口径 26.8 cm、底径 26.4 cm、器高 26.7 cm である。

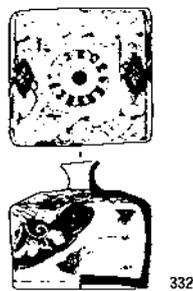
時期は 18 世紀末～19 世紀前半である。

土壙 81 出土土器 (318～331)
 318～321 は肥前系磁器である。318 は小椀である。外面に染付で笹文を描く。口径 6.5 cm、底径 2.6 cm、器高 3.8 cm である。319 は小型丸椀で、外面に唐草文を描く。口径 7.8 cm、底径 3.0 cm、器高 3.7 cm である。320 は筒形椀で、外面に雪輪文、源氏香文、雲文、

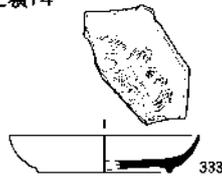
土壙81



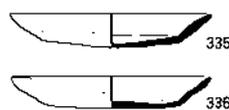
土壙69



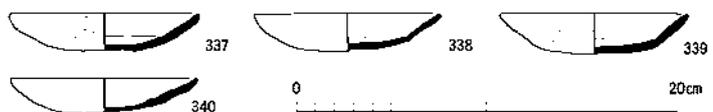
土壙74



土壙113



土壙590



柱穴63

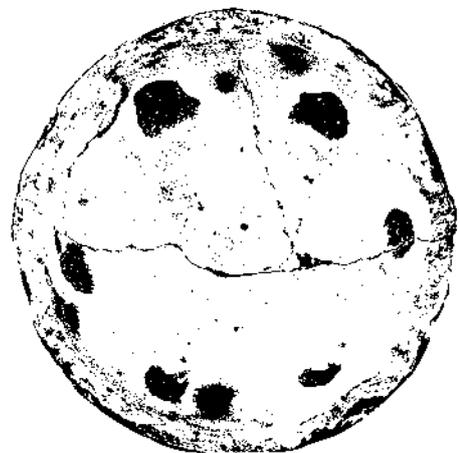


図 57 1 区出土土器実測図 11 [江戸時代] (1 : 4)

口縁部内面に四方襷文、見込み中央にコンニャク印判五弁花文を配する。口径 7.6 cm、底径 3.6 cm、器高 6.2 cmを測る。321 は芙蓉手輪花皿である。外面に梅花繫ぎを描き、高台内に 2 重角福を配する。内面は鳥籠と唐花文が交互に描かれ、見込みには鳳凰を描く。復元口径 14.4 cm、底径 7.9 cm、器高 4.8 cmである。

322 ～ 326 は京・信楽系陶器である。322 は小丸椀である。口径 6.5 cm、器高 4.0 cmである。323 は撥形に広がるもので、内外面を白化粧した上に、透明釉を掛けたが、外面の一部が剥がれたものである。口径 9.6 cm、底径 4.0 cm、器高 5.6 cmである。324 は 323 と同形で、円文、花文、如意文を上段から順に象眼し、白化粧する。その後、灰釉を掛けたものである。口径 10.0 cm、底径 4.2 cm、器高 6.2 cmである。325 は灯明皿である。見込みに入ったひびを埋めるために、内外面から緑釉が塗られたと考えられる。口縁部内面に貼り付けられた菊花文が付く。復元口径は 11.6 cm、底径 4.9 cm、器高 2.6 cmである。326 は体部が丸く広がりながら立ち上がる鉢である。外面中央に帯状の文様が描かれる。口径 12.8 cm、底径 4.6 cm、器高 6.7 cmである。

327 は軟質施釉陶器の算盤形灯火具である。見込み中央の心押さえなどは剥離していた。底部接地面中央に転倒を防ぐための釘孔である深さ 1.8 cmの孔が開けられている。いわゆるカキ釉の透明釉である。口縁端部に煤痕跡が残る。口径 6.4 cm、底径 4.4 cm、器高 5.6 cmを測る。

328・329 は土師器皿である。口径 8.0 ～ 9.6 cm、器高 1.5 cmである。329 の見込みに圏線が廻る。330 はでんぼである。接地面を回転糸切りする。口径 8.0 cm、底径 5.0 cm、器高 2.7 cmである。331 は体部に小さい突帯が貼り付く炮烙である。口縁端部が肥厚する。外面に煤痕が残る。復元口径 24.7 cm、残存高 3.8 cmである。

時期は 19 世紀前半である。

土壙 69 出土土器 (332) 332 は色絵磁器の四角い油壺である。上面の注ぎ口を染付で四角く囲んだ中に、菊花文を紅色、葉文を緑色で描く。それらの周りを 4 つに分け、染付で宝文、斜格子と網を組み合わせた文様を交互に配する。側面は、2 側面単位で 1 つの文様を構成する。側面角に染付の雲頭区画文内に紅色で花唐草を描き、間を紅色で塗り潰す。その両脇に灰色で薊、緑色で薊の葉を塗って、細かい文様を後で描く。口径 12.8 cm、底径 6.9 cm、器高 6.7 cmを測る。時期は 18 世紀後半と考えられる。

井戸 74 出土土器 (333) 333 は見込みに龍文様をもつ珉平焼の丸型皿である。黄釉が全面に掛けられている。復元口径 9.8 cm、底径 6.0 cm、器高 2.0 cmで、時期は明治時代である。

土壙 63 出土土器 (334) 334 は美濃焼の施釉陶器鉢である。見込みに目跡が 6 箇所にわたって認められる。内面は透明釉、外面は褐色釉に白色と青色を混ぜた釉薬を流し掛ける。最大径 24.0 cm、底径 17.0 cm、残存高 8.7 cmである。時期は 19 世紀後半と考えられる。

土壙 113 出土土器 (335・336) 335・336 は見込みに圏線を持つ土師器皿で、いずれも灯明皿である。口径 10.4 cm、器高 1.7 ～ 1.8 cmである。時期は江戸時代後期頃と考えられる。

土壙 590 出土土器 (337 ～ 340) 337 ～ 340 は見込みに圏線を持つ土師器皿である。口径は 9.6 ～ 9.8 cm、器高は 1.4 ～ 2.2 cmに納まる。時期は江戸時代中期頃と考えられる。

2) 2区出土の土器類 (図 58 ~ 61、図版 23 ~ 26)

古墳時代・平安時代の土器類 (図 58)

検出中出土土器 (341) 341 は古式土師器の小型器台である。受部は低く外方に開き、内面の底部と口縁部の境に段をもつ。口縁部・脚部下半はナデ、脚部と受部の境・脚部内面上半には指オサエ調整をする。色調は赤褐色で、胎土中に雲母・石英・赤色斑粒を含む。焼成は良好である。復元口径 8.7 cm、復元底部径 9.6 cm、器高 6.9 cm である。

土壙 111 出土土器 (345・346) 2点とも平坦な底部から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる土師器の皿である。345 は口径 9.4 cm、器高 1.7 cm、346 は口径 9.8 cm、器高 1.8 cm である。

溝 246 出土土器 (353) 353 は輸入青磁の椀で、体部外面に陽刻の蓮弁文をもつ。底部径 3.7 cm、残存高 3.1 cm である。

溝 308 出土土器 (347 ~ 352) すべて土師器の皿である。347・348 は平坦な底部に口縁部が短く屈曲して立ち上がる受皿である。349 は平らな底部から、口縁が短く外上方にのびる小型の皿である。350 ~ 352 は平坦な底部から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる。347 は復元口径 8.4 cm 器高 1.15 cm、348 は復元口径 10.2 cm・器高 0.9 cm、349 は復元口径 8.0 cm、器高 1.0 cm、350 は口径 9.7 cm、器高 1.45 cm、351 は口径 8.2 cm、器高 1.8 cm、352 は復元口径 12.8 cm、器高 2.0 cm である。

土壙 328 出土土器 (342 ~ 344) 344・343 は口縁部を強く屈曲させ、口縁端部をつまみあげた小皿の皿である。344 は平坦な底部から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる皿である。346 は復元口径 9.3 cm、器高 1.5 cm、347 は口径 10.6 cm、器高 1.85 cm、348 は口径 10.3 cm、器高 1.95 cm である。

341 は古墳時代前期の布留期、342・343 は 11 世紀末、344 ~ 353 は 12 世紀後半の土器である。

室町時代の土器類 (図 59 ~ 61)

井戸 10 出土土器 (354 ~ 426) 354 ~ 417 は、土師器の皿である。354・355 は平らな底部から、口縁が短く外上方にのびる小型の皿である。354 は復元口径 4.8 cm、器高 0.75 cm、355 は復元口径 6.4 cm、器高 1.25 cm である。

356 ~ 370・400 ~ 417 は、平らな底から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる。粘土板成形で、口縁部・体部内面はナデ調整をほどこす。口径 7.2 ~ 8.6 cm、器高 1.75 ~ 2.2 cm の小型 (356 ~ 370)、口径 11.4 ~ 12.1 cm、器高 2.35 ~ 2.9 cm の中型 (400 ~ 407)、口径 14.2 ~

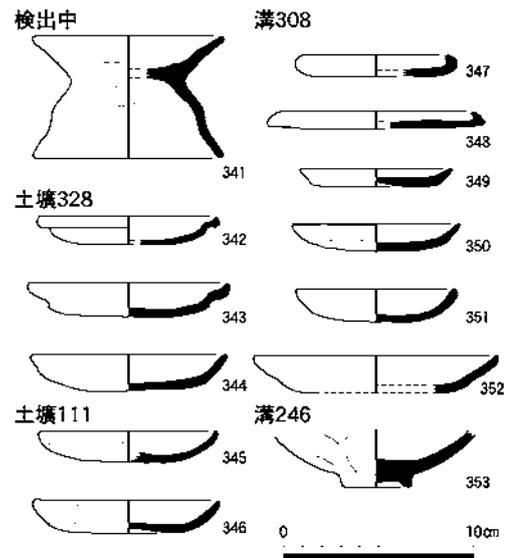


図 58 2区出土土器実測図1
[古墳時代・平安時代] (1 : 4)

井戸10

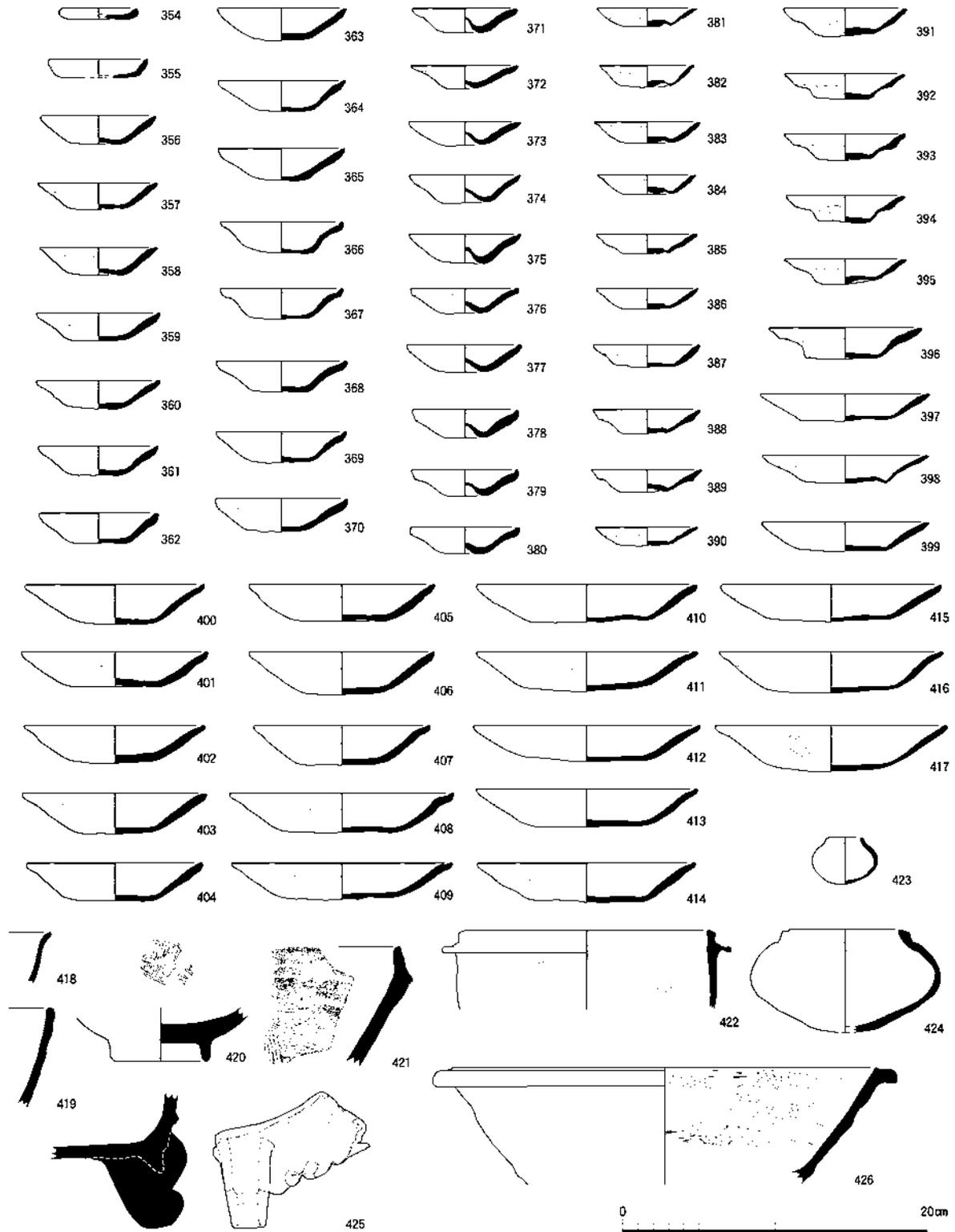


図 59 2区出土土器実測図2 [室町時代] (1:4)

15.1 cm、器高 2.4 ~ 3.0 cmの大型 (408 ~ 417) のものがある。

371 ~ 380 は、底部が内側に突出し、体部・口縁部がゆるやかに外反するいわゆる「へそ皿」である。口径 6.9 ~ 7.5 cm、器高 1.6 ~ 2.0 cmである。

381 ~ 399 は、体部・口縁部が屈曲して外反し、内外面ともに底部と体部の間が溝状に凹むも

のもみられる。口径 6.2～7.2 cm、器高 1.2～1.6 cmの小型（381～390）、口径 7.7～8.0 cm、器高 1.7～1.9 cmの中型（391～395）、口径 9.9～11.0 cm、器高 1.8～2.05 cmの大型（396～399）の3種がある。内面は体部・口縁部はナデ、底部は小型のものは無調整であるが、中・大型のものは仕上げナデを施す。外面は口縁部に粗いナデが見られるものがあるが、基本的には小型のものは無調整である。中・大型のものは体部下半に指頭痕がのこる。

418・420 は、輸入青磁の椀である。418 は、体部から口縁部が内湾して外方に開き端部は丸みをおびる。小片のため法量は不明である。420 は椀の底部で、内底面に花文が描かれている。底部径 6.0 cm、残存高 3.55 cmである。

419 は施釉陶器（瀬戸焼）の鉢である。体部・口縁部は外湾気味に上方にのび、端部は丸味を帯びる。緑灰色の釉がかかる。小片のため法量は不明である。

421 は、焼締陶器（備前焼）の挿鉢である。内面に播目がある。小片のため法量は不明である。

422 は瓦質の羽釜である。口縁部は鐙部から短く立ち上がり、端部は外傾する面をつくる。口縁部は指ナデ、内面は布状のものをういたナデを施す。復元口径 16.0 cm、残存高 5.2 cmである。

423・424 は瓦質の壺である。423 は手捏ね成形で、球形の底部・体部をもち、口縁端部は短く立ち上がる。口径 2.2 cm、器高 3.14 cmである。424 は体部中央が最大径をもつ楕円形を呈し、口縁部は体部との境に段をもち短く立ち上がる。口縁端部は面をつくり、浅い沈線がめぐる。口縁部・内面はナデで、体部下半に粗いタタキを施す。口径 7.2 cm、器高 6.8 cmである。

425 は瓦質の火舎の脚部で、ヘラで面取りした獣脚形をしている。

426 は瓦質の鍋で、底部を欠くが、内湾気味に外上方に伸びる体部から強く外方に屈曲した口縁部をもつ。体部外面は凹凸が激しく指オサエが目立ち、内面は丁寧にナデ調整を施す。口径 27.6 cm、残存高 7.1 cmである。

土壙 41 出土土器（427～437） 427・428 は口縁が短く外上方にのびる小型の皿である。427の内底面には途切れ途切れではあるが、ヘラによる円形の文様が描かれている。427は口径 8.1 cm、器高 2.1 cm、428は口径 8.5 cm、器高 2.1 cmである。同形の口径 11.9～12.1 cm、器高 2.65～2.75 cmの中型（433・434）、口径 13.4～14.7 cm、器高 2.7～2.85 cmの大型（435～437）がある。429・430 は体部・口縁部が屈曲して外反する小型の皿である。口径 7.85～8.1 cm、器高 1.6～1.7 cmである。431・432 は「ヘソ皿」である。口径 7.3～7.5 cm、器高 1.75～1.8 cmである。

438 は口縁部が内側に突出した、瓦質の火舎である。

土壙 108 出土土器（439～456） 439～445 は底部が内側に突出した土師器の「ヘソ皿」である。口径 6.5～7.3 cm・器高 1.5～1.8 cmである。446・447 は口縁が短く外上方にのびる土師器の小型の皿である。446は口径 8.4 cm、器高 1.8 cm、447は口径 8.4 cm、器高 2.1 cmである。448 は体部・口縁部が屈曲して外反する土師器の皿である。口径 10.8 cm、器高 2.0 cmである。

449・450 は、美濃・瀬戸系施釉陶器の「おろし皿」である。口縁部に緑灰色の釉が掛かり、内底面にヘラで格子に刻みを入れておろし目をつくっている。449は復元口径 11.2 cm、残存高 1.9 cm、450は復元口径 15.0 cm、残存高 1.8 cmである。

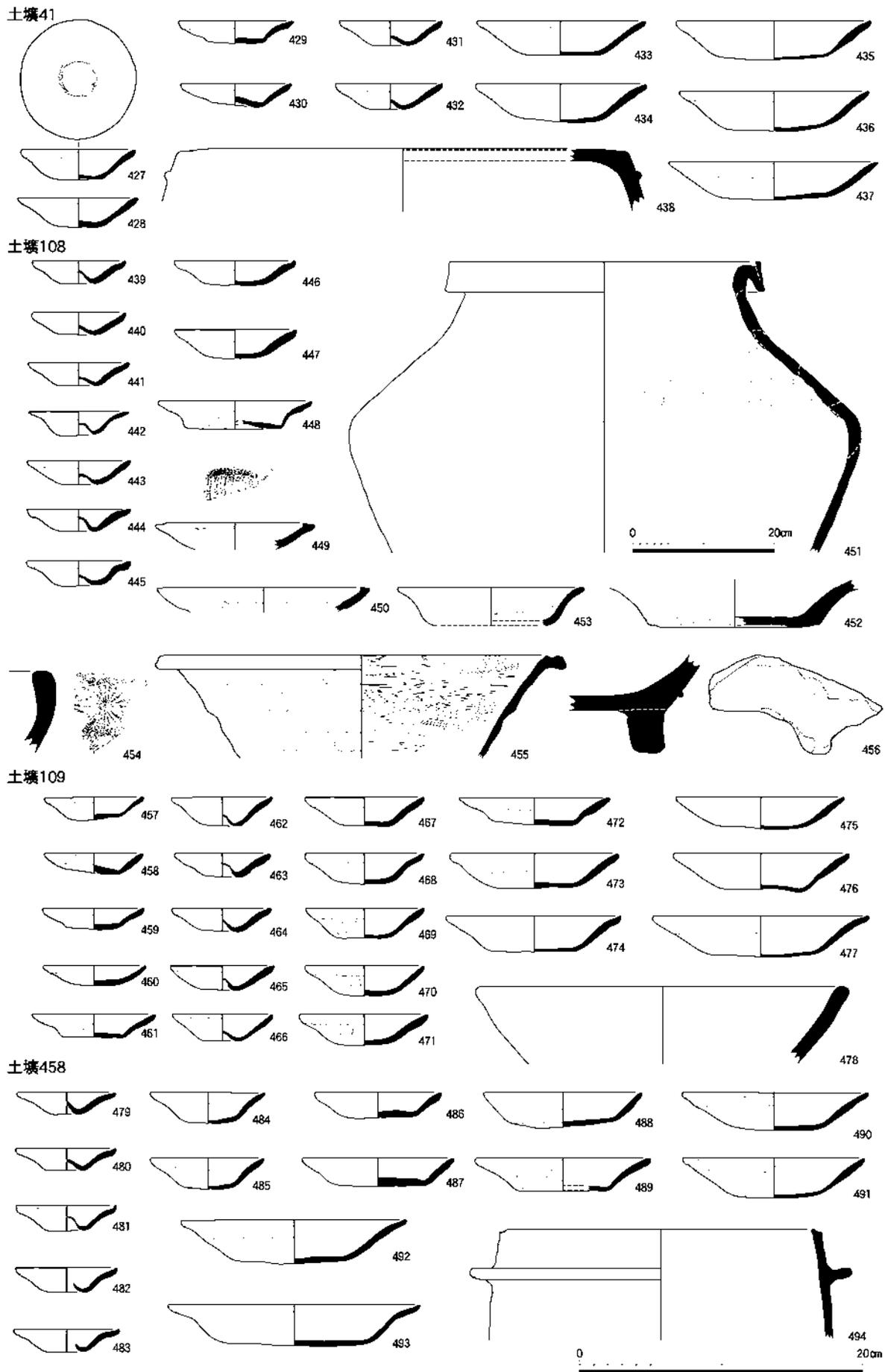


図60 2区出土土器実測図3 [室町時代] (1:4、451・452は1:8)

451・452は常滑の大甕で、同一個体になる可能性がある。大半の部品は土壌108から出土しているが、井戸10をはじめ他の遺構から出土した破片が接合した。451は復元口径43.8cm、残存高40.4cm、胴部最大径72.0cm、452は底部径24.6cm、残存高5.5cmである。

453は輸入青磁の皿で、一部釉の厚い箇所が筋状の文様になっている。復元口径13.2cm、器高2.7cmである。

454は瓦質の火舎の口縁部である。外面には菊花文が刻印されている。456は瓦質の火舎の脚部で、ヘラで面取りした獣脚形をしている。

455は瓦質の鍋である。内湾気味に外上方に伸びる体部から強く外方に屈曲した口縁部をもつ。体部外面は凹凸が激しく指オサエが目立ち、内面は丁寧にナデ調整を施す。復元口径26.8cm、残存高7.3cmである。

土壌109出土土器(457～478) 457～461・472は体部・口縁部が屈曲して外反する土師器の皿である。457～460は口径7.0～7.2cm、器高1.4～1.7cm、461は口径8.75cm、器高1.2cm、472は口径10.6cm、器高2.05cmである。462～466は「ヘソ皿」である。口径6.7～7.3cm、器高1.7～2.1cmである。467～471・473～477は口縁が短く外上方にのびる土師器の皿である。467～471は口径8.1～9.1cm、器高2.1～2.2cm、473～476は口径11.9～12.3cm、器高2.3～2.55cm、477は口径15.2cm、器高3.0cmである。

478は焼締陶器の鉢である。内外面ともナデ調整が施され、胎土中に径2～3mmの長石粒を比較的多く含む。復元口径25.3cm・残存高5.5cmである。

土壌458出土土器(479～494) 479～483は土師器の「ヘソ皿」で482・483は焼成後に底部を穿孔している。口径7.0～7.4cm、器高1.5～1.8cmである。486～489は体部・口縁部が

屈曲して外反する土師器の皿である。口径9.0～12.4cm、器高1.8～2.4cmである。484・485・490～493は平らな底から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる土師器の皿である。484・485は口径8.1cm、器高2.2～2.3cm、490・491は口径12.8～13.1cm、器高2.9cm、492・

その他の遺構

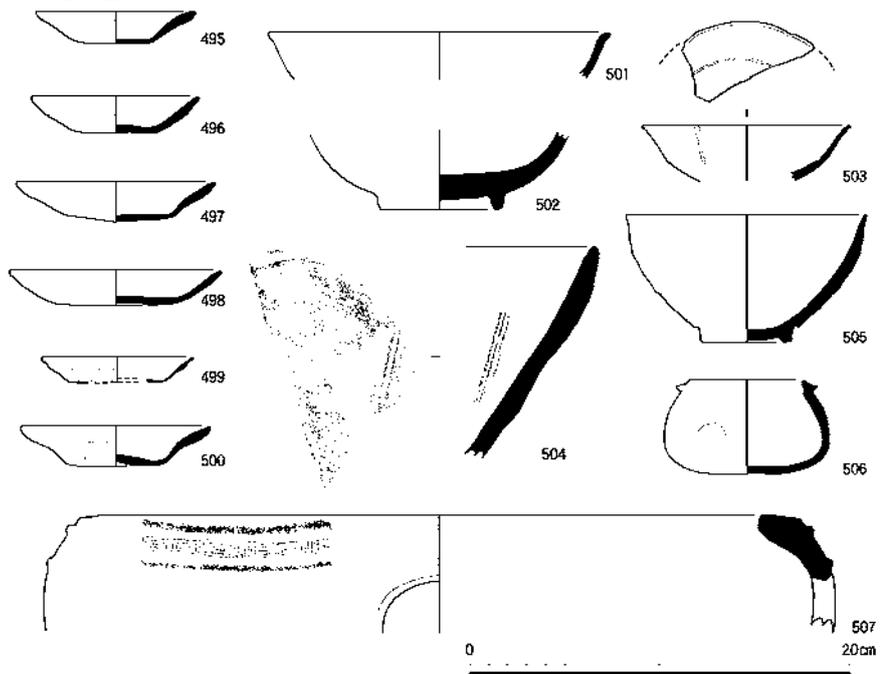


図61 2区出土土器実測図4 [室町時代] (1:4)

493 は口径 15.8 ～ 17.8 cm、器高 3.0 ～ 3.15 cm である。

494 は瓦質の羽釜である。直立する口縁部に鏝を貼り付けたもので、口縁端部は外傾し口縁部外面に浅い段がめぐる。ナデによる調整を施す。復元口径 21.5 cm、残存高 7.9 cm である。

その他の遺構出土土器（495 ～ 507）495・496 は平らな底から外反しなが立ち上がる体部・口縁部からなる土師器の皿で、口径 8.4 ～ 8.8 cm、器高 1.75 ～ 2.0 cm である。497 ～ 500 は体部・口縁部が屈曲して外反する土師器の皿で、口径 7.9 ～ 11.2 cm、器高 1.35 ～ 2.1 cm である。

501 ～ 503 は輸入青磁で、501・502 は椀、503 は皿である。釉色は 501 が褐色、502 が青白色、503 が灰青色で口縁部に輪花が施される。501 は復元口径 17.8 cm、残存高 2.5 cm、502 は高台径 6.5 cm、残存高 4.2 cm、503 は復元口径 10.8 cm、残存高 3.0 cm である。

504 は瓦質の播鉢で、内面に 3 条一単位の播目がある。口縁部・内面はナデ調整、体部は指オサエで調整する。小片のため法量は不明である。

505 は美濃・瀬戸系の天目椀で、体部下半・高台部を除いて黒褐色の釉が厚くかかる。復元口径 12.6 cm、器高 5.0 cm である。

506 は小型の三脚付きの瓦質の羽釜である。平らな底部から屈曲して体部・口縁部が内傾上方にのびる。口縁端部は面をつくり外面が浅く突出し鏝状を呈する。口径 5.9 cm、器高 5.0 cm である。

507 は瓦質の火舎で、体部に円窓を穿ち、体部上面には 2 条の突帯の間に雷文を刻印する。復元口径 33.8 cm、残存高 6.2 cm である。

495・501 は土壙 51、496・505 は土壙 211、497・498・500・502・504 は土壙 59、499 は井戸 318、506 は土壙 321、507 は土壙 32 からそれぞれ出土している。

354 ～ 507 は 15 世紀後半の土器である。

（3）瓦類

瓦はコンテナ数にして約 70 箱が出土している。軒丸・軒平瓦は瓦当文様が判明し、掲載したものの以外の細片を含めると、1・2 区合わせて約 90 点である。多くの丸・平瓦は一部の端面のみが残っているだけであったので、ヘラ記号や刻印があるもの、法量がわかるもの、叩き板に特徴的な文様があるものに限って実測した。瓦類の大半は平安時代後期に相当するものであるが、後世の井戸遺構を中心に様々な遺構から出土しているため、丸・平瓦の叩き板などによる瓦の分類、点数確認は行っていない。ただし、平瓦は凹面が布目で凸面が縄目、両面がケズリ調整のものが大半であったことを記しておく。

軒丸・軒平瓦の文様は多種多様であり、山城産軒丸瓦の典型である巴文と剣頭文、蓮華文、播磨産軒丸瓦の蓮弁が剣頭状になる蓮華文、丹波産軒平瓦の唐草文に同文が認められる程度である。これは、平安時代後期に造営された法勝寺の様相に符合するものであり、各地で製作された瓦が使用されるこの時期の特徴であると考えられている。産地は大きく 3 箇所に分けられ、①播磨、②丹波、③山城（京都）である。その他に、大和産や讃岐産と考えられるものなどが少数含まれる。

それぞれの瓦の出土遺構は、以下の通りである。

1 区井戸 317 (平安時代後期) : 544、545、557、558、580

井戸 583 (平安時代後期) : 508、510、520、522、527 ~ 530、534、573

井戸 588 (平安時代後期) : 583

井戸 614 (平安時代後期) : 518、519、542

溝 668 (平安時代後期) : 511、514、517、521、524、543、549、553、554、556

井戸 58 (室町時代中期) : 526、536、559、561、567 ~ 569、574、612

井戸 75 (室町時代中期) : 515、539、548、550、551、563 ~ 565、576、577、581、

611

井戸 452 (室町時代後期) : 537、570、575、579

井戸 119 (室町時代後期) : 548

鎌倉時代包含層 : 509、513、516、523、525、535、538、539、546、547、552

室町時代包含層 : 531、532、562

その他の遺構 (室町時代から近代) : 512、533、555、560、571、572、582

2 区溝 121 (平安時代後期) : 589

溝 308 (平安時代後期) : 598

土壙 328 (平安時代後期) : 585、594、605 ~ 609

井戸 10 (室町時代後期) : 588、592、593、595、600、

土壙 126 (室町時代後期) : 596、597、603

その他の遺構 (室町時代) : 584、587、590、591、599、601、602、604、610

なお、調整方向は瓦当面对して垂直方向であれば縦、平行であれば横と記載する。

1) 1 区出土の瓦類

軒丸瓦 (図 62・63、図版 27・28)

播磨産軒丸瓦 (508 ~ 514・525・526) 508 は複弁八葉蓮華文である。中房には 1 + 6 の蓮子が配置され、周りを圏線が囲む。蓮弁は中央に近い部分が盛り上がり、互いに接し、付け根が水滴状に窪む。三角形の間弁が連続して彫り込まれている。瓦当部の側面を横ナデし、裏面をなでる。顎部を直角に造り出している。胎土は砂粒を多く含む。509 ~ 511 は剣頭状の蓮弁を持つ。単弁も同様の剣頭状になっている。509 は範が浅い。中央附近で欠損しているため、蓮子の有無・数などは不明である。瓦当裏面上部に丸瓦を貼り付け、瓦当上面と瓦当裏面に粘土を充填して製作している。瓦当部側面を横方向にケズリ、裏面をなでる。顎部は外面が丸い。胎土は精良であるが、焼きはあまい。510・511 は胎土が精良で、堅く焼き締まる。511 は 509 と同様の造りである。範の一部に隆線が認められるが、範傷になるかは不明である。512 は複弁八葉蓮華文になると考えられる。中房を圏線が囲み、独立している蓮弁を三角形の間弁が連続して囲む。さらに、その周囲に 9 個以上の珠文と圏線が廻る。瓦当部側面を横ナデ、裏面をナデ、瓦当部と丸瓦

部を接合した上面を縦ケズリする。箆を外した際に付いたと考えられる横方向の工具痕跡が周縁に残る。また、瓦当面には1mm以下の砂粒が粗密はあるものの全面に付着しており、木箆を外す時に使用された離れ砂と考えられる。513は瓦当面の復元直径が10cm程度になる小型の瓦である。独立した蓮弁を持つ素弁蓮華文を圏線が囲む。間弁は撥形である。瓦当部裏面に孔を開けて、丸瓦を差し込み、瓦当部裏面下部から粘土を充填するが、508や次の514ほど大量の粘土を使用していない。瓦当部と丸瓦上部の境目も粘土をほとんど足すことなく、瓦当部側面の横ナデから続けたナデにより、接合痕を消している。514は素弁蓮華文になると考えられる。蓮弁は独立し、T字状の間弁が連続して廻る。周縁の高さが文様から1.5cmとなっている。瓦当部裏面上部に丸瓦の端面を当て、瓦当部上面と瓦当部裏面に粘土を足して成形を行う。その際、丸瓦は約8mmの厚さのものを2枚重ねにしているようである。瓦当部側面を横ナデ、丸瓦上面を縦ケズリ、瓦当

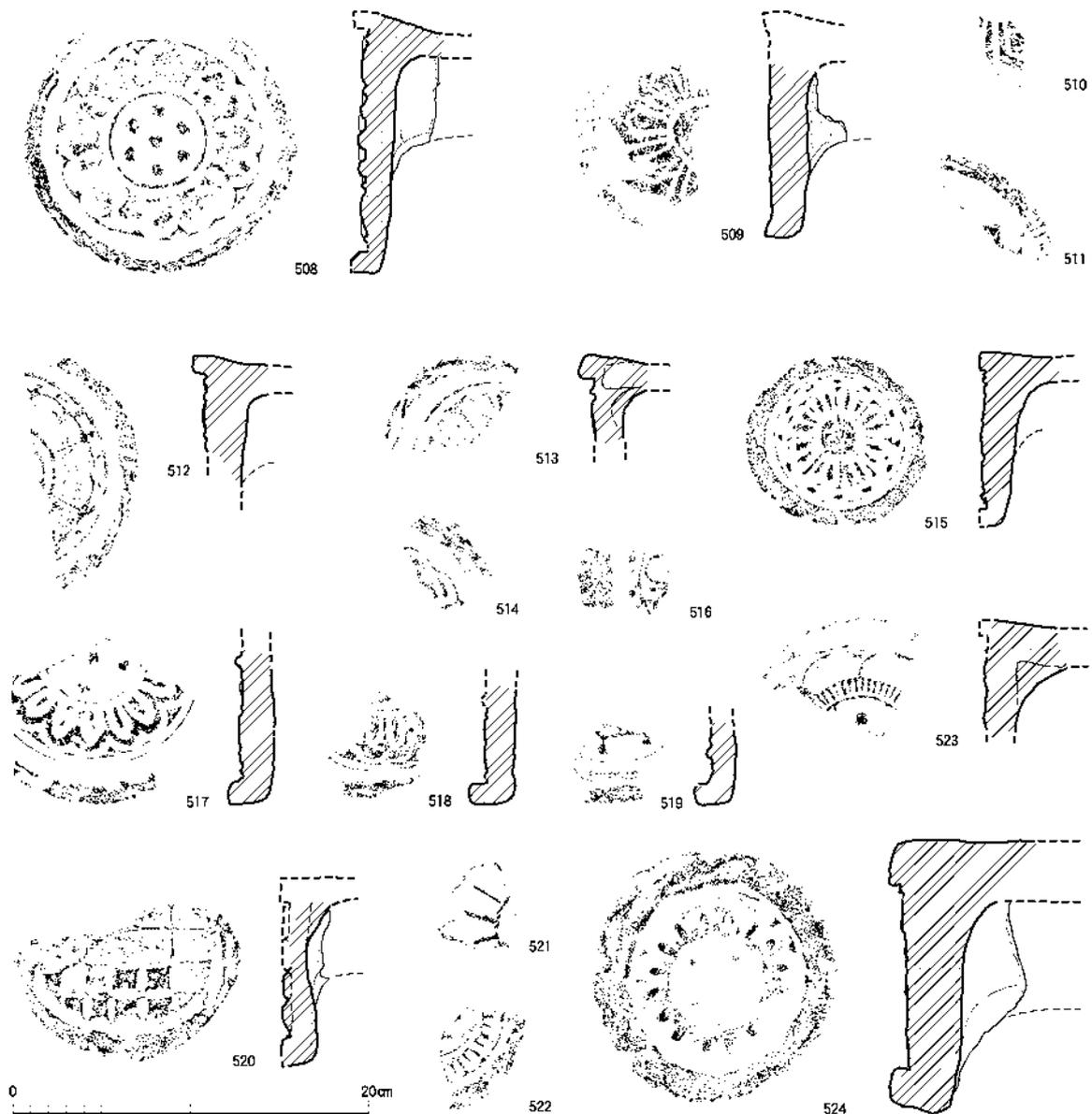


図62 1区出土軒丸瓦拓影・実測図1 (1:4)

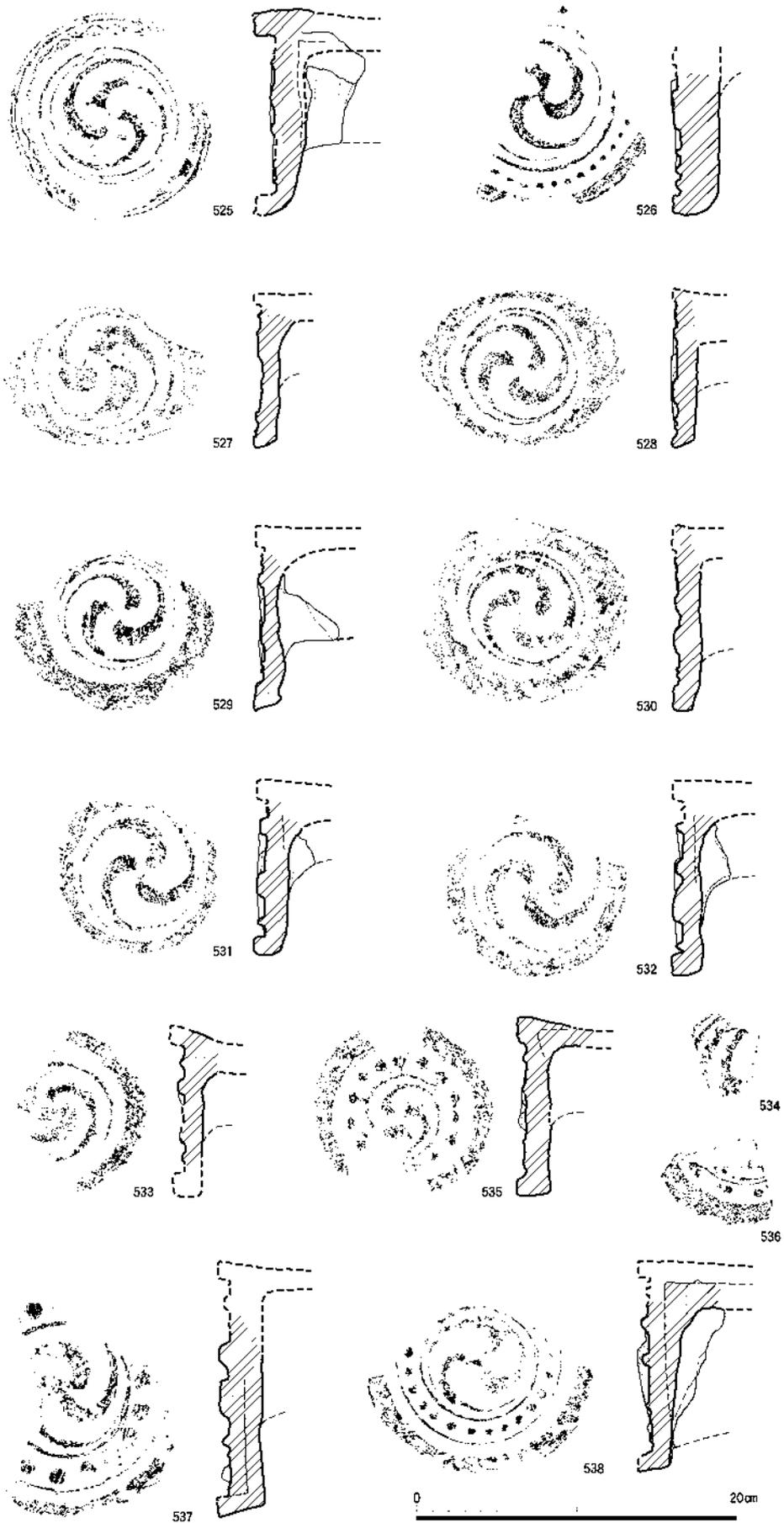


图 63 1区出土軒丸瓦拓影·実測图 2 (1 : 4)

部裏面をナデ、丸瓦裏面の一部を横ケズリする。丸瓦裏面には布目圧痕が認められる。525 は三巴文の周縁に唐草文と圏線を施している。巴文は中心が離れ、巴の頭が尖るもので、尾を長く引く。周りを圏線が囲む。周縁上の唐草文はデザイン化されたもので、隆線で描かれ、外側に向かって三転する。同じパターンと考えられる文様が周縁上に対称に配置されている。文様部分には離れ砂と考えられる約 1 ～ 2 mm の砂粒が認められる。瓦当部裏面上部に穴を開け、丸瓦を差し込むソケット状の造りで、粘土を補い、丸瓦上部を縦ケズリ、裏面をなでた後、瓦当部側面を横ナデ調整する。顎部は丸い。胎土は精良で、堅く焼き締まっている。526 は三巴文である。巴の尖った頭部分が中央でくっつく。尾は長く引き、周りを圏線と珠文が囲む。珠文の間隔は非常に狭く密に配される。瓦当部側面を横ナデ、裏面をなでる。瓦当面の厚みが約 2.5 cm と分厚い。瓦当面に自然釉が発生している。

509 ～ 511 は白河街区、512 は法勝寺跡、514 ・ 526 は円勝寺跡、521 は尊勝寺跡、522 は御香宮廃寺で同文様が出土している。525 は巴文の周囲を唐草文で飾るという古い要素と新しい要素が混在した瓦である。平安時代後期の軒丸瓦瓦当文様に巴文が入り始める直前頃から、蓮華文を持つ瓦当の周辺に、唐草文を施文する例がわずかに見られる。ただし、周縁上に施文されたものは確認していない。そして、巴文が席捲し始める短期間の間に消えてしまうようである。よって、巴文の初源期に近い資料の可能性が高い。

山城（京都）産軒丸瓦（515 ～ 523 ・ 527 ～ 536）515 は複弁八葉蓮華文である。中房に蓮子を配しているようであるが、筈が崩れているため詳細は不明である。蓮弁は独立しており、間弁は T 字状のものが連続する。蓮華文の周囲に珠文を 12 個と圏線を廻らす。造りは瓦当裏面に孔を開けて、丸瓦を差し込む。側面を横ナデ、丸瓦上面を縦ナデ、瓦当裏面はナデ調整する。側面と裏面は面取りされている。小型の瓦である。516 は素弁蓮華文になると考えられ、周りを圏線と 2 個以上の珠文が取り巻く。線状の間弁が見られる。517 は複弁蓮華文で、蓮弁 4 枚以上、蓮子が 1 + 2 個以上になる。中房と蓮華文の周りには圏線が廻る。517 は 518 と同文の複弁蓮華文である。519 は珠文と圏線以外の部分が欠損しているが、中央に蓮華文が配置される瓦に相当すると考えられる。520 は格子文である。縦方向を先に切込みを入れ、横方向を後で切る。片刃状の工具を使って沈線の断面を三角形になる様に切っているため、正方形に切られた部分の大半は、切り込みが深かったために剥離している。瓦当裏面に丸瓦を貼り付け、粘土を補充して荒くなでて接合する。521 は単弁の蓮華文になると考えられる。単弁は隆線で表現されている。522 は主文様が不明であるが、それを取り巻く蓮弁は剣頭状を呈する。

527 ～ 530 は三巴文をもつ小型の軒丸瓦で、横に扁平な形を呈する。側面は横ナデ、裏面はユビナデである。520 と同じ製作技法である。527 は巴の頭が非常に大きく、丸いものと尖っているものが混在している。周縁内側が段を形成する。528 ・ 529 は巴の頭部が尖り、尾を長く引く。530 は巴の頭が丸くなり始めているが、尾は長い。筈傷状の×字が巴文上に認められるが、繊維質の植物遺体は何らかの要因で筈を押す際に付着したと考えられる。離れ砂的な使用がされている可能性もある。文様と周縁上に指頭圧痕が残る。531 ・ 532 は巴の頭部が丸みを帯び始めてお

り、尾も長く引かない。頭部は離れている。527などと比べると、瓦当面が深い。533は巴文の一部が欠損している。頭部でくっ付いていたと考えられる。534は巴文軒丸瓦の瓦当面端部である。535は小さい巴文の周りに、大きい珠文を12個以上配置している。文様が瓦の中心に押されていないため、周縁の幅が所によって変わる。側面は横ナデ、裏面はユビナデ調整である。536は巴文の尾が一部に残り、周りを圏線と珠文が取り囲む。

521は尊勝寺跡出土の瓦に同文様がある。

その他の産地の軒丸瓦（523・524・537・538）523は単弁蓮華文である。蓮子を1個以上配した中房の周りに、中心に向かって櫛歯状の沈線を描き、それから蓮弁を廻らす。丸瓦を瓦当部に接合した痕跡は見られないが、裏面に粘土を充填している。この文様は南都系であるが、産地は不明である。524は産地不明の複弁八葉蓮華文である。中房に1+4の蓮子を配置する。範は非常にあまい。瓦当面に焼成時の割れが認められる。周縁幅は約2cmと広く、瓦当面の厚さは約3cm、丸瓦の厚さ2.5～3cmと全体的に分厚い造りである。側面は横ナデ、丸瓦上部は縦ケズリ、瓦当裏面はケズリとナデである。537・538は大和産と考えられる巴文軒丸瓦である。いずれも巴の頭部が尖る。537は巴の頭部がくっ付き、尾を長く引き、周りの珠文が大きく、数も少ない。側面は横ナデ、裏面はケズリである。538は巴の中心に丸い突起が付く。珠文は小振りで、数が多い。側面は横ナデ、丸瓦上部は縦ケズリ後横ナデ、裏面は横ケズリである。538は鎌倉時代、その他は平安時代後期に比定できる。

523は白河街区から同文様が出土している。

軒平瓦（図64・65、図版28～30）

播磨産軒平瓦（539～541）539は唐草文で左に2転することから、右側も対称的な構図になると考えられる。主葉は強く巻き込み反転する。支葉は巻き込み、先端の支葉は葉を広げて外に向かって延びる。瓦当部側面を横ナデ、凹面を横ケズリ後ユビナデ、顎部裏面を横ケズリ調整する。瓦当裏面に平瓦を当てて、粘土を凹・凸・側面に足して製作する包込み技法である。540は唐草文が左端で1転、中心に向かって2転以上、巻き込む。支葉が巻き込み、蕾が付く。文様の間隙部分に支葉または蕾が独立して配置される。顎部は横ケズリ、顎部裏面は横ナデ、凸面は縦ケズリ、凹面は平瓦の調整がなで消されている。包込み技法で、瓦当面に離れ砂を使用する。541は唐草文が右に向かって2転する。主葉が強く巻き込むが、支葉はほとんど巻き込まずに主葉根元などに付く。包み込み技法である。539とは異なり、周縁上にも離れ砂が付着している。

丹波産軒平瓦（542～548）542・543・545・548は平瓦を造った後、平瓦の一方の端部を折り曲げて瓦当面としている。顎部から平瓦凸面にかけて、縄目叩きが行われている。一部のものには顎部に横ナデ調整をするものもある。凹面は布目が残る。543と545の凹面は布目の上から板状工具でケズリを行う。542～544は中央に背向C字文を配し、唐草文が両端に向かって3転する文様を持つ。主葉は大きく強く巻き込み、支葉は巻き込み方が小さい。主文様を圏線と珠文が囲む。542の凸面は縄目叩き後にユビナデを施す。範を押した後、凹面との境目を面取りした際に、珠文と圏線の一部を削り取る。544のC字中央には上下2段に支葉が配置されている。

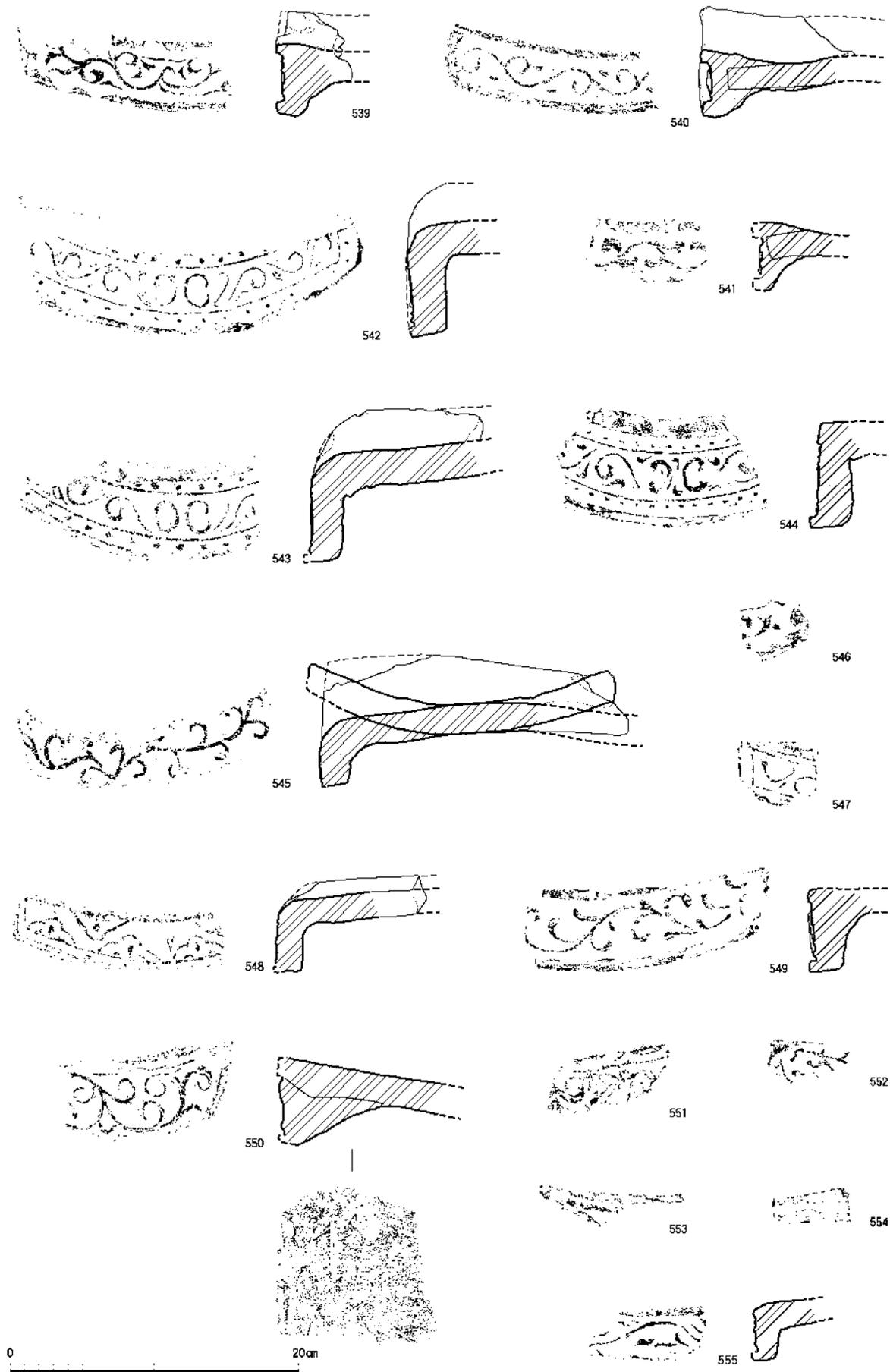


图 64 1区出土軒平瓦拓影·实测图1 (1:4)

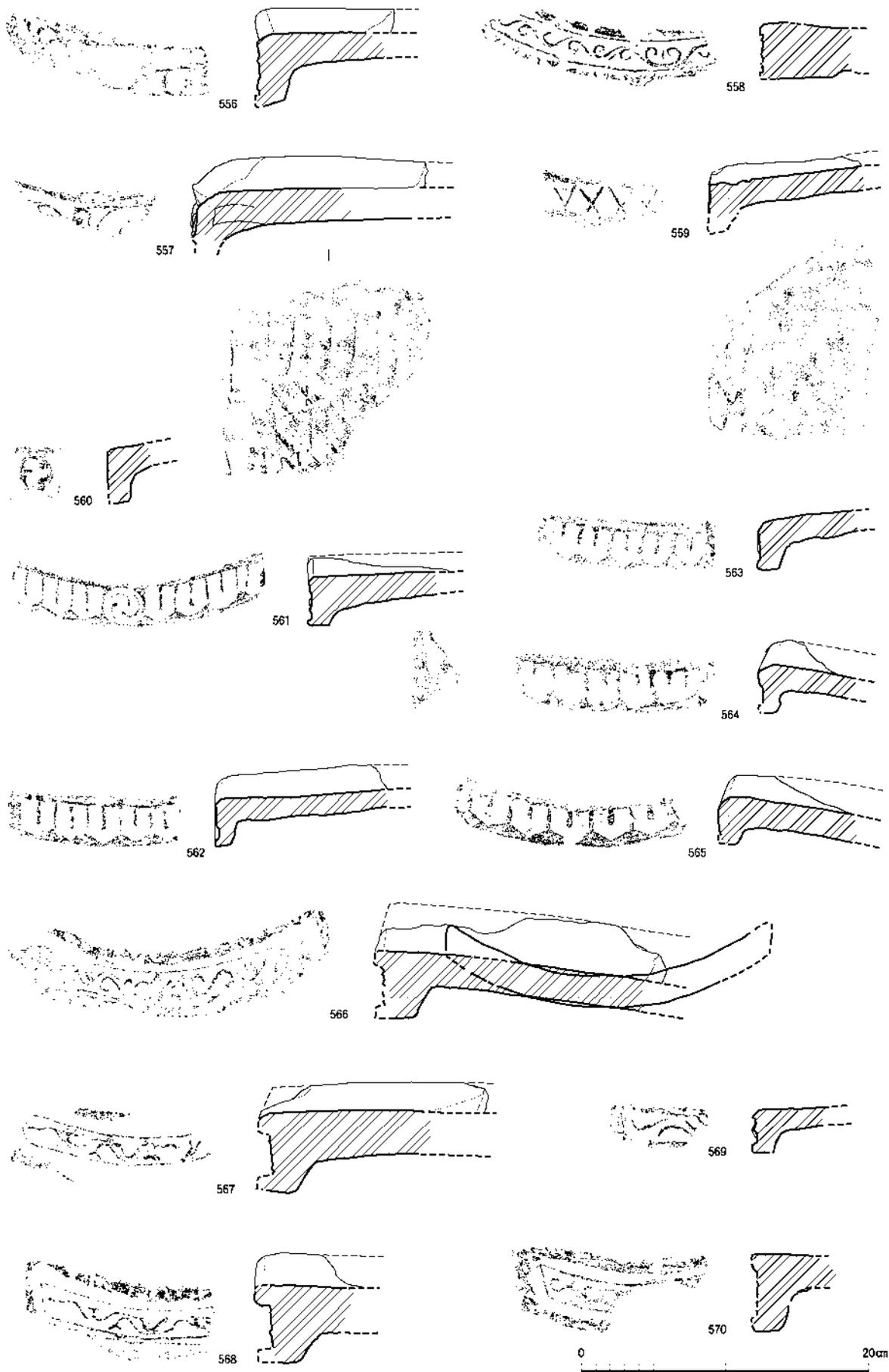


图 65 1区出土軒平瓦拓影·实测图 2 (1 : 4)

545 は唐草文が両側に展開する。主葉も支葉も連続しながら大きく巻き込む。平瓦側面に布目圧痕が残る。546 は唐草文の端部、珠文の部分だけが残る破片である。547 は唐草文の端部片である。文様は各单位ごとに分裂している。大きく巻き込む主葉と、V字状に変形した支葉を圏線が取り囲む。548 は半截宝相華文が上下に対向して配置され、中心で花頭形を軸にして文様を反転する。凹面との境目を横ケズリして面取りする。

山城（京都）産軒平瓦（549～557・559～566・569）平瓦に粘土を貼り付けて顎部を造る。顎部上部は端まで布目圧痕が認められる。

549 は左に向かって2転する唐草文で、主葉と支葉がわずかに巻き込み、拳のような蕾が付く。鏝面と凸面を横ナデする。550 は右に向かって2転する唐草文で、主葉は瓦当面の縦幅を使って大きく巻き込む。支葉も強く巻き込む。蕾が付く。顎部を横ケズリ、凹面を頭部が鋸歯状になった工具で縦ケズリ調整を行う。551 は瓦当面の大半が剥離しているが、唐草文の主葉と支葉が巻き込んでいることを確認できる。顎部と凸面は横ケズリ調整である。552 は左端から右に向かって小さい主葉が連続して巻き込む文様を配置すると考えられる。553・554 は唐草文である。555 は緩やかに主葉が反転する唐草文で、菱形になった支葉が主葉に平行して配置されている。中心飾りは蓮華文と考えられる。556 は中央から両端に向かって反転する唐草文である。文様が磨滅している。顎部と凸面は横ケズリである。557 は唐草文である。平瓦裏面に斜格子の叩き目が明瞭に残る。

559 は斜格子文を持つ。凹面は布目圧痕を残し、凸面は横ナデ、顎部は横ケズリ、平瓦側面はケズリである。凸部に「ハ」の字を横にしたヘラ記号が認められる。560 は三巴文が押されているが、欠損しているため詳細は不明である。範は浅い。顎部を横ケズリ、裏面をユビナデする。561 は中心飾りに三巴文を配し、両側を剣頭文が埋める。凸面にX字のヘラ記号が書かれている。瓦当上部をケズリで面取りし、顎部を横ケズリ、凸面をユビナデする。562～565 は剣頭文である。瓦当面に布目圧痕が認められるのは、562・563・565 である。565 以外は瓦当上部を削って面取りする。顎部は横ケズリ、顎部裏面は横ナデ、ユビナデ、凸面はユビナデである。563・564 は凸面に縄目叩き圧痕が認められ、564 は山形のヘラ記号が描かれている。

566 は各单位が離れて反転する唐草文である。高い周縁が取り付く。主葉、支葉共に山形を為して大きく巻き込む。凹面は布目圧痕を残し、顎部を横ケズリ、顎部から凸面にかけて縦ケズリを行う。鎌倉時代の瓦と考えられる。569 の中心飾りは蓮華文になり、唐草が2転する文様をもつと考えられる。各单位は分離している。凹面と周縁上に布目が認められる。顎部横ケズリ、凸面ユビナデである。室町時代と考えられる。

559 は平安宮から同文が出土している。

その他の産地の軒平瓦（558・567・568・570）558 は3転する唐草文である。主葉、支葉共に強く巻き込み、周りを圏線が廻る。段顎である。凹面は端部まで布目圧痕が残り、顎部は横ケズリ調整を行う。文様から南都系と考えられる。

567・568 は大和産の鎌倉時代の瓦である。唐草文で、同文様である。中央の飾りは不明であるが、

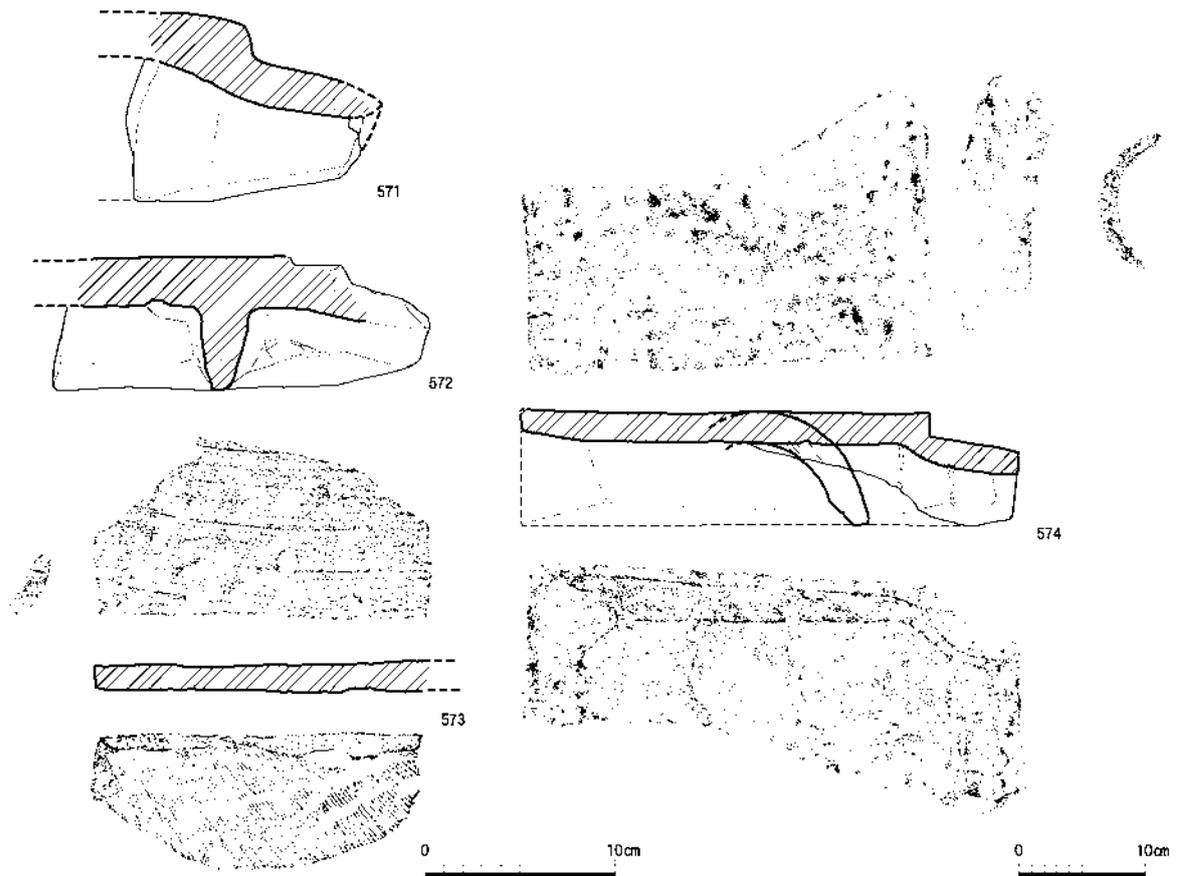


図66 1区出土丸瓦拓影・実測図（1：4、574のみ1：6）

唐草が緩やかに3転し、直線になった支葉と蕾のようなものが認められる。凹面と周縁上に布目があり、瓦当上部を横ケズリして面取りし、顎部を横ケズリ、顎部裏面を横ナデ、凸面を縦ケズリする。570は2転以上の唐草文である。主葉と支葉が強く巻き込む。室町時代前期に相当する、大和で製作された瓦と考えられる。

丸瓦・平瓦・塼（図66・67、図版30）

丸瓦（571～574）571以外の産地は、山城と考えられる。571・572・574は玉縁部分が残っており、572には半月形の返しが凹面茎附近に付く。571は奈良時代の瓦と考えられる。凹面に布目圧痕が認められる。572は室町時代の瓦である。凹面布目、凸面縦ケズリ調整である。573・574は鎌倉時代から室町時代の丸瓦である。573は凸面を縄叩き後ケズリ、凹面を斜め方向に削る。端部に「＝」のヘラ記号を書く。574は茎の端部に花文の刻印が押されている。凸面は縄目叩き後平滑に削られ、凹面には布袋の痕跡とケズリ痕跡が認められる。凹面の吊り紐痕は4段あり、波線状である。

平瓦（575～579）575～579は凸面に特徴的な叩き板を使用している平瓦である。凹面はすべて布目である。577の凹面は布目の上を板状工具でなでる。575は斜格子文、576は市松文様、577は米字状の文様、578は花文、木葉文、雲文をセットにした文様、579は三の字と3本の弧線を組み合わせた文様を彫り込んだ叩き板を使用している。575～577は叩き板の単位が、3・2・3と確認することが出来る。575～577・579は平安時代末から鎌倉時代にかけて造られたもの

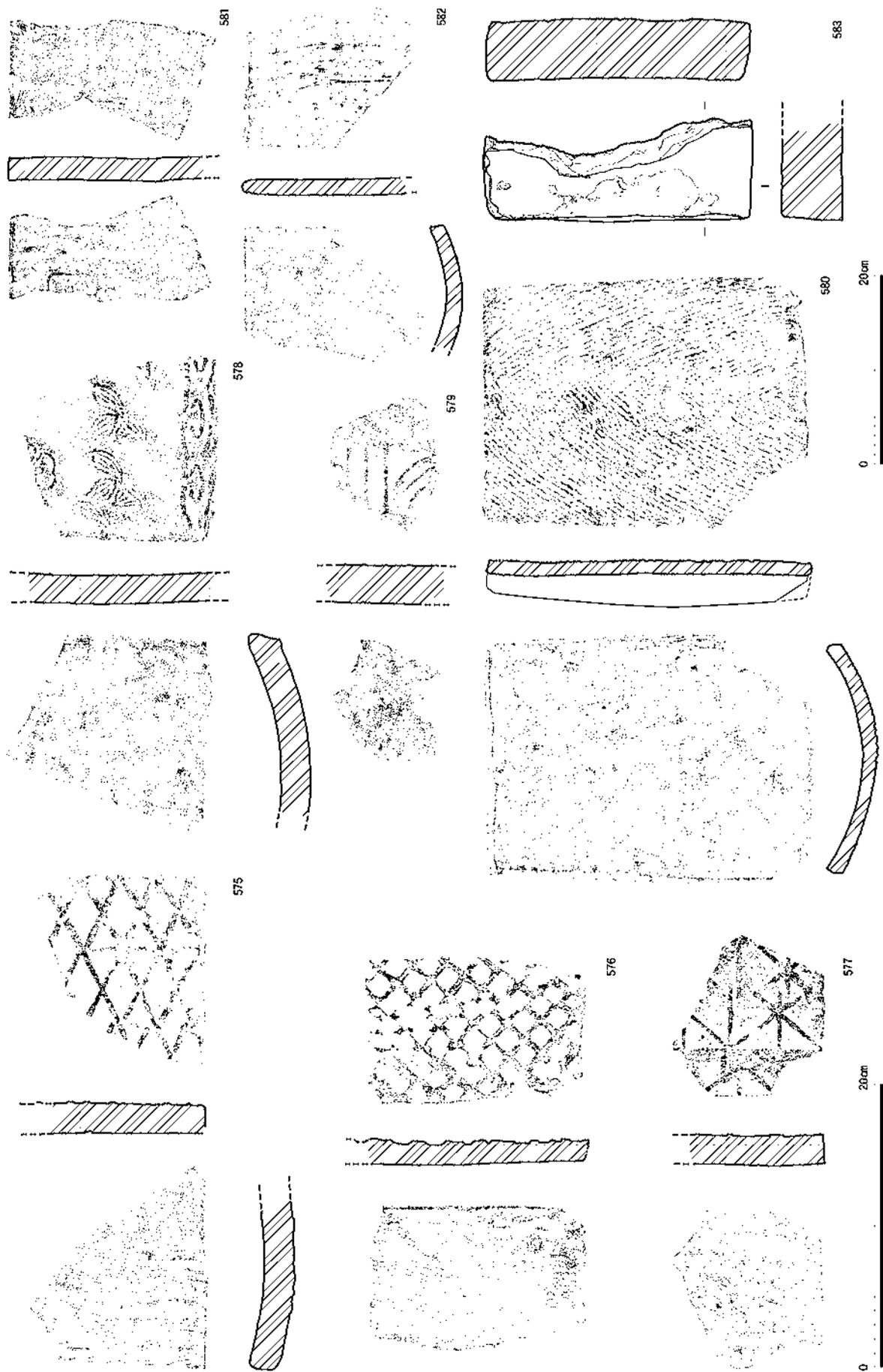


图 67 1区出土平瓦·埴拓影·实测图 (1:4、1:6)

と考えられる。578 は東寺灌頂院を解体修理した際に確認された平瓦に酷似しており、建久年間から建長年間（1190～1256年）の瓦と考えられている²⁾。灌頂院の瓦には花文が見えないが、木葉文や雲文は同一のもので、配置も同様である。現在、この瓦は灌頂院の屋根の上に戻されており、実見できるものとしては当遺跡出土の578 だけである。

580 は凸面が斜め縄叩き、凹面が布目の瓦で、端面を丁寧に削る。讃岐産と考えられる。

581 は凹面に四角く囲んだ「東大寺」銘が刻印された平瓦である。凸面はケズリ、凹面は布目が残る。厚みが分厚く、良く焼けている。

582 は上部端面を土器の口縁のように丸くなで、側面を真っ直ぐに切り落としている。凸面は縦ケズリ、凹面は離れ砂が認められる。端面に自然釉が発生し、須恵質であることから、須恵器生産を行っていた窯の工人によって製作されたと考えられる。播磨産である。

埴（583） 583 は約6cmの厚みを持つ瓦埴である。表裏面・側面を削る。寺院に使用されていたものと考えられる。

2) 2区出土の瓦類

軒丸瓦（図68、図版30）

播磨産軒丸瓦（584～588） 584 は複弁八葉蓮華文である。盛り上がった中房に1+4の蓮子を配し、それを太い圈線で囲む。蓮弁は互いにくっ付き、三角形の間弁が連続して施文される。顎部は丸く面取りされている。瓦当側面は横ケズリ、瓦当裏面はユビナデ、丸瓦上部は縦ケズリ、

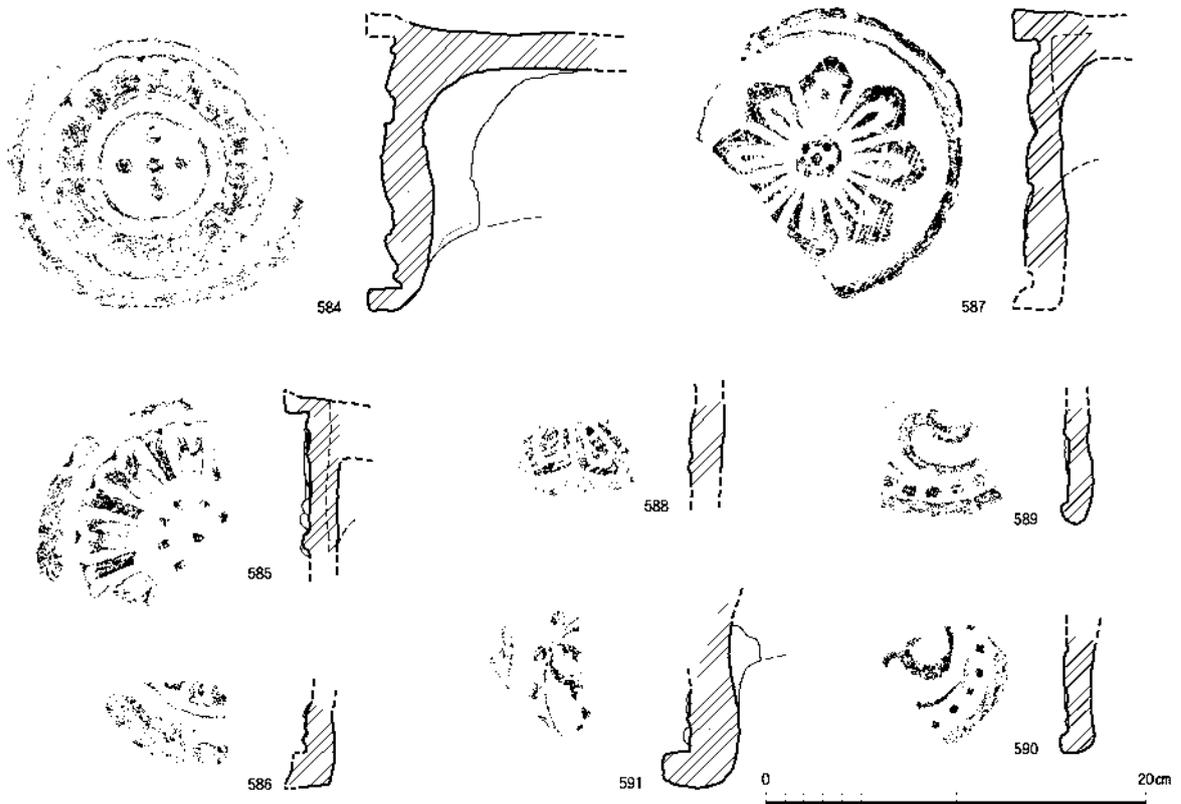


図68 2区出土軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

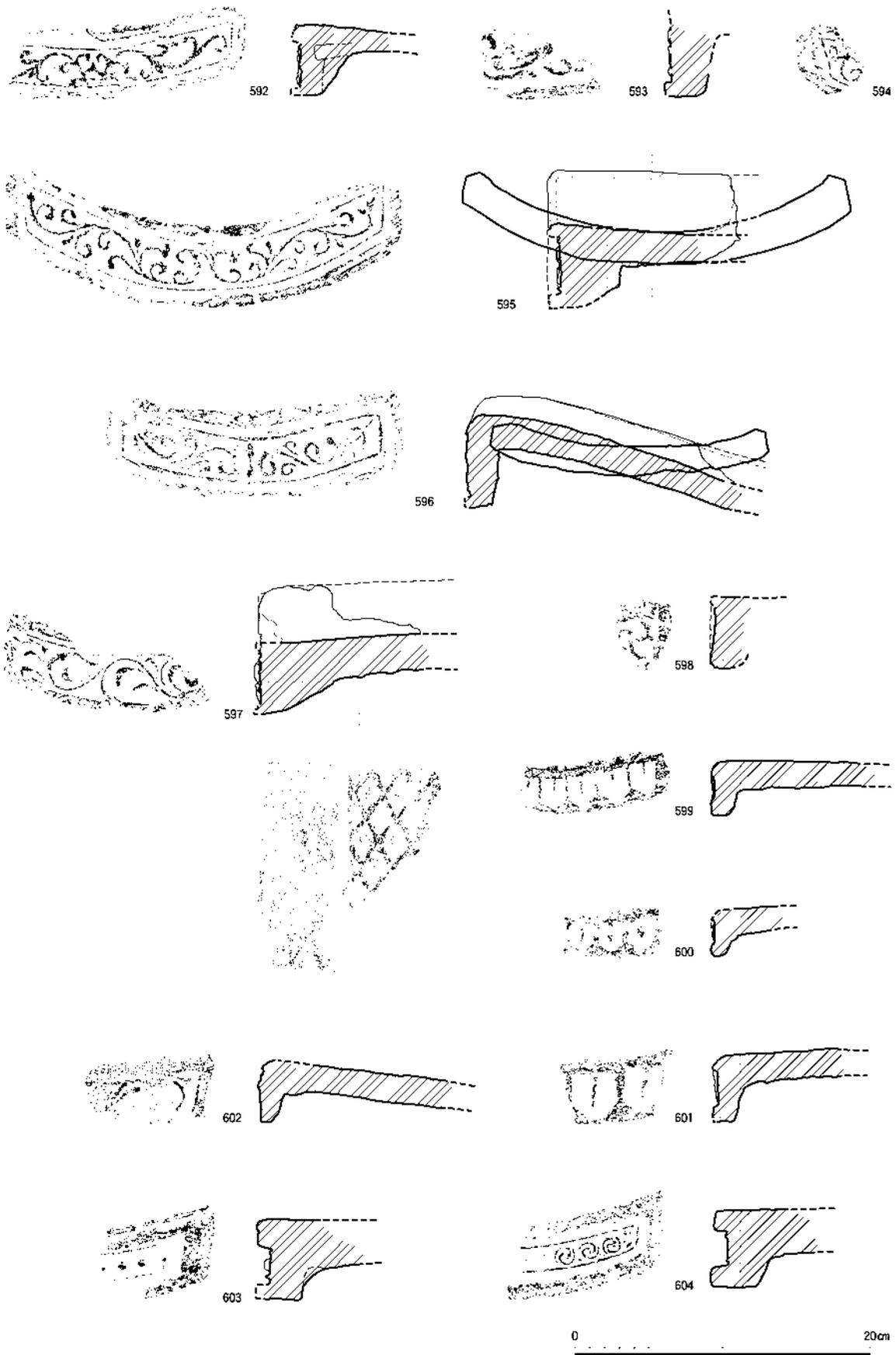


图 69 2区出土軒平瓦拓影·实测图 (1:4)

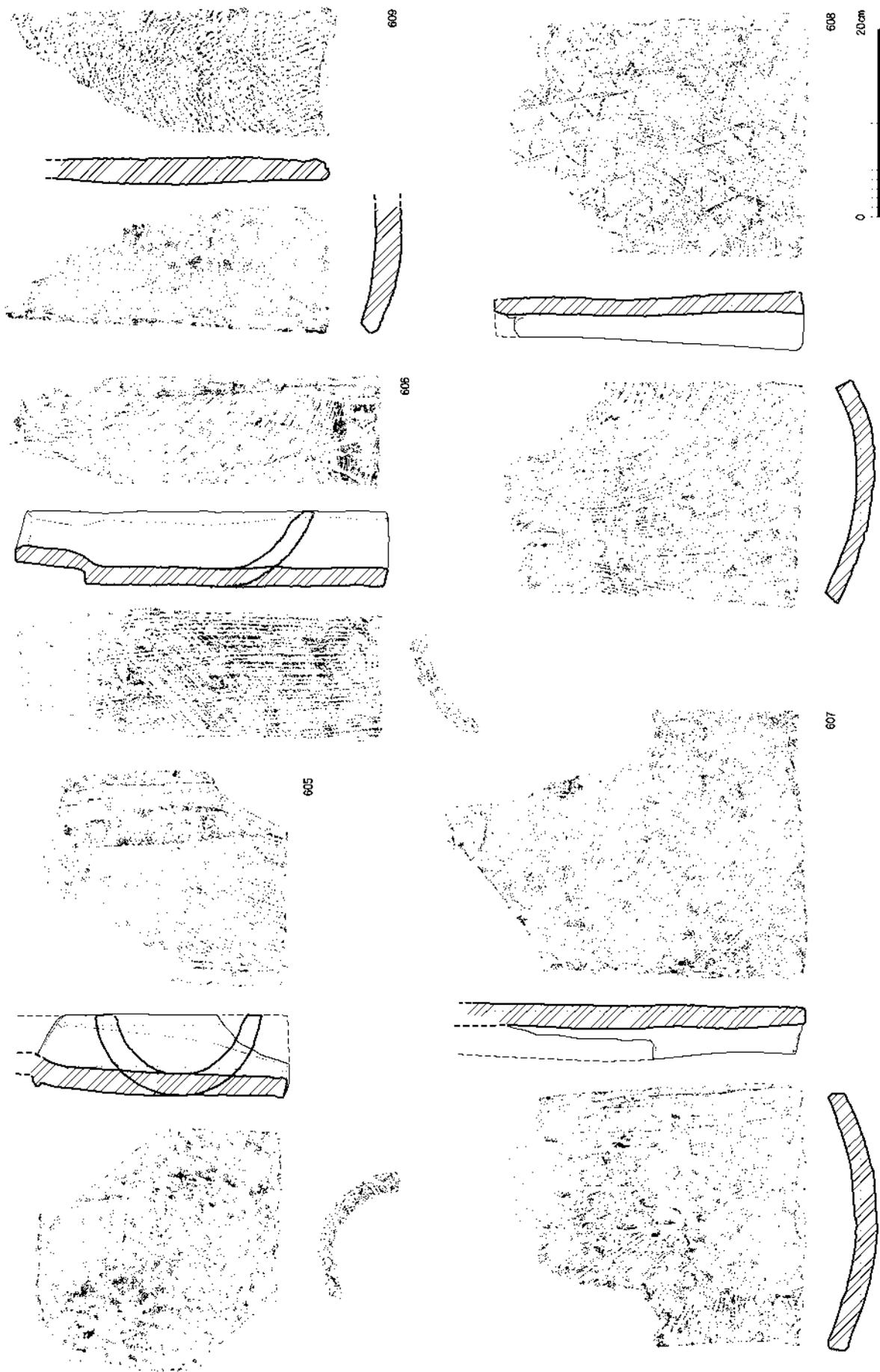


图 70 2区出土丸瓦·平瓦拓影·实测图(1:6)

丸瓦内面は布目を残すケズリ調整である。585は単弁の蓮華文で、独立した蓮弁間に間弁が配置されている。中房に1+6個以上の珠文がある。瓦当面は平坦である。瓦当側面は横ナデ、裏面は布目を残すユビナデである。586は複弁蓮華文に圏線が廻る文様を有すると考えられるが、細片であるため詳細は不明である。587・588は剣頭状の蓮弁を持つ単弁八葉蓮華文である。587の子葉頭部は丸いが、588の子葉頭部は蓮弁同様尖り、花卉も角張る。587の范の彫りは深い。587は中房に1+4の珠文を持つ。瓦当側面は横ケズリ、裏面はユビナデである。

587は法勝寺から同文瓦が出土している。

山城(京都)産軒丸瓦(589・590) 589・590は三巴文軒丸瓦で、巴頭部がくっつく。尾は長く引かない。珠文が廻る。

河内系軒丸瓦(591) 591は密教の仏具として知られる独鈷から派生した褐魔文に、圏線と珠文を廻らしたものである。

軒平瓦(図69、図版31)

播磨産軒平瓦(592～594) 592は中心飾りが対向C字の下半分がくっ付き、その根元から左右に2転する唐草文である。主葉は緩やかに、支葉は強く巻き込む。蕾が支葉の付け根に付く。凹凸面・瓦当側面は横ケズリである。包込み技法である。593は大ぶりの唐草文になると考えられる。594は主葉と支葉が強く巻き込む唐草文である。包込み技法で、瓦当面との接着を良くするために、平瓦端面に傷をつける。

丹波産軒平瓦(595・596) 595は背向C字文を中心に、左右に緩やかに2転する唐草文が展開する。支葉は強く巻き込み、蕾が付く。折り曲げ技法ではないが、文様や凸面の縄目叩きから丹波産とした。凹面は布目、顎部瓦当側面は縦ケズリ、裏面側・凸面は横ケズリ調整である。596は中心飾りに水滴を縦方向に2つ重ねたような葉と両端から3転する唐草文を配する。独立した主葉と支葉が山形を為して巻き込む。凹面布目、瓦当側面と裏面は横方向の縄目、凸面は縦方向の縄目叩きである。瓦当裏面に工具を押し引いた痕跡が認められる。

山城(京都)産軒平瓦(598～603) 598は唐草文であるが、三巴文のように頭部が集まっている。

599～601は剣頭文である。凹部は布目、顎部・凸部はユビナデまたは縄目叩きである。599・601には瓦当面に布目圧痕が認められる。599の凹部には、沈線に45度の角度から2本の平行沈線を描くヘラ記号が認められる。602は唐草文である。瓦当上部と凹面に布目が残る。603は鎌倉時代に寺院が修復された際に大量製作されたとされる、珠文が主文様になっている瓦である。凹凸面は縦ケズリ、顎部・顎部

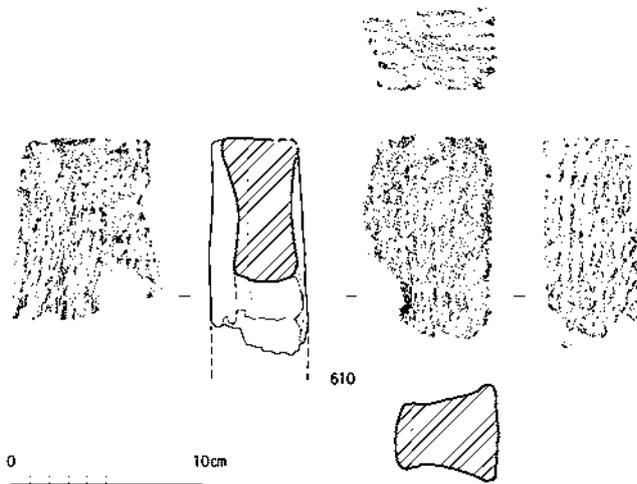


図71 2区出土磚拓影・実測図(1:4)

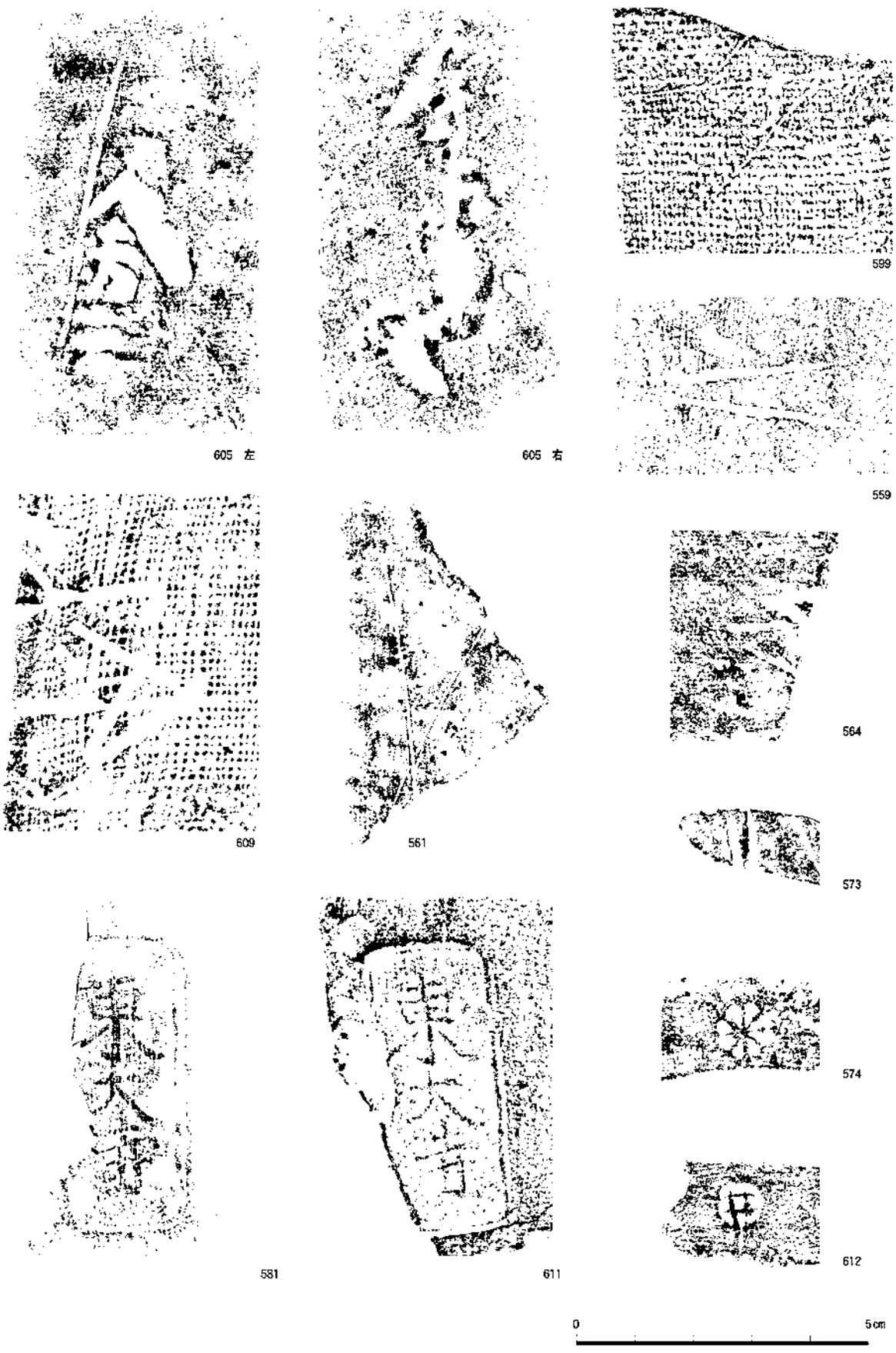


图 72 刻印瓦拓影 (1:1)

裏面は横ケズリ調整を行う。

その他の産地の軒平瓦（597・604） 597 は2 転する唐草文である。主葉が大きく巻き込み、支葉は巻き込まない。中心に向かって主葉の一部が巻き込む。顎部は角が無く、丸みを帯びる。凹面は布目、顎部は横ナデで、凸面に斜格子の叩き目が残る。産地は不明である。

604 は二巴文が3 つ一組で配置する文様構成であると考えられる。周りを圏線が囲む。凹面は布目、顎部は横ケズリ、顎部裏面から凸面にかけては縦ケズリである。鎌倉時代のものである。

丸瓦・平瓦・塼（図 70・71、図版 31）

丸瓦（605・606） 605 は玉縁部分が欠損している。凸面をケズリ、凹面を布目後斜めに削る。凸面には「金□」というヘラ描きが2 箇所に見られるが、文字の半分が不明瞭であるため、正確に読み取れない。606 は凸面に縄目とケズリ痕、凹面に布袋圧痕とケズリ痕が認められる。605・606 は山城産と考えられる。

平瓦（607～609） 607 は凹凸面ケズリ、608 は凸面を斜格子の叩き板を使って叩いた後に削る。凹面も削る。607・608 共に凹面ケズリ痕の下に布目が見える。609 は凸面に斜め縄目叩き、凹面に布目が認められる。609 の凹面端面近くには矢印状のヘラ記号が描かれている。

塼（610） 610 は両面と側面に縄叩き痕を残す。中央に孔を開ける。両面中央が窪む。平安京左京八条三坊から同様のものが出土している³⁾。鉄筋コンクリート造りの建物と同じ使用方法であったと考えられ、寺院の壁などに使用された壁材と考えられる。

3) ヘラ記号と刻印（図 72、図版 31）

ヘラで文字が書かれているものは 605 のみである。残りは、X 字、ハ字が横に寝たもの、→、＝、W 字などの記号であり、軒平瓦を先頭に丸・平瓦に描かれている。配置や向きなどに規則性は認められない。

刻印は「東大寺」を四角く囲んだもの 2 点と花文、井桁文である。「東大寺」印は同一のものが使用されたようである。574 は 612 よりも印影が浅いことから、製作後に胎土の硬化が進んでから押されたと推測できる。611 は平瓦凹部、612 は平瓦端面に押されていた。

（4）木製品

1) 1 区出土の木製品（613～694）（図 73～79、図版 32～37）

平安時代後期から室町時代後期にかけての木製品は、井戸枳材を中心に箸や人形、下駄、建築部材など、江戸時代の木製品は漆塗りの桶蓋が出土している。

613～649 は井戸 614 の井戸枳材である。材質はすべて檜が使用されている。613～624 は縦板材として使用され、内側に組まれていた横棧材の痕跡が残っている。625～637 は横棧材、638～649 は横棧材を支える四隅の支柱材である。特徴のない限り井戸の内側面を実測し、支柱材については縦板材と接する面（北東・北西隅：支柱材の北面、南東・南西隅：支柱材の南面）

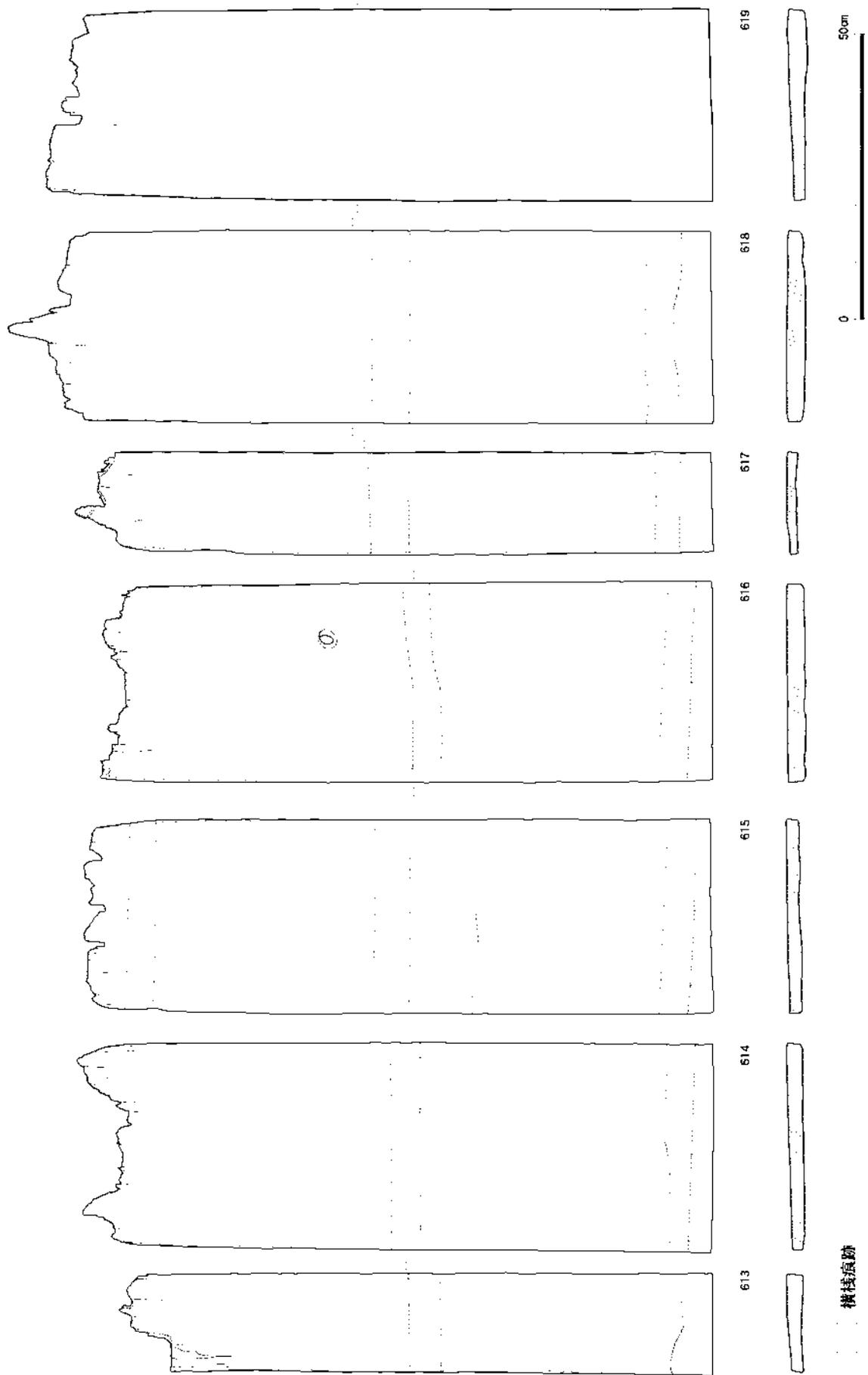


图 73 1区井戸 614 木杵実測图 1 (1 : 10)

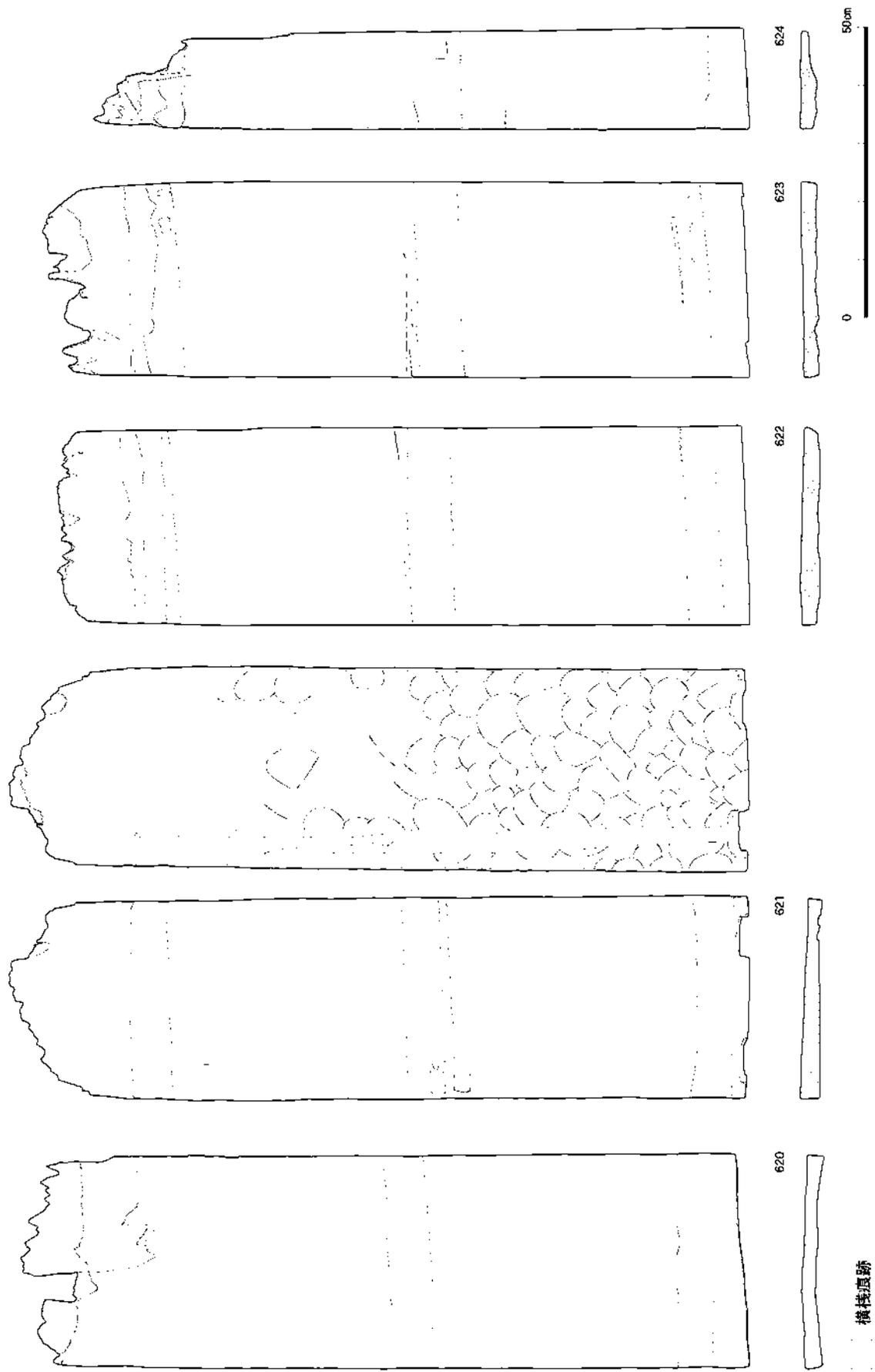


图74 1区井戸614木梓実测图2 (1:10)

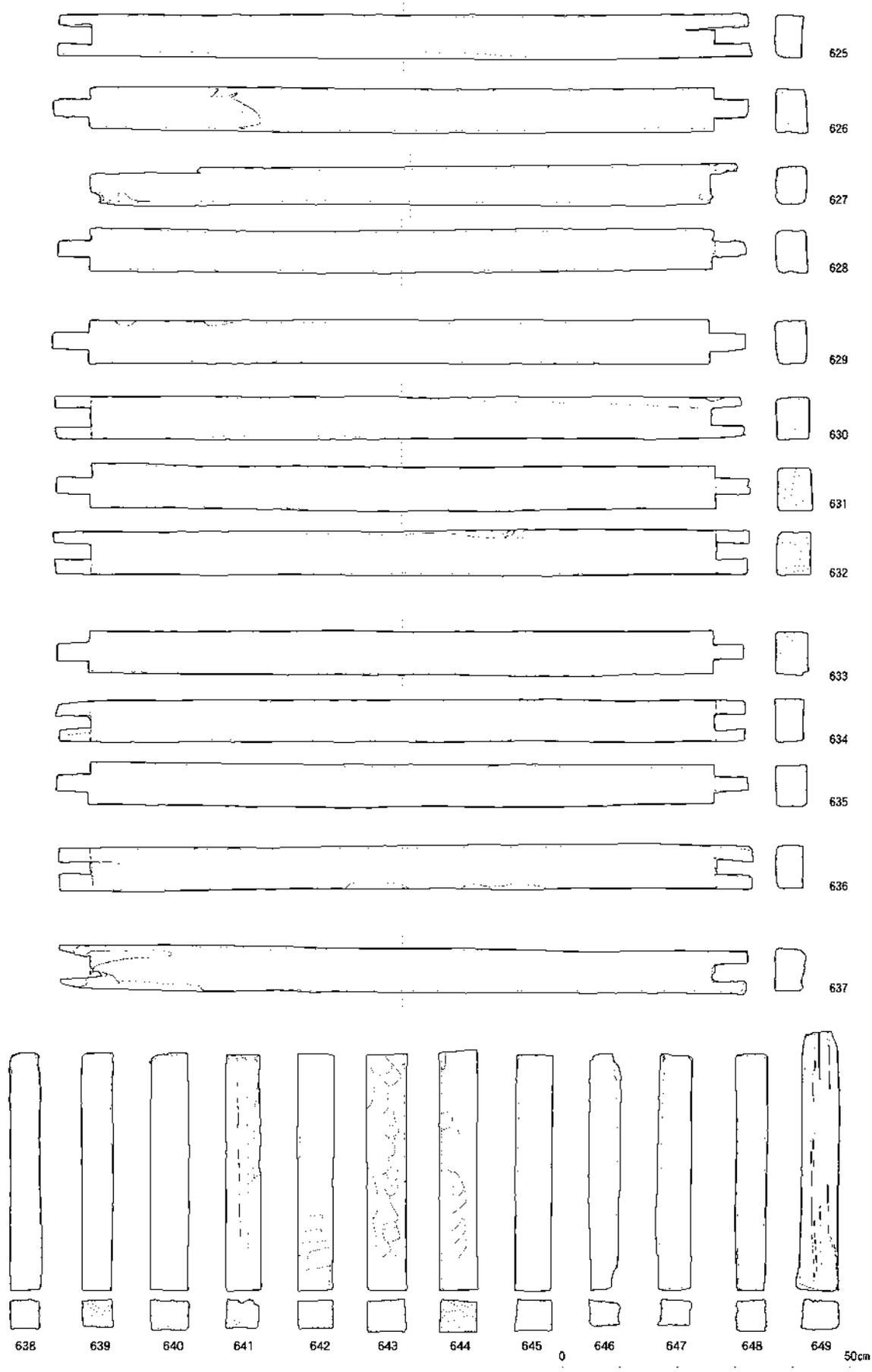


图 75 1区井戸 614 横棧・支柱実測図 (1 : 10)

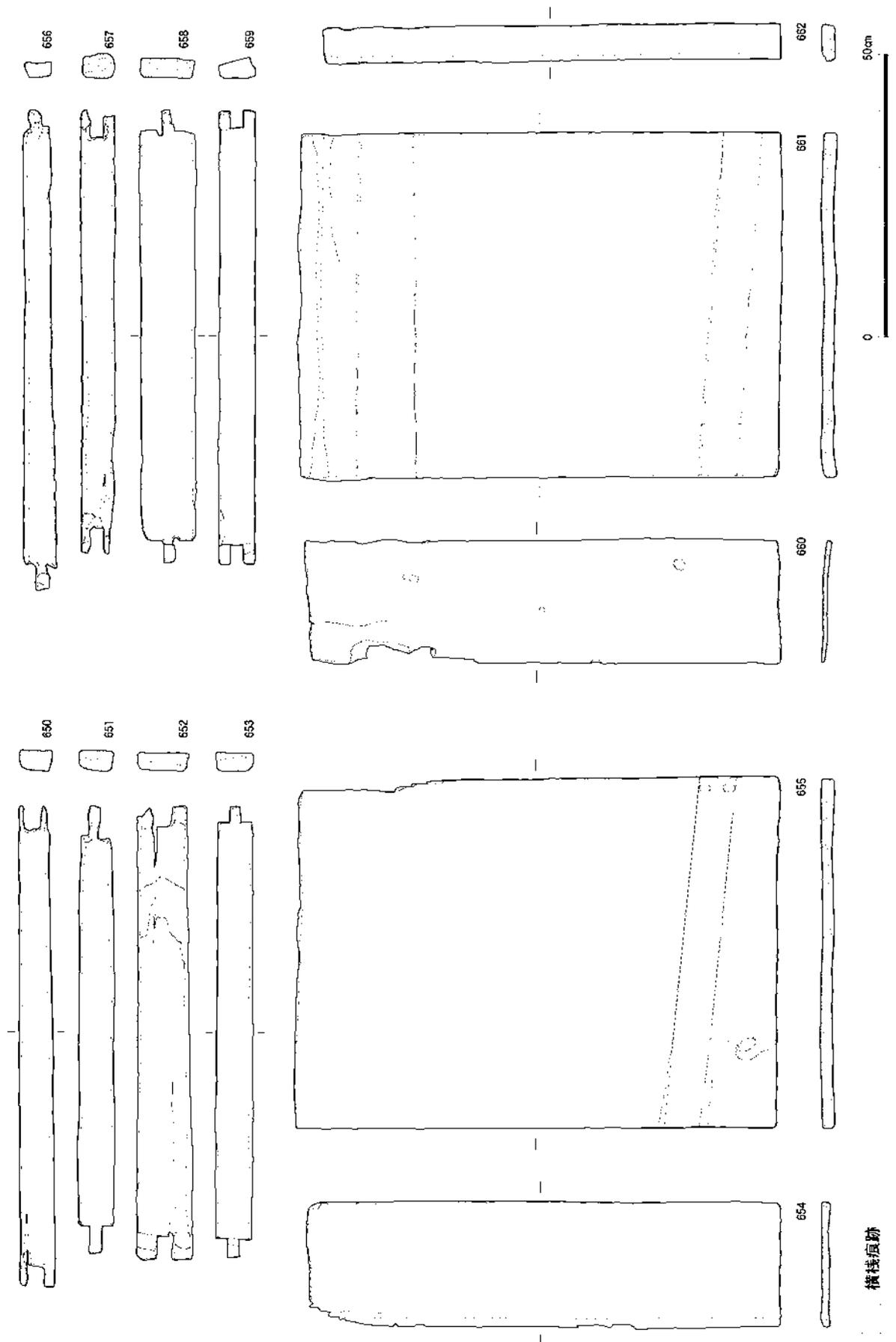
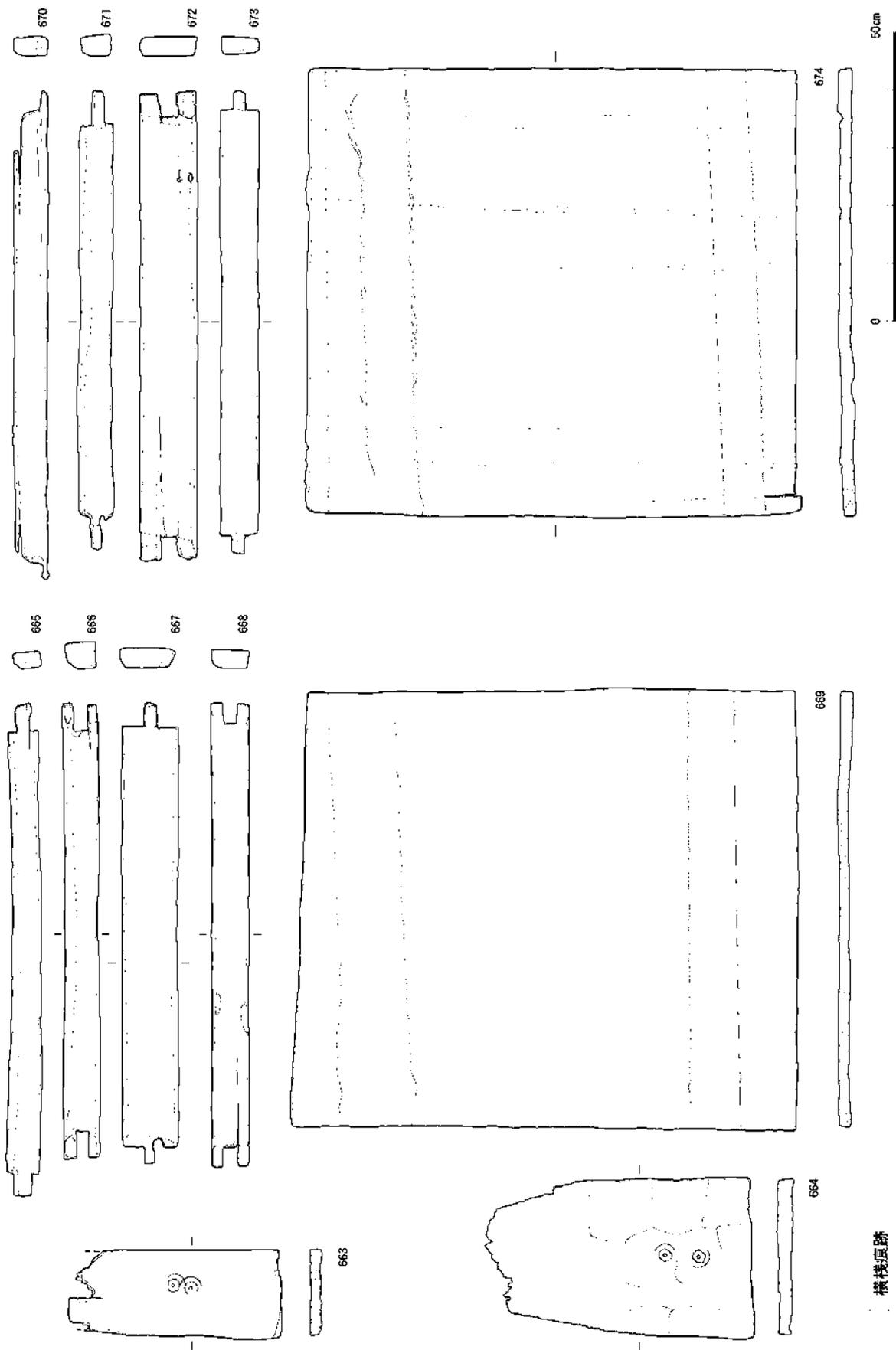


图76 1区井戸75木柁・横棧実測图1 (1:10)



横棧痕跡

图 77 1区井戸75木枠・横棧実測図2 (1:10)

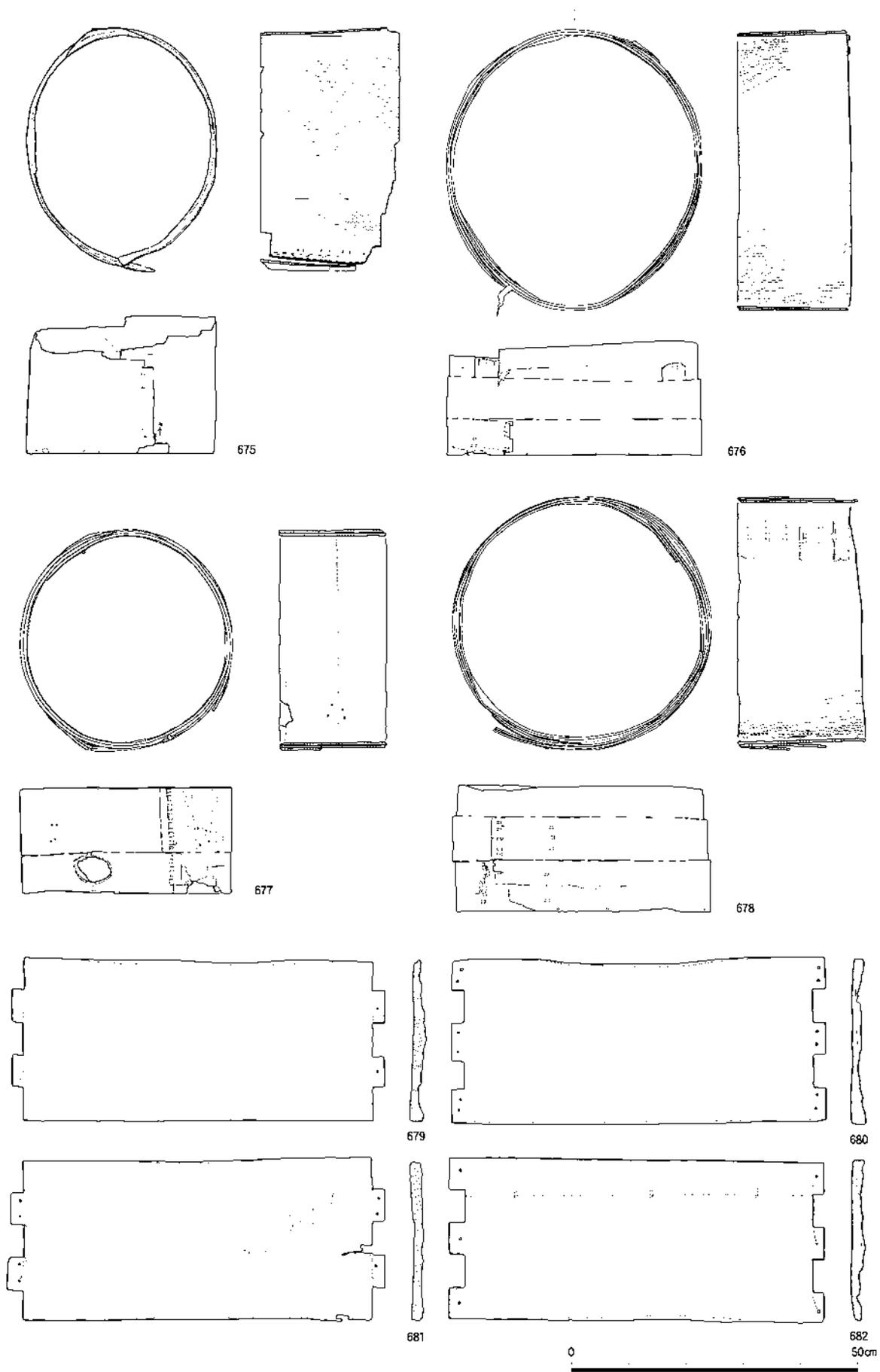


图 78 1区井戸 614・58・452・317 曲物、井戸 119 木柁実测图 (1 : 10)

を実測した。縦板材の番号は北西の隅から時計回りに、横棧材の番号は北の上段から時計回りのち中段から下段に、支柱材は北東の隅上段から時計回りのち中段から下段に付けた。637・646～649は井戸底の曲物内から出土しているため、位置・内外面は不明である。実測した面は任意である。

613～616は北壁、617～619は東壁、620は南壁、621～624は西壁に使用されていた。板材の幅には3通りあり、幅の狭い613・617・624は約18cm、標準サイズと考えられる614～616・618・619・621～623の幅は約34cm、最も広い620は約37cmである。厚さは2.5～3cm内に納まる。残存長は100～125cmであるが、曲物内出土の横棧材・支柱材の存在から、もう1段横棧が組まれていたことが判明し、推定長150cm前後になると考えられる。どの板材も上端部は腐食し、井戸の内側面は横棧材以外の痕跡はほとんど認められない。土と接していた外面については、数枚の板材に調整痕が明瞭に残っていた。621の外面は上部から下部にかけて手斧と考えられる工具で荒く削った調整が行われている。また、この板材の下端部には、横約8cm、縦0.5～1.5cmの凹型の割り込みが2箇所穿たれている。もとは完全な孔であったと考えられることから、原木を綱や縄を通して引っ張るための孔であった可能性が高い。同様の凹型加工痕が623の外面下端部にも認められる。

625～628は上段、629～632は中段、633～636は下段に組まれていた横棧材で、長さ約120cm、幅5～6cm、厚さ7～7.5cmの角材である。材の両端部を凹型に加工したものと凸型に加工したものがあり、組み合う部分は直角になるように丁寧に材が切り取られている。どの面にも明瞭な調整痕は認められなかった。

638～641は上段、642～645は下段の支柱材である。横棧材の上中下段それぞれの間に、四隅を支えるために立てられていた。長さ約42cm、幅約6cm、厚さ約5cmの角材である。表面の腐食が著しく、調整痕は認められない。

650～674は井戸75の井戸枠材である。650～655は南壁、656～664は西壁、665～669は東壁、670～674は北壁に使用されていた。横棧材は上段から下段に番号を付け、南壁と西壁の縦板材は東から時計回りに番号を付けた。井戸の内側面を実測し、掲載している。

650～653・656～659・665～668・670～673は横棧材であり、両端部を凹型に加工したものと凸型に加工したものがある。すべて檜を使用している。井戸の内側を向いている材の角は面取りされているため、丸くなっているものと、断面形状が台形を呈しているものがある。650・656・665・670は長さ85～86cm、幅5～6cm、厚さ2.5～3.5cmである。これらの材は、この井戸に使われていた横棧材の中で最も長く、凸凹部を除いた長さと669や674の上部縦板材幅が約77cmとほぼ揃っている。遺構立面図(図20)からもわかるように、下部の縦板材を内側に倒れ込むのを防ぐために使用されていたものではなく、663や664の上部縦板材の倒れ込みを防ぐ目的で組まれたものであるため、下部縦板材幅と横棧材の長さが揃えられたと考えられる。651～653・657～659・666～668・671～673は、長さ79～81cm、幅5～10cm、厚さ3～4.5cmである。上から3段目の幅が約10cmと広い。調整痕は不明瞭である。

663・664は西壁井戸枠上部縦板材である。663は残存長37cm、幅15cm、厚さ2cm、664は残存長46cm、幅28cm、厚さ3cmである。井戸の内側面は腐食が著しいため、調整が不明瞭であるが、土層と接している外面は荒い手斧の調整痕が認められた。また、外面には、径3.6cmの円内に亀甲文とその中心に隅丸方形文を配する刻印が刻まれている。663は半分消えかけた2つの刻印が重なって彫られている。664は2つの刻印が3cm程離れた位置に刻印され、それぞれ外周円が半分消え、亀甲文の一部も消えている。断面が三角形を呈する三角刀のような工具で彫り込まれたと考えられる。他の上部縦板材には、刻印は認められなかった。

654・655・660～662・669・674は下部縦板材である。すべて杉が使用されている。654・660は長さ約82cm、幅21.5～23cm、厚さ1～1.5cm、655・661は長さ約83.5cm、幅60～62cm、厚さ約2cm、662は長さ80cm、幅6cm、厚さ2cm、669・674は長さ82～86cm、幅約77cm、厚さ約2cmである。表面の腐食が著しいため調整は不明であるが、内面に横材が当たっていた痕跡が残っていた。

675～678は井戸底に据えられていた曲物である。

675は井戸614の底に据えられていた上下2段のうちの下段である。上段は破損が著しく、実測していない。高さ24cm、厚さ約0.4cmの板材を一重に巻き、桜皮で留めて直径約35cmの大きさに仕上げている。板材を曲げ易くするための加工として、内面に縦方向の細かい何筋もの切り目を入れた後、右上から左下にかけての斜め方向の荒い切り目を上半部に集中して入れている。

676は井戸317から出土した曲物である。厚さ0.4cmの板材3枚を重ねて巻き上げ、高さ20cm、最大厚約2cm、直径約45cmにする。内側の板材は高さ20cmあり、一周した図面左下で右前に重ねて桜皮で留める。外側上段（外観は中段に見える）の板材は幅7.5cmで、一周した図面右上で右前に重ねて桜皮で留める。外側下段の板材は幅6.5cmで、一周した図面左下で左前に重ねて桜皮で2箇所留める。内外板材の間には長さ約16cm、幅5.2～7.2cm、厚さ0.3～0.4cmの縦板材が4箇所挟まれており、図面右上と左下の板材は桜皮で曲物の板材と共に留められていた。外側上下2段のずれ落ちを防ぐための心棒として入れられたと考えられる。内面には、675同様の縦方向の細かい切り目と、左上から右下にかけての斜め方向の切り目を入れている。

677は井戸452の底から出土した。高さ18.5cm、最大厚約1.3cm、直径約39cmである。幅の異なる板材4枚を組み合わせて重ね、桜皮で留めることで、上下部が分離することを防いでいる。外側は左前で平面右下、内側は右前で平面左上附近で桜皮を返し縫いして留める。内面上段は幅8.4cm、内面下段は幅9.9cm、外面上段は幅11.5cm、外面下段は幅6.9cmの板材を使用している。内面は縦方向と斜め方向の切り目が下部を中心に入っている。

678は井戸58の曲物である。直径約45cm、最大厚2.2cm、高さ約22cm、3枚の板材を重ねて巻く。内面は幅約22cm、中央は幅約15cm、外面は幅約8.6cmで、それぞれ一周して曲物下部に高さを揃えて、図面左下で中央と外面、図面右上で内面の板材を桜皮で留める。内面は左前、中央と外面は右前である。内面は縦方向の切り目を全面に施しているが、斜め方向の切り目は一部で見られ、左上からと右上から切り込まれているため、斜格子状を呈する。曲物下部付近に釘孔の痕跡が残る。

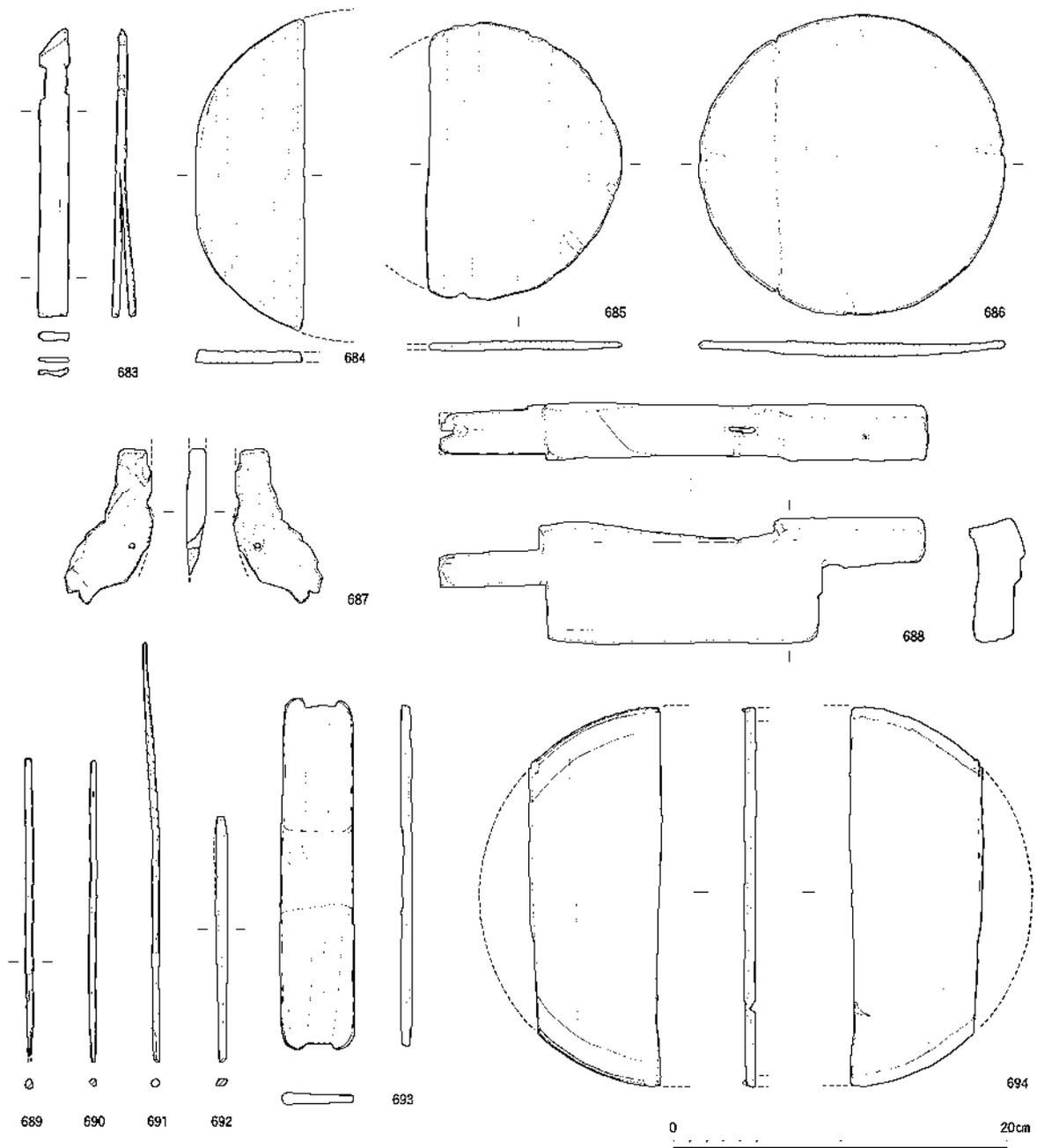


図 79 1区井戸 614・58・75・583 他出土木製品実測図（1：4）

679～682は井戸119の底で方形の井戸枠として使用されていた板材である。679は南、680は西、681は北、682は東の位置に組まれていた。長さ65cm、高さ29cmは揃っているが、厚さは土層との接触面が腐食しているため、1～2.5cmと不均一になっている。板材の両端部は、2つの凸部を持つ部材と、3つの凸部を持つ部材とに分かれ、679・681が前者、680・682が後者に相当する。隣同士の板材を直角に組み合わせ、凸部の外面から鉄釘を1本（679・682）または2本（680・681）打ち込んでいた。また、682は上から3分の1程度の部分で板目に沿って割れており、その中には木釘が3箇所打ち込まれた状態で残存していた。井戸枠を組む際に割れた板材を継ぎ直して使用したと考えられる。680の裏面に平仮名の「の」に似た記号を丸で囲んだ刻印が3ヶ所に刻まれている。

683は井戸58出土の人形である。上から約2cmのところ、両側面から5mm幅で材を切り取り、顔と後頭部を表す。正面（右側面）には目と口の表現と考えられる刻みが、丸刀のような工具で彫られていた。目は幅2mm、口は幅1mmと線幅を変える。頭には三角形を呈した烏帽子を載せる。口頭部側の烏帽子上部断面を斜めに切り落とす。また、側面の下から8.5cm付近まで縦に裂いて、脚を作り出す。長さ17.4cm、幅1.4cm、頭部の厚さ0.35cm、胴部の厚さ0.5cm、脚部の側面最大幅1.4cmである。

684～686は曲物の底板である。684は井戸614、685・686は井戸75から出土した。684は推定径20cmである。厚さ0.8cmで、端の部分を斜めに切り落としている。685は厚さ0.7cm、直径17cmである。端部は丸くなっている。686は直径18.2cm、厚さ0.5～0.8cmで、対称になる位置に打ち込まれた4本の釘穴を確認した。685・686の調整は不明瞭であるが、686の表面には工具痕と考えられる木目に対して斜め方向の痕跡が残る。

687は下駄の残片である。井戸614から出土した。残存していた右側の鼻緒孔は、踵から指先に斜めに開けられている。表面の孔の直径は約0.35cm、裏面の孔の幅0.65cm、長さ1.6cmである。歯の痕跡は認められない。踵部分の断面形状が斜めになっているが、最初から切り落とされていたものか、磨り減ったものかは不明である。残存長9.3cm、残存幅5.3cm、厚さ1.2cmで、調整は不明である。

688は井戸614から出土した。長さ29cm、最大幅7.5cm、最大厚2.8cmを測る。両端部が貫になり、左側の貫には縦0.2～0.7cm、横1.2～1.7cmの縦方向の切り込みが入っている。また、右側の貫上面中央部にある釘穴は貫通し、鉄釘が打ち込まれていた痕跡が残る。本体上部左から中央を超えた辺りまでなだらかに削られ、右側で1cm程度高くなり貫に続く。上部の傾斜がなくなる辺りに長さ2cm、幅0.3～0.6cmの横断面すり鉢状を呈する穴と、これに直交して径0.3cmの釘穴が表面から1.2cmの深さまで開けられていた。上部の調整は丁寧に行われているが、他の部分はほとんど調整が加えられていない。建築部材と考えられる。

689～691は箸である。689・690は井戸75、691は井戸614から出土した。689は残存長17.9cmで下部が欠損している。最大径は0.5cmで、断面を7面に面取りする。690は長さ18.2cm、最大径0.45cmで、6面に加工している。特に下部を削って細くする。691は長さ25.3cm、最大径0.55cmで、中心は6面に削る。両端を削ぎ落として、細く加工している。

692は井戸583から出土した火付け木である。持ち手部分が先端部分よりも細く、端部もまるく加工されている。先端部分は焼け焦げて、炭化している。長さ14.9cm、最大径0.7cmである。

693は井戸75から出土した。最大長21.2cm、最大幅4.3cm、厚さ0.5～0.7cmである。両木口の中央が凹状に切り取られ、表面中央の長さ約5.2cmの窪みは丁寧に削り取られている。糸巻きと考えられる。

694は井戸614の南側を削平した攪乱墳から出土したが、江戸時代の遺物と考えられる。全面に黒漆を塗り、表面は赤漆で1.2cm幅の縁取りを施す。厚さ約0.7cmで、直径23cmに推定できる。裏面には端に0.5～0.8cm幅の漆の剥離痕跡があることから、桶の蓋と考えられる。

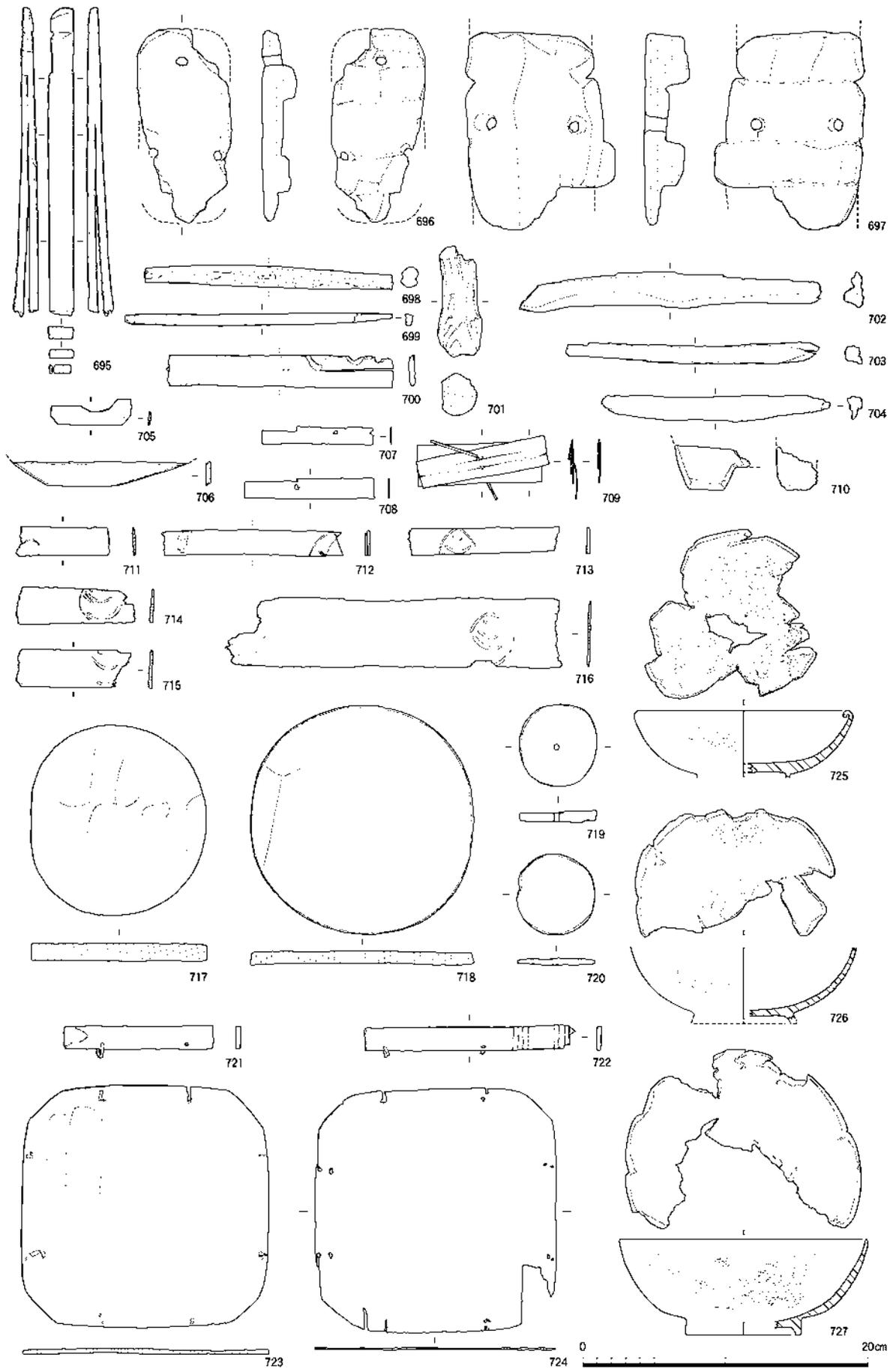


图 80 2区井戸 10 出土木製品実測图 1 (1 : 4)

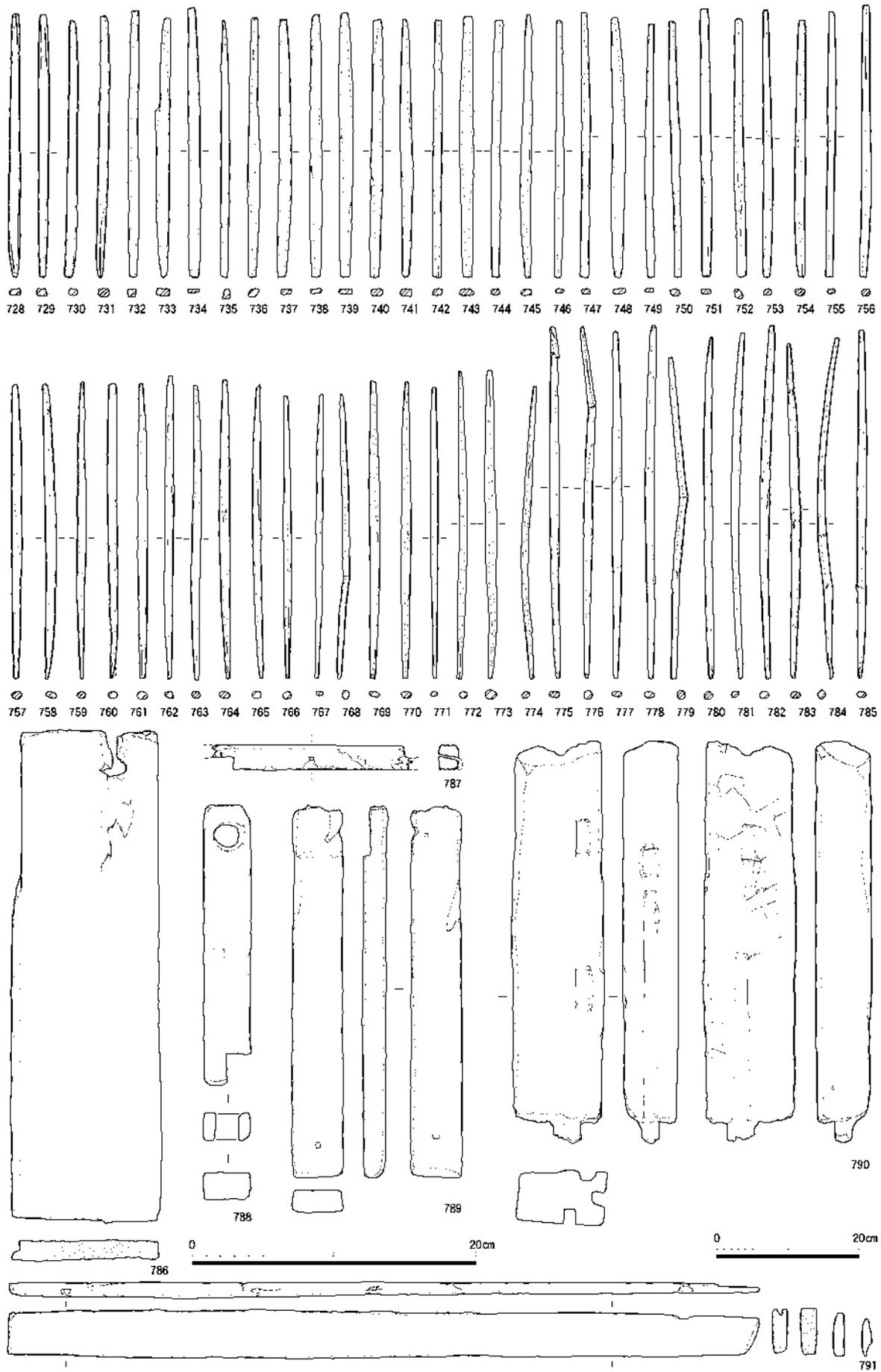


图 81 2区井戸 10 出土木製品実測图 2 (1:4、1:8)

2) 2区出土の木製品 (695 ~ 791) (図 80・81、図版 36 ~ 38)

図示した木器は井戸 10 から出土したもので、遺物整理箱で 8 箱分ある。大半は木箸で、他に折敷、曲物の底、人形、下駄、建築部材などがある。

695 は人形で、側面形で烏帽子、横顔、体部を表現しているが、片方が削られているためどちらが前面かは不明である。正面形は下部を割り裂いて二股にし、脚部を表現している。下端は切り込みをいれて折った痕跡がみられる。墨書は施されていない。長さ 19.8 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.9 cm である。

696・697 は下駄で、どちらも 2 枚の歯を削り出しており、歯は磨滅している。696 は小型の下駄で、歯と台がほぼ同じ幅で、鼻緒の孔は歯に接して開けられており、前壺は中央に位置する。697 の歯は台の幅よりも広く、外方に広がっている。696 は長さ・幅は原状を残していると思われ、長さ 13.7 cm、幅 6.6 cm、台の厚み 1.3 cm、歯の厚み 0.9 cm である。697 は前方が欠けているが、現存長 14.0 cm、幅 10.5 cm、台の厚み 1.6 cm、歯の厚み 1.5 cm である。

698 は把手で、中央に軸木を挿し込む、縦 0.02 cm、横 0.05 cm の扁平な孔が穿ってある。横方向に細かい削りで面取りをし、中央が最も太く両端がやや細くなる。長さ 17.4 cm、幅 1.5 cm、厚さ 1.2 cm である。

699 は、加工痕のある棒状の木片である。一端に浅い凹みを入れ、他端を削って尖らせたもので、柄杓の柄の可能性がある。長さ 18.7 cm、幅 0.85 cm、厚さ 0.55 cm である。

700 は板状の木製品であるが、用途は不明である。側面上面端部に半円形の抉りが 2 箇所入れている。長さ 15.9 cm、幅 2.3 cm、厚さ 0.4 cm である。

701 は木炭で、長さ 7.85 cm、幅 3.1 cm である。

702 ~ 704 は火付け木で、割木の一端が炭化しており、燃焼の痕跡を残す。702 は長さ 21.2 cm、幅 2.45 cm、厚み 1.35 cm である。703 は長さ 17.7 cm、幅 1.4 cm、厚み 1.0 cm である。704 は長さ 16.0 cm、幅 0.8 cm、厚み 0.85 cm である。

705・706 は加工痕をもつ、板状の用途不明木製品である。705 は長さ 5.55 cm、幅 1.85 cm、厚み 0.15 cm である。706 は台形を呈し、長さ 12.3 cm、幅 1.7 cm、厚み 0.4 cm である。

707・708 は加工痕をもつ、薄い板状の用途不明木製品である。四隅の一角を削り取り、1 ~ 2 孔を穿っている。707 は長さ 9.15 cm、幅 1.45 cm、厚み 0.05 cm である。708 は現存長 7.9 cm、幅 1.2 cm、厚み 0.03 cm である。

709 は、2 枚の薄板を中央に穿たれた二つの孔を通じて細い木紐で結びつけたものである。2 枚の板は、共に長さ 8.8 cm、厚み 0.03 cm であるが、幅は上の板のほうが小さく 2.2 cm で、下が 2.9 cm である。

710 は容器の方形の脚部で、断面が台形を呈する。長さ 5.25 cm、幅 3.0 cm、高さ 2.75 cm である。

711 ~ 716 は、曲物の側板で宝珠文の焼き印が押してある。いずれも断片で、長さは不明、幅

がわかるものは 4.9 cm、厚みは 0.13 ～ 0.25 cm である。

717・718 は、曲物の底板である。どちらも表面を平滑にした痕跡が認められる。717 は、径 12.3 ～ 13.45 cm、厚さ 1.25 cm である。718 は、径 15.7 ～ 16.2 cm、厚み 0.9 cm である。

719・720 は、小型の円板状の木製品である。719 は中央に径 0.4 cm の孔が穿たれており紡輪の可能性もある。長径 5.8 cm、短径 5.45 cm、厚さ 0.85 cm である。720 は小型の曲物の底と思われ、長径 5.75 cm、短径 5.45 cm、厚さ 0.55 cm である。

721・722 は、折敷の側板で、底板 723・724 と組合せになる。屈曲部は、1.8 cm の間を開けて両脇に 4 条の切り込みをいれて曲げ易くしてある。下部に 6.0 cm の間を開けて 2 箇所孔を開けて、底板と桜の皮で結合している。高さ 1.7 cm、厚さ 0.35 ～ 0.4 cm である。

723・724 は、折敷の底板である。四隅を小さく切った八角形を呈し、各辺に 2 箇所側板を結合するための 2 個一対の孔が、6.0 ～ 7.2 cm の間隔を開けて穿たれている。723 は長さ 17.45 cm、幅 17.2 cm、厚さ 0.4 cm で表面を平滑にした痕跡が認められる。724 は長さ 17.3 cm、幅 16.9 cm、厚さ 0.15 cm である。

725 ～ 727 は、内外面に黒色漆を塗った器地に、赤色漆で絵を書いた漆器の椀である。いずれもロクロ成型である。725 は、口縁の端部が内側に折れこんでいる。内面に山岳・飛鳥・樹木、外面に山岳が描かれている。高台が欠けているが、残存高 4.75 cm、復元口径 14.8 cm である。726 は、内外面に木瓜文が描かれている。残存高は 5.05 cm である。727 は、内面には黒色の漆が付着しているが網代垣と思われる絵が、外面には笹と網代垣が描かれている。器高 6.75 cm、口径 17.3 cm、高台径 7.9 cm である。

728 ～ 785 は箸で、いずれも割木を粗く削って成形し、両端は細く尖っている。6・7・8 寸（ほぼ 18・21・24 cm に相当）の 3 種類の長さがある。6 寸の箸（728 ～ 756）には、断面が多面形を呈するものと扁平なものの 2 種がある。7 寸の箸（757 ～ 774）、8 寸の箸（775 ～ 785）は 6 寸のものに比べて数が少なく、ほとんどのものは断面が多面形で、折れたものも多い。

786 は板材で、長側面の一端に継手の「相欠き」がみられる。長さ 35.05 cm、幅 10.6 cm、厚さ 1.4 cm である。

787 は両端を互い違いに相欠きした、断面矩形の棒状の用途不明木製品である。中央部に縦 0.01 cm、横 0.04 cm の扁平な小孔が穿たれており、この孔は釘孔だと思われる。下方には釘を打込んだ後残りの部分を折り曲げてつけられた圧痕が認められる。現存長 14.2 cm、幅 1.75 cm、厚さ 1.45 cm である。

788 は一端を相欠きにし、他端に径 1.6 cm の孔を穿ったものである。孔を横方向になるように相欠きの部分を柱に取り付け、2 個一対で棒状のものを差し込んで支える部材ではないかと思われる。長さ 19.5 cm、幅 3.35 cm、厚さ 1.95 cm である。

789 は、短側面の一端を相欠きした扁平な部材である。相欠きのない面が表と思われ比較的丁寧に調整され、縁は面取りされている。相欠き側に径 0.02 cm の円孔、他端に一辺 0.035 cm の方形の孔が開いている。

790 は、一部にヤリカンナで調整した部分が認められる、木口の一方にホゾをもつ建築部材と思われる。1面を除く3側面に矩形・溝状のホゾ穴が設けられている。現存長 57.0 cm、幅 13.0 cm、厚さ 7.9 cmである。

791 は、棒状の部材である。長側面の1面は比較的丁寧に調整され緩く丸みをもち、径約 0.02 cmの釘穴が不定間隔で3箇所認められる。また、短側面に縦 0.04 ~ 0.06 cm、横 0.06 ~ 0.08 cmの矩形のホゾ穴が不定間隔で5箇所開けられている。長さ 110.2 cm、幅 6.6 cm、厚さ 2.2 cmである。

他に、井戸 318 の底部に組まれた箱状の井戸杵材がある。表面はかなり風化している。長さ

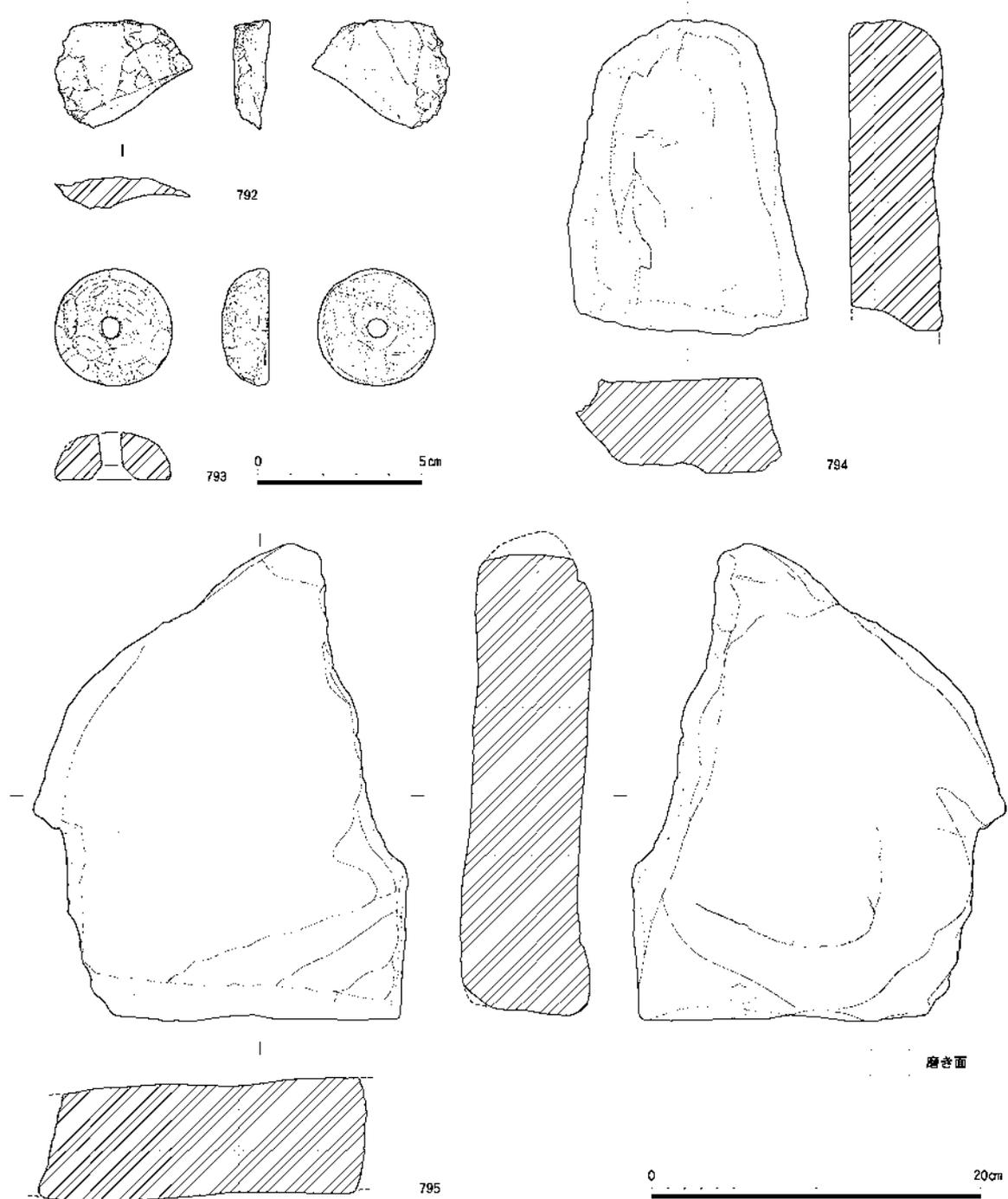


図 82 石器・石製品実測図 (1 : 2、1 : 4)

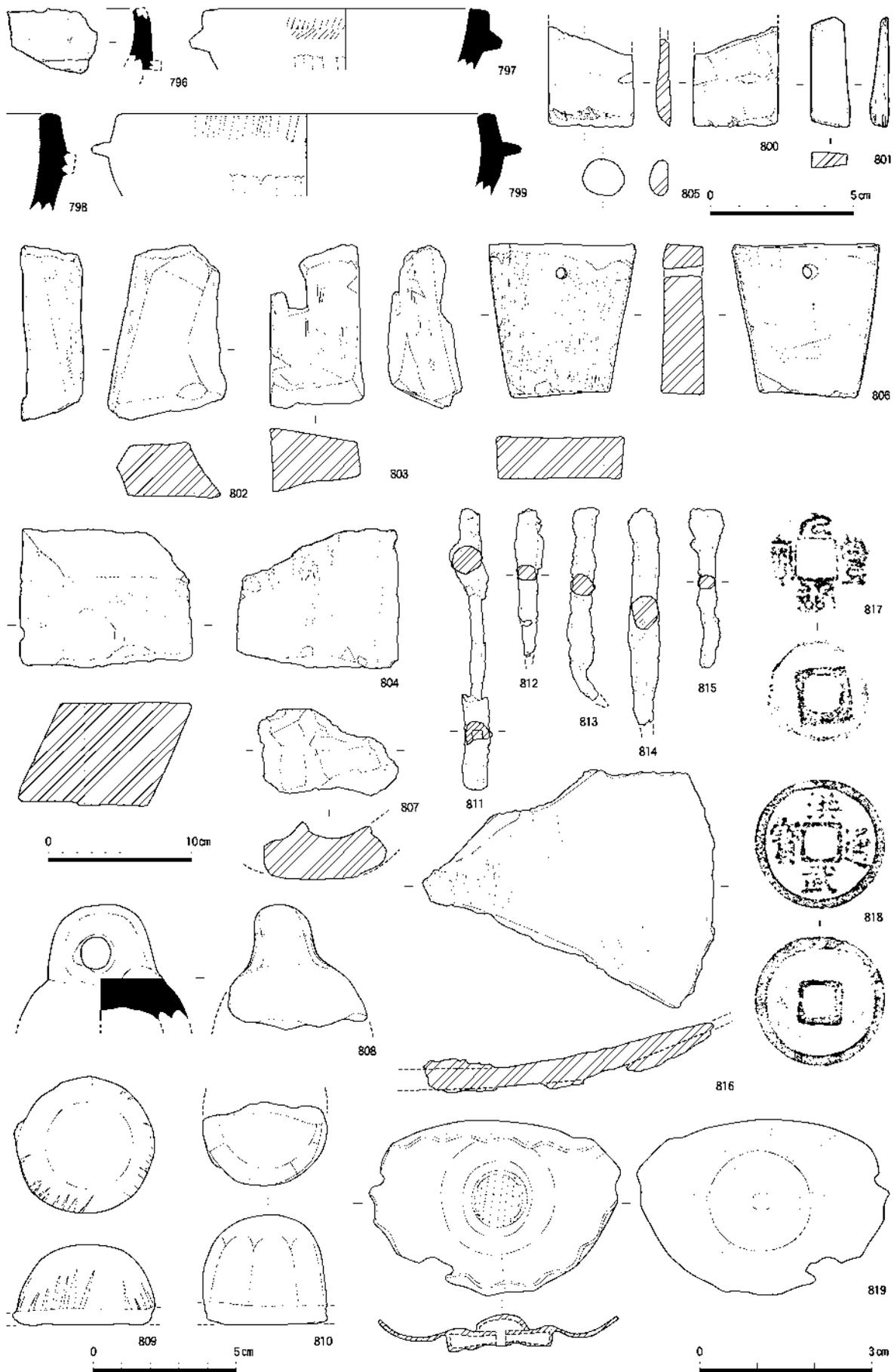


图 83 石製品・土製品・錢貨・金属製品拓影・実測図 (1:4、1:2、1:1)

86.8～89.2 cm、幅 26.2～31.8 cm、厚さ 1.8～2.6 cmで、側板から小口に鉄釘で打ち付けて接合している。残存率が悪いので、掲載していない。

(5) 石器・石製品 (図 82・83、図版 39・40)

792 はサヌカイトの剥片である。上部に自然面を残す。両端を押圧剥離し、下部を割る。縄文土器が出土しているので、当該期と考えられる。1区の古墳時代の遺構に混入していた。縦 3.3 cm、横 4.3 cm、厚さ 0.9 cmを測る。

793 は滑石製紡錘車である。断面が饅頭形を呈する。中央に2方向から穿孔された孔が開く。裏面の孔の周囲は、播鉢状に加工され、細かい擦痕と荒い傷が同心円状に残る。全面に磨いて成形した際の擦痕が認められる。深い溝状の傷が上面に文様のようにつけられている。側面は面取りされている。直径 3.6 cm、厚さ 1.5 cmである。794 は堆積岩製の砥石である。使用面以外はすべて割れ面または自然面である。使用面には擦痕が縦横に付く。縦 19.0 cm、横 14.8 cm、厚さ 5.8 cmである。795 は砂岩製の磨石である。使用面は表と裏面で、両者ともに中央附近が窪むが、磨かれたように平滑で細かい凹凸が認められない。縦 28.8 cm、横 22.6 cm、厚さ 7.6 cmである。793～795 の時期は古墳時代後期に相当する。793 は古墳時代の包含層を掘り下げた際、794 は古墳時代の落込み、795 は溝 818 から出土した。いずれも 1区である。

796～799 は石鍋の口縁部片である。すべて滑石製である。796 は突帯と口縁端部が欠損している。外面に鑿で加工した痕跡が残る。残存高 4.5 cm、最大厚 1.4 cmを測る。1区の井戸 75 から出土した 12世紀前半の混入品である。797・799 は体部と口縁部外面に縦方向の鑿痕跡が認められる。鏝や口縁端部、内面を平滑に調整している。復元口径 17.2 cmの 797 は1区の土壌 619、復元口径 25.0 cmの 799 は1区の土壌 340 から出土し、前者は13世紀の混入品、後者は12世紀中葉で出土遺構の時期と合う。798 は突帯が欠損している。内面と口縁端部を平滑に調整しているが、外面はふきこぼれの痕跡があるため、詳細は不明である。時期は出土遺構である1区井戸 614 の12世紀後半と考えられる。797～799 の器厚は約 1.6 cmである。

800～804 は砥石である。800・801 は黄褐色の粘板岩製である。全面に細かい擦痕が認められる。800 は側面の一部が片刃のようになっているが、自然面である。使用痕の溝状の窪みが確認できる。長さ 7.8 cm、幅 6.0 cm、厚さ 1.1 cmを測る。1区井戸 58 から出土した。801 は裏面が割れ面である。長さ 7.8 cm、幅 2.7 cm、厚さ 1.1 cmである。1区井戸 452 から出土した。802 は凝灰岩製で、使用面は2面である。長さ 12.3 cm、幅 8.2 cm、厚さ 3.7 cmである。1区の井戸 58 から出土した。803 は堆積岩製で、3面にわたって擦痕が見られ、いずれの部分も中央部附近が窪む。表面に鋭い傷が数条入る。長さ 11.5 cm、幅 6.6 cm、厚さ 4.4 cmである。2区井戸 318 から出土した。804 は表と2側面が平滑に磨かれている。実測した2面には擦痕が確認できるが、もう1面では認められない。形状は台形で、断面は菱形を呈する。鉄製品用の砥石ではないと考えられる。縦 9.8 cm、横 12.0 cm、高さ 8.5 cmである。堆積岩製で、1区井戸 75 から出土した。

805 は乳白色の饅頭形をした碁石と考えられるものである。一部に磨いた痕跡が認められる。

最大径 1.5 cm、厚さ 0.7 cmを測る。1区井戸 452 から出土した。

806 は平面が台形の温石である。上部中央にある紐孔は、2方向から穿孔されている。表裏面に鑿痕跡と考えられる指頭圧痕のような窪みが確認でき、深く長い溝状の傷も多く認められる。側面は磨かれて平滑であるが、磨いた際の傷が残る。長い期間の使用によって表面が磨耗したり、分割されたりするが、加工痕が明瞭に残り、製作当初の法量を保っていると考えられる。縦 10.8 cm、横 10.2 cm、厚さ 3.0 cmである。1区井戸 75 から出土した。

(6) 金属製品 (図 83、図版 40)

811～815 は鉄釘である。全面を錆に覆われているものが大半である。812・813 から正方形または長方形の断面を持つ鉄釘であったと考えられる。また、813 からは頭部は平らで一方に張り出す形状をしていたようである。811 は長いので、金具の可能性もある。重さは順に 11.49、5.45、5.25、12.45、4.42 g である。残存長は 10.0、5.2、6.7、7.6、5.5 cm である。811・812 は 1区井戸 583、813 は 1区井戸 614、814 は 1区井戸 119、815 は 2区井戸 10 より出土した。

816 は鉄鍋の底である。底に近くなるほど分厚い。重さは 153.22 g である。厚さ 0.65 cm である。1区井戸 75 の井戸枠内から出土した。

817 は北宋銭の「元豊通寶」(初鑄 1078 年) である。文字は篆書である。裏面の孔の周りが四角く鑄られている。銅製品である。銭の周縁部は削り取られている。重さ 1.85 g である。1区井戸 75 出土である。818 は明銭の「洪武通寶」(初鑄 1368 年) である。裏は無背、銅製である。重さ 3.58 g である。2区井戸 10 より出土した。

819 は菊花形銅製品である。見込み部分に格子状に沈線を引いて、匂いを作る。匂いは別の部品で押しピン形を呈し、裏面の高台中央に開けられた孔から針の部分を出して、かしまっている。高台内は空洞である。2区土壙 458 から出土した。重さ 7.60 g、縦 3.05 cm、横 4.4 cm、高さ 0.6 cmを測る。内面に暗褐色の色素が沈着していることから、紅皿として使用されていた可能性が高い。同時期の類例は、越前一乗谷朝倉氏遺跡のものがあり、⁴⁾ほとんど器形・文様が変化せずに江戸時代の化粧道具の中に鉄漿入れとして残っている。

(7) 土製品 (図 83、図版 40)

807 は鑄型と考えられる。内面は黒色に変色する。胎土にはすさとして使用された繊維状の植物痕跡が残る。型は欠損が多いため、不明である。外面をナデ調整する。縦 3.1 cm、横 4.9 cm、最大厚 2.0 cm である。1区溝 668 から出土した。

808 は須恵器の蛸壺紐孔部分である。把手は貼り付けである。内外面を丁寧になでる。1区溝 342 から出土したが、古墳時代の混入品である。残存長 4.6 cm、孔径 1.2 cm である。

809・810 は土塔である。鏝部分が剥離している。809 は緑釉が掛かり、鏝との接合部付近に縦方向の深い溝が何条も入っている。布目を確認していないが、型抜きに使用する布の寄り皺の可能性が高い。直径 4.8 cm、高さ 2.8 cm である。810 は側面を面取りする。釉は残存していなかった。

直径 4.4 cm、高さ 3.9 cmである。両者ともに 1 区の平安時代包含層を掘り下げている際に出土した。

註

- 1) 土師器皿については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1996 年 を参考にした。
- 2) 『重要文化財教王護国寺灌頂院并北門／東門修理工事報告書』京都府教育廳文化財保護課 1968 年
- 3) 『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 6 冊 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1982 年
- 4) 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ－第 29 次 第 77・78 次調査－』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1995 年 第 24 図 452 の銅製の紅皿に該当する。

5. まとめ

今回の調査最大の成果は、平安時代後期の白河街区の区画溝と室町時代後期の邸宅跡を検出できたことである。また、弥生時代からの遺跡である岡崎遺跡の範囲内で、縄文時代の土器やサヌカイト剥片が出土した。縄文時代の遺跡は、北白川追分町遺跡などがある吉田丘陵の北側が中心地であり、今回出土の遺物は磨滅しているため、白川の流れて運ばれてきたとも考えられるが、岡崎遺跡が縄文時代にまで遡る可能性もある。そして、宅地内の土地利用がわかる江戸時代末から明治時代の遺構を検出している。調査地とその周辺の土地利用の変遷がほぼ連続して知ることができたことは、今後の白河街区の調査に役立つものである。

(1) 古墳時代

1 区西半分で検出した遺構の大半は、自然の落込みであったが、北端と中央付近で検出した溝と土壇は人工的に造られたものである。土壇 748 は、土層断面と板材のような木片の存在から墓壇と考えられ、溝 717 の大部分は調査区外ではあるが、規模や形状から古墳の周溝になる可能性が高い。出土遺物には、古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋や祭祀関係に使用されたと考えられる**臙**、滑石製紡錘車などがあり、古墳に副葬される遺物組成に似ていることから傍証されよう。調査地周辺では、岡崎グラウンドの整備工事に伴う調査¹⁾で、古墳時代後期の古墳「鶴塚」が見つまっている。今回検出した遺構や遺物が、その古墳の時期とほぼ同時期であることから、調査地を含む岡崎遺跡北東部一帯に古墳時代後期の墓域が広がっていたと考えられる。

(2) 平安時代後期

1 区西半分を覆っていた約 20 cm の黒褐色粘質土層には、平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺構が切り込んでいた。遺物としては、黒色土器や古相の瓦器碗、11 世紀の土師器皿などが含まれていたことから、溝 668 を開削する以前、つまり白河街区が整備された際に、この土は整地されたと考えられる。また、遺物が細片化していないことから整地土は遠方からの客土ではなく、付近



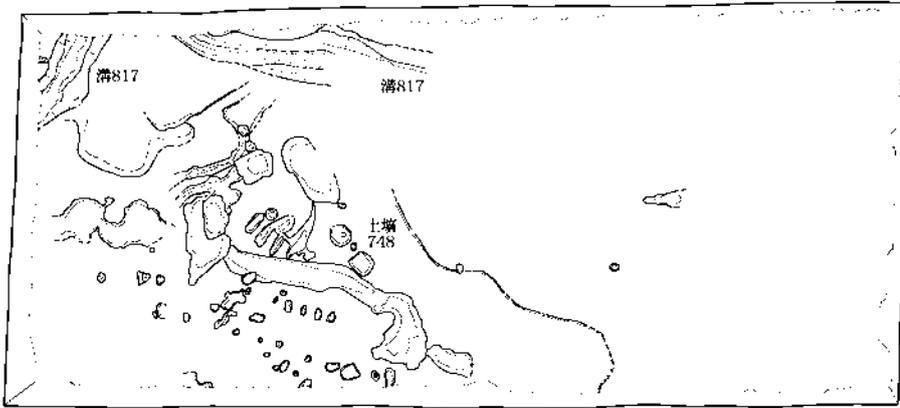
Y=-19,240

Y=-19,230

Y=-19,220

Y=-19,210

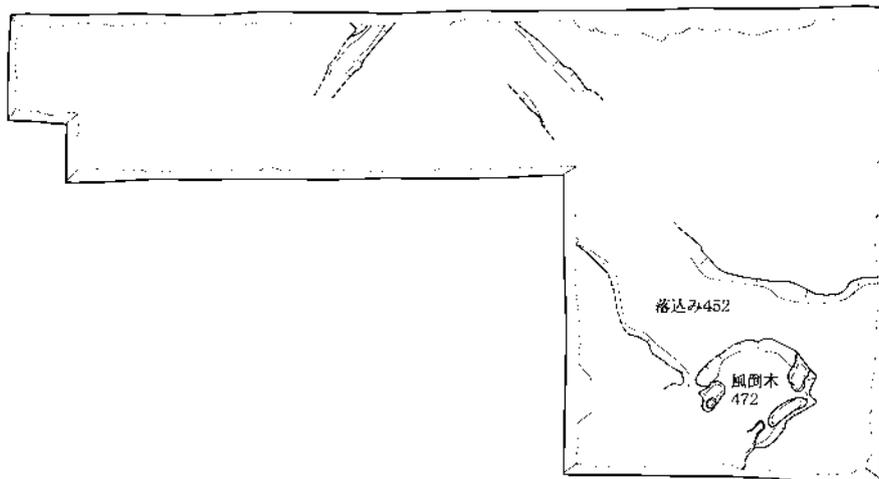
1区



X=-109,420

X=-109,430

2区



X=-109,460

X=-109,470

0 10m

図84 古墳時代から平安時代以前遺構配置図 (1 : 350)



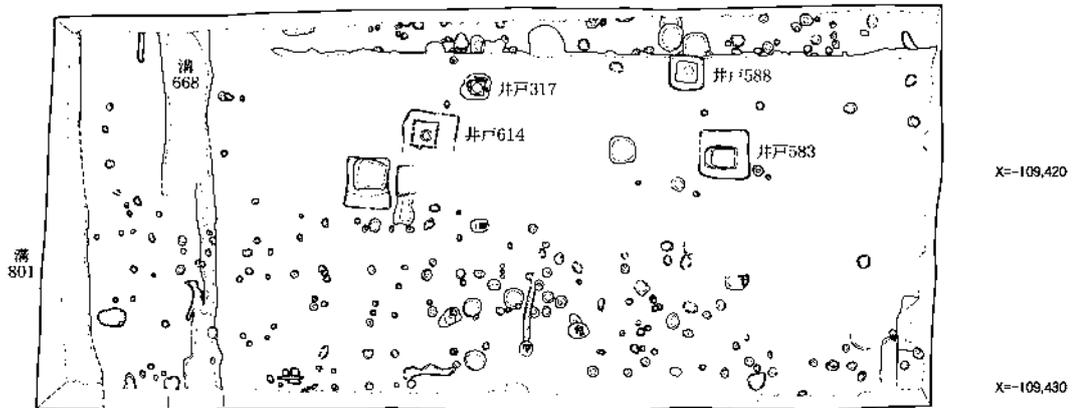
Y=-19,240

Y=-19,230

Y=-19,220

Y=-19,210

1区

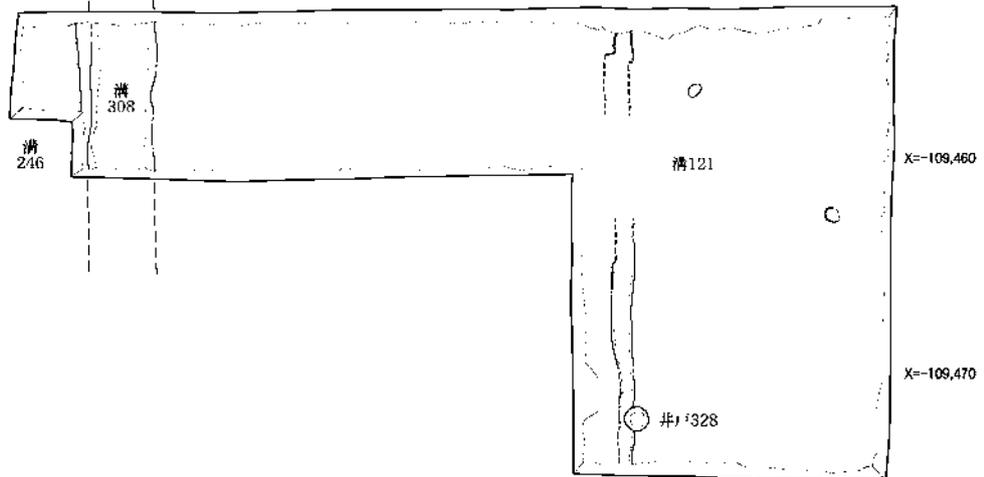


土壇274

外溝

内溝

2区



0 10m

図 85 平安時代後期から鎌倉時代初頭遺構配置図 (1 : 350)



Y=-19,240

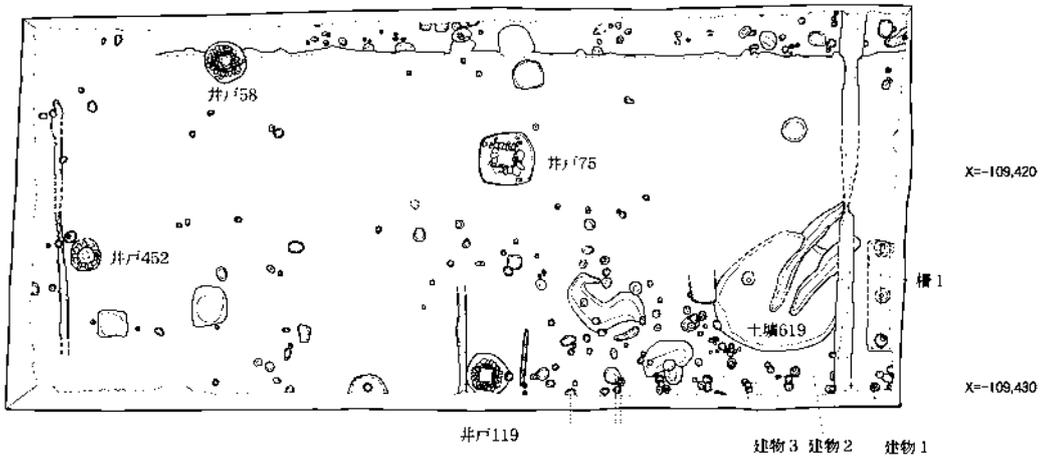
Y=-19,230

Y=-19,220

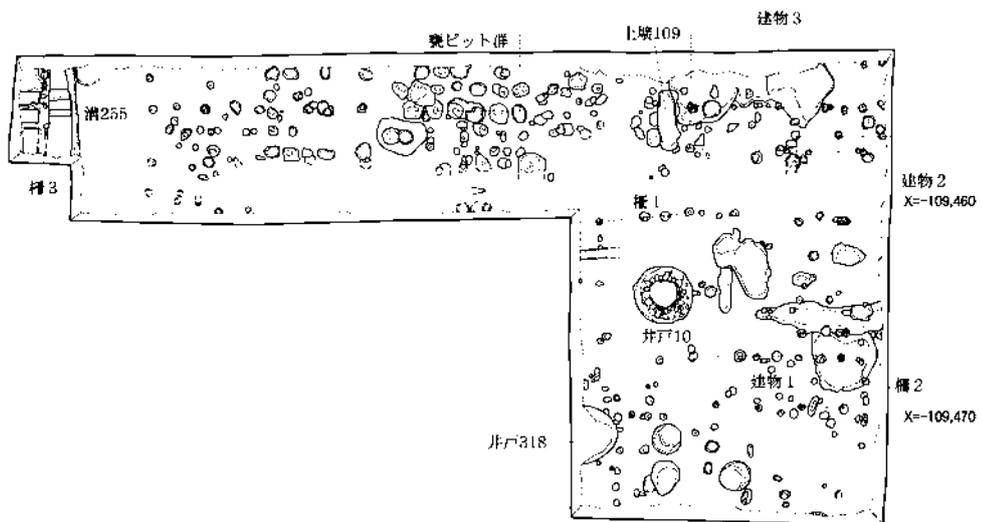
Y=-19,210

1区

溝342



2区



0 10m

図 86 室町時代遺構配置図 (1 : 350)



Y=-19,240

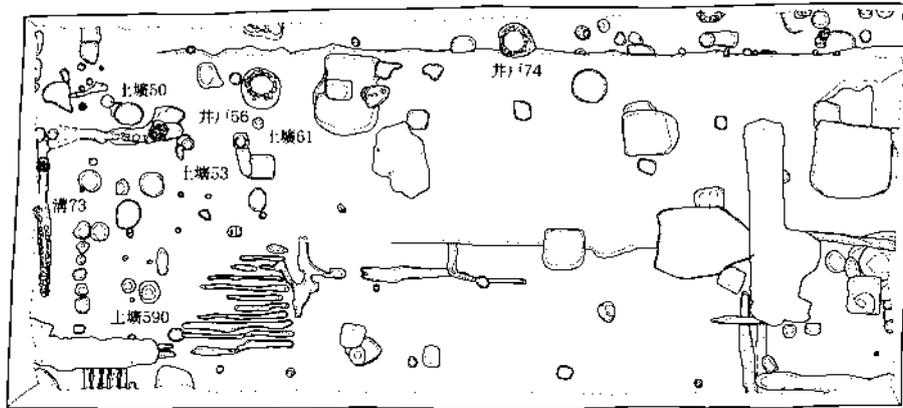
Y=-19,230

Y=-19,220

Y=-19,210

1区

カマド112

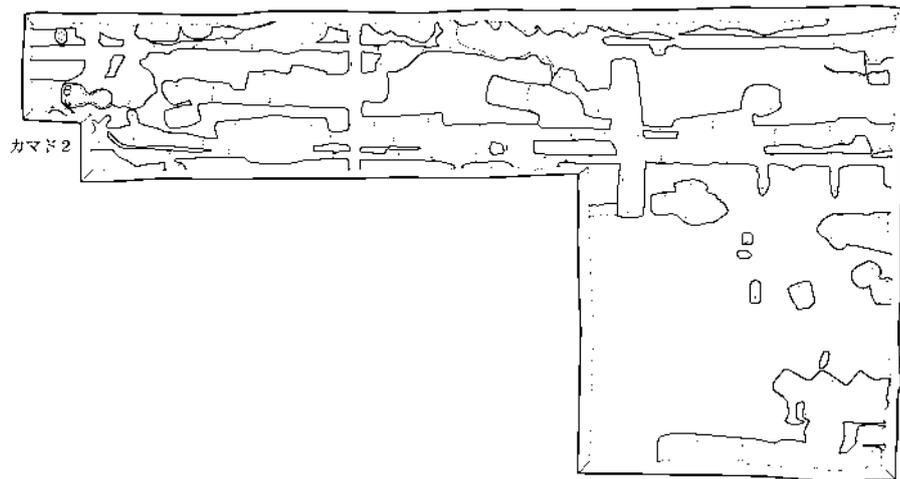


X=-109,420

X=-109,430

2区

カマド3



X=-109,460

X=-109,470

0 10m

図 87 江戸時代遺構配置図 (1 : 350)

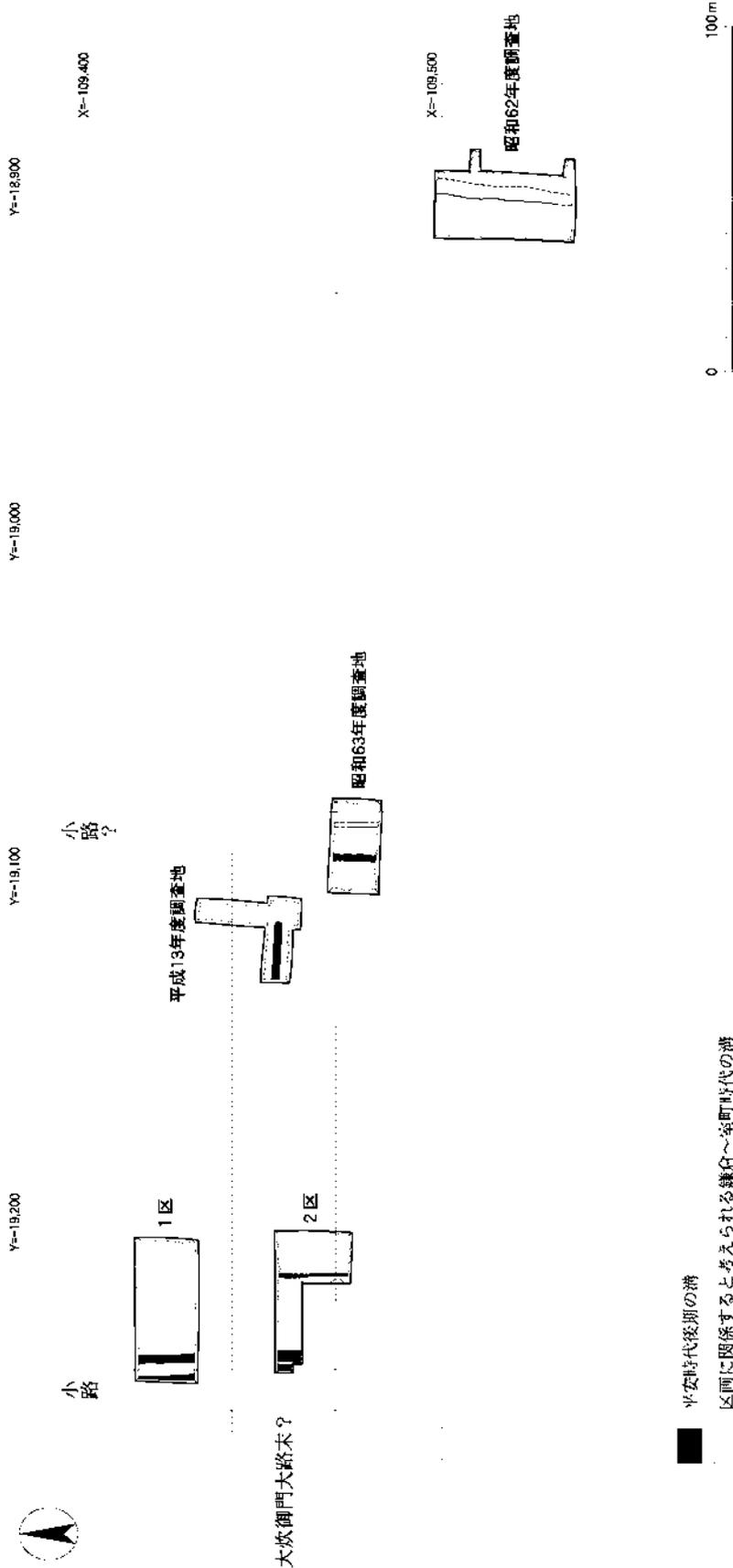


図 88 既往検出遺構関係図 (1 : 2,000)

に遺構が存在していたと考えられ、11世紀代には宅地としての利用が始まっていた可能性がある。

(3) 平安時代末期から鎌倉時代初頭

1区では、井戸4基を検出し、調査区南半分で検出した柱穴群から、建物が数棟あったと考えられるが、宅地規模を想定し得る他の遺構に乏しく、宅地内における建物の配置を明らかにすることができなかった。しかし、井戸が北側に集中し、小型の柱穴が多いことから、奥向きの敷地（いわゆる「ケ」の場）としての利用を想定できよう。

2区は1区に比べて、遺構がほとんど検出できなかった。江戸時代の遺構に削平されたと考えられる。検出できた溝308と溝121の心々間は約24mであり、宅地境の溝と考えられる。

1区で検出した2本の溝668と801は、調査区西端が法勝寺西道の一筋東にある南北方向の小路（法勝寺金堂の中軸線延長上に位置する）東側溝推定ラインに該当することから、これらの溝が白河街区の区画溝に

相当すると判断した。これらは南側で上部が削平され、北側の一部が近世遺構に切り取られていたために、間にある築地痕跡は確認することができなかつた。溝 668 の続きが 2 区の溝 308 で内溝になり、溝 801 が外溝になる。溝 668 の中心が南側では $Y=-19,239$ であるが、北端では $Y=-19,240$ に位置する。一方、2 区の溝



図 89 白河街区復元図 (1 : 10,000)

308 の中心は $Y=-19,238.6$ となる。1 区の溝 668 北端と 2 区の溝 308 南端の溝中心を線で結んだところ、方位が北に対して西へ 1 度 50 分程振れることがわかった。周辺調査の結果から推定されている白河街区の道路などは 0 度 30 ~ 50 分西へ振れているとされており、今回の調査では軸の振れが大きくなっているが、これは測点間の距離 (1 区北端から 2 区南端) が約 50 m と短いことに起因すると考えられる。平安京や白河街区の条坊の振れ方向が西であるという点では同じであり、妥当であろう。

今回の調査区は、今までに発表されている白河街区の復元条坊²⁾によれば、東西方向の大炊御門大路末推定ラインを今回の 2 区の南端、または 2 区全体に含むと想定できるが、この復元案について疑問が生じることとなった。前述したように、2 区は 1 区に比べ遺構密度が非常に薄いが、宅地境と考えられる溝や井戸、あるいは白河街区の南北区画溝と考える溝 308 を検出している。一方、調査区内が道路面とするならば、堅く踏み固められた状態や補修の跡が認められるはずであるが、検出できなかった。また、本来存在するはずの南側溝も検出していない。よって、少なくとも調査区内には、復元案で示される大炊御門大路末やその側溝は通っていなかったと考えられる。では、他の調査から考えられる大炊御門大路末の位置はどこかという点について検証した結果、やはり当調査区の一部に入ることとなった。ここに至って、大炊御門大路末がこの区画の西側で止まっていた、と今の段階では考えざるを得ない。また別の考え方として、過去の調査事例 (図 88) から法勝寺北方にも整然とした区画が施工されているとみられるので、法勝寺西道から東は大路幅の 10 丈 (約 30 m) ではなく、小路幅の 4 丈 (約 12 m) であった可能性を指摘することができる。この場合、白河街区復元図 (図 89) に表した 2 区を含む 1 町の南北幅 (120 m) を東西幅 (150 m) に合わせて拡大すると、大炊御門大路末の推定位置は 2 区北側の調査区外に当たることになり、今回の調査結果に符合する。しかしながら、何れについても憶測の域を出ないので今後の課題としたい。

(4) 室町時代

1区では室町時代前期の遺構を中心に検出した。井戸75・119はほぼ同時期に造られており、南北方向に並ぶ。井戸58・452は前の2基より半世紀以上新しいと考えられるが、この2基に対して互い違いに造られていることから、宅地の区画が残っていたと考えられる。また、柱穴に根石を持つ建物1～3を検出している。詳しい時期は不明であるが、検出地点から井戸119または井戸75のどちらかに伴うもので、柱穴の重複からは立て替えが行われたと考えられる。溝342と柵1は平行していることから同時期の区画溝や柵と考えられるが、どちらも遺物が少なく時期を決めかねる。2区の遺構との関連から16世紀前半の可能性が高い。

室町時代後期の白河街区は、1467年から10年間続いたとされている応仁の乱によって寺院などが焼失し、荒廃したという記録が残っているに過ぎない。しかし、今回の調査により、応仁の乱後にも平安時代の区画溝を踏襲した溝の存在が確認できただけでなく、敷地内には建物や井戸が造られて、宅地としての利用が続いていたことが明かとなった。また、2区南東部の建物1やその北側に位置する井戸10、ごみ捨て穴などの配置から宅地内土地使用方法を知ることが可能となった。その他に、大きく深い井戸10からは、経済的に豊かな住居人を想定できる。

(5) 江戸時代後期から明治時代

1区の西端で検出した江戸時代の遺構群は、暗渠や水甕など北側に水関係の遺構がまとまり、カマドや井戸がある所は台所と考えられる。また、南側には畑の畝が東西方向と南北方向に数条並んだ状態で検出した。暗渠に沿って南北方向に並ぶ土壌は、植栽の痕跡で垣根になると考えられる。暗渠と植栽、2区西端のカマドから、西側が道路として機能していたことがわかる。時期は幕末から明治時代にかけてのものと考えられる。柱穴がみつからないため、家屋の復元には至らないが、京都の農村を知るうえで貴重な資料になると考えられる。

(6) 遺物について

検出した各時代の遺構に伴う遺物が比較的まとまって出土した。1区の溝668や井戸58、2区の井戸10や土壌41・109などからは、小型から大型まで揃った各時代の土師器皿が大量に出土した。前述したように2区井戸10からは、食住に係る木製品が大量に出土している。大小取り混ぜた土師器皿と合わせて、箸や折敷、漆椀などの遺物からは、供膳具としてのセット関係や器の使用量などを知ることのできる資料として注目できる。

また、瓦当文様は豊富で、産地も様々であり、平安時代後期の特徴を示している。鎌倉時代から室町時代の瓦の中には、寺院の修復に使用されていた瓦当文様を持つ瓦が含まれ、法勝寺域内に堂宇が存続していたことを示しているといえよう。

- 1) 内田好昭ほか「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 最近の白河街区条坊復元に関するものとして、主に以下の論文などを参考にした。
『六勝寺と白河御所』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
浜崎一志「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV 京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年
上村和直「平安京と白河」『条里制・古代都市研究』通巻第15号 条里制・古代都市研究会 1999年

6. 自然科学的分析

(1) 岡崎周辺の火山灰について

これまで六勝寺では多くの埋蔵文化財等の調査が実施され、4種類の火山灰層が検出されている（図94、表4）。今回の調査地（図94-8）では、南側2区の東壁断面堆積層の中に、標高53.6m（地表下1.3m）で、シルト・粘土・砂礫等に挟在された状態で周囲の層序と比較すると不自然な色相（にぶい橙色）を有するシルト層を確認した（図90）。この層は薄く両端が途切れ、厚さ5cm、幅90cmしかなかった。シルト層を顕微鏡観察したところ、有色鉱物が卓越し、火山ガラスを含むなど火山灰の様相を呈していた。北側1区では井戸75掘削断面に、前述した層より



図90 2区火山灰検出土層

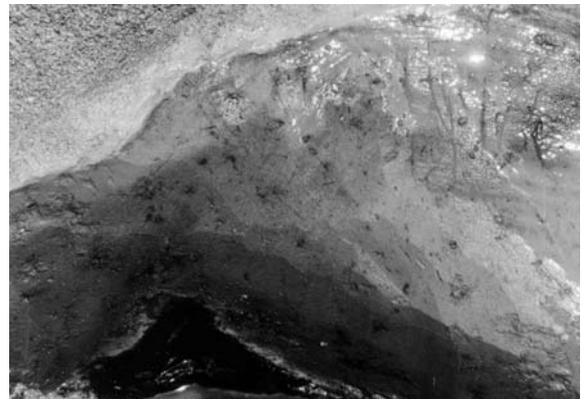


図91 1区井戸75壁面

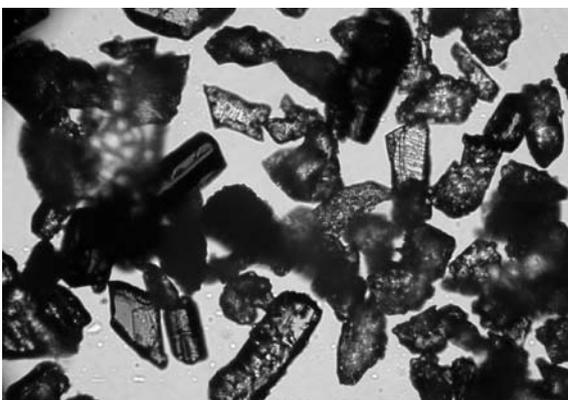


図92 大山系火山灰顕微鏡写真（×75）

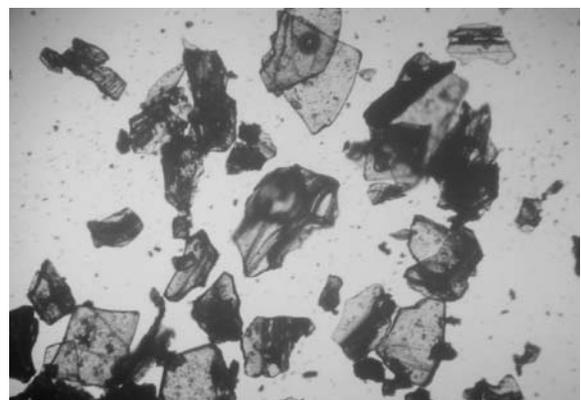


図93 始良Tn火山灰顕微鏡写真（×30）

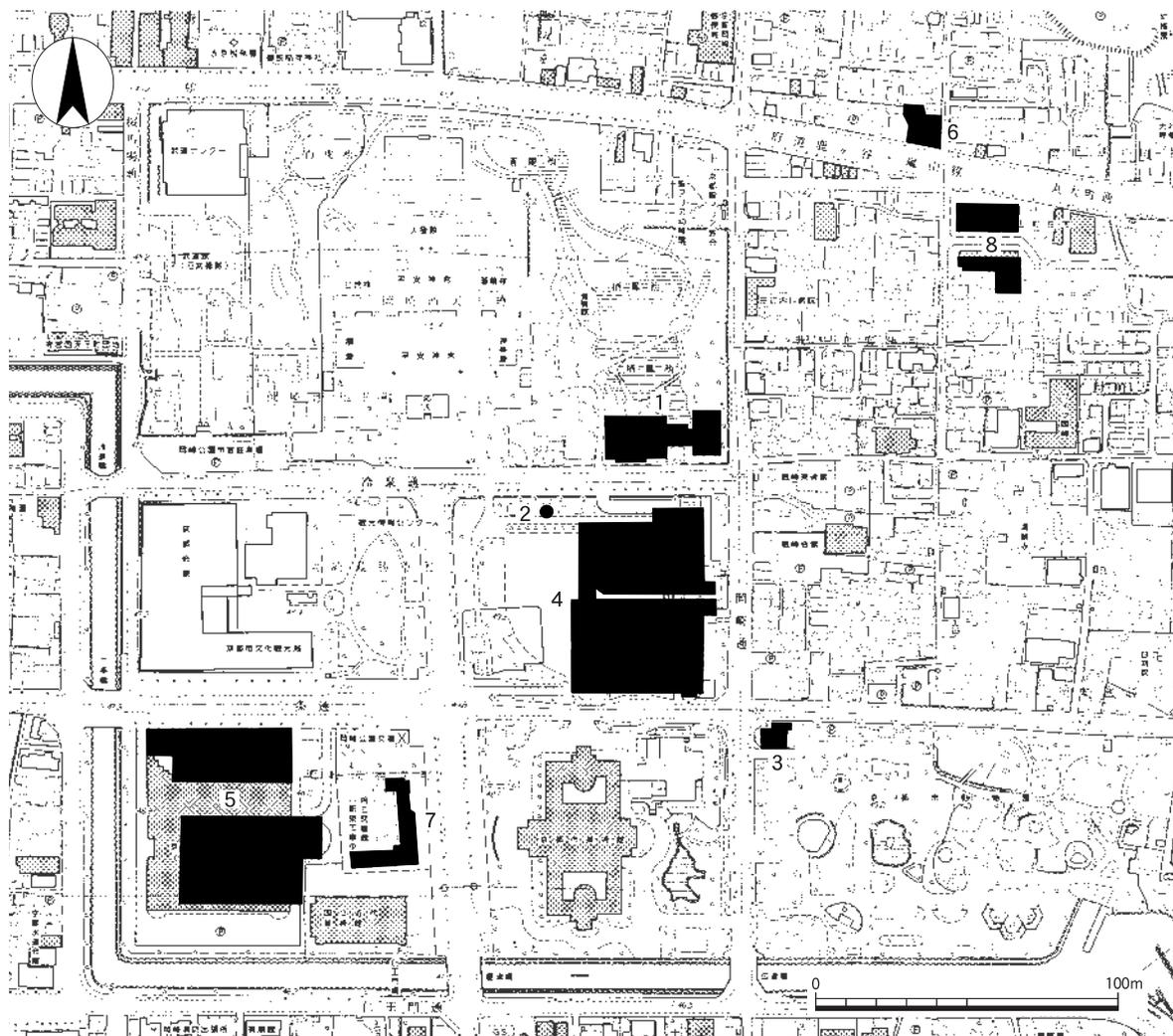


図94 調査地点位置図 (1 : 5,000)

表4 確認された火山灰一覧表

番号	火山灰名	標高 (地表下) (m)	層厚 (cm)	調査団体名	調査年
1	始良Tn (平安神宮火山灰)	約48.1~48.3 (約1.7~1.9)	10~17	東山学園高等学校 池田碩氏	1970
2	始良Tn (平安神宮火山灰)	48.1~48.2	10	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1982
3	始良Tn (平安神宮火山灰)	47.75	10~15	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1989
4	始良Tn (平安神宮火山灰)	48.0	8~26	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1991
	U-Oki (港火山灰)	49.10 (流路内ブロック)	2~4		
	K-Ah (横大路火山灰)	48.27 (流路内ブロック)	20		
5	始良Tn (平安神宮火山灰)	44.8 (4.5~6.0)		(財)京都市埋蔵文化財研究所	1992
6	始良Tn (平安神宮火山灰)	約54.7 (0.6)	6	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1997
7	始良Tn (平安神宮火山灰)	約44.0 (5.2)	約20	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1998
	大山系 (上のホーキ)	約45.4 (3.8)	約5		
8	始良Tn (平安神宮火山灰)	52.7 (約3.3)	約18	(財)京都市埋蔵文化財研究所	2005
	大山系 (上のホーキ)	53.6 (約1.3)	約5		

始良Tn (平安神宮火山灰) : 26,000~29,000年前、大山系 (上のホーキ) : 約20,000~22,000年前かそれ以上、
 U-Oki (港火山灰) : 10,700年前、K-Ah (横大路火山灰) : 7,300年前

深い標高 52.7 m（地表下 3.3 m）で、黄褐色（白色に近い）微砂層があり、肉眼観察で火山灰層だと思われた（図 91）。層厚は 20 cm 前後あった。この層は上面が波のように変形した黒褐色泥炭層の直上に堆積し、上には 0.5 cm 前後の厚さの泥炭層がかぶり、さらにその上は粗砂・砂礫層に厚く覆われていた。また細かく 5 層に分けられ、下層ほど粗粒で有機質が多かった。調査の結果、2 区の層は角閃石・斜方輝石が特徴的に見られる火山灰層で、大山系の「上のホーキ」（図 92）、1 区の層は平板なバブル型の火山ガラスを主とする始良 Tn 火山灰（図 93）であると判明した。

始良 Tn（平安神宮火山灰）火山灰層は、北東から南西方向へ並ぶ 8・1・7 各地点の標高を比較すると、8 と 1 では約 250 m 離れて比高差 4.6 m に対して、1 と 7 では約 350 m 離れて比高差 4.1 m と、徐々に緩傾斜になっている様子が見える。堆積状況は 6 が泥炭層がなく粘土の上に直接堆積している以外は、すべて泥炭層に挟まれた状態で検出されている。この調査地近辺では丸太町通あたりが泥炭層の北限と思われる。

火山灰の同定は（株）京都フィッシュントラックの檀原徹氏に御教示を頂きました。

参考文献

町田 洋・新井房夫「新編火山灰アトラス」東京大学出版会 2003 年

（2）白河街区から出土した動物遺存体

今回、報告する動物遺存体は、貝類 3 点、魚類 2 点、鳥類 1 点の計 6 点である。貝類と鳥類は平安時代後期の井戸 614 から出土しており、魚類は 15 世紀末から 16 世紀初頭にかけての井戸 10 から出土している。

井戸 614 から出土している貝類 3 点は、いずれも殻軸しか遺存しておらず、種の同定は困難である。同遺構から出土した鳥類は、カモ科の一種と思われる胸骨 1 点で、大きさからヒシクイの可能性が高い。しかし、出土資料は破片であるため、他種と明確に区別できる部分を欠損しており、断定するには至らない。胸骨は、いわゆる「むね肉」とよばれる大胸筋が付着する。刃物による鋭く、直線的なカットマークが、筋肉付着部分に 4 箇所みられる。いずれの傷も、骨に対して刃の角度は浅く、刃物をねかせた状態で使用したと考えられる。竜突起の付け根側から刃をあてており、

表 5 種名表

腹足綱	Gastropoda
腹足綱の一種	<i>Gastropoda fam. gen. et sp. Indet.</i>
硬骨魚綱	Osteichthyes
スズキ目	Percidae
タイ科	Sparidae
タイ科の一種	<i>Sparidae gen. et sp. Indet.</i>
鳥綱	AVES
カモ目	Anseriformes
カモ科	Anatidae
ヒシクイ？	<i>Anser fabalis</i>

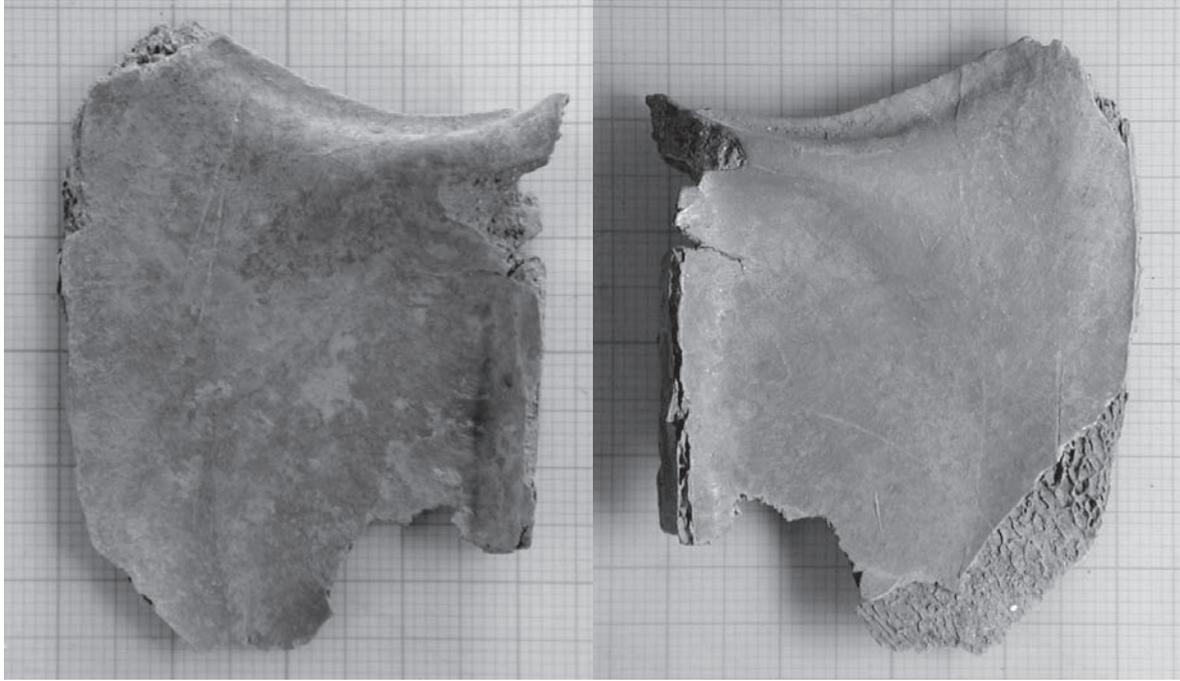


図95 ヒシクイ胸骨 (×1.5)



図96 タイ科右上顎骨



図97 魚類鱗 (×7.5)



図98 貝類



幼虫 (×6.6)



頭部 (×10.6)



頭部 (×10.6)



腹部 (×10.6)

図99 昆虫遺存体

刃幅が広いと骨体部と接触するため、刃幅の狭い刀子のような道具であるか、刃幅の広いものでも刃先を使って切り取ったのであろう。ヒシクイという和名が表されるのは、室町時代の『下学集』が初めである。平安時代の『和名類聚抄』には和名を加利と称する鳥のなかで、大きいものを鴻（おとり）、小さいものを雁（かり）という記載があり、鴻はヒシクイを示すものと考えられている（梶島 1997）。縄文時代の遺跡からも出土しており、古くから食用となっていた。

井戸 10 から出土した魚類は、鱗と骨の 2 点が出土している。鱗は保存状態に恵まれず種を同定するのが困難である。骨はタイ科の前上顎骨（左）である。タイ科は、マダイ、クロダイ、チダイ、キダイが多い。そのなかでも、地域によっては赤色のマダイが好まれる傾向があったとされる（久保 1997）。近世の京都を遺跡出土資料から見ると、クロダイは稀で、マダイが主体となり、キダイやチダイが加わるのが、一般的な傾向である。

他に昆虫の遺存体を検出している。

参考文献

梶島孝雄 1997 『日本動物誌』

久保和志 1997 「近世大坂における水産物の流通と消費」『動物と人間の考古学』真陽社 .pp.137-179

（3）白河街区から出土した植物遺存体

はじめに

植物遺存体は井戸 10 から出土したものである。井戸 10 は同時期の遺構との関連から見て、建物 1 に伴う屋敷内の 15 世紀終りから 16 世紀初めの井戸と考えられる。井戸 10 は湧水が激しく完掘が不可能であったため、掘下げた最下層にあたる井戸中段の堆積層を遺物整理箱 1 箱（約 20 ℓ）サンプリングした。サンプリングした土壌は 4 mm・2 mm・1 mm・0.5 mm の篩を用い流水で濾し篩の上に残ったものを選別し拾い上げた。

植物遺存体の分析

同定できたのはシダ 1・木本 13・草本 11 である。ただしマツ・カヤ・オニグルミ・モモ・ウメ・スモモ・コナラ・クリ・マダケ・コシダは発掘調査中に採集されている。

シダはコシダの 1 種である。葉柄の分岐した葉のある先端部分だけである。葉柄の長い部分は籠等に利用される。

木本では、針葉樹はマツ・モミ・カヤ・ヒノキがある。マツは種子に皮針形と倒卵状皮針形の 2 種類ありアカマツ・クロマツの 2 種がある。モミは葉である。カヤは核の破片である。種子は食用・油にされる。ヒノキは鱗片状の葉である。いずれも常緑の高木である。広葉樹はオニグルミ・モモ・ウメ・スモモ・コナラ・クリ・キイチゴ・マダケがある。オニグルミからスモモ・キイチゴは核、クリは果皮でいずれも食用にされる。コナラは果皮である。種子は水に晒しアク抜きをしないと食用にできない。マダケは稈で節の部分である。庭木として利用できるものはマツ・モミ・ヒノキ・モモ・ウメ・スモモ・キイチゴ・マダケが考えられる。

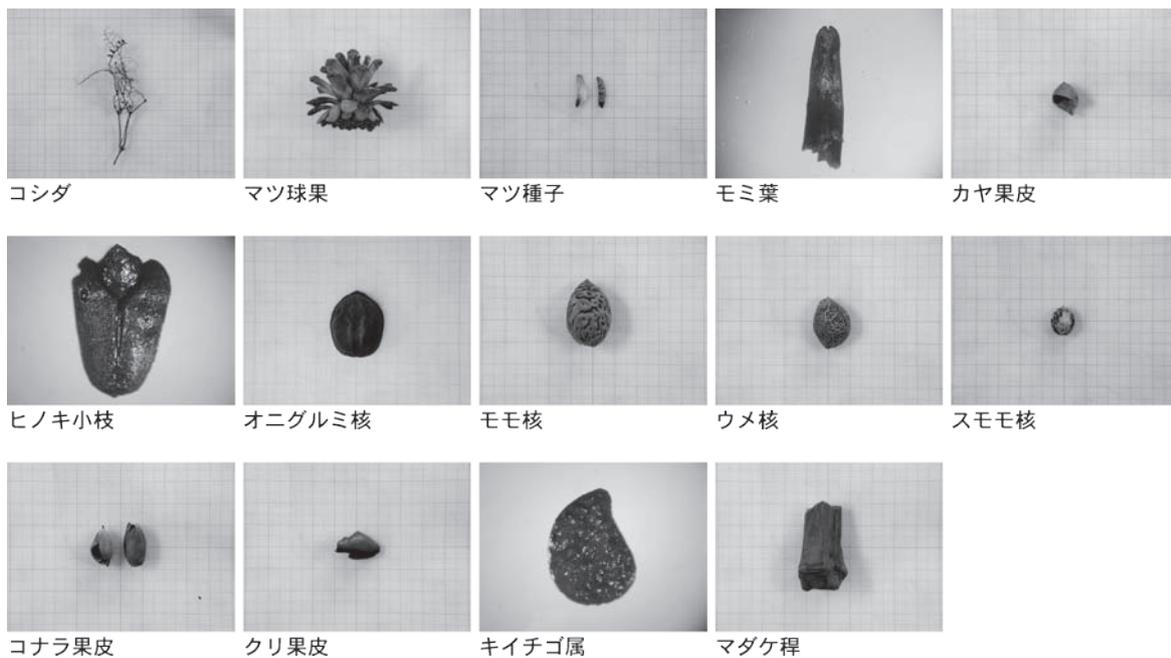


図 100 植物（木本）遺存体

草本はタデ属・ミドリハコベ・アカザ属・イノコズチ・ヒユ属・カタバミ・トウダイグサ・シソ属・

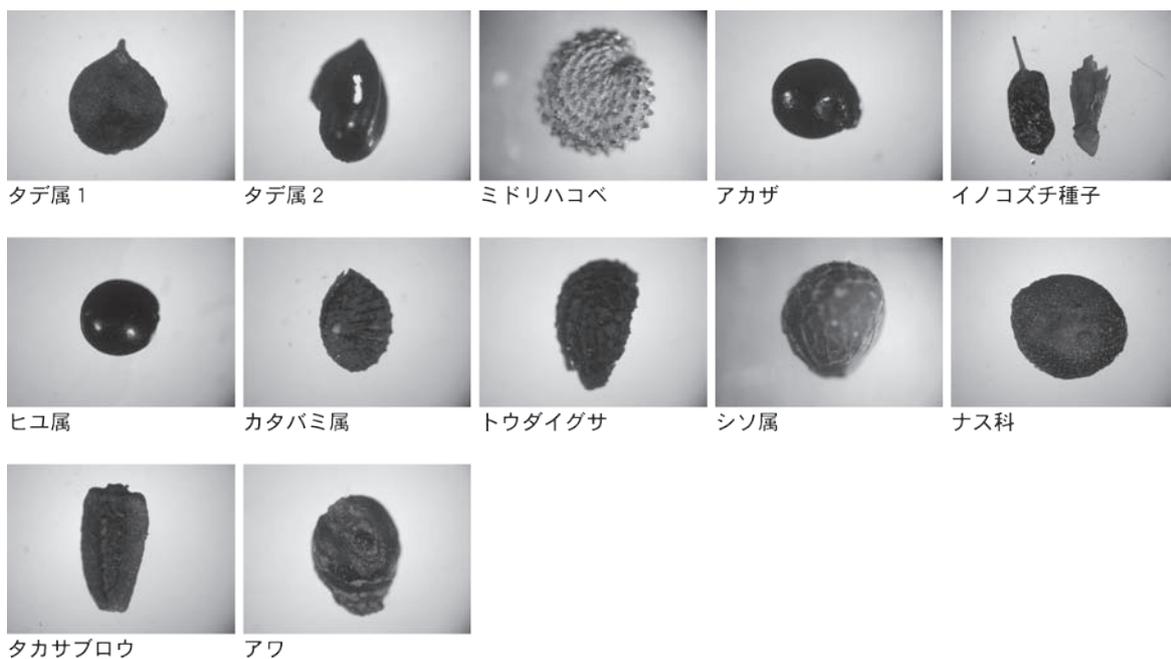


図 101 植物（草本）遺存体

ナス科・タカサブロウ・アワである。イノコズチの花被・胞果以外は果実・種子である。タデ属・タカサブロウは主に水辺・湿地・田・路傍に生える。ミドリハコベ・アカザ属・ヒユ属・カタバミ・トウダイグサ・シソ属は主に庭・畑・路傍に生える。イノコズチ・ナス科は路傍・山野に生える。アワは炭化した果実で主食の一部にされる。シソ属も食用の可能性はある。いずれも庭あるいは人家に近接した場所に植生するものばかりである。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・おかざきいせき							
書名	白河街区跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-4							
編著者名	近藤奈央・木下保明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいくあと・ 白河街区跡・ おかざきいせき 岡崎遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区 おかざきてんのうちよう 岡崎天王町 ちない 地内	26100	417 418	35度 00分 48秒	135度 47分 22秒	2005年3月 9日～2005 年7月29日	1277m ²	市営住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡崎遺跡 白河街区跡	集落跡	古墳時代	土壙(墓)、溝	土師器、須恵器、石製品、土製品	古墳時代後期の墓壙と考えられる遺構を検出した。			
	寺院跡 邸宅跡	平安時代後期 ～鎌倉時代	井戸、溝、土壙、柱穴	土師器、須恵器、白色土器、山茶椀、瓦器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、木製品、石製品、金属製品、土製品	法勝寺西道の一筋東にある南北方向の小路東側溝を検出した。			
		室町時代	建物、柵、井戸、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品、石製品、銭貨、金属製品、製塩土器	室町時代後期の宅地内土地使用を知る手がかりになる遺構群を検出した。			
		江戸時代 ～明治時代	カマド、井戸、溝、土壙	土師器、土師質土器、焼締陶器、磁器、施釉陶器、軟質施釉陶器、木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-4
白河街区跡・岡崎遺跡

発行日 2005年9月30日

編集

発行所 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1

〒602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒604-0093 TEL 075-256-0961